

SD ジャーナル 2000

第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 2000

The 19th Exhibition of Winning Architectural Drawings and Models

審査員：横文彦／岡部憲明／芦原太郎／小川晋一／鹿島昭一

コミュニケーション・ワークスペース：芦原太郎建築事務所リノベーション

Communication Workspace: Taro Ashihara Architects Renovation

SDグラフィティ：36年の想い出

SD Graffiti: Recollections of 36 Years

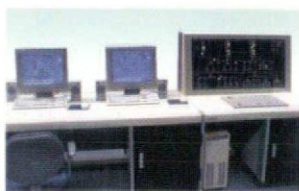
文：飯島洋一／磯崎新／植田実／宇野求／片木篤／北沢猛
隈研吾／黒川紀章／香山壽夫／小林克弘／椎名政夫／篠原一男
陣内秀信／杉浦康平／高階秀爾／丹下健三／長谷川逸子／羽原肅郎
林昌二／原広司／穂積信夫／横文彦／松本哲夫／元倉眞琴

スペースデザイン ISSN 0963-0991
第435号2000年12月1日発行（毎月1回1日発行）
昭和40年2月5日第三種郵便物認可

Space Design

SD
0012



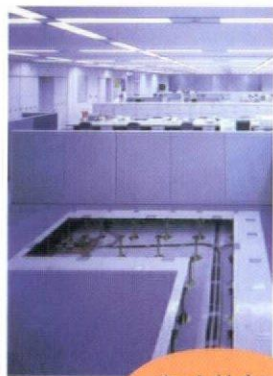


リーズナブルって
いいなあ



「ビルや工場が生き生き。
オープンシステムだから
可能です」

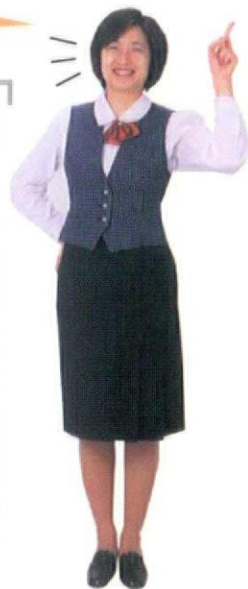
ビルオートメーションシステム「A&A」や工場計
装システム「FACIAS（フエイシャス）」は、ハー
ドウェアを汎用機器で構成するオープンシステム。
だからリーズナブルでフレキシブル。しかも付加
価値の高いシステムで設備の機能を引き出します。



ネット社会に
頼もしいわ

「情報の洪水がきたって
大丈夫。光ファイバで
余裕の対応」

大量の情報を伝送できる光ファイバの先行配
線システム「GIGA・LINE（ギガライン）」
や統合配線システム「KSCS」で、次世代情報
化オフィスを提案します。



「もっと快適に、もっと機能的に。
欲張りなオフィス環境を
サポートします」

リニューアルすれば
まだまだ使えますよ

きん がつくヤツと評判です。



地球に
優しいんです

「太陽光や風力も
最大限にいかします」

長年培ってきた電気設備の技術力で太陽
光や風力を最大限に活用。クリーンなエネ
ルギーで、環境保護にしっかり貢献できる発
電システムを強力にサポートします。

「電気や熱にも思い
やり。エネルギーを
有効活用します」

豊かな実績と技術力によって、コージェネ
レーションや地域熱供給の最適システム
を構築。環境性・経済性に優れたトータル・
エンジニアリングで、エネルギーの高效率
な利用を可能にします。



省エネなんだな、
これが



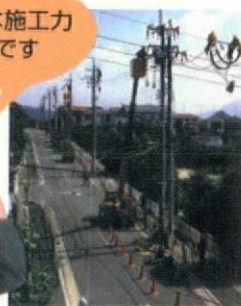
「地球にやさしくスムーズに。
交差点でも非開削で掘り進めます」

きんでん独自の技術で、交差点でも非開削で掘り進める「急曲線（Jカ
ーブ）推進工法」。交通支障もなく、工期の短縮でコストも削減できます。



技術力で
コストを削減します

「トータルな施工力
が自慢です」



「社会を支えるエネルギーや情報
通信。ネットワーク構築からメ
ンテナンスまでお任せ下さい」

エネルギーや情報通信ネットワーク。品質・安全・環境に配慮し
た高い技術と経験を生かして、ネットワーク構築からメンテナンス
までトータルにエンジニアリングを行います。

私たちは、情報・エネルギー・環境の幅広いフィールドで、高品位な技術を
駆使するシステムインテグレータです。だからこそ、お客様のニーズに応え
るだけでなく、さらにその一歩先のご提案をしていける。いつも「気がつく」、
名前に**きがつくきんでん**ですから「もっとお役にたてるご提案を」と
がんばっています。

きんでん

本 店：大阪市北区本庄東2丁目3番41号 TEL:06(6375)6000
東 京 本 社：東京都品川区東五反田5丁目25番12号 TEL:03(3447)3151
国内事業所180カ所/海外事務所12カ所/国内関係会社18社/海外関係会社11社
<http://www.kinden.co.jp/>

20歳過ぎたら 健診を。 人間の話では ありません。



働きざかりのビルを診断、中から元気にする。関電工でリニューアル。コンピューターや通信機器など、加速する技術の進歩に追われて息切れしているのは、私たち人間だけではありません。あなたが働いているそのビルも、電気配線など様々な設備の面で、中から疲れやすくなっています。だから、関電工でリニューアルを。ビルの内部を診断した上で、設計、施工してビル内環境をリフレッシュします。関電工はビルの設備に関するプロフェッショナル。新しいビルの電気設備から、今あるビルのメンテナンスまで、最高の技術力でお応えします。ビルをきちんと長生きさせるために、ビルのドクター関電工にお任せください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

関電工

本社〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号

もう一つのカジマを知ってください。

高層のビルを建てる。巨大なダムを造る。長い海底トンネルを掘る。確かにカジマの仕事ですが、しかしそれは、

ほんの一面にすぎません。私たちが四六時中生活する住まいの、

ここにも、あそこにも、意外なところにカジマの仕事が隠れています。

毎日が健康で、安心して、しかも快適に暮らせるために、

マンションや住宅用につくられた沢山の建材や工法たち。環境に配慮しつつ、

これからの高齢化する社会に向けて、カジマは何ができるのか。

そんな気持ちで、住空間に役立つ商品を開発しています。



健康に暮らせる住まいづくりへ。

住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす

人々の健康にも影響を与えます。鹿島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能ももつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。



ゼオライト建材



自然を身近に感じる快適環境づくりへ。

ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむの

はとて素晴らしいこと。鹿島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



エコヒーリングガーデン



ひとのふだんへ。



地震や火災に負けない安心空間づくりへ。

住まいを考えると、地震への対策が不可欠です。壊れない住まいを目指すのであれば、構造を強くすれば解決します。しかし、家具の転倒などによる被害は防ぐことができません。鹿島の「戸建住宅免震システム」は、建物と基礎との間に設置するボールベアリングを活用。建物に伝わる地震エネルギーを1/5以下に減らし、安全で安心な住まいを実現します。



ボールベアリングが受皿の上をなめらかに動きます。



100年をつくる会社

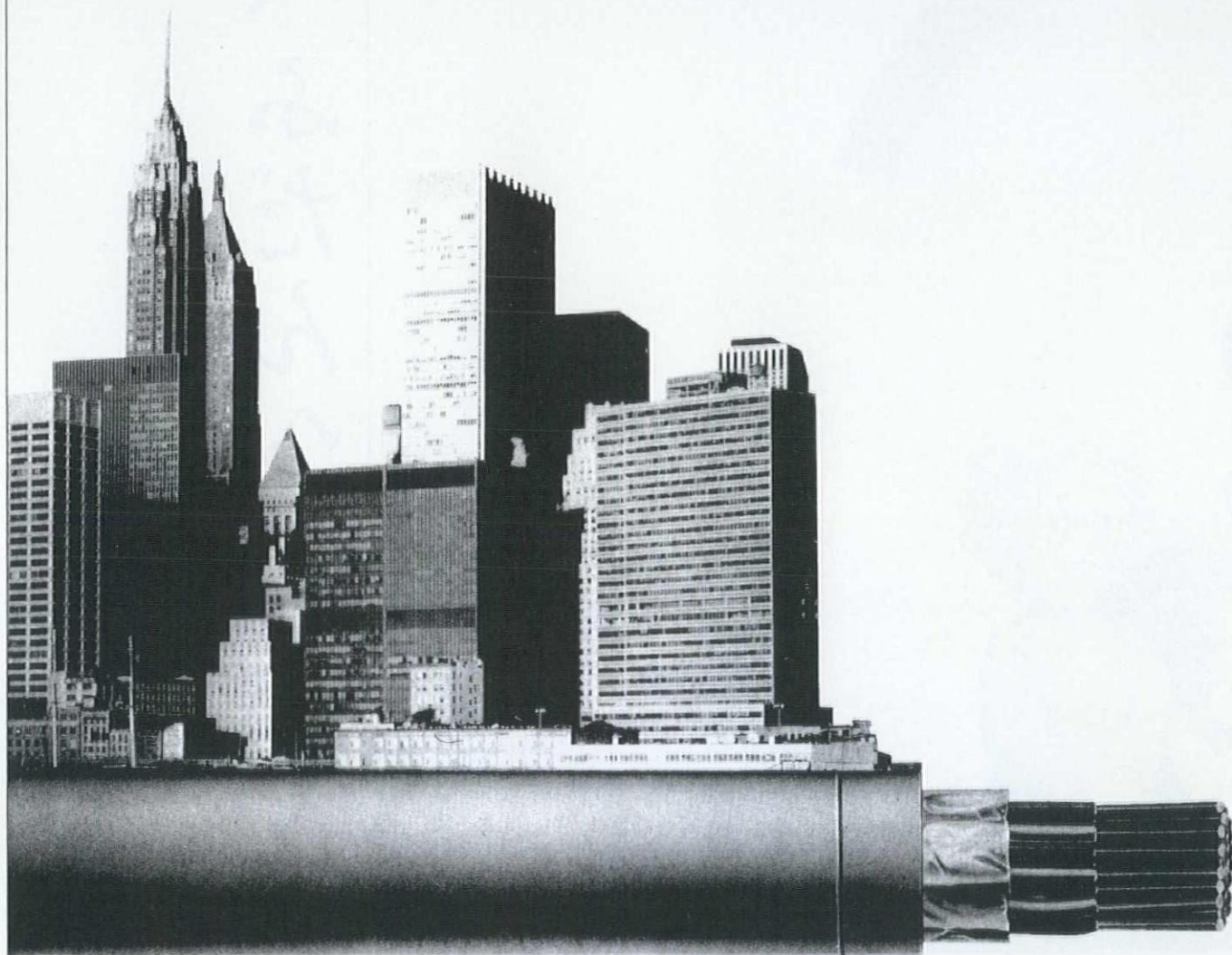
鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388

ホームページ <http://www.kajima.co.jp/>

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中樞神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のバイオニア



株式会社 弘電社

東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興藝科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネートを行います。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

より快適な
水環境を
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

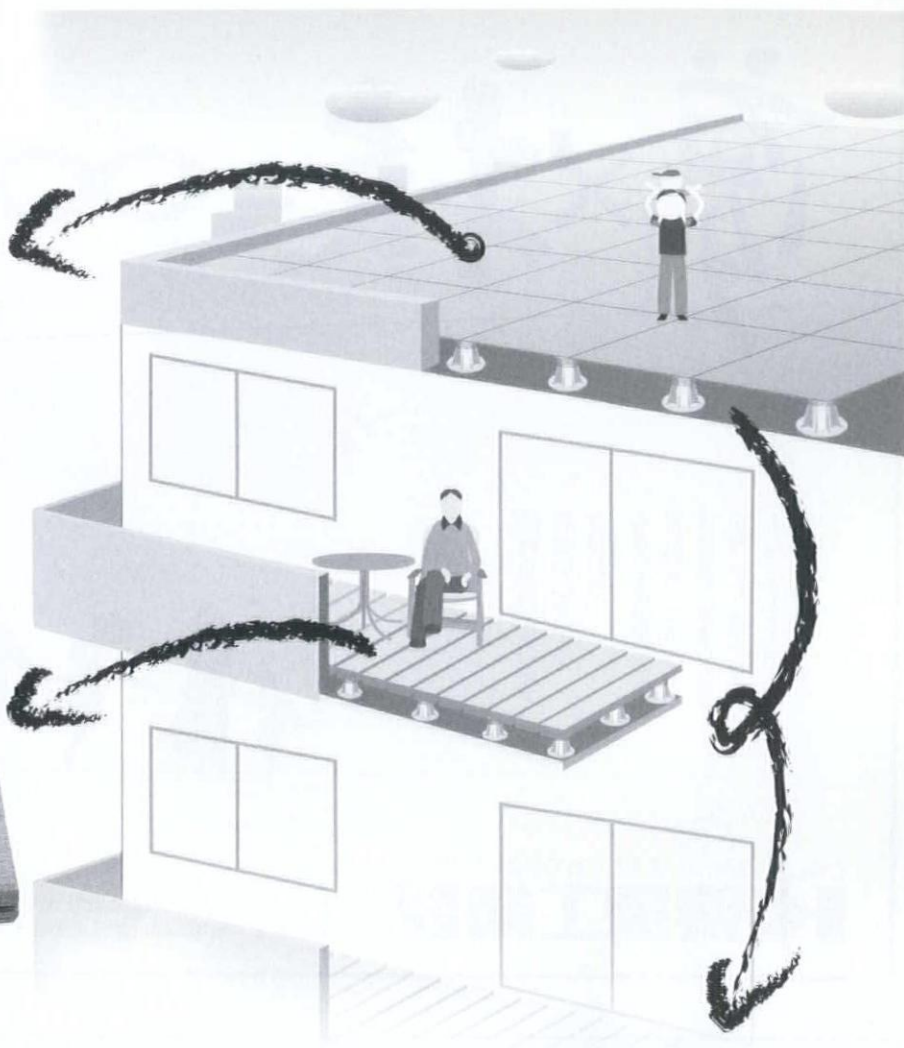
東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工



PFストーンパネル



PFウッドパネル(超硬質木材)



ユニークな発想で開発された「PFシステム」は、コンクリート製平板「PFパネル」を専用支持脚「PFスタンド」にて支持して二重床を設置し、防水層と二重床との間にフリースペースを確保する新しいタイプの防水層化粧保護システムです。

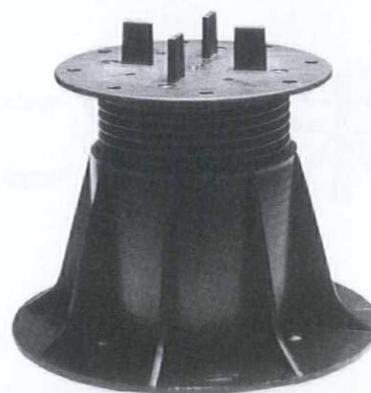
耐久性に優れたポリプロピレン樹脂製の「PFスタンド」は、独自のねじジャッキ作用により容易にレベル調整が可能であり、フラットな床面を確実に、素早く施工することができます。また、PFパネルの外に、凝石板の「PFストーンパネル」、洗出し板の「PFロックパネル」さらに木質板の「PFウッドパネル」も用意されているので、様々なデザインに対応できます。

【PFシステムの適用箇所】

- 陸屋根をはじめ、ガーデンルーフ隣接部、人工地盤、ルーフバルコニー（テラス、ベランダ）犬走り、室内二重床、外溝一般部等にご採用下さい。

容易な施工、軽量で丈夫、フラットな仕上り新しいタイプの乾式浮き床工法……

PFシステム



PFスタンド B-4タイプ

《特徴》

- 保護コンクリートが不要
- 32~600mmの自在な高さ設定
- スピーディで正確な施工
- 高い排水性
- アクセシブな空間
- 容易なメンテナンス



総合防水材料メーカー

日新工業株式会社



営業本部 ■ 〒103-0005 東京都中央区日本橋久松町9-2
TEL.03 (5644) 7211 (大代)

● ホームページ / <http://www.nisshinkogyo.co.jp/>

札幌・仙台・春日部・東京・千葉・横浜・名古屋・金沢・大阪・高松・広島・福岡

夢×技=無限大

YUME  TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。

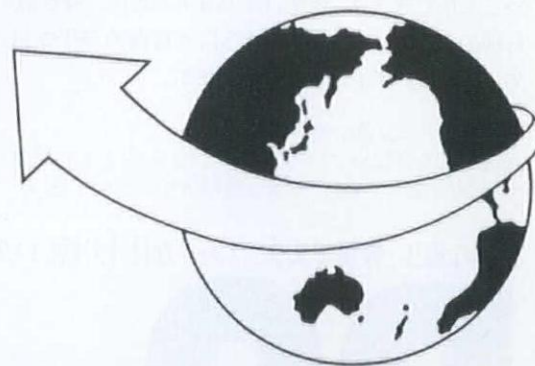



創業1919 あなたの街でお会いしています
東原工業株式会社

本社／〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(6313)1101
東京本店／〒105-0012 東京都港区芝大門 1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

未来に向って...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目
空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5711
大阪支社 〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(6302)2273
支店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろいろな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOENEK

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本店/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06)6305-2181
名古屋支店/名古屋市中区千代田3-1-32 〒455-0011 ☎(052)659-1123

N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本社 〒101-0047 東京都千代田区内神田3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大阪支店 ●横浜支店 ●仙台支店 ●広島出張所 ●福岡出張所

日立製作所電機特約店
日立化成工業特約店
日立機材特約店
日立建機特約店

旭化成建材代理店
新明和工業特約店
大和ハウス工業特約店
大昭和製紙特約店

施設商品

エレベータ・エスカレータ
ホームエレベータ
機械駐車設備
ゴミ処理設備
バスユニット・流し台
洗面化粧台
集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事
受変電・自家発電設備
空調機・ポンプ・送風機
監視防犯システム
節水バルブ・節水トイレ

建材商品

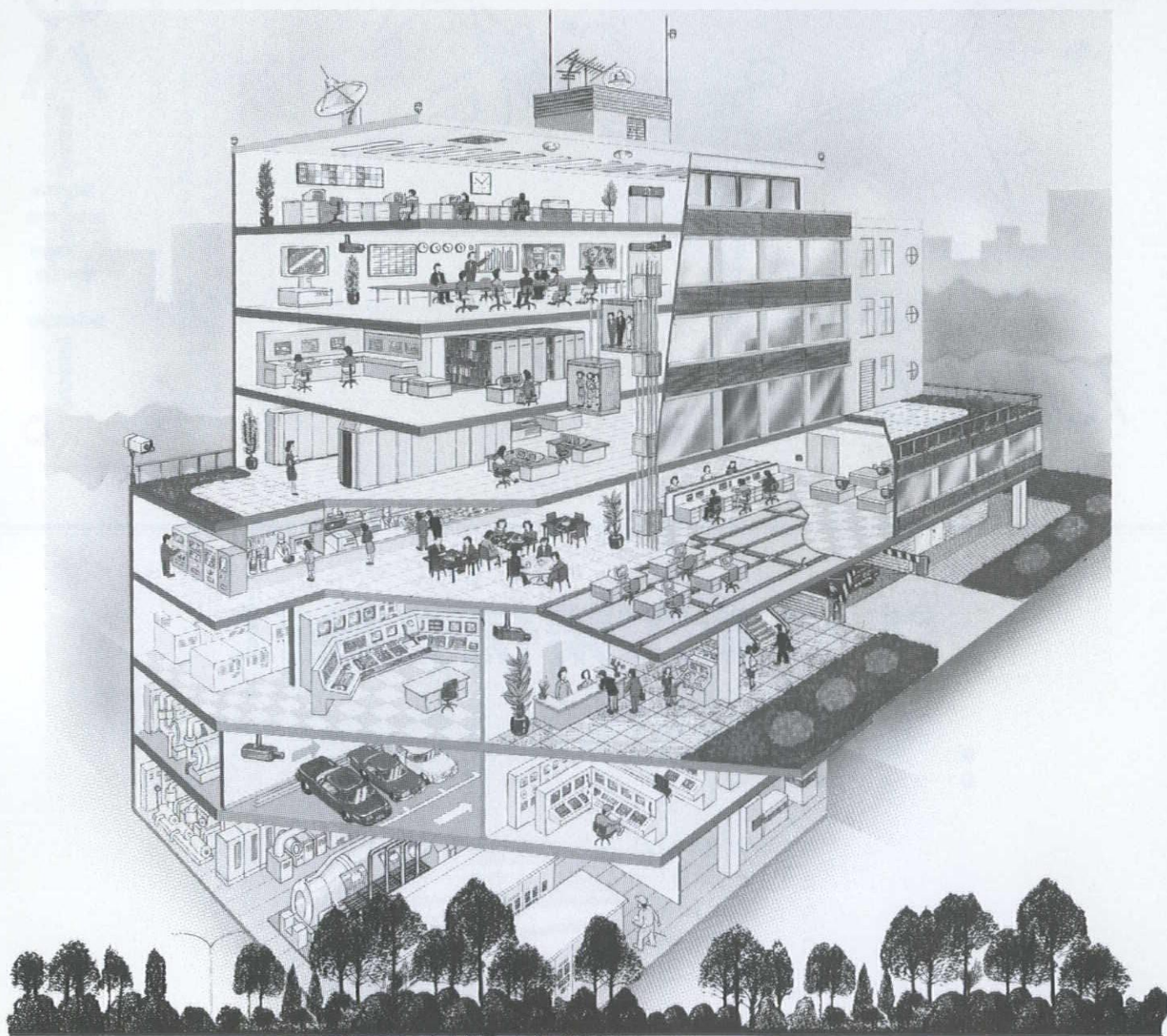
PHCパイプ・シテイガイ
イーゼット・現場造成杭
地盤改良
ヘーベル・グランデ
押出成形版・金属パネル
屋根・硝子工事
フリーアクセスフロア・OAフロア

クリーンルーム床工事
ハイベース・ハイスプリット
ユーボード・軽量鉄骨
プレハブ規格建築
大昭和ユニボード
九木ライトフォーム・シールド
クローラクレーン・耐火被覆



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

0010

特集

改造建築 公共建築の増改築の手法

既存の建築を改造する際、その国の文化や考え方が反映されている。本特集では10カ国の公共性の高いプロジェクトに焦点を絞り、その増改築の手法を紹介する。

改造という視点からみると、「建築」と「都市計画」には類似点がある。ひとつは既存の文脈を読み、評価することのできる「目」を持つこと。もうひとつは15のインタビューにあるような「プロセス」の重要性。大切なのは、都市と歴史に建築をしっかりと位置づけることである。

●都市の記憶

ビベラッハ市立図書館／ボリス・ボドレツカ、オペラ・ハウス／ジャン・ヌーヴェル、他。

●既存の価値を高める改造

大英博物館／フォスター・アンド・パートナーズ、テート・モダン／ヘルツォーク&ド・ムーロン、他。

●新しい領域へ

バンダーベーン・デパート増築／ヘルマン・ヘルツベルハー、マンハッタンのパントハウス／安藤忠雄、他。

●インタビュー：ヴォルフ・デン・ブリックス、フランチェスコ・ダル・コオ、安藤忠雄、香山壽夫、伊東豊雄、他。

●監修・インタビューアー＝宮脇 勝

定価＝2000円／本体1905円



0011

特集

ヒューマン・センター・デザインの可能性 アドバンス・プロダクトデザインからソーシャルデザインまで

単なるデザインを超え、環境・社会・コミュニケーションまでを含む、「あらゆる人々が快適に利用できるように、モノや空間、コミュニケーション環境をデザインしよう」といった、人間の生き方をめぐる新たなデザインの概念——ヒューマン・センター・デザイン (HCD)。21世紀デザインの新たなパラダイムといえるHCDの概念とその可能性を、既存のジャンルを超えた横断的視点から俯瞰する。

●座談会＝HCDをめぐる状況と可能性

柏木 博十・川崎和男・中原蒼二十彦坂 裕

●論文＝ヒューマン・センター・デザイン序説／Design Great：次世紀への構想と実践／タンジブルを超えて／「経験経済」へ向けてのユースウェア、ソーシャルウェア、他。

●インタビュー＝ジョン・アレン、中村 考

●文＝彦坂 裕、川崎和男、吉本光宏、渡辺保史、魚住早智子、今村有策、岩川千歩、森岡祥倫

●監修＝彦坂裕 企画・編集協力＝中原蒼二十信時正人

宮崎浩の“透明なスペース”

住宅から公共建築まで最新作3題

●取材・構成＝磯 達雄 写真＝北嶋俊治 文＝椎名英三

定価＝2000円／本体1905円



鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address：
http://www.kajima-publishing.co.jp/
index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号+消費税、送料込み）

SD

Space Design

SDバックナンバー常備店
東京
八重洲ブックセンター 03-8231-8203
三省堂本店(神田) 03-3233-3314
書泉グランデ 03-3295-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
大阪
旭屋書店本店 99-999-9999

柳々堂 06-443-0167
札幌/旭屋書店 011-241-3007
横浜/有隣堂本店 045-261-1231
京都/大龍堂書店 075-231-3036

9901 環境共生の現在 2700円
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のビジョンを示唆する。
エムシャープーク、東京ガス〈アースポート〉、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。

9902 ダッチ・モデル：建築・都市・ランドスケープ 2000円
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンズ、他。

9903 木の空間：木素材による快適建築 2000円
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンシヨナリズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐみ、H DESIGN、他。

9904 ガウディの愛弟子ジュジョールの夢 2000円
ジュジョールの選んだ作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄。文＝丹下敏明、他。[ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]

9905 挑発するマテリアリティ：素材の進化とデザインの可能性 2500円
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。素材史年表、素材地図1999、他。

9906 小川晋一：Transbody / Super traffic 2000円
小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝鶴沢隆、岡河貴、小川晋一、他。

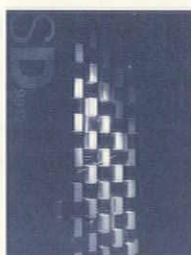
9907 学校建築：個性を育む環境創出へ向けて 2500円
学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる事項を解説し、実例を現地レポートを交え紹介する。文＝上野淳、他。座談会＝堀昭代十佐藤十船越徹十小嶋一浩十上野淳。

9908 階段：Beyond Function 2000円
近年の国内の階段、21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。
文＝渡辺武信、下村純一。

9909 ベルリン・トポグラフィ 2000円
今世紀最後の首都移転が展開されている、ハイポテンシャルな状況をドキュメントする。文＝内山佳代子、杉本俊多、山下昌彦、飯島洋一、花田和幸、他。
個性の彩る集住群：長野市今井ニュータウンの試み

9910 東京リノベーション 2000円
スペースの再生転用の事例を紹介するとともに、その手法やスペースの新しい可能性を探る。企画編集協力＝相谷姫中
写真＝村角創一
隅田川再生とリバーサイドスペース 写真＝加藤嘉六

9911 ジャパニーズ・プロダクツ'99：インディーズなシチュエーション 2300円
インディペンデントな活動を展開するデザイナーを中心に紹介し、日本におけるプロダクト・デザインの可能性を探る。
企画協力・文＝川上典子、青山玲、写真＝高山幸三



9912 SDレビュー 1999
第18回SDレビュー1999入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。
エリック・ブリュグマンの建築 文＝ユハニ・パルスマー、田中雅美、他。
ハブニング展1999/2000
2000円



0001 横 文彦 1993-1999
1993年から最新作までの作品を進行中のプロジェクトを含め、豊富な写真、スケッチ、図面で紹介する。
文＝横文彦、D.スチュワート、富永 謙
対談＝横文彦×門内輝行
4100円



0002 コミュニケーション・キッチン
建築家によるキッチンスペース、メーカーのキッチン機器を紹介しながら、国内で実現できるキッチンスペースの可能性を探る。
文＝黒田秀雄、下島資子、他。黒田＝黒田秀雄×葛西潔×東利恵
2000円



0003 リカルド・ボフィー 1995-2000
クラシシズムとモダニズムの現代的融合の表現をめざして活動を展開するリカルド・ボフィーの近年の主要作品、プロジェクトを紹介する。
文＝リカルド・ボフィー、飯島洋一、櫻井義夫、志村直登。
2000円



0004 歴史的都市を読む
近代都市への反省を踏まえ、改めて今、歴史的都市に注目し、都市の形成、空間構造の魅力についてフィールドワークの成果をレポートする。
対談＝長尾重武×陣内秀信
監修＝陣内秀信。
2000円



0005 ヒューマノイド・インターフェイス
メディア化されたインターフェイスは、センサー・情報処理能力・運動能力を備えて身体と関わる。このようなメディア化をともなったテクノロジーと身体の新たな関わり方を考察する。
編集協力＝小田切博、他。
2000円



0006 クライン・ダイサム・アーキテクト
クライン・ダイサム・アーキテクトの、これまでのデザイン活動の全貌を紹介する。
文＝伊東豊雄、渡部千春、萩原修、西沢立衛、クライン・ダイサム・アーキテクト。
2000円



0007 ツール・ド・ロマネスク
中世の光と空間をテーマに、フランス西部の巡礼路にそって、ロマネスク教会建築を紹介する。
企画協力＝櫻井義夫 写真＝堀内広治 文＝羽生修二、長塚安司、田窪恭二、山田健。
2000円



0008 本：20世紀ブックデザインの精鋭
北園克衛の「空気の箱」[VOU]他、[VISIONAIRE]、[漢聲]、[tomato]、[fuel]、[フルクサス・アネックス]、[ウルムの遺産]、他。文＝蜂賀享、渡部千春、方振寧、北橋明也、他。インタビュー＝杉浦康平。
監修＝全澤一志
2300円



0009 木造モダニズム 1930s-50s
近年のモダニズム再考、「木」という素材への回帰といった動きの、日本におけるパイオニアともいえる1930～50年代の「木造モダニズム」というカテゴリ。その全貌を紹介する。文＝大川三雄、黒沢隆、他。写真＝清水薫
2000円



0010 改造建築
世界10カ国の公共性の高いプロジェクトに焦点を絞り、増改築の手法を探る。作品・インタビュー＝ボリス・ボドレック、安藤忠雄、ポール・シュメツ、香山壽夫、ヘルマン・ヘルツベルハー、伊東豊雄、他。監修＝宮脇勝
2000円



0011 ヒューマン・センター・デザインの可能性
21世紀の新たなパラダイムともいえるヒューマン・センター・デザインの概念とその可能性を、横断的視点から俯瞰する。文＝川崎和男、渡辺保史、魚住早智子、吉本光宏、他。監修＝彦坂裕
2000円



9908 Stairs: Beyond Function

Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.

¥ 2,000



9809 Berlin Topography

The century's last transfer of a capital city is taking place. This issue documents the high potential of this move. Text: Kayoko Uchiyama, Toshimasa Sugimoto, Masahiko Yamashita, Youichi Iijima, Kazuyuki Hanada, and others.

Distinctive Housing Complexes: The Imai New Town Experiment in Nagano ¥ 2,000



9910 Tokyo Renovation:

Introduces several cases of space renovation and reuse and explores the methods used and the new possibilities of space they offer. Editorial Cooperation: Hijun Kasuya. Photographs: Soichi Murazumi.

Reviving the Sumida and Riverside Space. Photograph: Karoku Kato ¥ 2,000



9911 Japanese Products 99: Their Independent Situation

Introduces mainly designers engaged in independent activities, and explores the potential of product design in Japan. Editorial cooperation and text by Noriko Kawakami and Akira Aoyama. Photographs by Kozo Takayama

¥ 2,300



9912 SD Review 1999:

Introduces the results of the 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings, along with comments from the screening committee.

Erik Byggman's Architecture: Texts by Juhani Pallasmaa and others.

HAPPENING 1999/2000 ¥ 2,000



0001 Fumihiko Maki 1993-1999:

Introduces a generous selection of photographs, sketches, and drawings of Maki's most recent works from 1993. Texts by Maki, David B. Stewart and Yuzuru Tominaga. Discussion: Teruyuki Monnai and Fumihiko Maki.

¥ 4,100



0002 Kitchen for Communication:

Introduces kitchen spaces designed by architects and kitchen furniture by manufacturers and explores the potential of kitchen spaces in Japan. Texts by Hideo Kuroda, Motoko Shimojima, etc. Discussion: Hideo Kuroda, Kiyoshi Kasai, and Rie Azuma.

¥ 2,000



0003 Ricardo Bofill 1995-2000:

Introduces leading works and projects of Ricardo Bofill, whose recent activity aims at a contemporary union of classicism and modernism. Texts by Ricardo Bofill, Yohichi Iijima, Yoshio Sakurai, and Naoki Shimura.

¥ 2,000



0004 Reading the Historical City:

Introduces the results of fieldwork-based analysis of historic cities, reporting on how the cities emerged as well as how their spatial structure gives them special appeal, from a critical perspective on the modern city. Dialogue: Shigetake Nagao and Hidenobu Jinnai. Editorial supervision: Hidenobu Jinnai.

¥ 2,000



0005 The Humanoid Interface:

The media of the man-machine interface now utilize sensors, information processing capabilities, and motor capabilities. This issue considers the technologies of these media and their new relationship to the human body. Editorial cooperation: Hiroshi Odagiri and others.

¥ 2,000



0006 Klein Dytham architecture:

Presents an overall view of the design activities to date of Klein Dytham architecture. Texts by Toyo Ito, Chiharu Watabe, Shu Hagiwara, Ryue Nishizawa, and Klein Dytham Architecture.

¥ 2,000



0007 Pilgrimage to Romanesque Architecture in France:

Following pilgrim routes in Western France, this issue introduces the themes of light and space in the Romanesque religious architecture of the Middle Ages. Cooperation: Yoshio Sakurai. Photographs: Kouji Horiuchi.

¥ 2,000



0008 Selected Bookworks in the 20th Century:

Katsue Kitasono: Kuki no Hako (Poetry Book) and VOU. VISIONAIRE and Hansheng. "tomato", "fuel", and "Fluxus Annex".

Texts by Toru Hachiga, Chiharu Watabe, Fang Zhenning, Tomoya Kitahashi. Interview with Kohei Sugiura.

Cooperation: Hitoshi Kanazawa. ¥ 2,300



0009 Modernism in Wooden Construction 1930s to 1950s:

Provides an overview of "modernism in wood construction in the 1930s-1950s," a pioneer movement in Japan now receiving renewed attention as part of the reappraisal of modernism and return to wood materials.

Texts by Mitsuo Ohkawa, and others. ¥ 2000



0010 The Architecture of Transformation:

Explores methods of conversion and addition, with focus on projects of a predominantly public nature in ten countries, designed by Boris Podrecca, Tadao Ando, Paul Chemetov, Hisao Kohyama, and Herman Herzberger. Guest editor: Masaru Miyazaki

¥ 2,000



0011 The Potential of Human-Centered Design:

Presents bird's-eye view of human-centered design, the concept that has been called the new paradigm for the 21st century, and its possibilities. Texts: Kazuo Kawasaki, Yasushi Watanabe, Sachiko Uozumi, and others. Supervised by Yutaka Hikosaka.

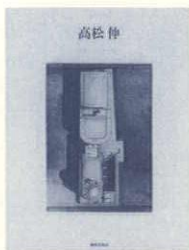
¥ 2,000



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキンブラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁気込まれた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織澤 I、III、他。

3800円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタポリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンベ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新 ① 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐習館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、灰別山寮、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井翌磨。座談=大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新 ② 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。チームデイズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

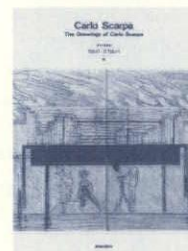
4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英 X 安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地进行と主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

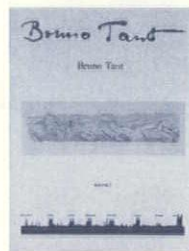
3500円



横文彦 ②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ボスボラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄 ② アンビル・プロジェクト

'70年代からの見逃せないアンビル作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギヤラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で育まれた作品群。その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

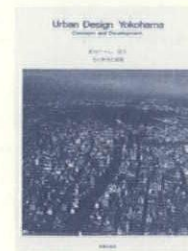
3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールその歴史と思想：三宅理一編。ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×裏原敬×小澤恵一、他。

5000円

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design; 81-3-5561-2561

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2551

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

社告

永年にわたりご愛顧いただいていた『SD』誌を、本号をもちまして一時休刊することいたしました。

本誌は「都市・建築・芸術の総合誌」として、1965年1月に創刊されて以来36年間、都市・建築およびその他の諸芸術・デザインの領域において、それぞれの持つ空間概念の共通性・連続性を考察する月刊誌として広くご愛読いただいておりますが、今ここに一応その役割を果たしたものと思料いたします。

今後は新たな世紀に向けて、私たちを取りまく環境と幅広いデザイン分野に対する新しい視点を求め、再出発を期するものです。

今日までのご愛顧を心から感謝申し上げますとともに、今後の再出発に向けて、変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成12年12月1日
株式会社 鹿島出版会

0012

都市・建築・芸術の総合誌

スペースデザイン 第435号
2000年12月号

SD

Space Design

編集長：相川幸二
副編集長：高木伸哉 松口 龍
編集スタッフ：川嶋 勝 石田貴子
伏見佳子
制作協力：久世 健
株式会社シンクス
発行人：井田隆章
発行所：鹿島出版会
107-8345
東京都港区赤坂6丁目5番13号

電話：03-5561-2551 営業
03-5561-2555 編集
FAX：03-5561-2561 営業
03-5561-2565 編集
TELEX：02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
URL：http://www.kajima-publishing.co.jp

005

特集

SDレビュー2000

第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

017
「SD レビュー 2000」開催にあたって
鹿島昭一

020
岡田周也+大庭 晋+住谷 寛
[IVY]

022
川人洋志
[光のトーチカ]

024
齋藤 誠+石田建太郎+アレックス・エレンパーガー/
LOCUS.+m architects
[house PTT]

027
三分一博志+坂野博行
[running green project]

030
末包伸吾
[b-in-d]

032
中島貴光+安宅研太郎+西澤徹夫+儀賀咲恵
[HAYAMA beach house project]

034
二宮 博+菱谷和子 / Studio 2 Architects
[FLAT A+B]

036
野澤良太+栄元正博+中村秀樹
[M 村温泉施設計画]

038
原田真宏+原田麻魚
[@ /scape]

018
総評：
横 文彦/岡部憲明/芦原太郎/小川晋一

040
矢口博幸+I.C.A.
[Soft house]

042
安田光男
[Reversible House]

044
藤本壮介
[M Hospital Day-care House]

047
山岡嘉彌
[linea]

050
吉田 晋
[街の教会]

052
松野 勉+相澤久美
[都市生活者たちの家
a Home of / by / for City Dwellers]

054
講評：
横 文彦/岡部憲明/芦原太郎/小川晋一

059
SDレビューレビュー
熊倉洋介

060
経過報告

061
コミュニケーション・ワークスペース
芦原太郎建築事務所リノベーション

064
ワークスペースの進化

069
コミュニケーション・ワークスペース：
上原モデルルームリノベーション

074
上原リノベーション・クロニクル

076
次なる時代へ向けての実験
芦原太郎

093
SDグラフィティ
36年の想い出

飯島洋一/磯崎 新/植田 実/宇野 求/
片木 篤/北沢 猛/隈 研吾/黒川紀章/
香山壽夫/小林克弘/椎名政夫/篠原一男/
陣内秀信/杉浦康平/高階秀爾/丹下健三/
長谷川逸子/羽原庸郎/林 昌二/原 広司/
穂積信夫/横 文彦/松本哲夫/元倉眞琴

077
越後妻有アートトリエンナーレ 2000
「大地の芸術祭」を終えて / CLIP

082
ニュース：不思議の国のCHARA
植木明日子

083
ニュース：2000年チェルサイエ国際展示会より

085
ニュース：ビデオ・ササキ氏の死を憶ふ
都田 徹

086
書評
岸田省吾

089
新刊紹介

090
お知らせ

109
総目次

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大阪屋・大洋社・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円 [本体1,905円]
年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：齋藤 誠+石田建太郎+アレックス・エレンパーガー/
LOCUS.+m architects [house PTT]
表紙写真：堀内広治/新写真工房
デザイン：山口デザイン事務所/山口信博+齋藤亜季子

005

Special Feature

SD Review 2000

The 19th Exhibition of Winning Architectural Drawings and Models

- 017
On the Occasion of SD Review 2000
Shoichi Kajima
- 020
Shuya Okada+Shin Ohba+Satoru Sumitani
[IVY]
- 022
Hiroshi Kawahito
[The Shining Tochka]
- 024
Makoto Saito + Kentaro Ishida + Alex Ellenberger/
LOCUS.+m architects
[house PTT]
- 027
Hiroshi Sambuichi + Hiroyuki Sakano
[running green project]
- 030
Shingo Suekane
[b-in-d]
- 032
Kiko Nakajima + Kentaro Ataka +
Tetsuo Nishizawa + Sakie Gika
[HAYAMA beach house project]
- 034
Hiroshi Ninomiya + Kazuko Hishiya/
Studio 2 Architects
[FLAT A+B]
- 036
Ryota Nozawa + Masahiro Eigen + Hideki Nakamura
[Plan for M Village Hot-spring Facilities]
- 038
Masahiro Harada + Mao Harada
[@/scape]

- 061
Communication Workspace:
Taro Ashihara Architects Renovation

- 018
Comments from the Screening Committee:
Fumihiko Maki, Noriaki Okabe,
Taro Ashihara, Shinichi Ogawa

- 040
Hiroyuki Yaguchi + I.C.A.
[Soft house]
- 042
Teruo Yasuda
[Reversible House]
- 044
Sosuke Fujimoto
[M Hospital Day-care House]
- 047
Yoshiya Yamaoka
[linea]
- 050
Shin Yoshida
[Church of City]
- 052
Ben Matsuno + Kumi Aizawa
[A Home of/by for City Dwellers]
- 054
Screening Committee:
Fumihiko Maki, Noriaki Okabe,
Taro Ashihara, Shinichi Ogawa

- 059
SD Review Review
Yosuke Kumakura

- 060
Progress Report

- 064
Workspace Evolution
- 069
Communication Workspace:
Uehara Sample Room Renovation
- 074
Uehara Renovation Chronicle
- 076
The Experiment for Next Generation
Taro Ashihara

- 093
SD Graffiti:
Recollection of 36 Years

- Yohichi Iijima / Arata Isozaki / Makoto Ueda /
Motomu Uno / Atsushi Katagi / Takeru Kitazawa /
Kengo Kuma / Kisho Kurokawa / Hisao Kohyama /
Katsuhiro Kobayashi / Masao Shiina /
Kazuo Shinohara / Hidenobu Jinnai /
Kohei Sugiura / Shuji Takashina / Kenzo Tange /
Itsuko Hasegawa / Shukuro Habara / Shoji Hayashi /
Hiroshi Hara / Nobuo Hozumi / Fumihiko Maki /
Tetsuo Matsumoto / Makoto Motokura

- 077
Echigo-Tsumari Art Triennial 2000
CLIP

- 082
News: CHARA in Wonderland
Asuko Ueki

- 083
News:
International Exhibition of Ceramics for the Building
Industry and Bathroom Furnishings, Cersaie

- 085
News: News: Remembering the Late Hideo Sasaki
Toru Miyakoda

- 086
books Review
Shogo Kishida

- 089
Books Information

- 090
Announcement

- 109
SD 2000 INDEX

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
TEL: +81 3 5561 2551 [Management],
+81 3 5561 2555 [Editing]
FAX: +81 3 5561 2561 [Management],
+81 3 5561 2565 [Editing]
TELEX: 02422467 KAJIMA J
URL: <http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm>

Printed in Japan

This Copy: ¥ 2,000
¥ 30,000 a year
¥ 50,000 two years

Order Form: Page 2

Cover: Makoto Saito + Kentaro Ishida + Alex Ellenberger/
LOCUS.+m architects [house PTT]
Photo: Kouji Horiuchi / N.P.A.
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

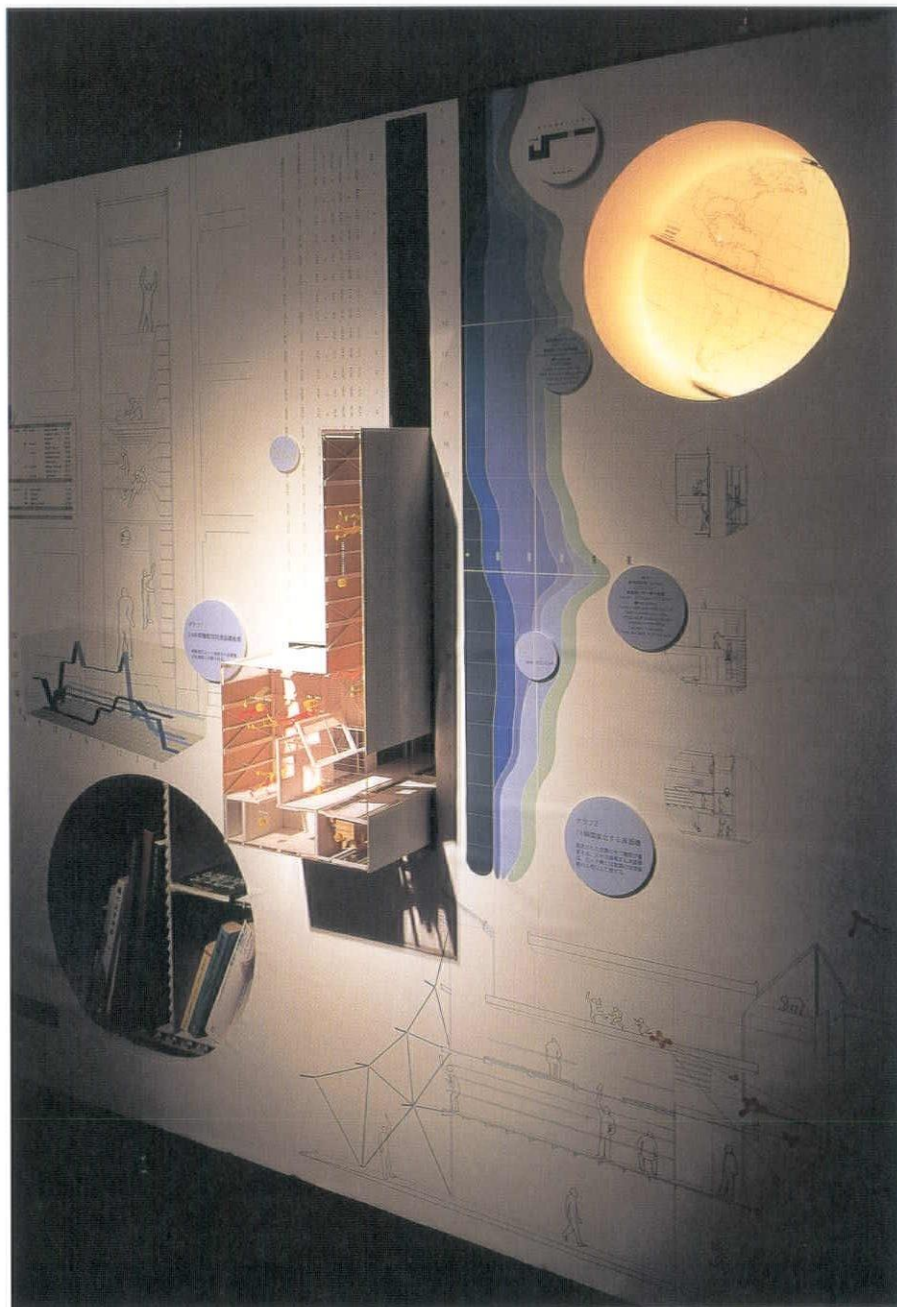
特集

SDレビュー2000

第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 2000

The 19th Exhibition of Winning Architectural Drawings and Models



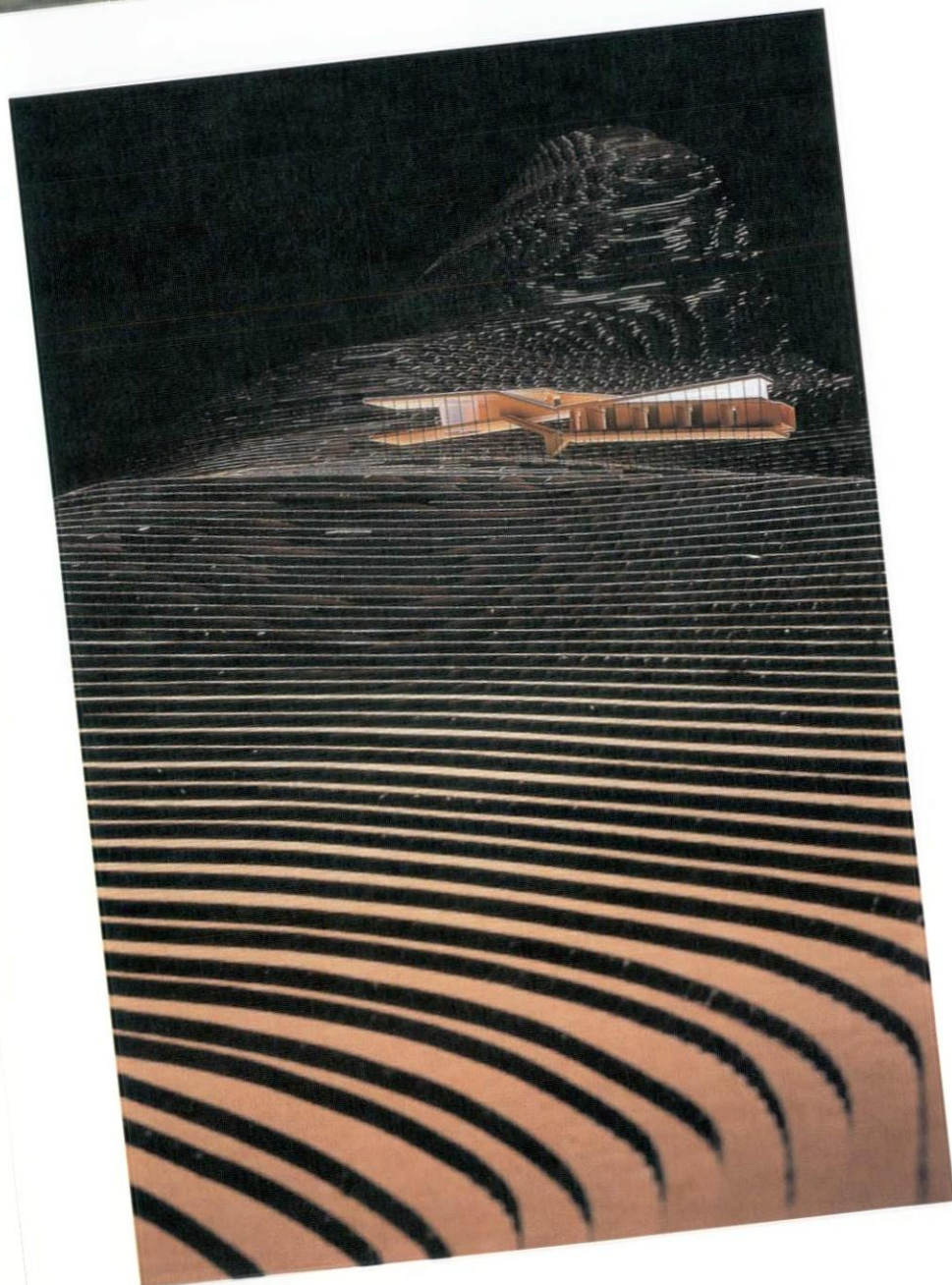
ライフ アンド シェルター社／松野 勉＋相澤久美

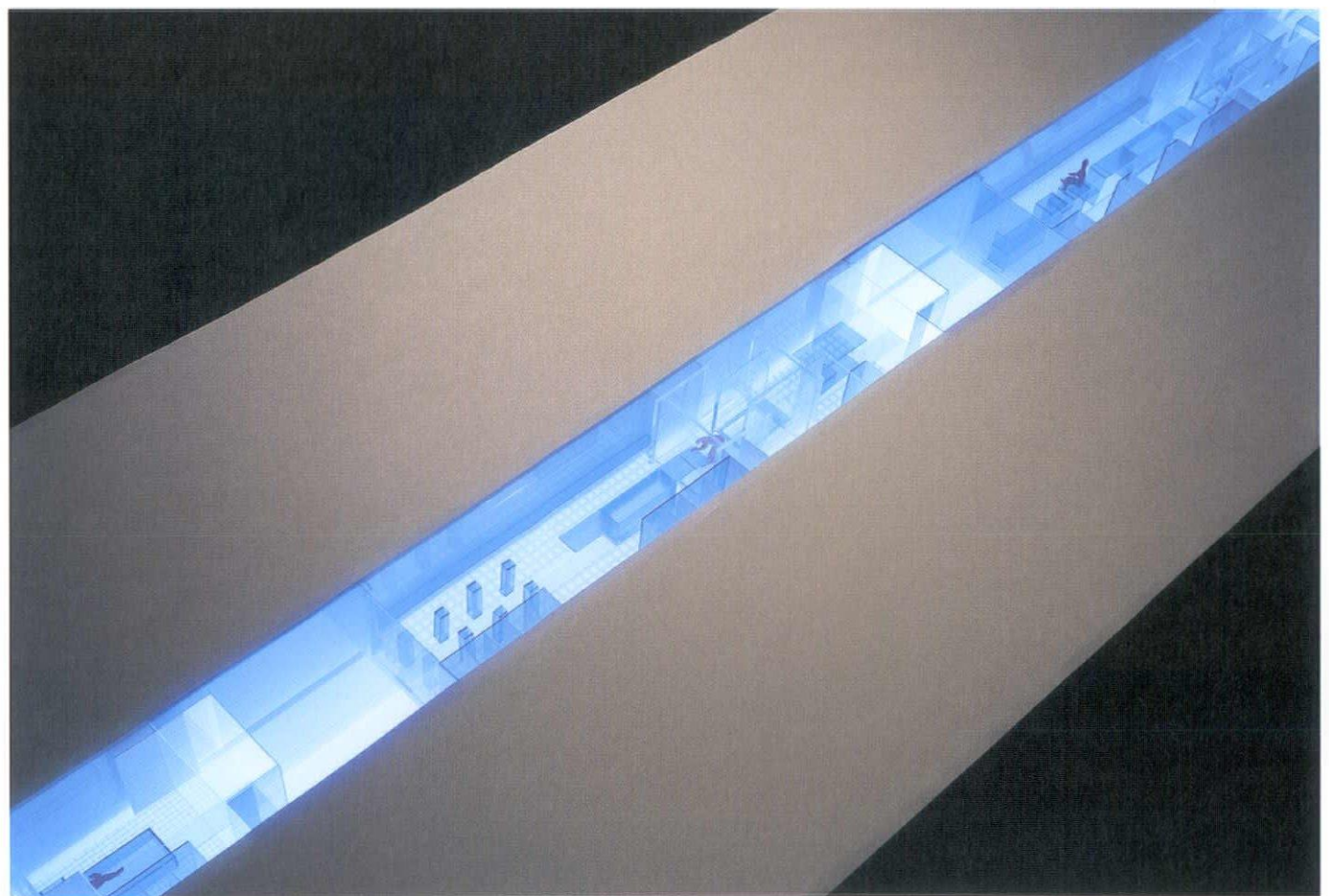
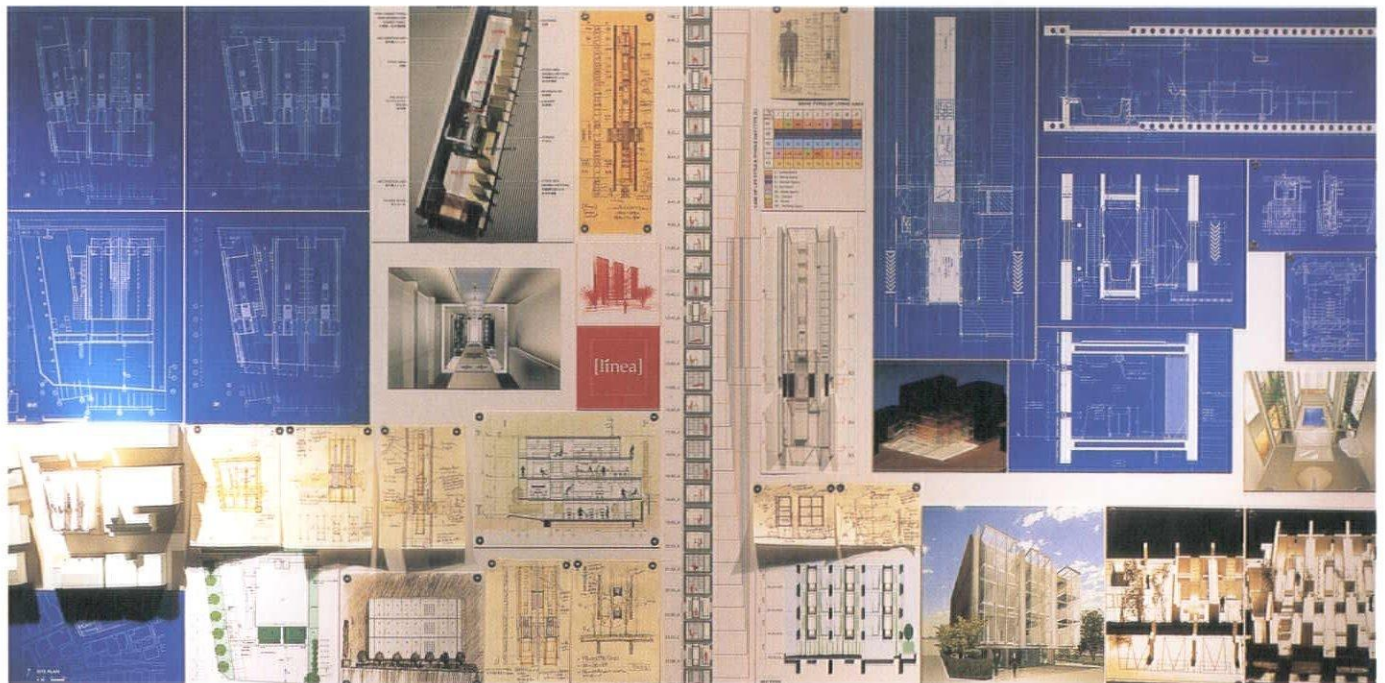
[都市生活者たちの家 a Home of / by / for City Dwellers]→052

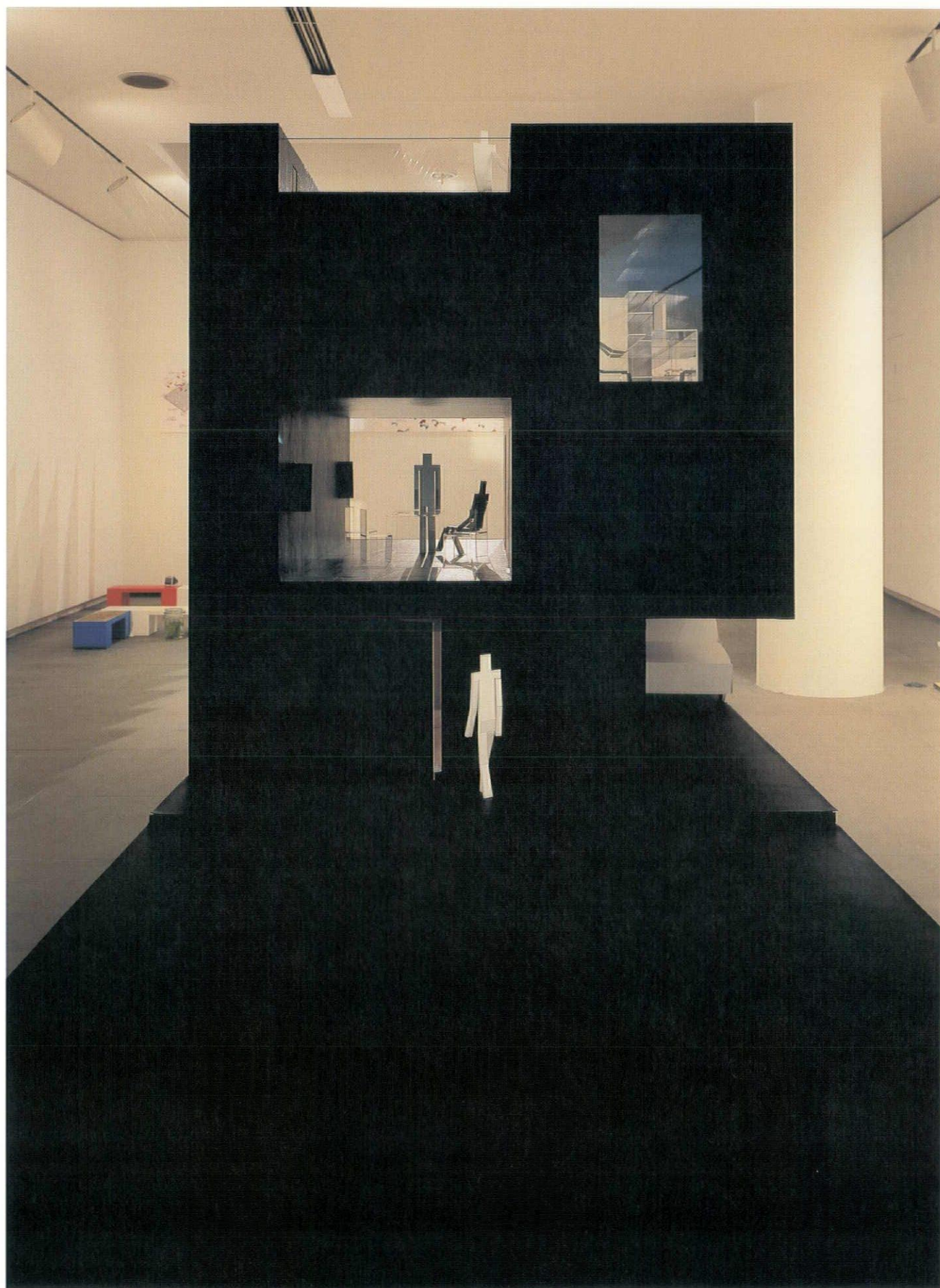
◎鹿島賞

齋藤 誠+石田建太郎+アレックス・エレンバーガー / LOCUS. + m architects

[house PTT] → 024



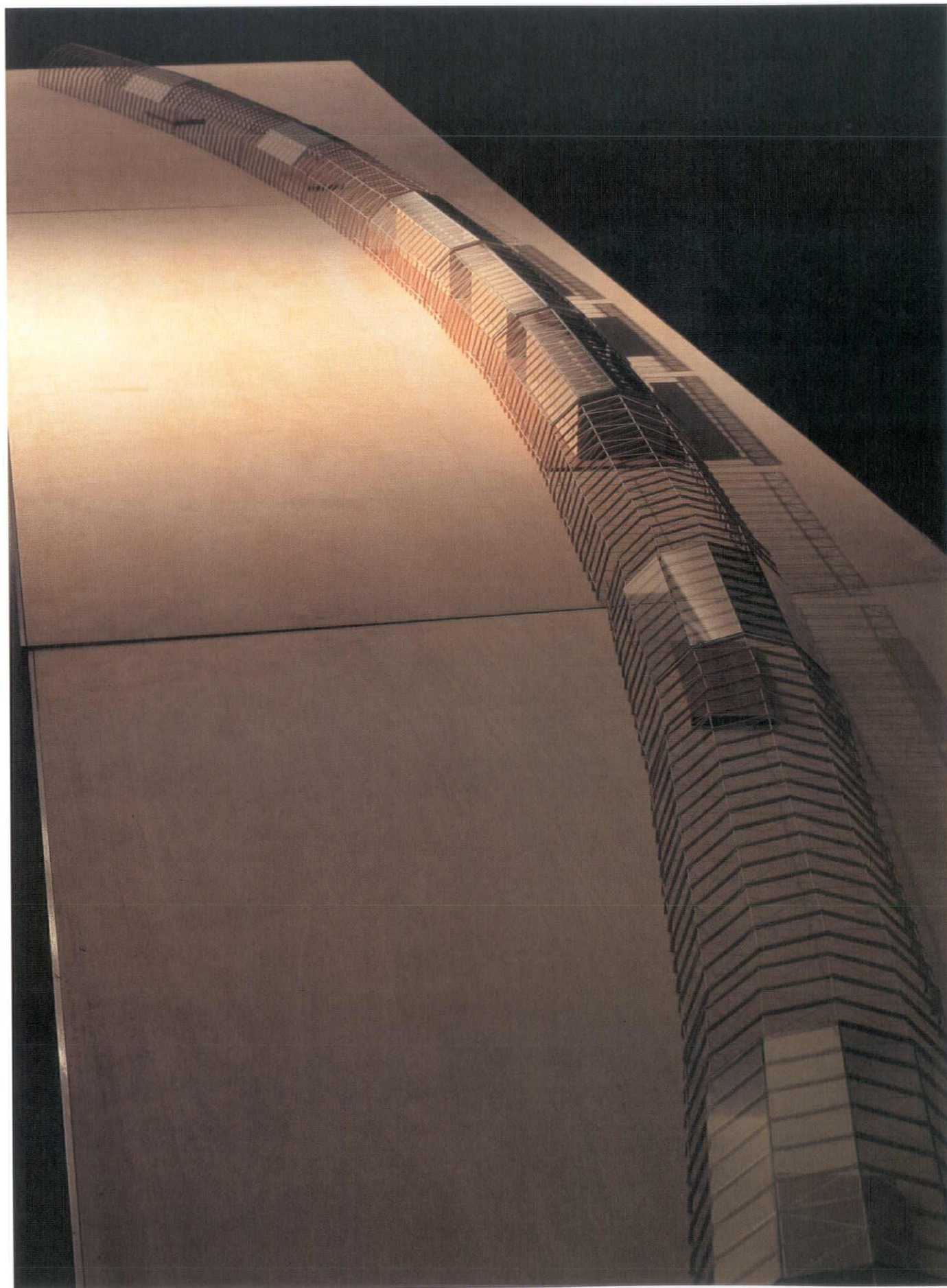




◎新人賞

三分一博志+坂野博行

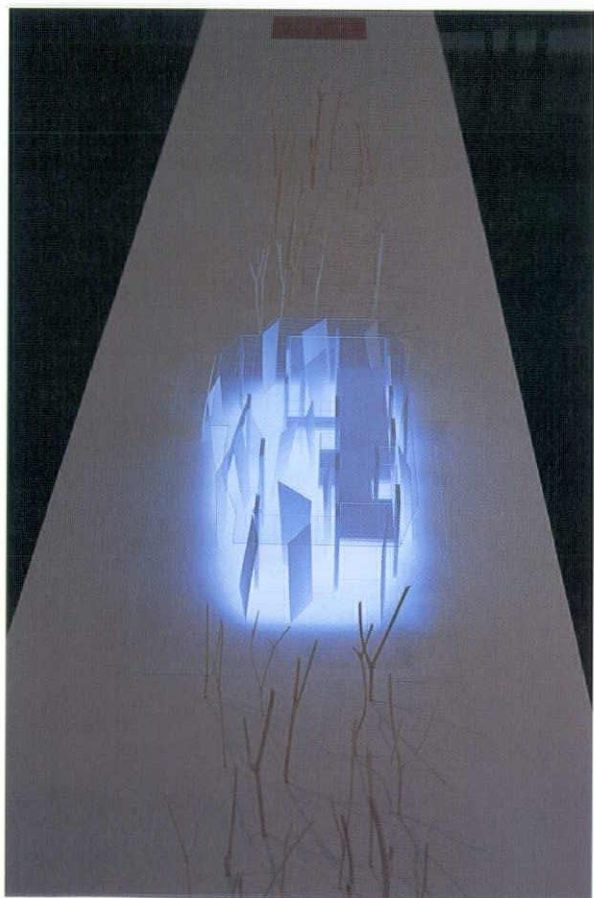
[running green project] → 027

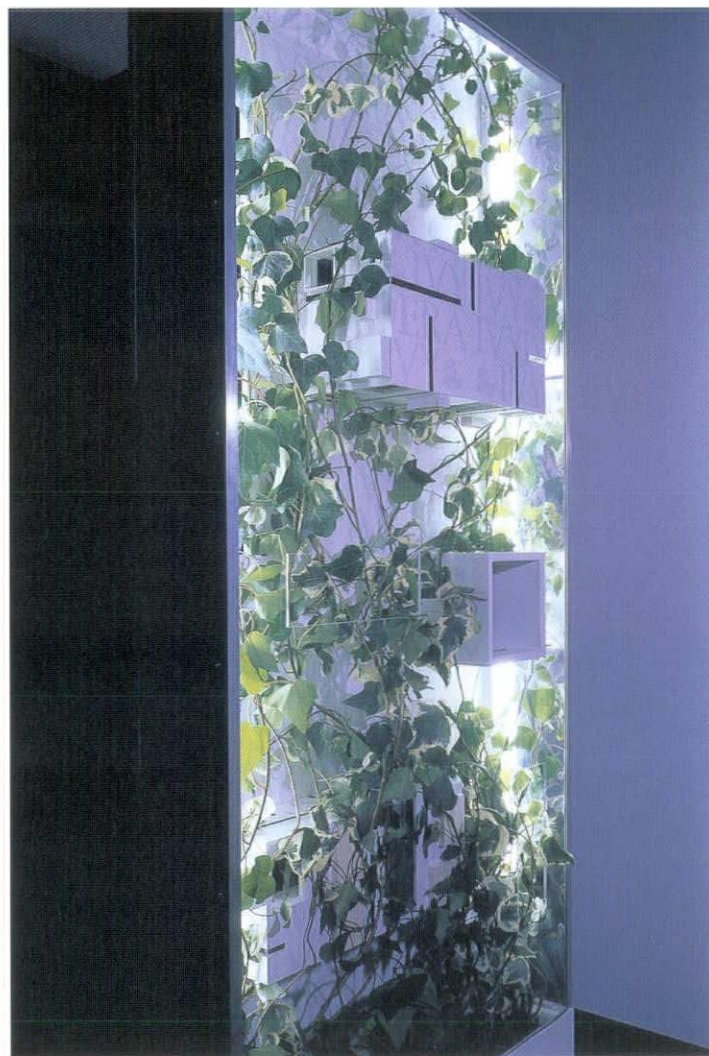


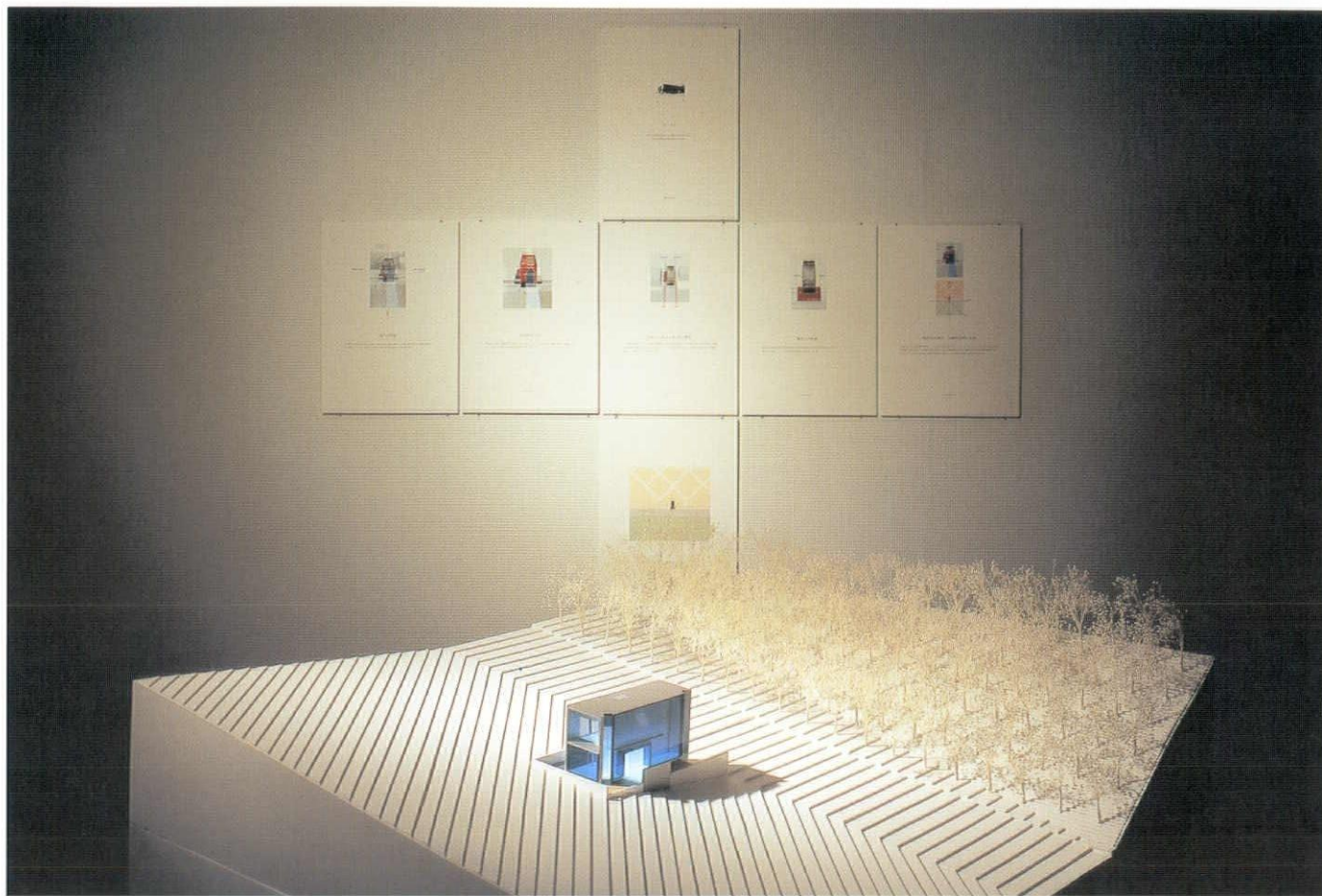
◎横賞

藤本壮介

[M Hospital Day-care House] → 044

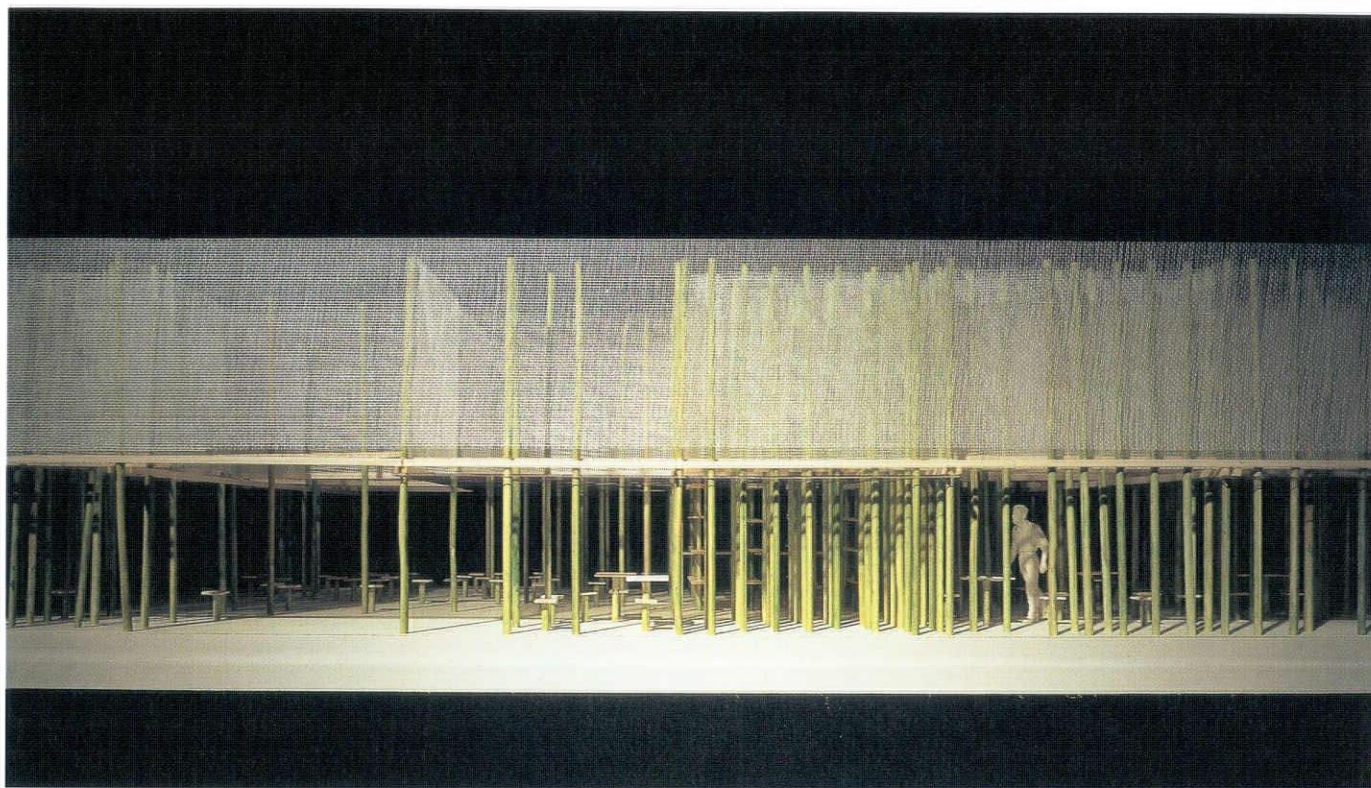




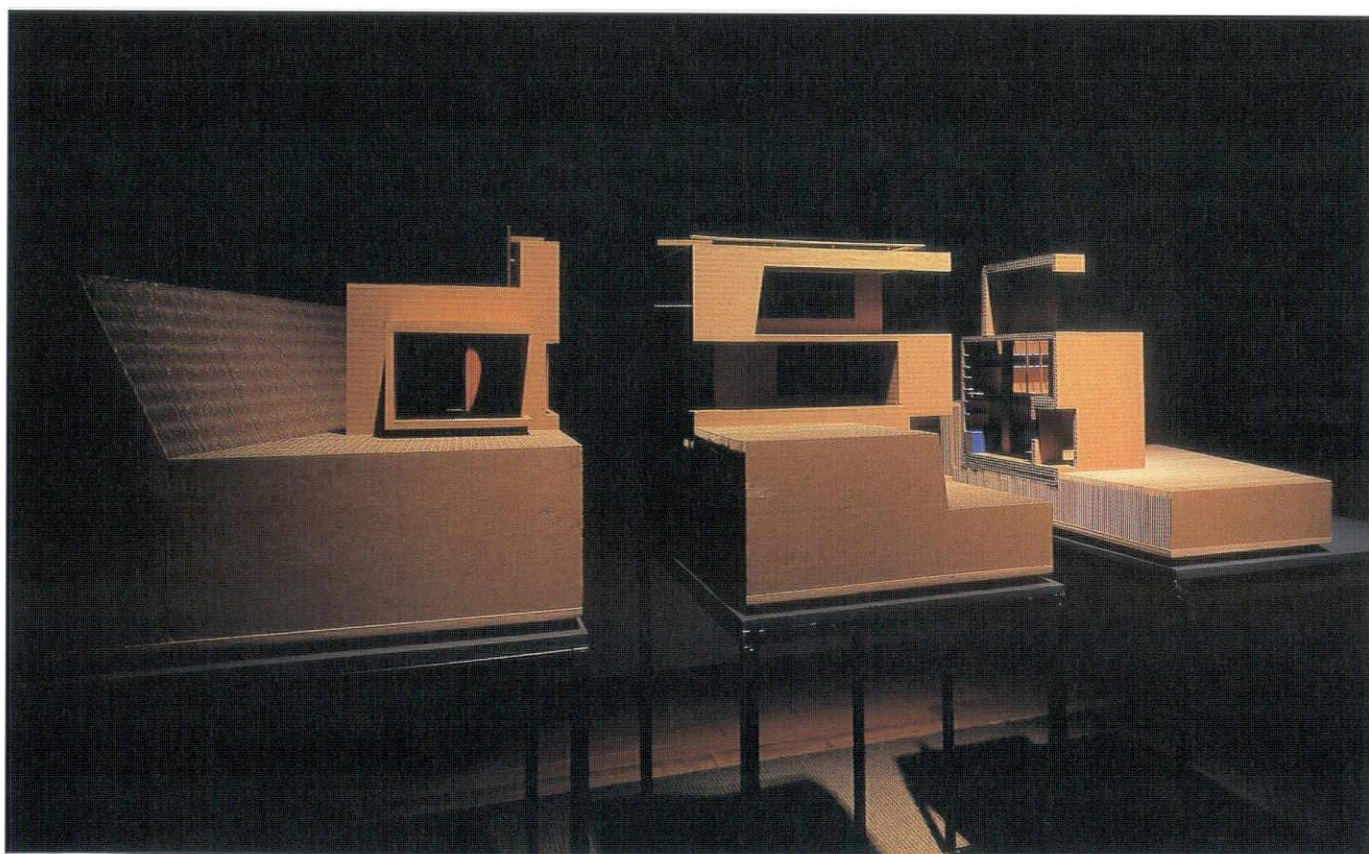


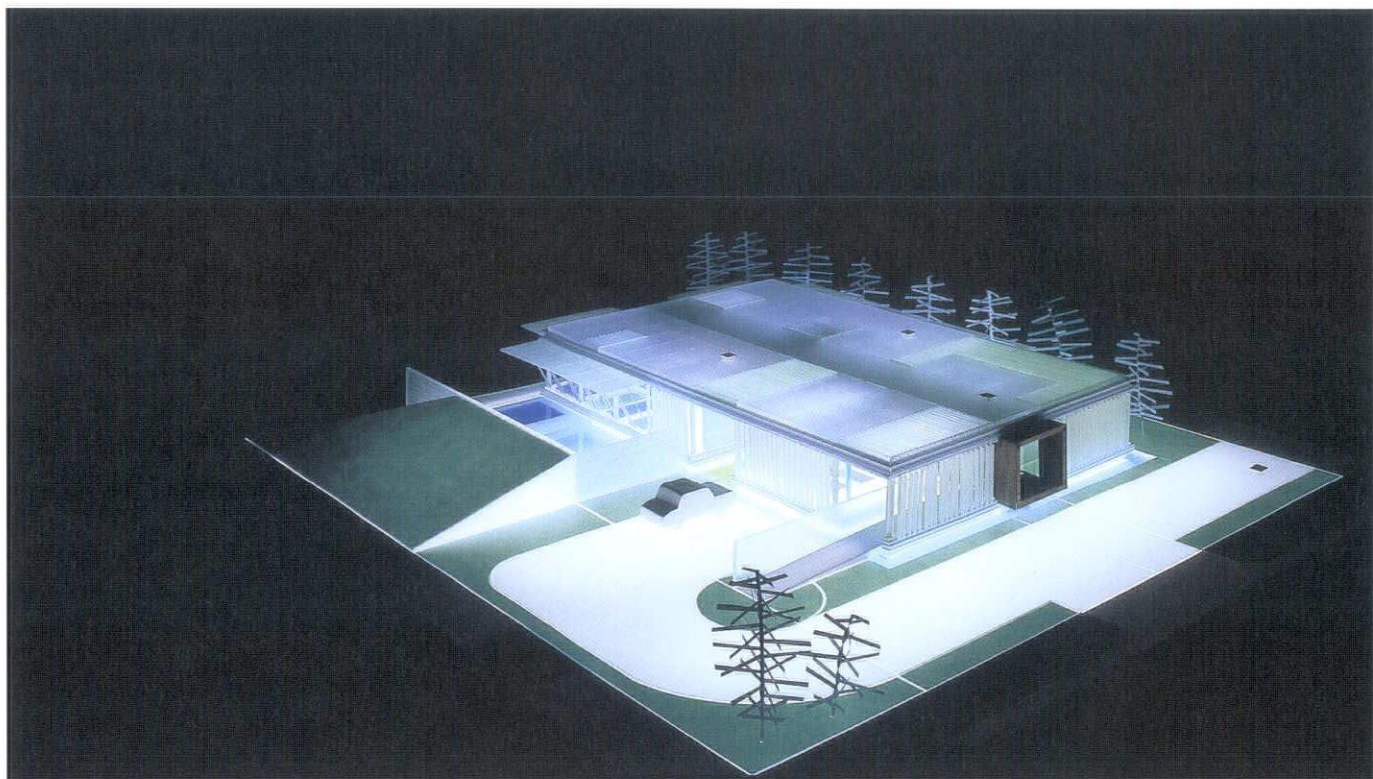


中島貴光＋安宅研太郎＋西澤徹夫＋儀賀咲恵
[HAYAMA beach house project] → 032

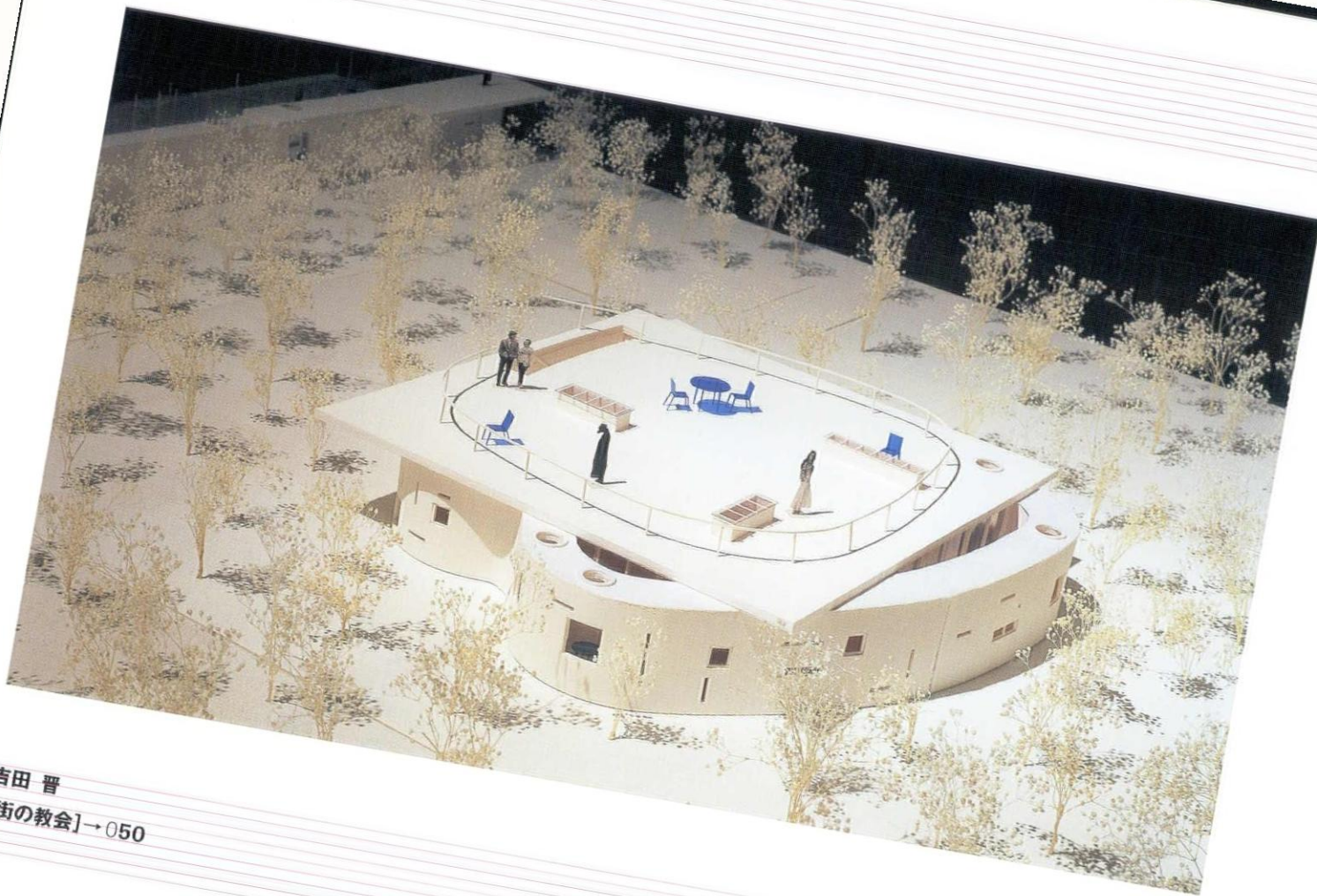


二宮 博＋菱谷和子／Studio 2 Architects
[FLAT A+B] → 036

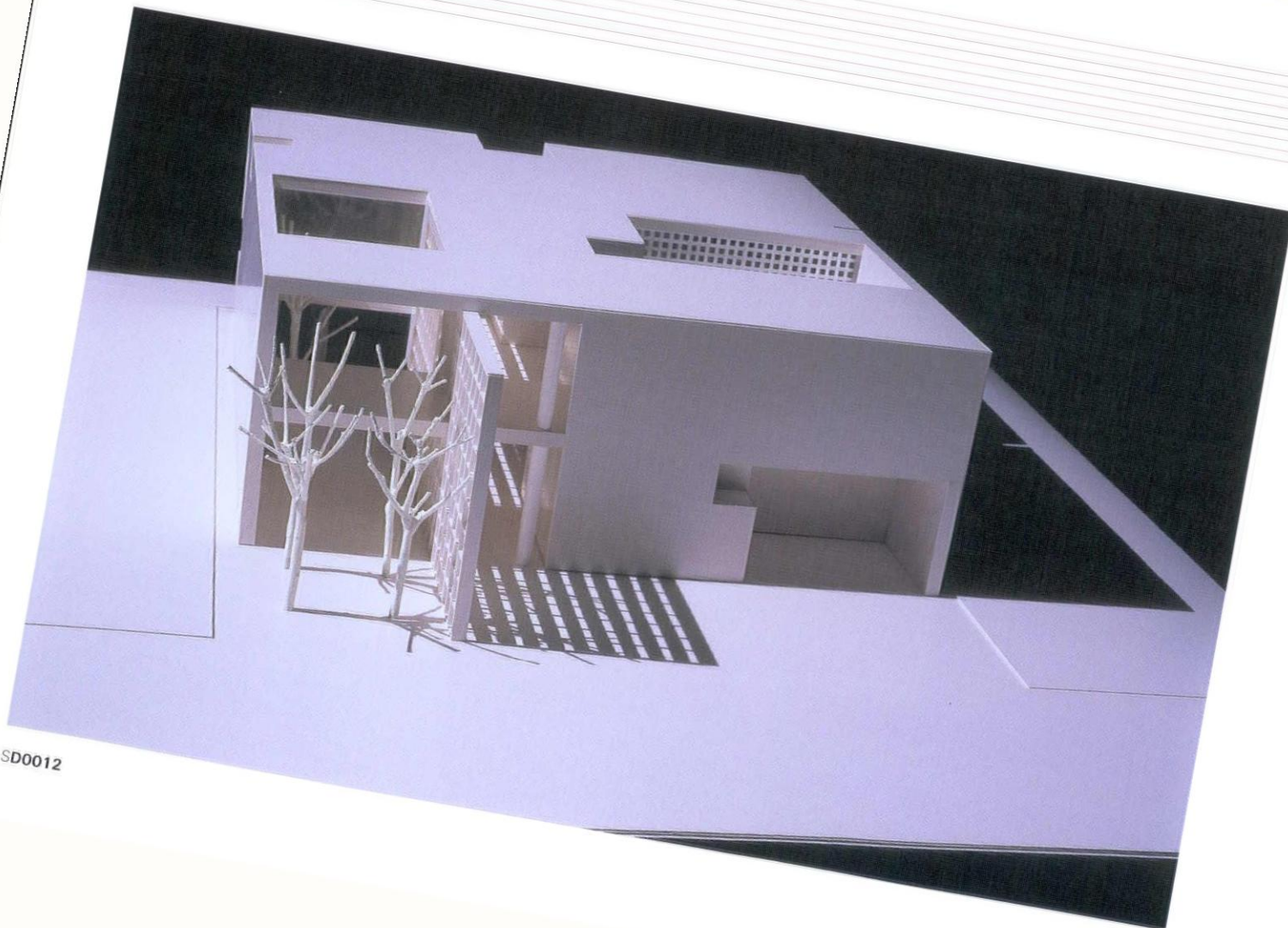




矢口博幸+I.C.A.
[Soft house]→040



吉田 晋
[街の教会]→050



鹿島昭一

SDレビュー展は、1982年の第1回開催より今回で19回目を迎えました。建築家やデザイナーの方々のご理解とご支援を得まして、回を重ねてこれまことは誠に喜ばしいことと存じます。

今回の応募総数は過去最高の315点にのぼり、意欲あふれる力作を多数お寄せいただきました。審査員の先生方による熱心な審査選考によりまして、今回も素晴らしい作品が選定されております。

さて、すでにご承知とは存じますが、雑誌『スペースデザイン=SD』は本年12月号をもちまして、しばらく休刊といたしました。『SD』は、都市・建築・芸術を総合的に扱う月刊誌として1965年の1月号を創刊号とし、以来2000年の12月号までの永きにわたり、みなさまの温かいご支援をいただき、ご愛読いただきましたことを心より感謝いたしております。

『SD』の創刊には、初代編集長平良敬一氏と共に、当時30代で建築・都市問題・美術・インテリア等の各界でご活躍中の方々を編集顧問に迎え、それまでにはなかったフィールドで、ヴィジュアルを重視し、国際的に通用する「建築家の教養誌」を目指しました。幸いにも創刊と同時に大きな反響を得、順調に読者を獲得することができまして、その後の『SD選書』、『SDグラフィック』、『都市住宅』などの出版や、このSDレビューの開催につながって参りました。

こうした建築関係図書の出版活動に対し、1990年度の日本建築学会文化賞受賞の栄に浴したことは、ご支援・ご愛読いただきました方々のおかげと厚く御礼申し上げます。

SDレビューについて振り返りますと、横文彦先生から、このヒルサイドテラスにおいて、米国の『PA』(Progressive Architecture) Awardのようなイベントの開催についてご提案いただいたことが始まりでした。若手の建築家でも気軽に応募でき、しかも「実施を前提として設計中ないしは施工中の作品」とい

う条件で作品を公募する、というユニークで新しい試みのコンペティションを意図いたしました。

1982年に第1回目を開催し、1985年からは大阪展を併催、1987年から5年間は金沢展も開催されました。翌1988年にはスイス・チューリッヒ展や国内巡回展も実施されております。審査にあたられた諸先生方のご尽力により、図らずも若手の登竜門的色彩のコンペティションとして確固たる存在に育てていただきましたことは、主催者としてこの上ない喜びであります。

また、一貫して東京展の会場と朝倉賞をご提供いただき、熱心にご後援いただいたヒルサイドテラスのオーナーである朝倉様、各賞のご協賛をいただいたスポンサーの方々、展覧会の会場設営にあたられた方々など、数多くのご支援により、今日のSDレビューがあるものと存じております。朝倉様が、SDレビューほか数々の文化発信活動により、1998年度の栄えあるメセナ大賞を受賞されたことは、未だ記憶に新しいところであります。

先ほど申し上げました通り、雑誌『SD』は休刊とし、これからの新しい時代に適合するスタイルでの再出版を考えております。しかし、このSDレビューは想像していました以上に若い建築家の方々の継続を希望する声が多くあり、SDレビュー展はこれまで通り年1回開催し、併せてSDレビュー特集号を年1回発行したいと考えております。

今後とも意欲ある建築家やデザイナーの方々の新しい空間の創造と、建築文化の向上に少しでも貢献できますよう、努力して参りたいと存じておりますので、変わらぬご支援をお願い申し上げます。

(かじま・しょういち／鹿島建設 取締役相談役)

(2000年9月20日SDレビュー オープニング・パーティ挨拶より)

SDレビュー展 19年を回顧して 変わったこと、変わらないこと

槇 文彦

まず、今回20世紀最後のSDレビュー展に入選された方々に心からお喜び申しあげたいと思います。先に主催者からお話しがありましたように、この展覧会がひきつづき来年も、つまり21世紀の世代にひき継がれ、同じヒルサイドテラスで開催されるということを伺い、当初より関わってきたものとして本当に喜ばしいことと思います。

この19年を回顧したときに「何が違って、何が変わらなかったか」と考えてみました。まず変わらなかったのは何か。それは20代、30代を中心としたこの世代の建築家の建築に対する意欲や情熱であり、それが展示された作品から伝わってくることです。考えてみるとSDレビュー展が始まった80年代のはじめは、オイル・ショックの後であり、まだバブルが始まる前でした。ちょうどバブルの後遺症に苦しむ今日のように、若い人たちに与えられる作品発表の機会はありませんでした。そうした時代にこそ、このSDレビュー展は、若い世代のみなさんに何かを世に問う機会を提供しつづけてきたのではないかと思います。どういうアプローチをとるのか、またスタイルやコンセプトの如何に関わらず、やがてこうした若い人たちが建築界を背負っていかうという意気込みが常に伝わってきました。

一方何が変わったのかといえば、今回入選された方には申し訳ないのですが、まったく私の方が存じ上げていないということです。もちろん、お名前を伺った方もいます。しかし19年前は私自身も若かったためか、すぐ近いところに次の世代がおられました。たとえば入選の常連者は、安藤忠雄さん、高松伸さん、そして竹山聖さんといった建築家たちでした。おそらく、彼らにつづく未来の建築界を背負う建築家が、入選者の方々の中から生まれてくるだろうと思っていますし、また期待もしています。

もうひとつ変わったことといえば、それはこの数年、入選者のプレゼンテーションの技術がたいへんに多岐化し、また洗練されてきたことです。CADの導入、新しい表現の技術、映像の参加など、たしかに時代の変遷を映し出しています。しかし第一次審査において、限られた4枚のドローイングの中のコンテンツを審査員が評価するという仕組みは、昔も今も変わっていません。

最後に、このSDレビュー展で入選された後も、みなさんがさらに自由に柔軟に、それぞれの個性をちょうど樹木が育つように生長されていくことを心から願っています。

本当におめでとうございました。
(まき・ふみひこ／建築家)

もう一步ふみだした建築を見つけられたら

岡部憲明

「現実性、実現性を前提に……」というSDレビューの規定が、不確定でつかみにくい現在の状況を切り崩し、新たな断面をもつ作品を発見する機会を与えてくれた。「実現性」の枠を与えた「現実」のからみにしたたかに、また、実に爽やかに取り組んだいくつもの作品に出会えたことは審査する側に大きな喜びを与えてくれた。入選した15作品は、すべて「現代」という「事実」に対して挑戦しつつある建築の試みだと思えた。「環境——場と領域の限定」、「空間のヴォリュームの制約」を確かにつかみ、のりこえる意志に加え、身体性や精神性へと沈降していかうとする方向が入選作品のすべてに読みとれた。

15作品の中から4作品を抽出して簡単にコメントしておく。

〈house PTT〉：原始の緑の強力な自然の上を浮遊する2枚の基盤は、始源的な建築の場そのものを象徴すると共に、そこに立つときの新たな視覚の創生を喚起する。敷地の風景のもつ壮大な魅力に呼応し、拮抗する人間の舞台としての場が、軽やかでソフトな装置の存在として伝わってくる。今回の展示で提出されたモデルは、ランドスケープと建築の相関するコンセプトを大変見事に表現していたと思う。

〈línea〉：都心の集合住宅というテーマのもとでは新たな解法を生むことが極めて困難と考えられている中で、本作品は驚くほど大胆な取り組みを実現のプロセスの中で力強く押しすすめている。「表層の小綺麗さ」に収束しがちな現在の日本の建築の傾向の中にあって、住の空間に正面から取り組んだ貴重な創造性の提案に感動した。Step1からStep2への展開、発展も実に豊かで実現に大きな期待がもてる。

〈都市生活者たちの家〉：括弧で括られる「建築」を「都市の究極のネガティブスペース——微領域の中で解体し、都市の社会性の中で組み直してみる」という実験に果敢に挑戦している。「現実はこの空間をつくって活動してみたい」という意志の強さは建築設計というお定まりの認識を飛び越して清々しい。

〈FLAT A + B〉：2世帯のふたつの世界を3次元の中でパズルのごとく解いている。不可思議でわくわくするような複雑な空間構成が実体化しているが、あたかも文学的想像力の中にあるかの様だ。実際の空間のヴォリュームや身体との関わり、スケールの展開などにひしひしと興味が沸く。ひとつのアーキタイプ住居ともなりうる建築の提案だといえる。

全参加者作品を見ることにより、また入選した15作品を通して感じた率直な気持ちは、「ある可能性が見えた」という点にある。情報と消費の中で流されがちな建築デザインの今日において、「もう一步踏み出した建築」の可能性を見つめる機会を与えてくれたことを参加者全員に感謝したい。
(おかべ・のりあき／建築家、神戸芸術工科大学教授)

芦原太郎

SDレビューの審査は、昨年につづき今年で2度目になります。

SDレビューは、実施が前提とされた、若い世代の建築家のプロジェクトを対象としたユニークなものですから、雑誌などで発表される以前にいち早く、これからの建築の波頭を感じ取れるようでいつも楽しみにしています。応募作品を見ると、次なる時代に向けての可能性へ挑戦している建築家たちの姿を読み取ることができ、建築への熱い思いが伝わってきます。

昨年の応募作品には、農村施設など、新しい施設としてのプログラムをいくつか見て、若い世代の建築家の活動領域が拡大しつつある元気な印象を受けました。しかし今年は、再び都市の小住宅の領域に戻って来つつあるように感じられました。もちろんその中で、質的に様々な展開が行われていましたが、いつの時代でも、外に向けて元気に領域を拡大する努力も必要だと思います。社会にはまだまだ、これから開拓する領域が多く残っているわけですから。

審査にあたっては、そのプロジェクトにおける建築家の構想や意図を読み取ることが心がけました。そして、それが社会的に意味あるものであるかどうか、また、デザインされたモノに明確に現れているかを評価したつもりです。あくまで建築家の構想や意図の評価ですから、それが次なる時代を切り拓くデザインとなり得るかという点を重視しました。そのためプロジェクトの完成を予測して、建築の総合的な評価を試みることはしませんでした。ですから、現実社会における建築の評価ではなく、建築仲間での競技会といってもいいかもしれません。

入選作品のパネルや模型のプレゼンテーションは、SDレビュー展の歴史によって例年工夫が凝らされ、見応えのあるものです。その力量と熱意には、毎年敬服するばかりです。ただ残念に思えることは、建築家同士で分かり合うことができたとしても、この展示会場にいらした一般の方々の目線で見てみると、わかってもらえないと思える点です。ここで建築家たちが問題にしている、そのプロジェクトの命ともいえる構想や意図というモノを、どの様にしたら一般社会でも通じる言葉に翻訳できるのかを、今後さらに考えていく必要があるでしょう。社会の側は、個々のより現実的な側面から建築を捉える傾向がありましたが、最近は少しずつ、建築家の言葉を理解しはじめているようにも思えます。

すでに建築仲間に着したSDレビューが今後も継続されるこのことですので、ぜひ近い将来には、一般社会の中にもしっかりと位置づけられるものになってほしいと期待しています。
(あしはら・たろう／建築家)

小川晋一

今年の入選案の傾向として、バラエティがあるという印象がありました。ビルディングタイプでみても、住宅だけでなく、病院、集合住宅、温泉施設、教会、海の家など様々であり、それらの案がこれまでの施設にはない新しいあり方を提案しており、楽しく審査できました。もうひとつの傾向として、成熟した案が多かった点が挙げられます。

今年は、昨年につづいてさらに記録を塗り替える程の応募があり、それらの中から選ばれた案は、表現においても、コンセプトにおいても優秀な作品ばかりでした。落選案の中にもこれと同等に優秀な案が多くあり、全体のレベルが向上しているといえます。しかし一方では、突出した提案がないということもいえるでしょう。他の建築関係のメディアを見ても感じられるように、建築表現が成熟されて落ち着いた状況にあるということ、今回の審査で再認識した気がします。私はSDレビューには他のコンテストやメディアの表現とは異なった独自の役割を期待しています。それは、過去の審査員の方が指摘されているように、実施を前提としたコンペでありながら、完成する前の模型や図面などの間接的なプレゼンテーションによって競われることに深く関係しています。作品の実現したときの良さを競うのであれば、完成した作品を競えば良いはずですし、そのような機会は今回のコンテスト以外に多くあるように思われます。また、実施を前提としない純粋なアイデアコンペも同様です。

私はコンペの審査をする際に、建築家たちが計画案に秘めた構想を注視するようにしました。そこには、現実とアイデアの狭間で微妙な感覚に左右されている状況があります。現実を前提としているからこそ、現実とアイデアの狭間で、力強いコンセプトが生じるように思われます。そのような新しい可能性の誕生を、私だけでなく多くの人がSDレビューに期待しているのだと思います。

各々の建築家の意識の中に描かれたコンセプトは、時に現実離れして空想に近いものであるかも知れませんが、それが、現実の条件の中で建築空間として計画される過程で、様々な可能性や意味、社会性をもつことがあります。その反対に、様々な条件に押しつぶされてしまうこともあるでしょう。今回の審査のなかでも、一次審査から二次審査を経る過程で、設計が進行し実現化しながら、当初分りにくかったコンセプトが明確になり、その提案が社会性を獲得する過程を見ることができたのは、審査員として楽しい経験でした。一方、はじめのアイデアは良かったのですが、詳細な空間のつくり方の時点で、当初のイメージが現実に取り込まれて弱くなってしまふような感じを受ける案もありました。このような案の成熟の課程を見ることができると、SDレビューのユニークな点であると思います。来世紀のSDレビューでは、さらに多くの提案が寄せられ、新しい建築の可能性が発見されることを期待します。

(おがわ・しんいち／建築家、近畿大学工学部助教授)

用途：住宅

所在地：高松市昭和町

主体構造：RC造

外部仕上げ

屋根：シート防水、外壁：ポリカーボネード

開口部：アルミサッシュ

内部仕上げ

床：押えコンクリート+カバフローリング

壁：PB+突板貼り、天井：PB+塩ビシート貼り

浴室・トイレ 床・壁：磁器質タイル、天井：バスリブ

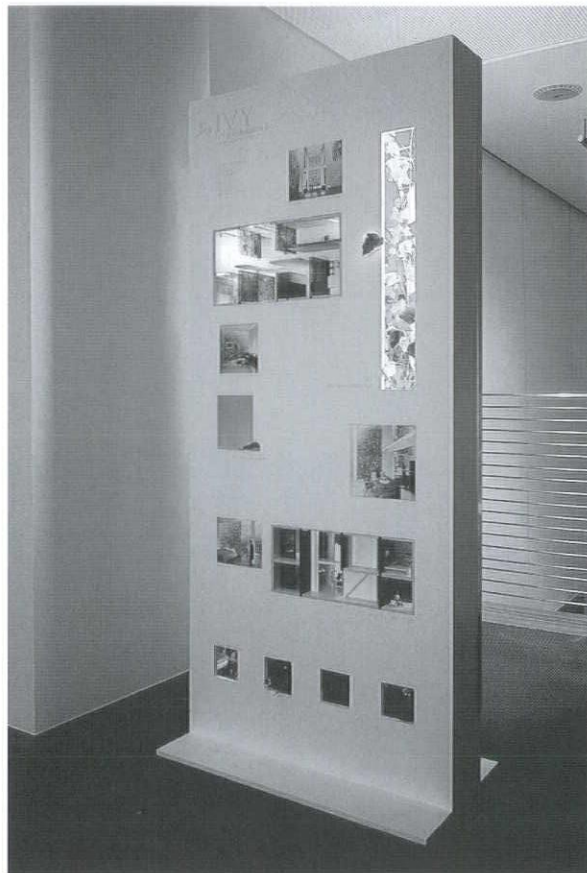
敷地面積：199.80m²

建築面積：110.34m²

延床面積：178.42m²

工期予定：2001年2月～6月

協力：園田慎二



岡田周也 Shuya Okada

1974年／愛知県生まれ

1998年／法政大学工学部建築学科卒業

1996年～／倉田康男校主「高山建築学校」に参加

現在、渡辺真理研究室在籍

「Lad Scape Graphics from LUX」共同主宰

大庭 晋 Shin Ohba

1974年／東京都生まれ

1998年／法政大学工学部建築学科卒業

1996年～／倉田康男校主「高山建築学校」に参加

現在、渡辺真理研究室在籍

「Lad Scape Graphics from LUX」共同主宰

住谷 覚 Satoru Sumitani

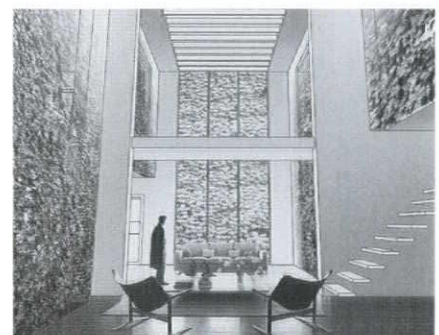
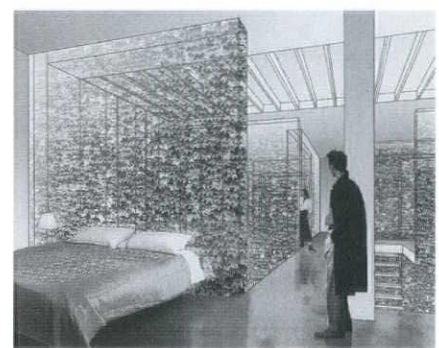
1975年／東京都生まれ

1998年／日本大学工学部建築学科卒業

2000年／日本大学大学院修士前期課程修了

現在、三菱地所設計監理事業本部建築設計第一部

「Lad Scape Graphics from LUX」共同主宰



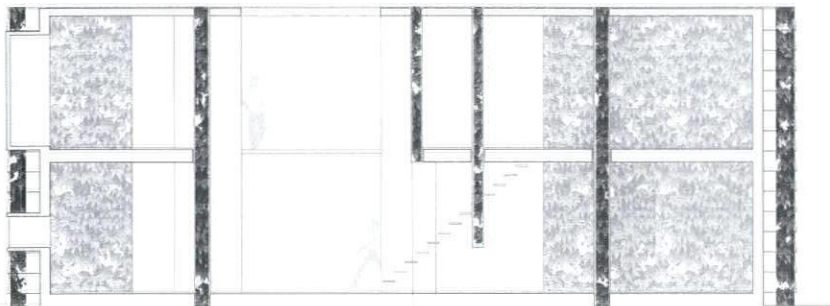
〈IVY〉は設計者の家族の2世帯住宅である。

〈IVY〉は蔦が生えないと成立しない。〈IVY〉は植栽と生活の間にかかる相互作用をクリティカルに計画しようとするものである。この建築の輪郭は「蔦の壁」で覆われ、さらに室内へと切れ込んでいる。建築の表層は建築内部の構成へとつながり、この建築のすべてを表象している。

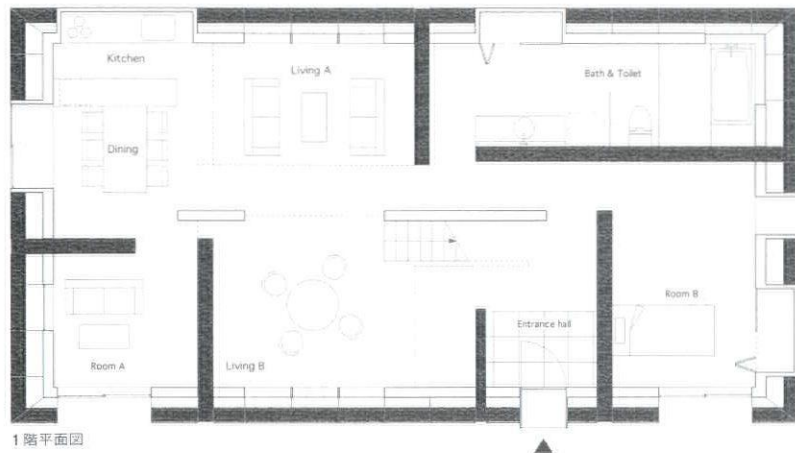
「蔦の壁」は日射による熱を蓄えることで熱負荷を低減する。その蓄熱はRC壁との隙間における通風により解消する。「蔦の壁」は、ガラスのスリットを通して室内へと切れ込むことで、室内に採光と通風をもたらす。「蔦の壁」は〈IVY〉と周辺環境との関係を曖昧に切り、ガラスのスリットを通して室内に切れ込むことで、家族の関係を曖昧につなぐ。蔦を充填したガラ

スのスリット、外部に突出する窓、蔦が被さる窓等、蔦の成長の度合いにより多様な透明性が生まれる。「蔦の壁」をさらに覆う透明ポリカーボネードは、蔦が登坂する補助資材としての機能ももつ。採用する蔦を生育が旺盛で丈夫なヘデラヘリックス種と秋期に紅葉するナツツタの混植とすることで、季節の変化と建築の知覚が重なり合う。

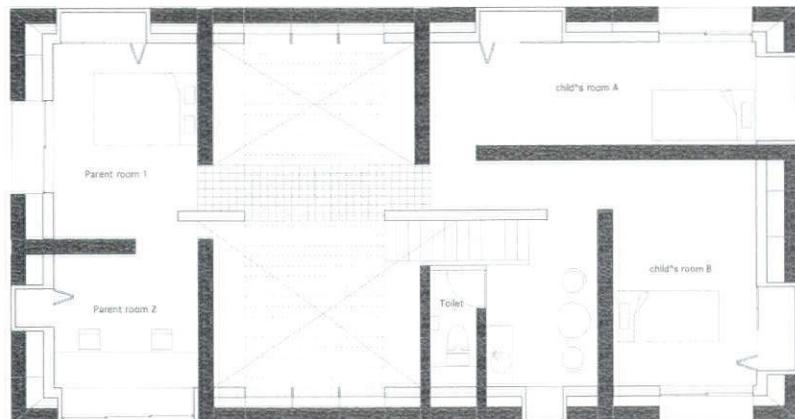
透明ポリカーボネードやガラスに覆われた「蔦の壁」は映像化した「生活を制御する壁」として、建築の構成要素という積極的な意味をもつ。地被植栽のもつ政治的たらざるをえない時流に揺れるエコロジカルな美学に対抗的な価値を試すことで〈IVY〉はその可能性をもつものとする。



断面図 S = 1:150



1階平面図

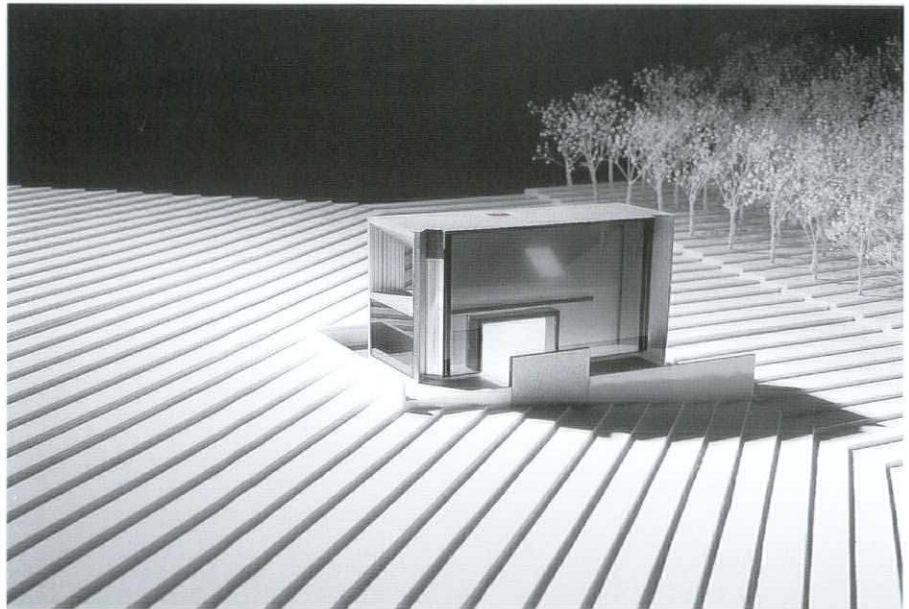


2階平面図 S = 1:150

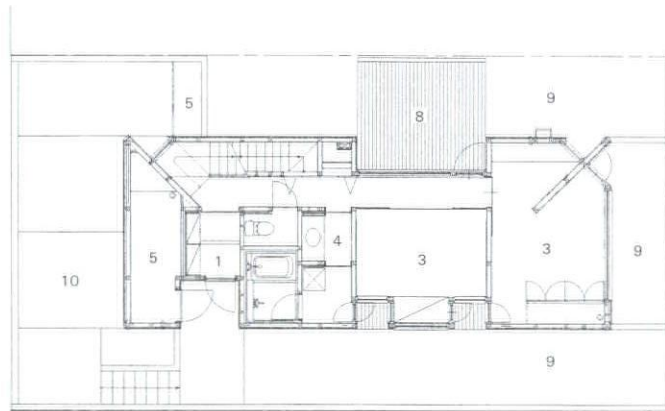
川人洋志 光のトーチカ

用途：個人住宅
所在地：北海道札幌市
主体構造：木造、一部RC造
外部仕上げ
外壁：ガルバリウム鋼板、角波（黒色、銀色）
屋根：長尺カラートタン
開口部：木製サッシ（トリプルガラス）
内部仕上げ
床：コルクタイル（床暖房）一部ロードヒーティング
壁：PB＋EP、天井：PB＋EP
敷地面積：168m²
建築面積：62m²
延床面積：124m²
工期予定：2000年5月～9月

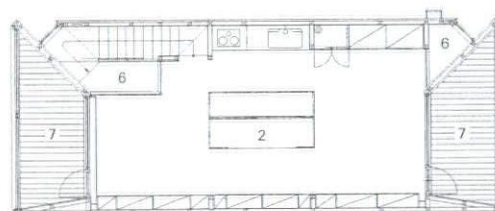
協力：川人督代、川人愛子、川人寛子
模型製作：ホロン



川人洋志 Hiroshi Kawahito
1961年／徳島県生まれ
1986年／京都大学工学部建築学科大学脱修了
1986-99年／清水建設設計本部
1990、95、98年／新建築住宅設計競技入選
1997年／SDレビュー1997朝倉賞受賞
1999年／SDレビュー1999入選
1999年／札幌市立高等専門学校建築デザイン系講師
2000年／室蘭工業大学非常勤講師



1階平面図 S=1:200



2階平面図

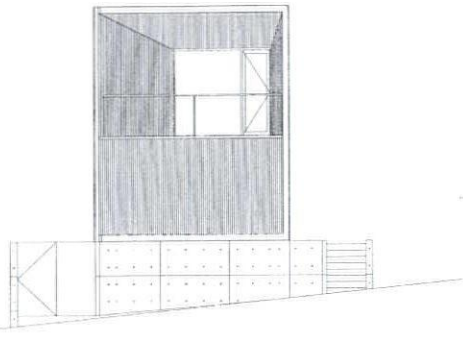
1. エントランス
2. LDK
3. 居室
4. 洗面所
5. 倉庫
6. 吹抜け
7. バルコニー
8. テラス
9. 庭
10. 駐車場

1. 庭への呼応

2. 光の呼びこみ

3. 街並への試みと独立性の獲得

北立面图 S=1:200



4. 積雪への配慮

5. 場所性の刻印—力動的空間の生成

東立面図 S=1:200



用途：住宅

所在地：ラ・ミゼール（セيشェル共和国マヘ島）

主体構造：S造（CHS & RHS）

主要仕上材：スチールパネル、ソリッドハードウッド、

テラッゾ、ファイバーグラス、

クリアーブランテーション

敷地面積：20,235m²

建築面積：397.1m²

延床面積：410.5m²+215.0m²（テラス、プール）

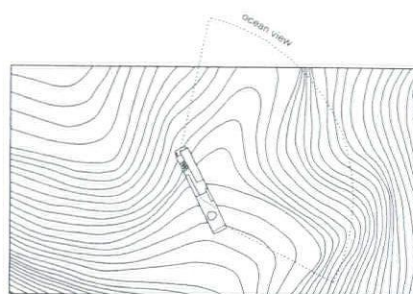
+170.5m²（ルーフガーデン）

工期予定：2001年2月～2002年2月

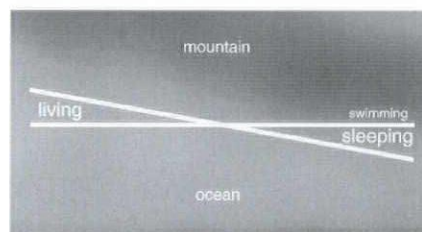
共同設計：Eur Ing Bryan Gauld（構造）

協力：斎木敬一（studio ZERO）、Yasu Santo、

福永 隆、subdock



Site Plan



Concept

齋藤 誠 Makoto Saito

1961年／三重県生まれ

1983年／ロンドン大学バートレットスクール卒業

1986年／AAスクール、ディプロマ修了

1994-98年／AAスクール。

インターミディットとディプロマで教鞭を執る

2000年／同大学、ディプロマユニットマスター

1998年／+m architects 設立

石田建太郎 Kentaro Ishida

1973年／愛知県生まれ

1996年／工学院大学工学部建築学科卒業

1996-98年／AAスクール、ディプロマ留学

1998年／+m architects

アレックス・エレンバーガー Alex Ellenberger

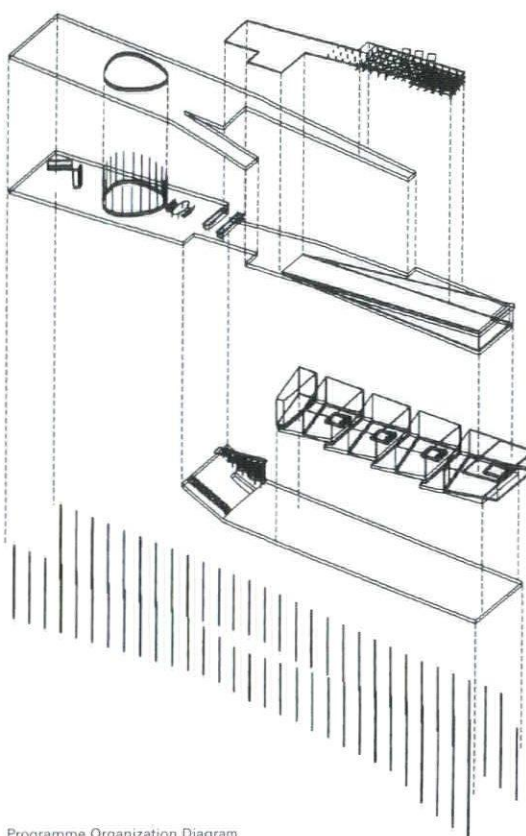
1971年／セيشェル生まれ

1993年／マンチェスター大学卒業

1993-94年／ジョフリー・バワ建築設計事務所

1996年／AAスクール、ディプロマ卒業

1997年／Locus Architecture 設立



Programme Organization Diagram

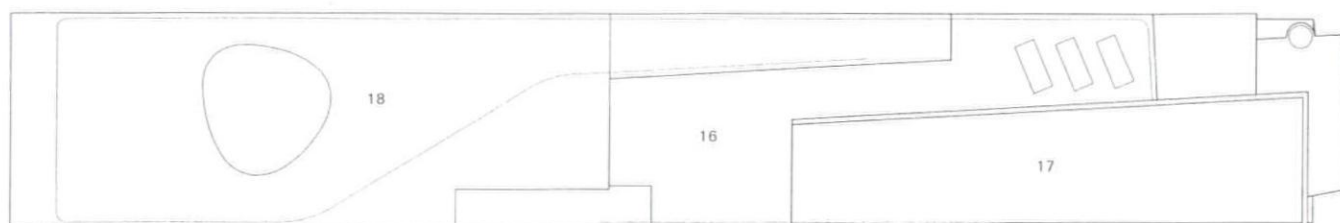
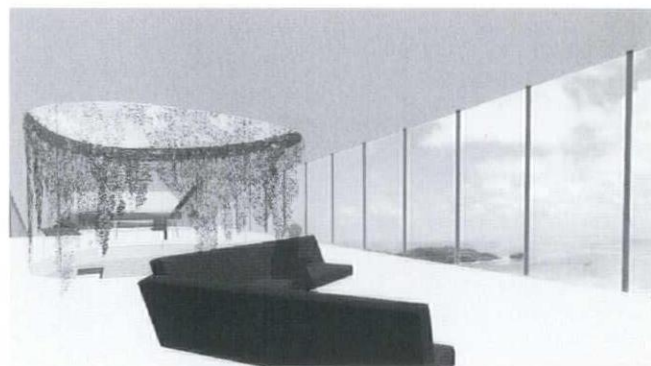
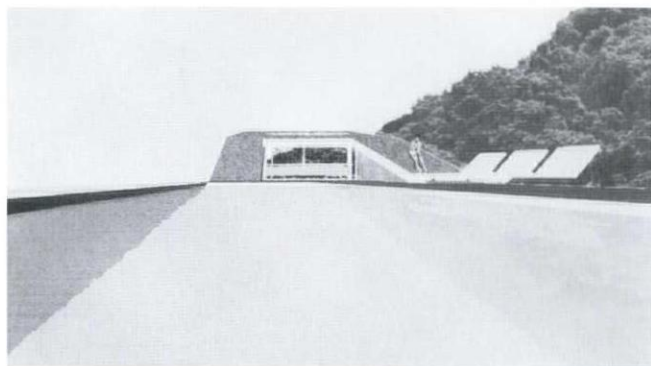
この住宅は、フランス系セイシェル人家族を施主とし、アフリカ大陸の東側、インド洋南半球に浮かぶ総人口8万人の群島国家セイシェル共和国の本島に計画されている。マヘ島中心部を占有する険しいグラニット質山系の中腹部に位置する約2万m²の敷地からは、島の東海岸が一望できる。建物は眼下に広がる最大限の視界を獲得するように配置される。

本計画では、赤道直下に近い熱帯気候における住宅として、通風の良い開放的空間を創造することが要求される。また、グラニット質地盤の特性を活かしつつ、自然のエコシステムへの干渉を最小限にするため、基礎打設のための過度な地盤の爆破、掘削、充填による傾斜地盤の水平化を回避している。

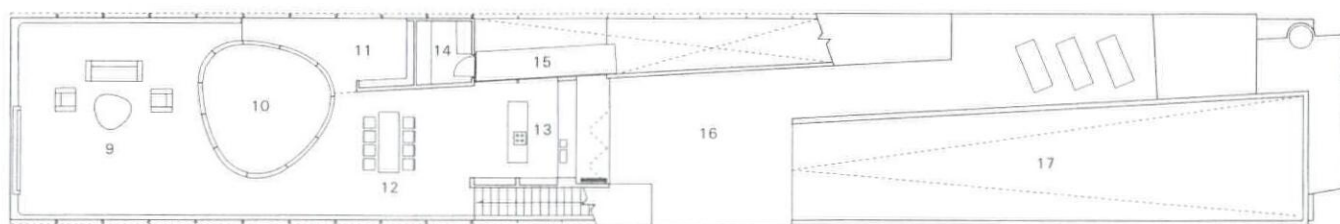
中空鉄骨による主構造体は、ピンポイント基礎上に配列される直径114mm、計78本の円柱、および、空中に持ち上げられる人工地盤により

構成される。

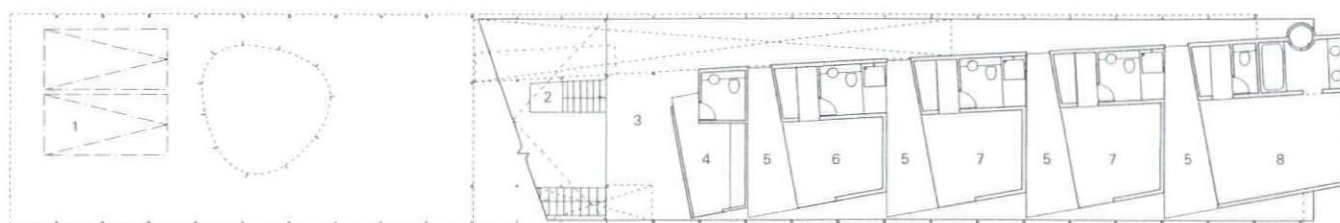
緩やかに傾斜する長さ約50m、幅8.4mの2枚の人工地盤は、ヴァーティカルガーデンをコアとする開放的なリビングスペース、4つのベッドルームボックス等を包括するとともに、直射日光を遮る屋根、およびルーフガーデン、プール、デッキを支持するスラブとして機能する。また、周囲の森林環境が、スクリーン、ヴェンティレーターなどの機能を果たすことにより、生活空間と自然とのさらに積極的な関係性をつくり出している。建築資材のほとんどは国外からの輸入に頼らざるを得ないため、関税率の違いによるコストメリットを考慮し、パッケージ化された資材は、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなどに向け、それぞれ発注される。



Roof Plan

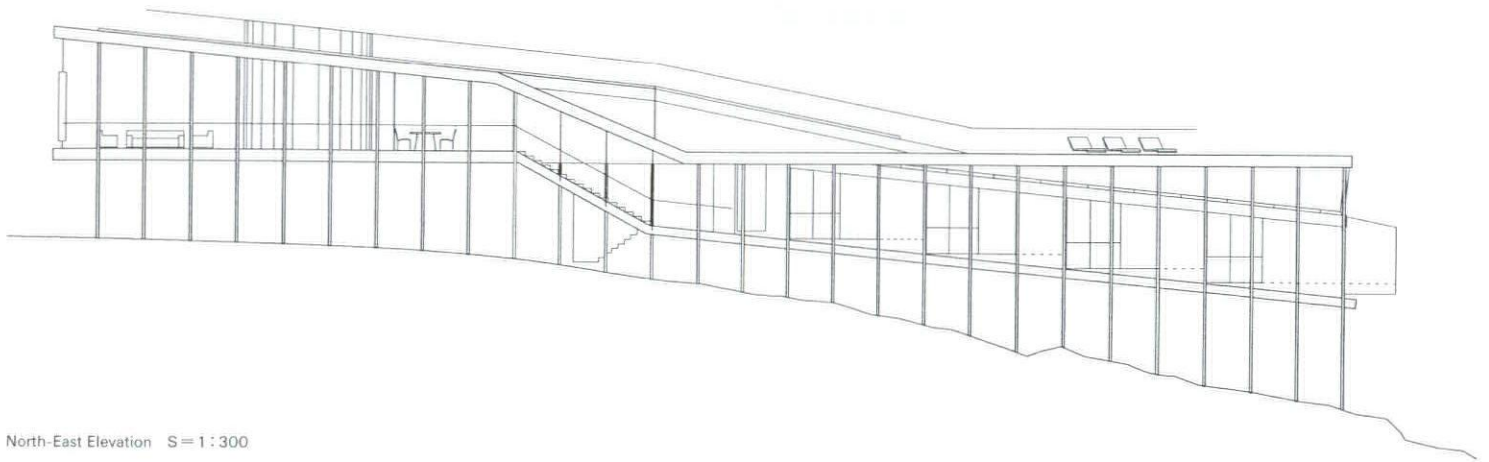
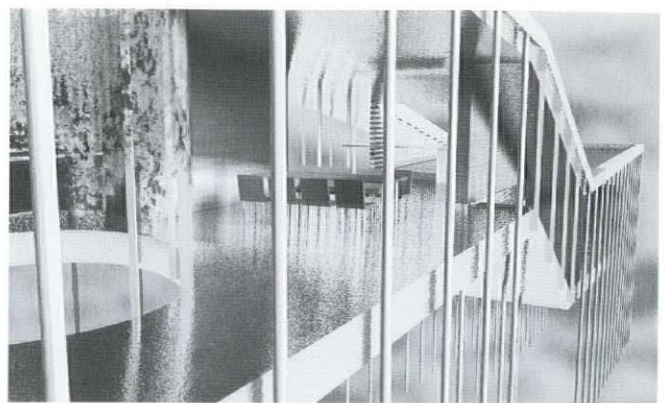
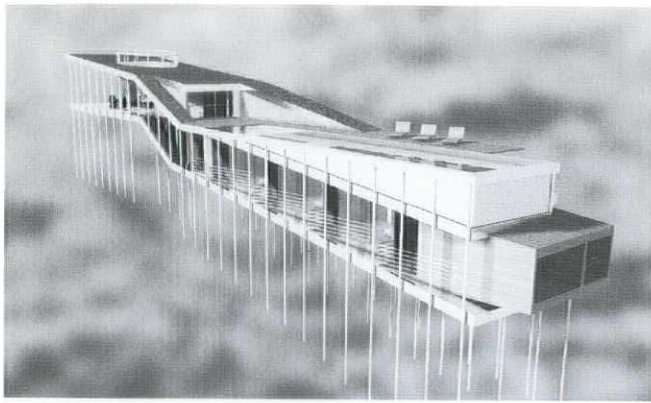


Level 1 Plan

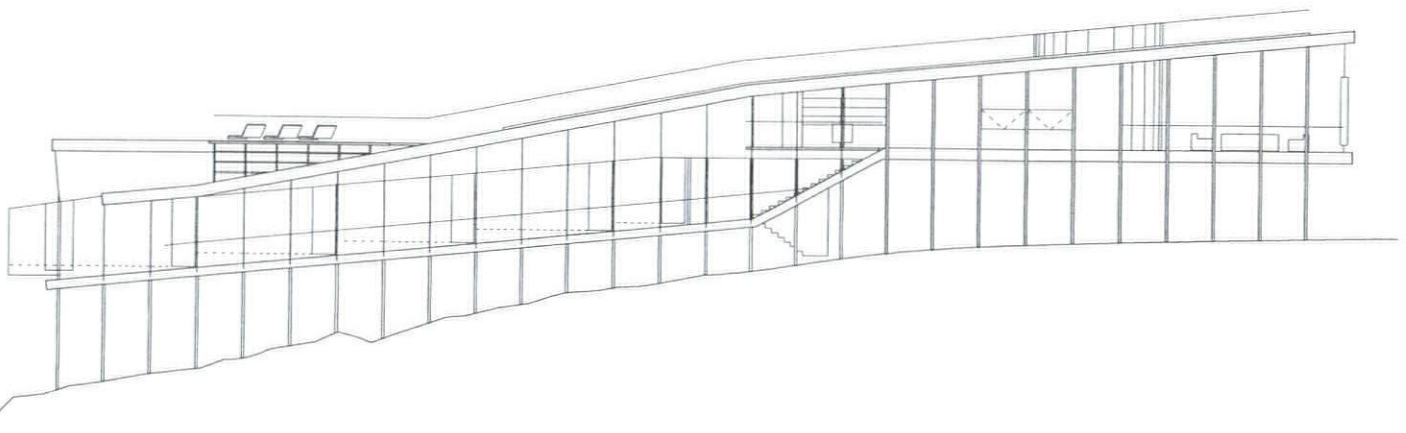


Level 2 Plan S=1:300

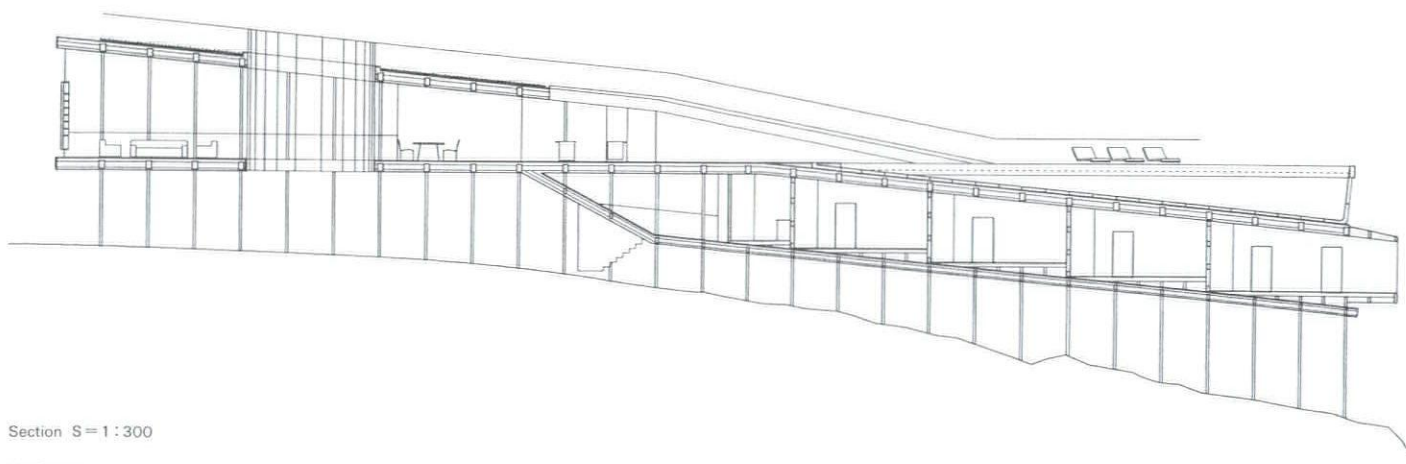
- | | |
|------------|---------------|
| 1. パーキング | 10. ヴォイド |
| 2. エントランス | 11. バラウング |
| 3. ホール | 12. ダイニング |
| 4. ユーティリティ | 13. キッチン |
| 5. テラス | 14. 納戸 |
| 6. ゲストルーム | 15. テラスブリッジ |
| 7. 子供室 | 16. プールサイドテラス |
| 8. 主寝室 | 17. プール |
| 9. リビング | 18. ルーフガーデン |



North-East Elevation S = 1 : 300



South-West Elevation S = 1 : 300



Section S = 1 : 300

用途：海浜公園

所在地：山口県豊浦郡豊北町

主体構造：木造

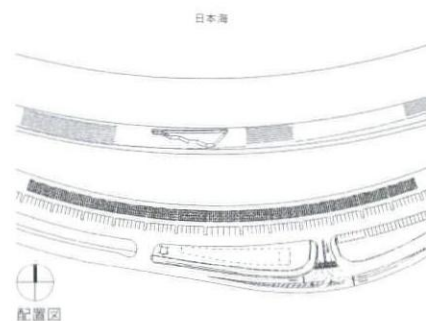
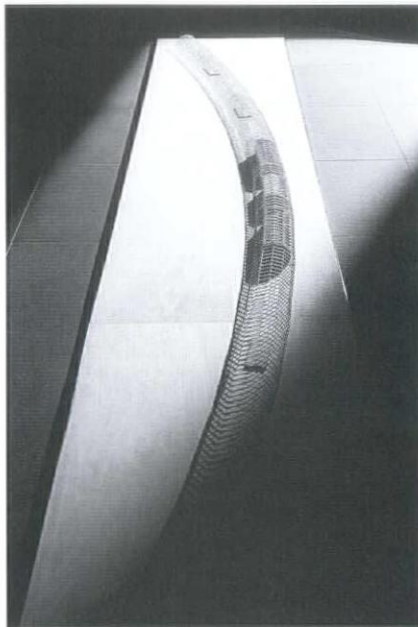
主要仕上材：透明強化ガラス、ステンレス、檜

建築面積：1,592.5m²

工期予定：2000年3月～2001年3月

共同設計：地川 光（構造）

協力：西尾通哲、富田英夫、江島秀典、臼井宣之



三分一博志 Hiroshi Sambuichi

1968年生まれ

1992年／東京理科大学理工学部建築学科卒業

1992-96年／小川晋一アトリエ

1997年／三分一博志建築設計事務所設立

1996年／SDレビュー1996入選

1998年／日経デジタルデザインコンペティション
（実施部分）最優秀賞

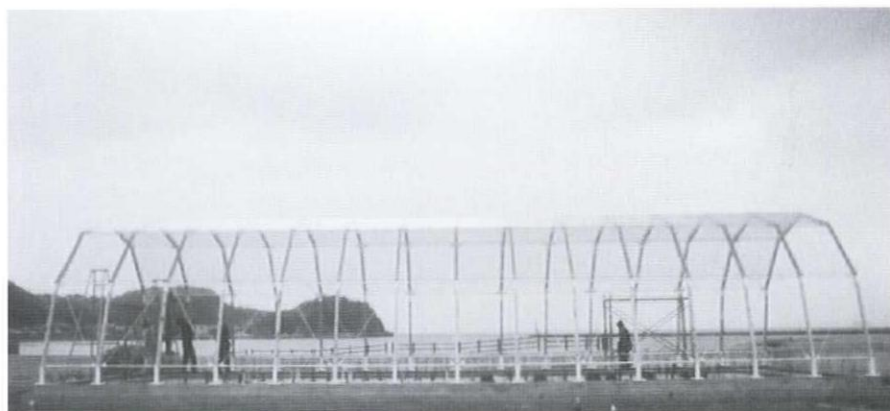
坂野博行 Hiroyuki Sakano

1959年生まれ

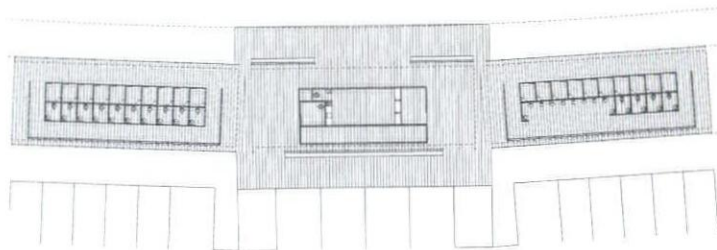
1982年／金沢美術工芸大学工業デザイン専攻卒業

1989-95年／川崎和男デザイン室

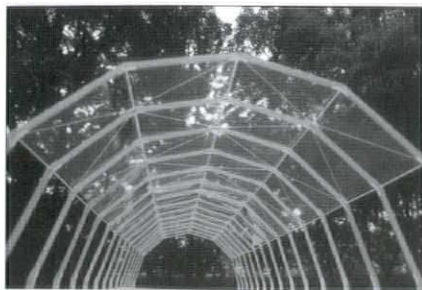
1995年／坂野博行デザイン室設立



実際の海岸でモックアップされた1ユニット、プロトタイプ。最終的には13ユニット置かれる



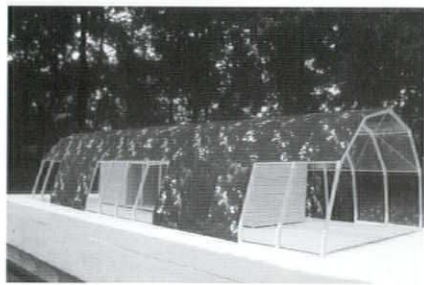
平面図 S=1:300



木製フレーム 1/20 スケール模型



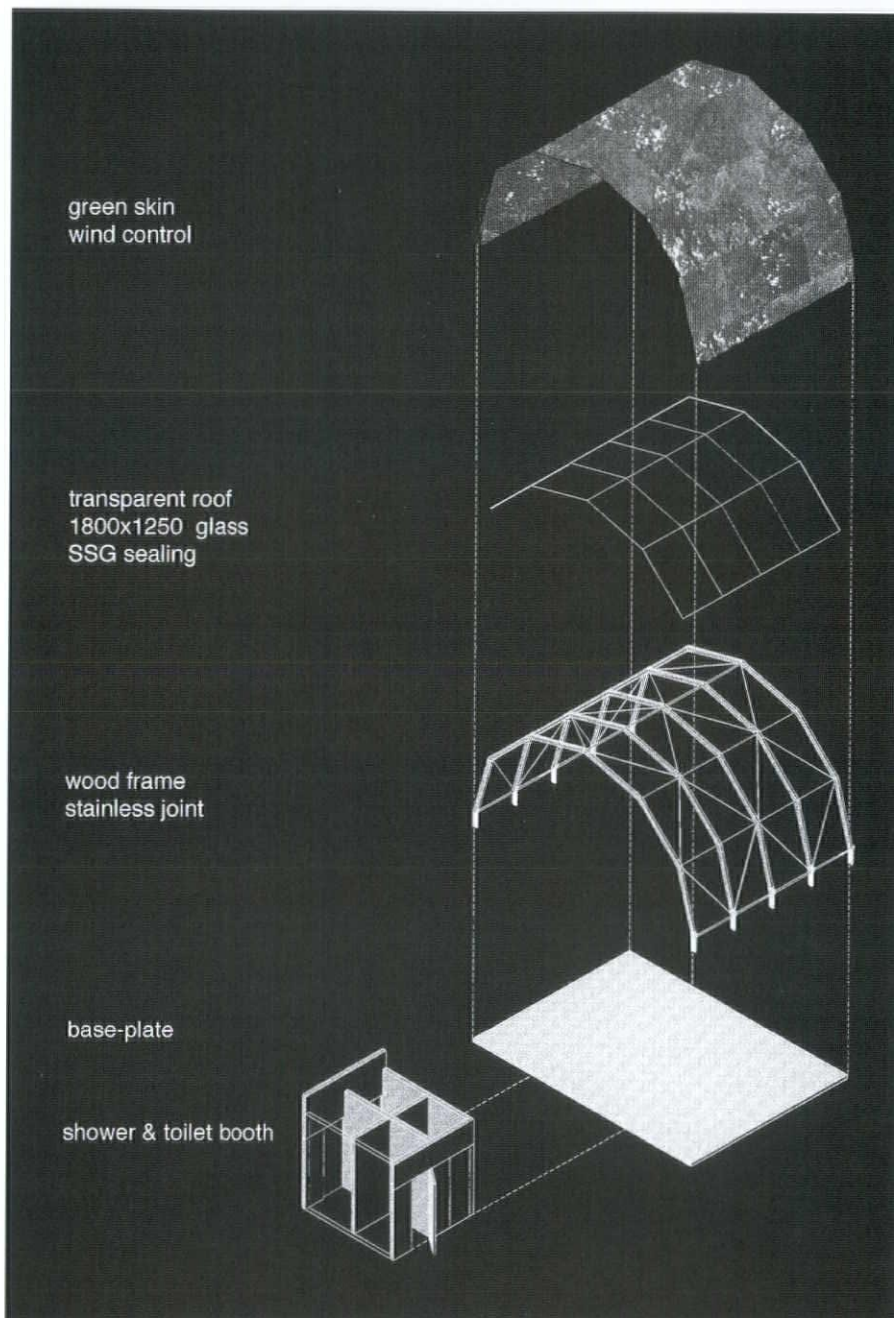
中央管理棟 1/20 スケール模型



ツタ（超知能）がフレームを覆う



木製格子の中央棟（模型コラージュ）中央管理棟模型



アインメトリック

これは、自然という超知能と共生するサイバネティクス (cybernetics) 建築である。生物と機械における通信・制御が模索されるなかで、建築を環境と交感する媒体とみなすひとつの試みである。

敷地となる油谷海岸は本州のほぼ最西端に位置し、日本海に面した約1kmの白浜をもつ海水浴場である。海からの強い風と砂に悩まされる周辺地域は、道路拡張計画によって失われたかつての防砂林の復旧と海水浴場のリニューアルを望んでいる。そこで、新たに植栽しても立ち枯れる自然の防砂林に代わり、建築がその役割を担うこととなった。

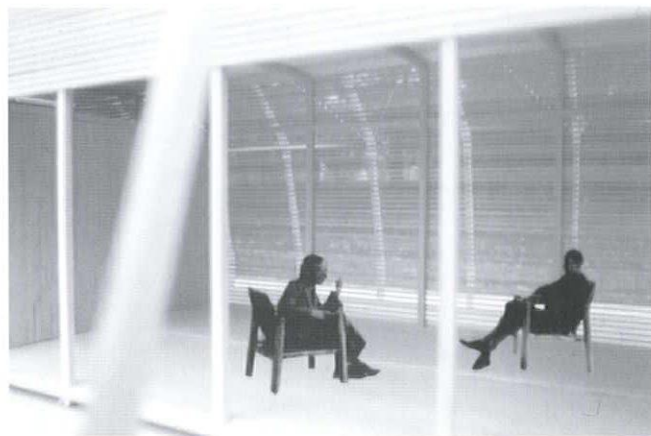
1.25m スパンで並べられたアーチ状の木製骨格は、1基17.5m×7mの単位が13基連結され、全長は240mに達する。その全体がツタによってオ

ーバーラップされ、超知能を纏った高さ4mの人為的構造物として周辺環境をコントロールしていく。

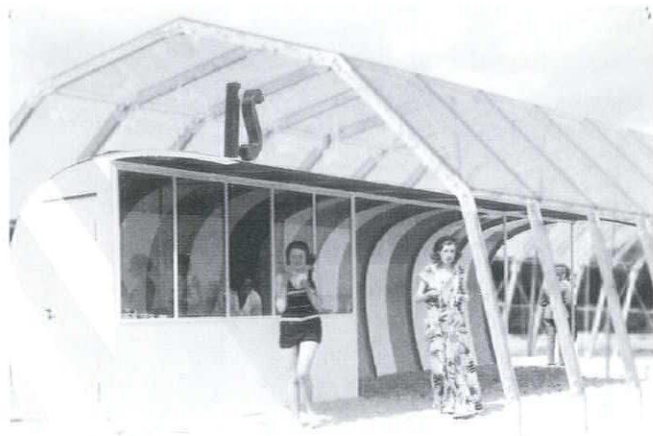
中央の3基にはガラスの外皮が被せられ、トイレ、シャワー、監視の機能が与えられる。そこでは檜の格子によって光、熱、空気、視線を制御されたブースに必要な設備がプラグインされる。また両翼約200mは、海の家、ショップ、キオスクなどのモバイルが季節に応じてプラグインされ、木漏れ日の下で人々のにぎわいを加速させる。

これは、自然と建築が同化する一過程であり、建築が人工知能をもつに至るまでの過渡期としてのプロトタイプである。

そして2001年、超知能を纏った建築の環境調整計画が開始される。



中央管理棟イメージコラージュ (内観)



ビルトインされたヤコブセンのアイスクリームキオスク

透明強化ガラス t=12 飛散防止フィルム貼り
構造用シール工法2辺支持
アルミフラットバーt=3 ビス止め

グリーンルーフ (非人工知能)

桁: 松 80×110

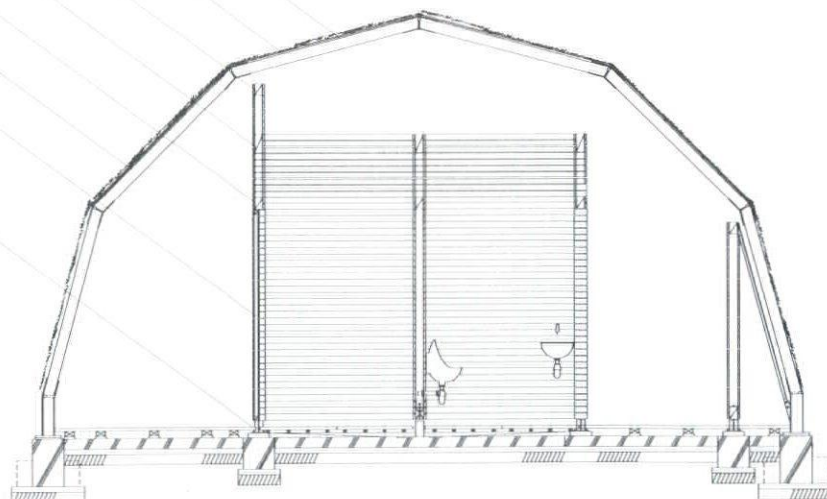
桁: 松 80×170

フロストガラス t=6

構造フレーム: 松 65×100

柱: 松 80×80

IPP (パオロベ)t=30×w=30 スノコ敷き
目スリ3mm/m (サイロ口処理) 取り外し可
積大 45×54 @250
モルタル全ゴテ直押えアスファルト防水処理の上



断面図 S=1:75

作品用途：住宅

所在地：愛知県豊川市

主体構造：S造

外部仕上げ

屋根：アイルーフ、フレキシブルボード、

押出発砲ポリスチレンボード、シート防水

外壁：木下地+イペ壁貼シッケンズ塗装、

一部耐震レンガ積、一部アスロック+割肌タイル貼り

開口部：木製サッシ（ペアガラス）、

一部アルミサッシ（ペアガラス）

内部仕上げ（Space 1）

床：フローリング（床暖房仕様）、一部琉球畳敷き、

壁：ラスボード下地、珪藻土塗り、一部サクラ練付合板

天井：ラスボード下地、珪藻土塗り

敷地面積：509.00m²

建築面積：300.55m²

延床面積：410.94m²

工期予定：2000年11月～2001年3月

共同設計

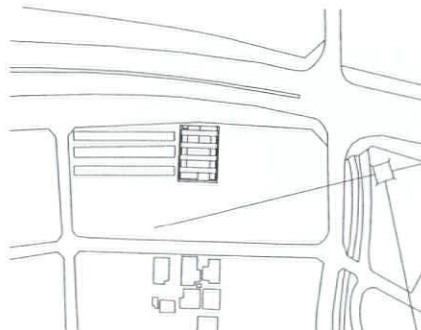
意匠：神戸大学建築・都市設計研究室／

奥村恵巳、木下利英子、白波瀬智幸、増岡 亮、

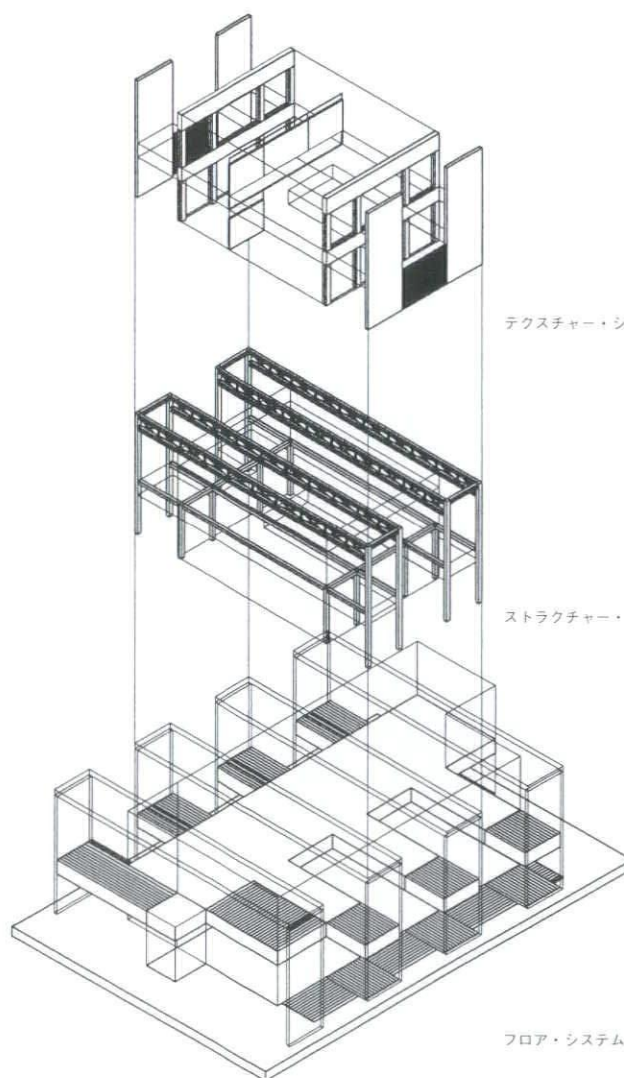
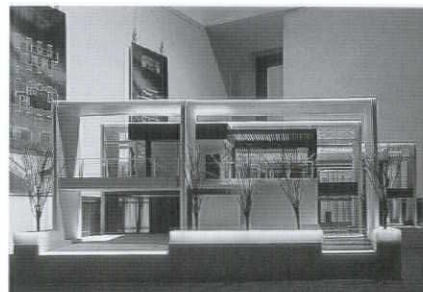
Abax Architects／栄 隆志、水弘 彩、斉藤 修

構造：トチオ構造設計室／板尾 実

設備：バルス設計／前原多恵子



配置図



テクスチャー・システム・ダイアグラム

ストラクチャー・システム・ダイアグラム

フロア・システム・ダイアグラム

末包伸吾 Shingo Suekane

1963年／大阪府生まれ

1986年／神戸大学工学部建築学科卒業

1989年／ワシントン大学大学院建築学科修了

1990年／神戸大学大学院建築学専攻修了

1990-94年／KAJIMA DESIGN 建築設計部

1994-99年／神戸大学工学部建設学科助手

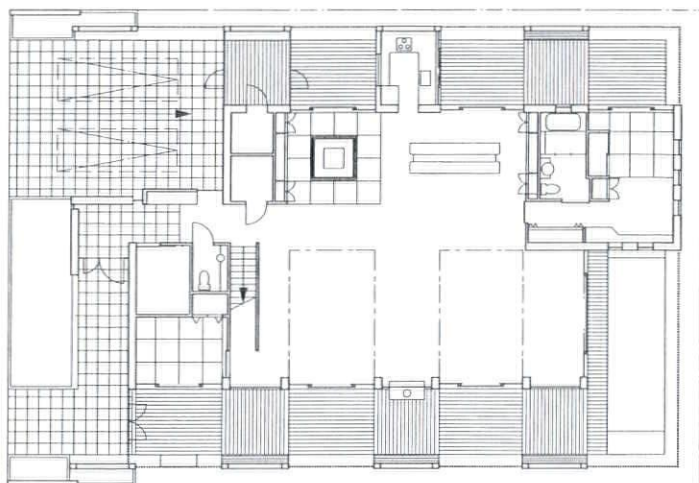
1999年-／神戸大学工学部建設学科助教授

敷地は、名神高速豊川インターから約1分の場所に位置し、その周囲は、大幅員道路とロードサイドショップを田畑や小規模開発の住宅が囲む、インター近郊の典型的な景観を呈している。さらにこの敷地は、土地区画整理事業による整備がすすむ地区の一角を占めている。

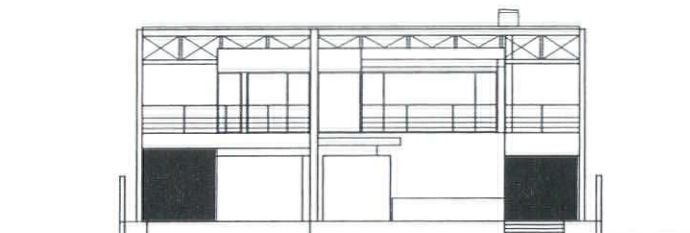
依拠可能な文脈や地区の将来的な像が明確な焦点を結ばない状況のもと、親子4人と御母堂の計5名が居住し、圧倒的な広さを有する「Space (1)」や、内外ともに光と開放感あふれる空間、さらに地区イメージの先導的役割を果たすことがもてられた。



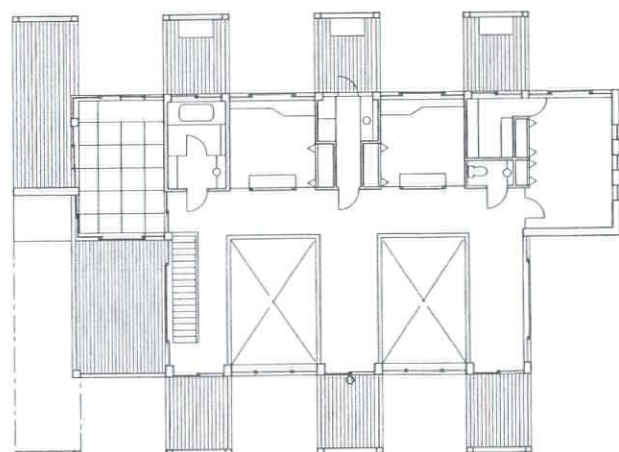
敷地の東西方向に4枚の門型のフレームを均等に配する。このフレームは、周辺環境とのゆるやかな融合と分離をはたすとともに、この住宅の構築術や設備の配置を規定することで、一体的なヴォリュームとして想定された内部空間の分節をはかり、内部空間を外部への拡張しアウトドアリビングとして機能させる。この門型のフレームは、また“b-in-d”として、対称形のフレーム(“b”, “d”)に、さまざまな素材等が挿入される(“in”)ことにより、空間の融合と分離、空間の分節と拡張をつなぎとめる空間構成の主軸になり、さらに完結性を回避する概念装置として想定されている。



1階平面図 S=1:300



北立面図 S=1:300



2階平面図



断面図 S=1:300

中島貴光+安宅研太郎+西澤徹夫+儀賀咲恵

HAYAMA beach house project

所在地：神奈川県逗子市

主体構造

土台：S造

上部：竹

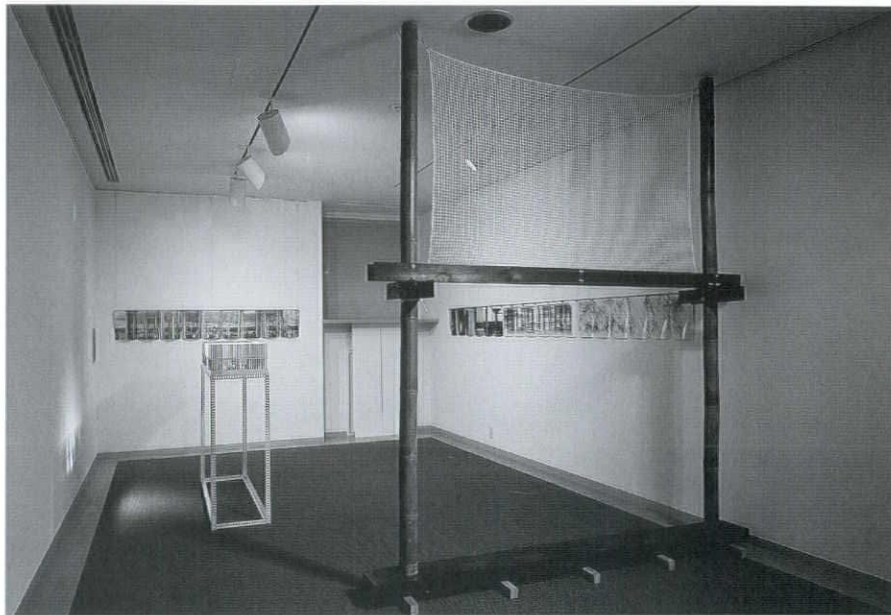
主要仕上げ材：真竹、漁網 # 25

敷地面積：476.99m²

建築面積：476.99m²

延床面積：476.99m²

工期予定：2000年7月



中島貴光 Kiko Nakajima

1975年／愛知県生まれ

1999年／東京芸術大学美術学部建築科卒業

現在、東京芸術大学大学院修士課程在籍

安宅研太郎 Kentaro Ataka

1974年／埼玉県生まれ

1998年／東京芸術大学美術学部建築科卒業

現在、東京芸術大学大学院修士課程在籍

西澤徹夫 Tetsuo Nishizawa

1974年／岐阜県生まれ

1998年／東京芸術大学美術学部建築科卒業

2000年／東京芸術大学大学院修士課程

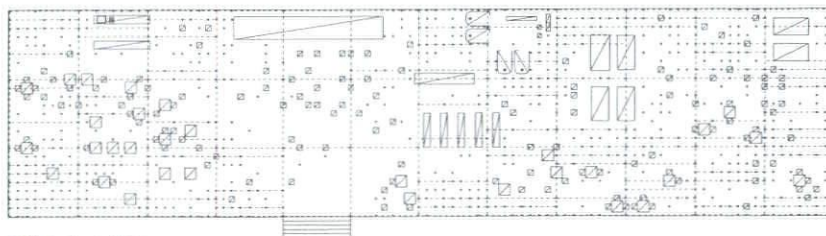
2000年／青木淳建築計画事務所

儀賀咲恵 Sakie Gika

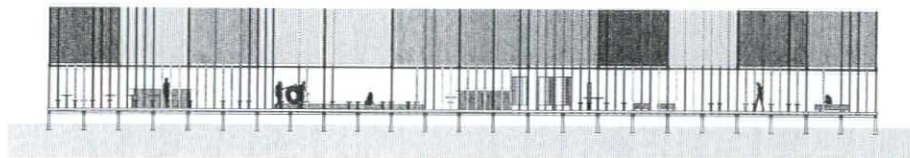
1977年／東京都生まれ

2000年／日本女子大学家政学部住居学科卒業

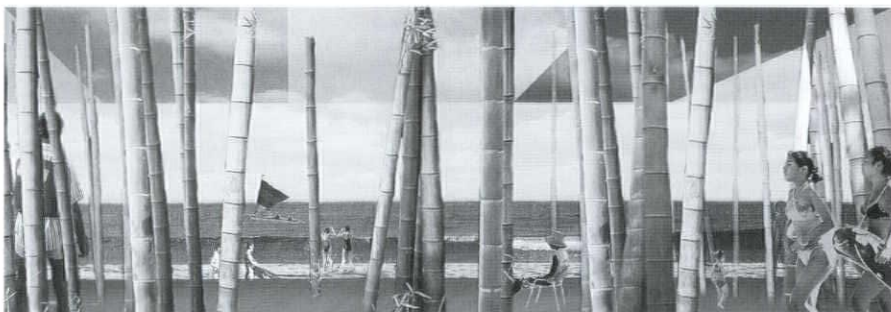
2000年／清水建設設計本部



平面図 S=1:400



立面図 S=1:400



ドローイング

このプロジェクトは神奈川県立葉山公園に近接する海岸に「海の家」を計画するものである。

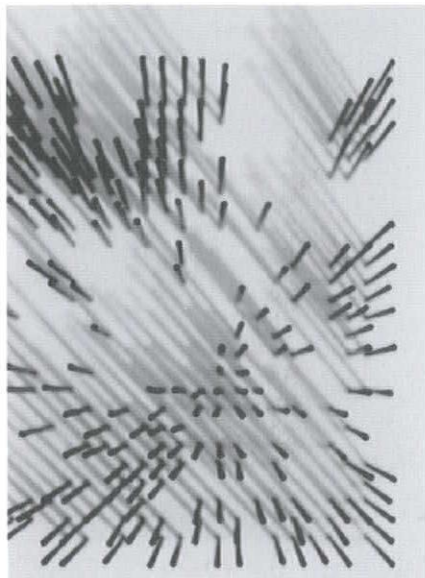
今年度から敷地である海岸が遊泳禁止となり、国内では類のないマリンスポーツ専用の海岸となるため、その宣伝効果も含めて従来の海の家にとらわれない斬新な提案であること、また夏期のみを対象とした仮設構造物でもあるため建設部材の来年度以降の転用も同時に要求された。

これに対して我々は、基礎部分に物理的に転用可能な鋼材を用い、上部構造には近隣から容易に入手できることから竹を主構造とすることを提案した。

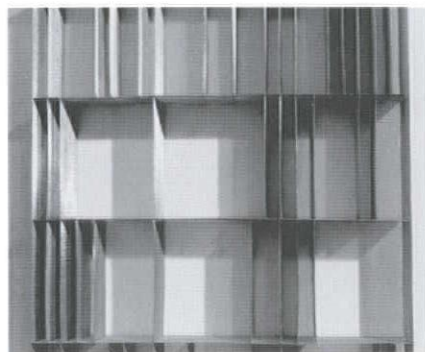
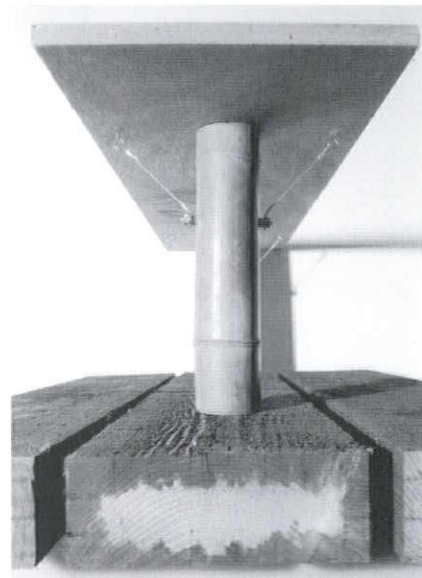
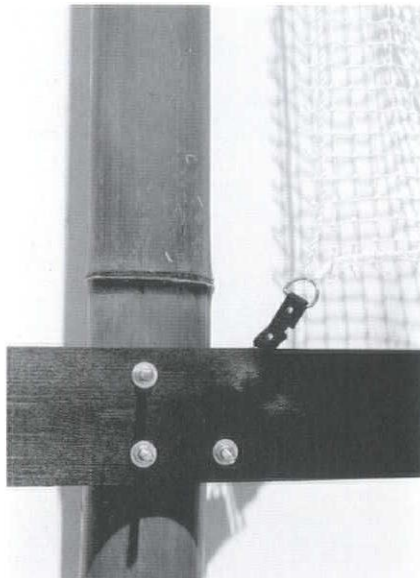
構造を壁に依存せず、竹の疎密で空間を構成することで十分な風通しと敷地の眺望のよさを確保することが可能だろう。

また屋根はプログラムを考える上で、雨を防ぐことと日射しを遮ることの役割上のバランスが大きく後者に偏るため、竹の上部間で漁網を張ることによって柔らかく「かげ」を落とすことを考えた。

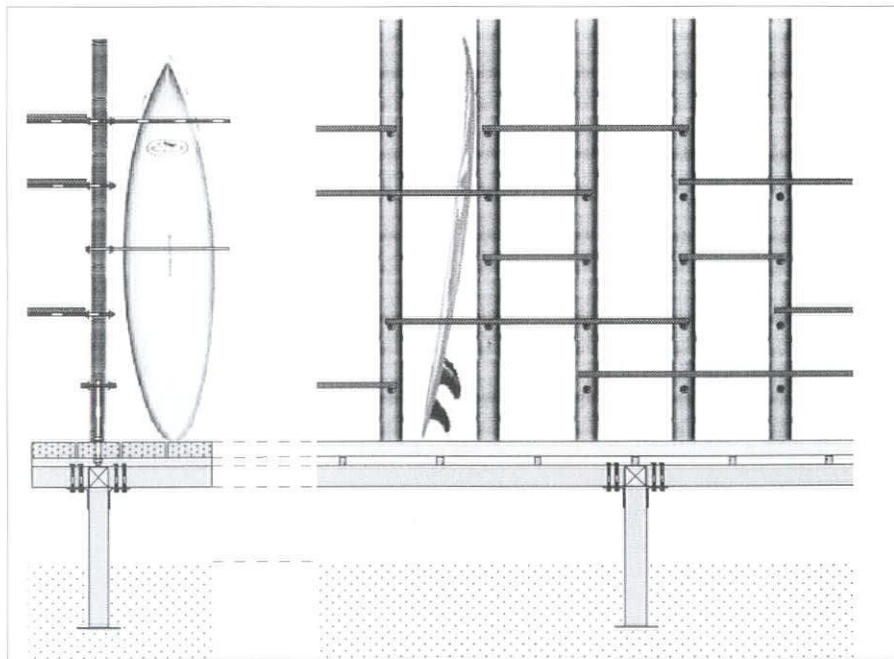
来訪客は気ままに「竹林」の間をすり抜け、それぞれの気に入った「かげ」で休み、開放的なパースペクティブを体験することができるだろう。



bamboo model



gyo-ami model



用途：2世帯住宅

所在地：神奈川県横浜市

主体構造：RC造

主要仕上材：コンクリート打放し

敷地面積：289.22m²

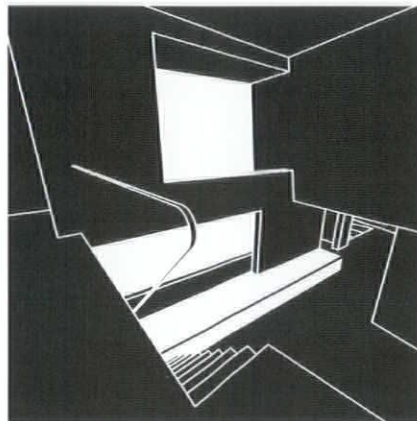
建築面積：115.55m²

延床面積：190.22m²

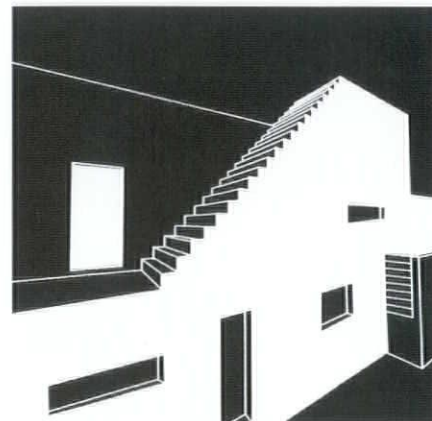
工期予定：2001年1月～8月

共同設計：佐々木睦朗構造計画研究所/久米弘記

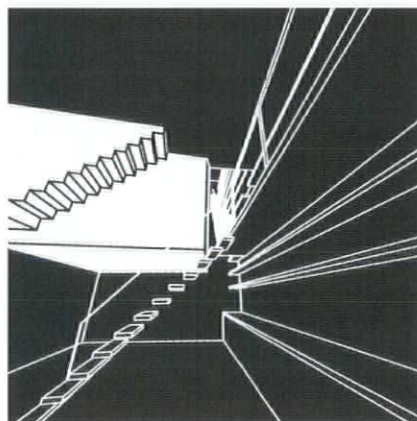
協力：阿部直樹



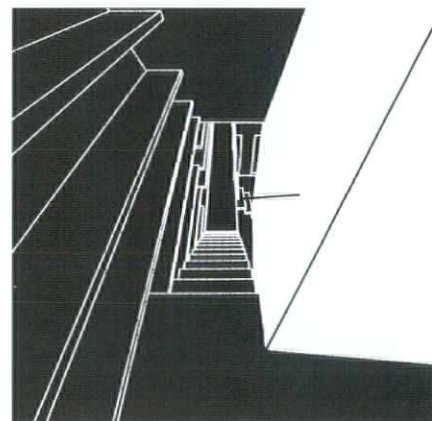
FLAT A / ホビールームからリビングルームを見下ろす



FLAT A / ホビールームからルーフデッキへの階段



FLAT B / エントランスからの見上げ



FLAT B / 寝室からギャラリーを見下ろす

二宮 博 Hiroshi Ninomiya

1963年/神奈川県生まれ

1988年/早稲田大学大学院修了

1996年/AAスクール大学院修了

1994-96年/Shirdel Kipnis Architecture Urban Design

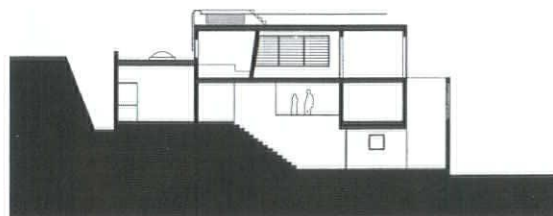
1997年-2000年/磯崎 新アトリエ

菱谷和子 Kazuko Hishiya

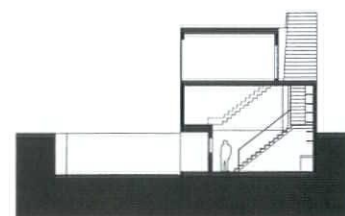
1963年/福岡県生まれ

1986年/横浜国立大学工学部建築学科卒業

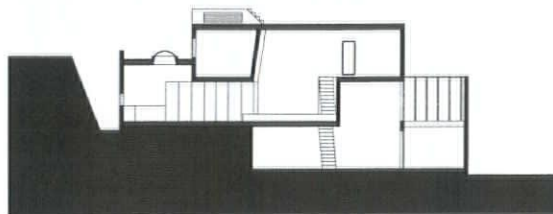
1994年-/Studio 2 Architects 主宰 (二宮博と協同)



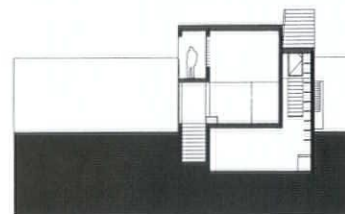
断面図 A



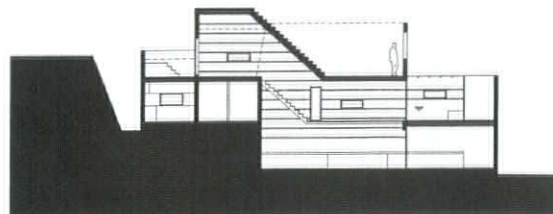
断面図 E



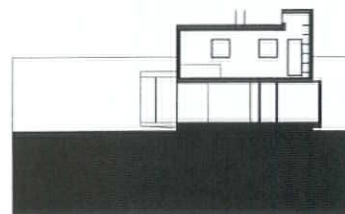
断面図 B



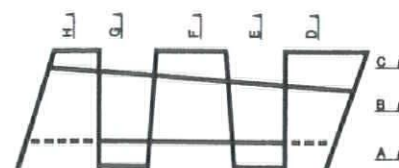
断面図 F



断面図 C



断面図 G



キープラン

SD0012

老朽化と子世帯の同居にともなう建替え計画である。既存家屋における親世帯 (FLAT A) のライフスタイルを尊重、発展させることが第一に求められた。そこで、既存の庭に面して採光条件の良い居室を並列し、その要求を満たした上で、この上部下部を巡るよう子世帯 (FLAT B) の居室配置を検討した。

親世帯 (FLAT A) は、単身の住居であることから、専有の庭に面して連続する単一の空間が天井高やレベルの変化によって緩やかに分節されている。屋上テラスを含め、敷地全体を専有しているかのようなひろがりのある居住空間がかたちづくられている。

子世帯 (FLAT B) は、仕事場としても利用される地階のリビングスペース

とプライベートな2階部分の寝室に分節され、それぞれが専有のテラスに面している。これらを連結する動線上には、浴室と棚板が配置されており、敷地の奥行きとレベルの変化を活用した伸びやかな空間構成となっている。

結果として、両世帯のライフスタイルがまったく異なっているがゆえに、互いの空間を干渉することなく、逆に相互を補完しながら成立する空間構成を生み出し得ることがわかった。住居のボリュームが立体的に絡み合い統合される一方で、適度に分配された外部空間を含め、ふたつの世帯の生活が完全に独立していることが、もうひとつの2世帯住宅の形式になり得ると考えている。

GARDEN/COURT/ROOF DECK DISTRIBUTION

FLAT A PROGRAM DISTRIBUTION

FLAT B PROGRAM DISTRIBUTION

FLAT A SPATIAL COMPOSITION

FLAT B SPATIAL COMPOSITION

FLAT A+B LIVING HYBRIDIZATION

空間構成ダイヤグラム

- | | | |
|-------------|----------|------------|
| 1. リビングルーム | 6. ホール | 11. ホビールーム |
| 2. ダイニングルーム | 7. 和室 | 12. 浴室 |
| 3. 光庭 | 8. ロフト | 13. ルーフデッキ |
| 4. パーキング | 9. ギャラリー | 14. 庭 |
| 5. エントランス | 10. 寝室 | 15. 吹抜け |

屋根伏図

1階平面図

2階平面図

地階平面図 S=1:400

用途：公衆浴場

所在地：秋田県

主体構造：木造（＋基礎部分RC造）

主要仕上材

屋根：ステンレス溶接工法＋融雪ヒートパネル

外壁：FRPハニカムコアパネル（浴室部）、

一部押出し成形セメント板＋撥水材塗布

開口部：アルミサッシ

浴室：（床）玄武岩、（壁）スギ板（セラミック防菌剤塗料）、

（天井）バスリブ

敷地面積：1,692m²

建築面積：480m²

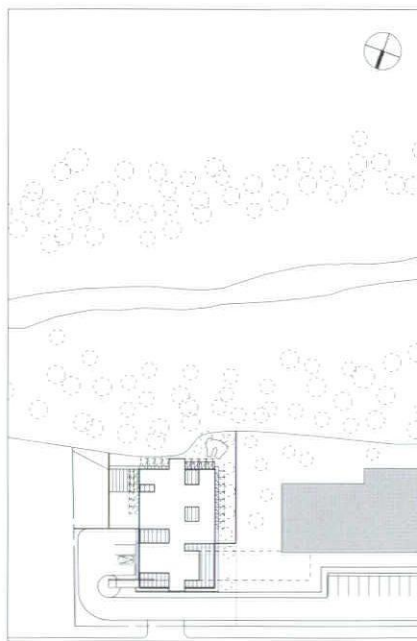
延床面積：713m²

工期予定：2001年5月～2002年6月

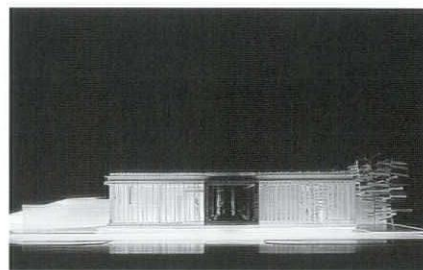
共同設計：（株）日立建設設計

協力：浅井亮介、塚越佳葉、佐藤美保子、

大西聡子、五十嵐且治



配置図



野澤良太 Ryota Nozawa

1969年／東京都生まれ

1996年／芝浦工業大学大学院修了

1996年／横河設計工房

1999年／CODEC設立

栄元正博 Masahiro Eigen

1969年／京都府生まれ

1996年／芝浦工業大学大学院修了

1996年／ED設立

1999年／CODEC設立

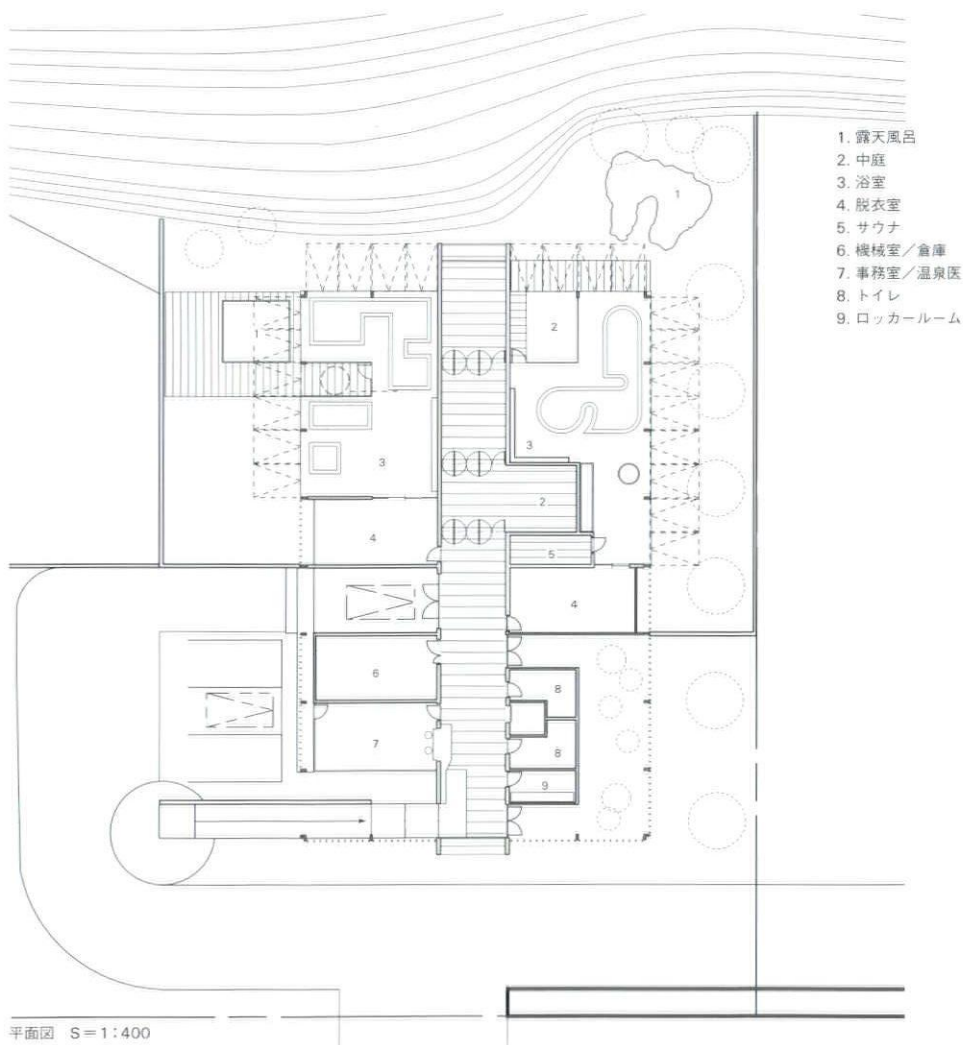
中村秀樹 Hideki Nakamura

1971年／兵庫県生まれ

1996年／神戸芸術工科大学大学院修了

1996年／日立建設設計

1999年／CODEC設立



平面図 S=1:400

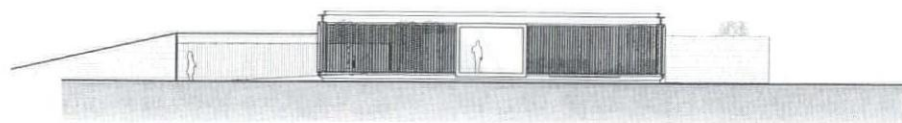
秋田県の山間部に位置するM村は、人口5000人の温泉町で高齢者の割合が高く、今後急速な過疎化が予想される。そのような状況の中、1.都市部からの交流人口の増加、2.町民の健康・交流の場を目的とし1998年から進められた町の活性化事業のひとつとしてこの施設は計画されている。

要求されたプログラムは、地元の木材を使用し町の自然環境をテーマとする展示空間と中心施設に相応しい温浴空間であった。

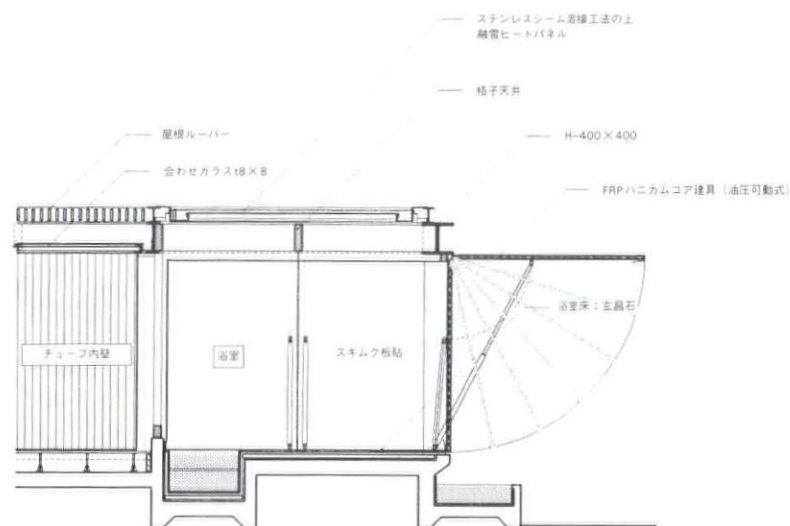
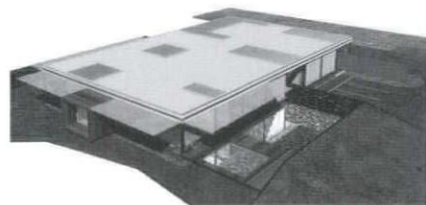
敷地は豊かな自然風景(国定公園)に囲まれ、東側には温水プールが隣接する。施設は、南北に抜けた木製チューブを中心に左右に浴室、諸室を配した構成となっている。

中央のチューブは外部と内部、各プログラムを繋ぐインターフェイスとして機能し、床、壁、天井には各種設備、配管スペースを有する。また通常は要求された展示空間としての機能ももつが、展示パネルを利用した可動間仕切によって空間を分節し、集会室や休憩室、託児室といった、この施設のバ

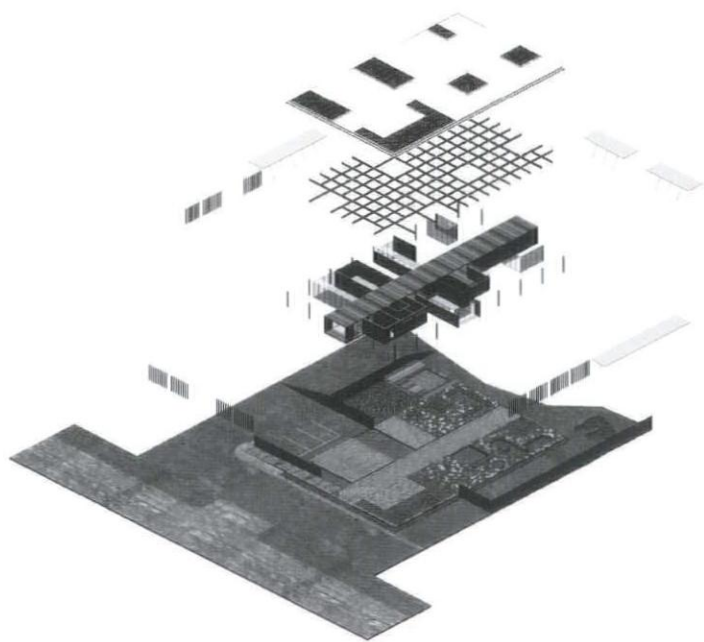
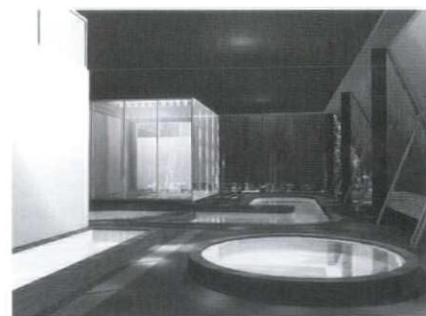
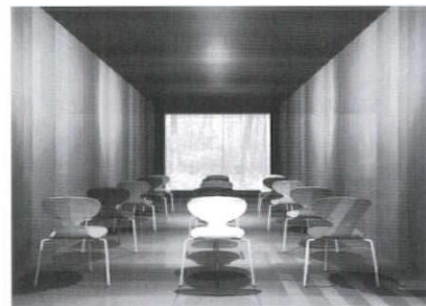
ブリックなエレメントに対応する。諸室は、欠き取られた中庭に面したガラス張りの開放的な空間とし、必要に応じて建物の外皮として設けられたルーバーによって視線の調整、冷暖房負荷の軽減を行う。中庭とルーバーによってつくられるバッファゾーンは、秋田県の伝統的民家のもつ「土縁」と同様の効果をもつ。また北側の中庭は、将来建て替えられる温水プールとこの施設を繋ぐエクステンションエリアとして計画される。浴室は谷側(国定公園)の自然を最大限取り入れる配置とし、それぞれ独自のプログラムによって構成され、様々な温浴メニューが楽しめる。外壁は、FRPハニカムコア製の建具の連続によってつくられ、気候の温暖な時期にはそれが滑り出すことによって深い庇をつくり、浴室は半屋外空間となり露天風呂、南側の自然と一体化する。冬期に於いては寒冷地であるため建具を閉じ、最小限に設けられた中庭とFRPの外壁から透過された光りにより、まったく別の表情をもつ浴室空間をつくり出す。



北立面図 S=1:400



ディテール S=1:200



ダイアグラム

用途：事務所

所在地：渋谷区南青山

主体構造：RC造（既存）

主要仕上げ

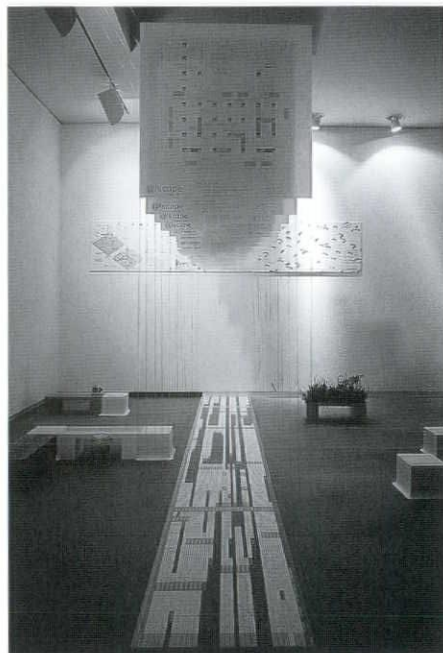
壁面：PB増し張り+AEP

床面：超硬質ウレタン塗装（ビューコート）

天井：PB寒冷紗パテしごき+AEP

延床面積：約540m²

工期予定：未定



原田真宏 Masahiro Harada

1973年／静岡県生まれ

1997年／芝浦工業大学大学院修了

1997-2000年／隈研吾建築都市設計事務所

1999-2000年／国際ガラス学院非常勤講師

現在、数寄屋職人安井清、

書道家川邊りえことコラボレーション

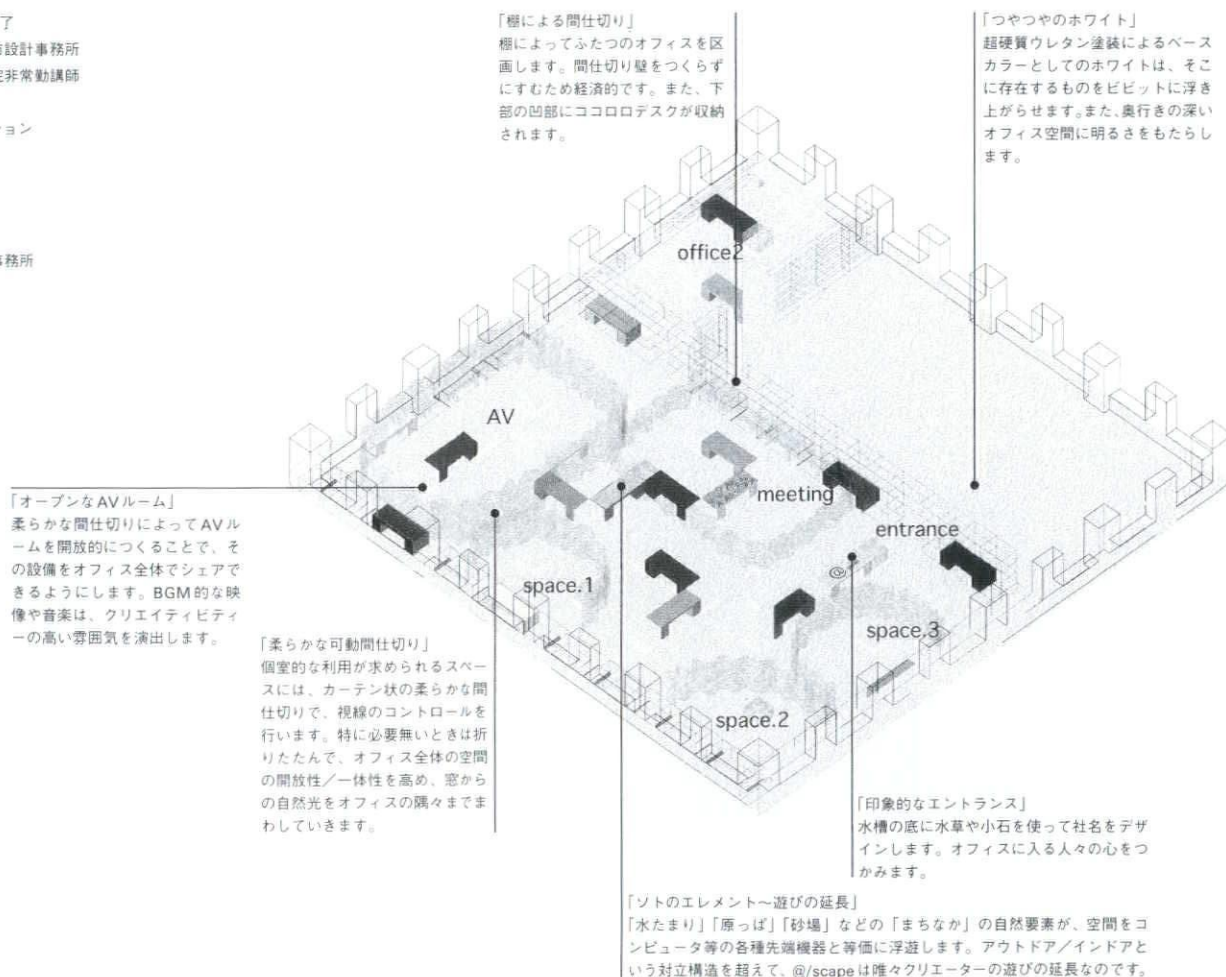
原田麻魚 Mao Harada

1976年／神奈川県生まれ

1999年／芝浦工業大学卒業

1999-2000年／原尚建築設計事務所

現在、フリー



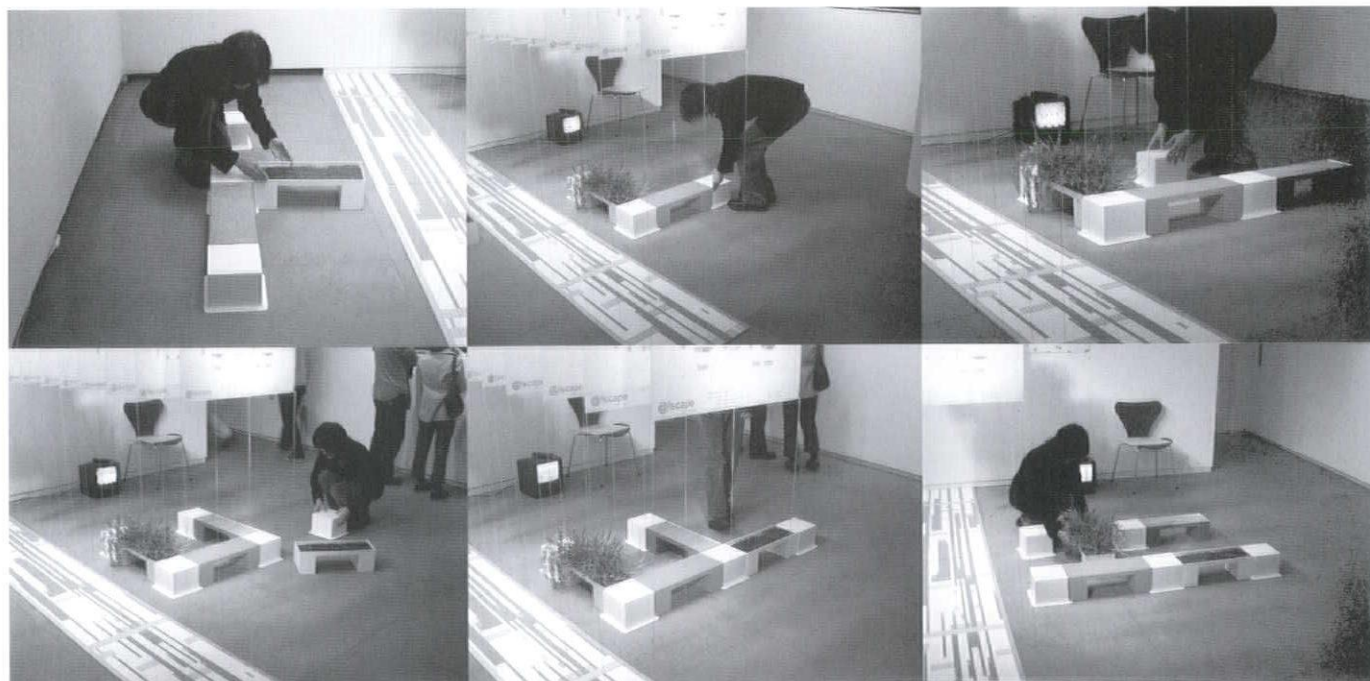
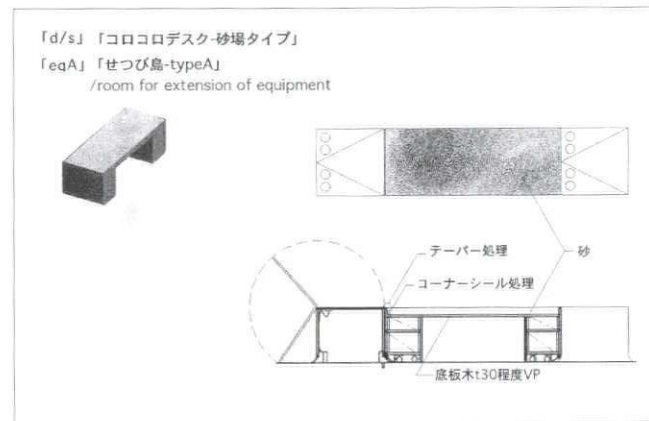
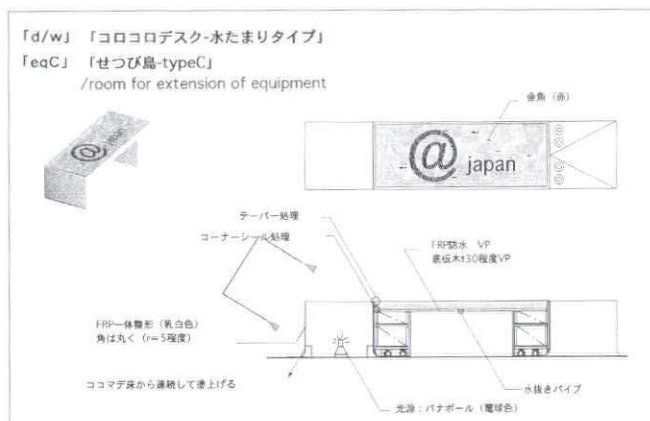
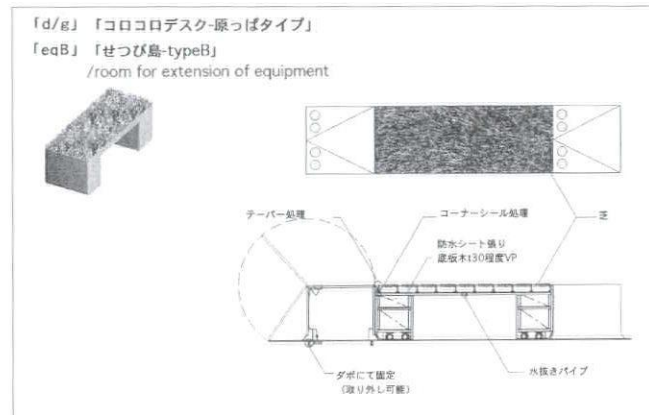
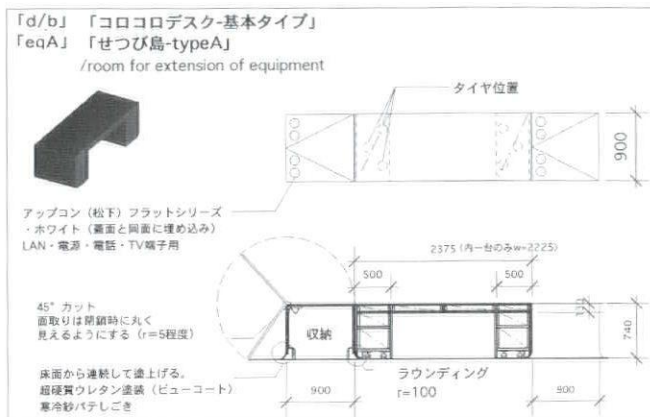
施主である「@JAPANmedia.com」はインターネットを背景とした顧客獲得システムや運営アドバイス、株主化による資金援助等を行うことで若手起業家やクリエイターをサポートしていくことを目的に、近々正式に設立される新会社である。この新会社のスタートに合わせて、新オフィスの計画が求められた。

施主より示された数少ない与件は「若手クリエイターの温床となるような空間であること。最新技術をサポートできる設備の強度と拡張性を有していること。クリエイターを含めて増減するスタッフや変転するプロジェクト

に柔軟に対応できる空間であること。世界に対して開いていること。」であった。

コンピュータのような自由度と、秘密基地のような固有な場所性が求められている。これはこれからの「IT時代のオフィス」にとって共通の命題であるように思われた。

我々はこの課題を「@/scape」=WEBの風景として解いてみることにした。



矢口博幸+I.C.A.

Soft house

用途：セカンドハウス

所在地：茨城県新治郡霞ヶ浦町

主体構造：RC造

外部仕上げ

外壁：リシン吹きつけ

(スタイロフォーム打込の外断熱工法)

屋根：アスファルト防水+押さえコンクリート（外断熱）

開口部：アルミサッシュ、スチールサッシュ

内部仕上げ

壁：石膏ボード+寒冷紗テープ、パテシゴキEP

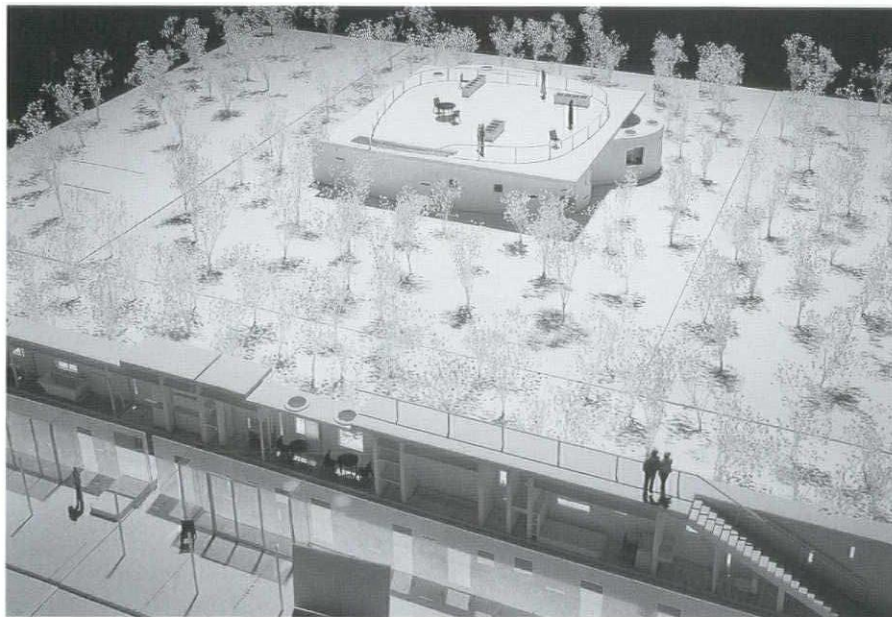
敷地面積：500.00m²

建築面積：226.43m²

延床面積：231.64m²

工期予定：2001年1月～6月

共同設計者：転石 勇（構造）、土浦設備設計／櫻井重夫



矢口博幸 Hiroyuki Yaguchi

1969年／茨城県生まれ

1993年／東京理科大学理工学部建築学科卒業

1993-95年／北川原温建築都市研究所

2000年／I.C.A. (Institute of contemporary art) 設立

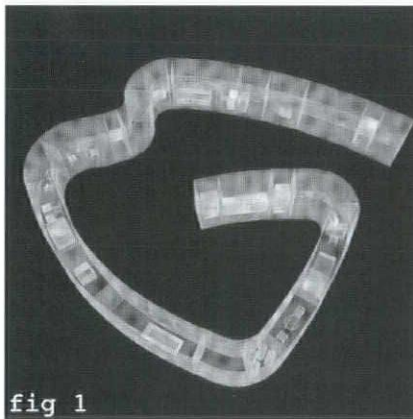


fig 1

functional band

様々な機能をもつ最小限のスペースの連なり

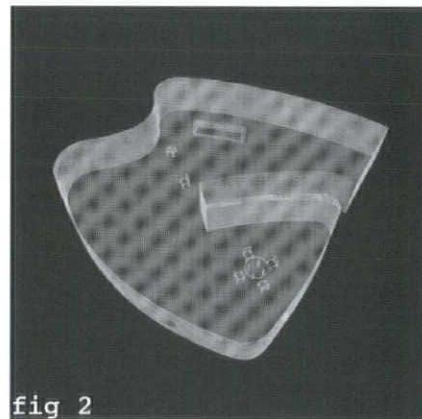


fig 2

void

明確な機能および動線をもたないスペース

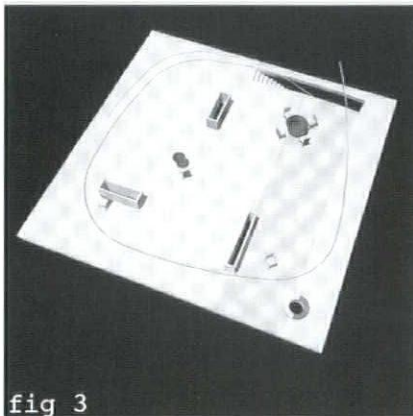


fig 3

roof

屋上庭園およびセカンドリビング

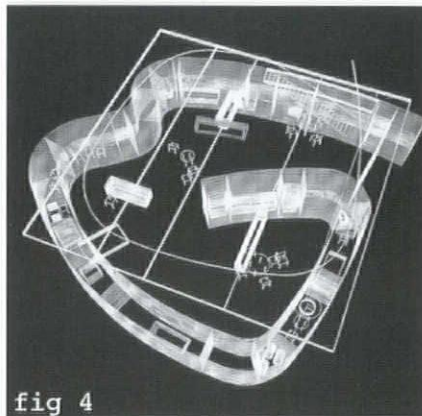


fig 4

レイヤーモデル

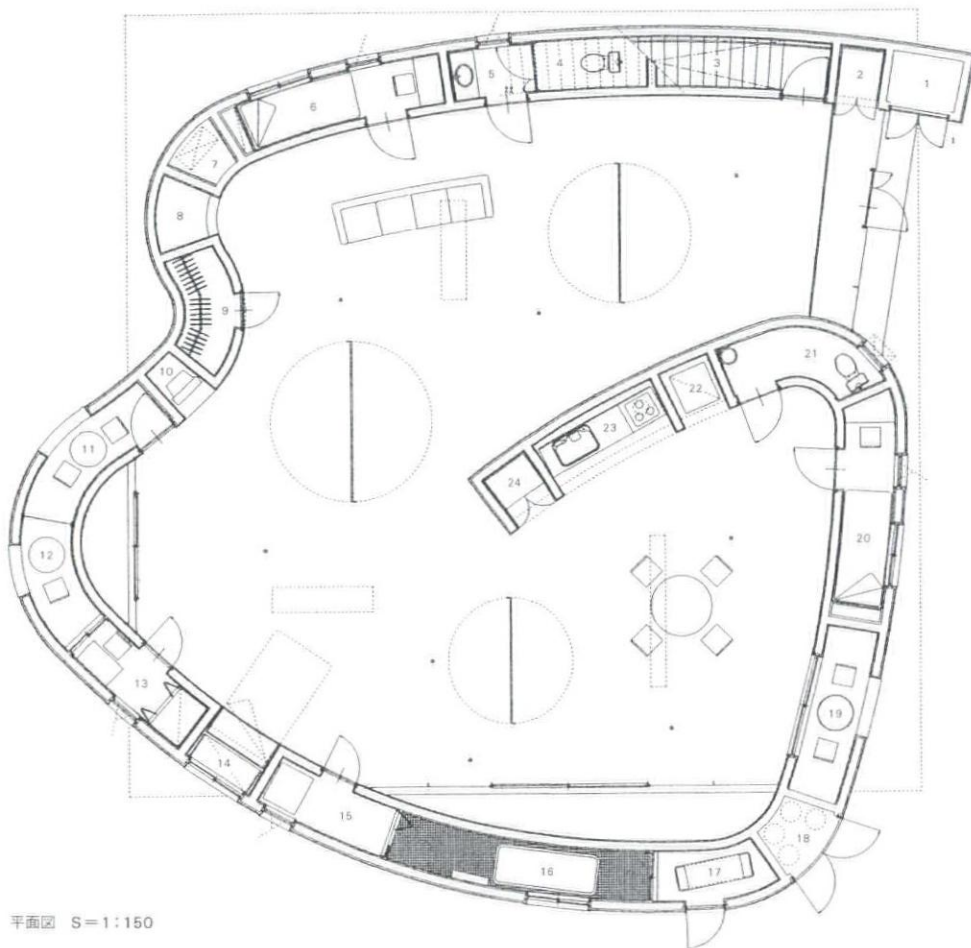
functional bandがvoidをサポートしている

計画地は湖である霞ヶ浦を望む、田園と美しい森が織りなす片田舎にある。クライアントは近接地に住居を構えており、今回のプロジェクトにおいて特異なダイアグラムを用いるのは、セカンドハウスと、パーティールームという機能的にもあまり拘束をもつものではないことも作用している。計画には functional band と呼ばれるさまざまな機能をもつ最小限のスペースの連なりが内部の void を包み込むように配置され、内部空間は functional band からさまざまな機能のサポートを受けるような平面となっている。

このプロジェクトのダイアグラムの特異性は、固定化した動線を排除したことにより、人々は常に相対的な位置関係を保ちながら空間の中を漂流することになり、void は単純な形式であるにもかかわらず、多義的な意味で複

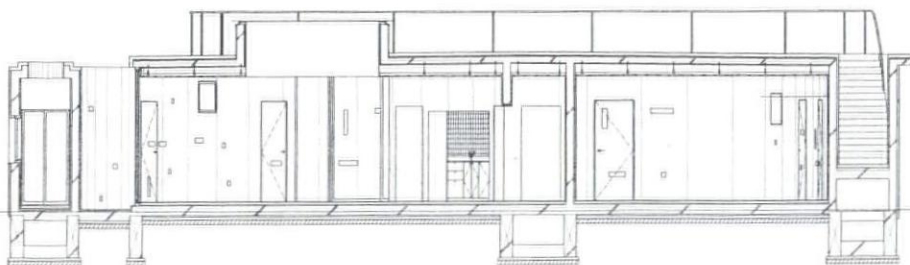
雑なアクティビティを許容している。今回のプロジェクトにおいて void はひとつであるが、void が複数になっても特異なダイアグラムの図式は成立する。

また、内部空間は functional band を通して、外部のさまざまな風景を断片的に切り取り、物理的にも、2重の壁によって環境をコントロールされている。屋根は内部空間の閉鎖性を補完するように、森に浮遊しているような開放的なかつ軽やかなデザインとし、functional band にソフトに支えられ、セカンドリビングのような機能を期待されている。〈Soft house〉という名はさまざまなプログラムを緩やかに調停することやデザインされたフォルムの結果による。



1. 物置
2. 玄関収納
3. 階段室
4. トイレ
5. 洗面台
6. 寝室1
7. 室外機置場
8. 展示棚
9. クローゼット
10. 収納
11. テラス1
12. 個室付きテラス
13. 個室
14. 収納ベッド
15. 脱衣室
16. 浴室
17. 浴室付きテラス
18. 機械室
19. テラス2
20. 寝室2
21. トイレ
22. 冷蔵庫
23. キッチン
24. 食器棚

平面図 S=1:150



断面図 S=1:150

用途：住宅

所在地：京都府長岡京市

主体構造：RC造

主要仕上材

外装：コンクリート打放し+撥水剤塗布

内装：コンクリート打放し+AEP、PB+AEP

敷地面積：106m²

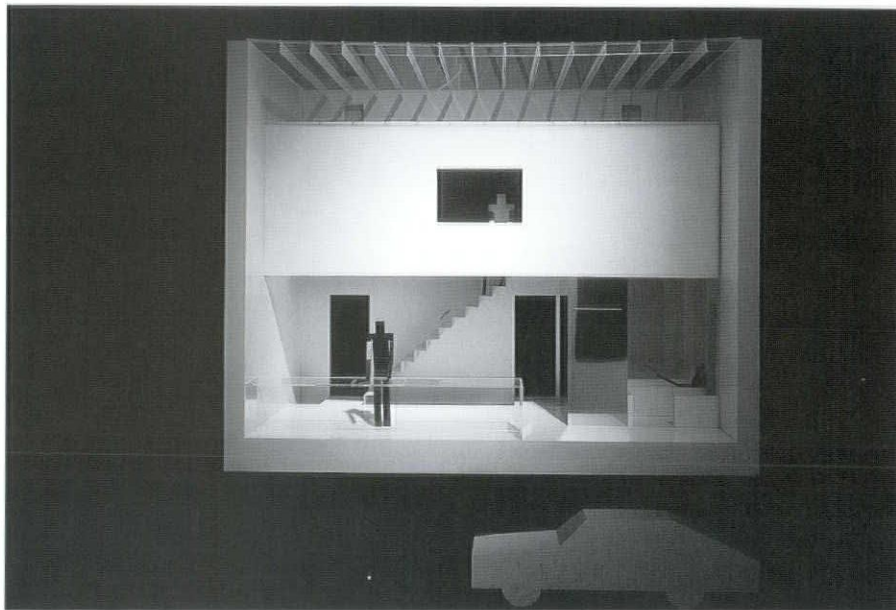
建築面積：62.8m²

延床面積：141.1m²

工期予定：2000年10月～2001年5月

共同設計：佐藤淳構造設計事務所

協力：外木裕子、加藤昌子、式地香織



安田光男 Teruo Yasuda

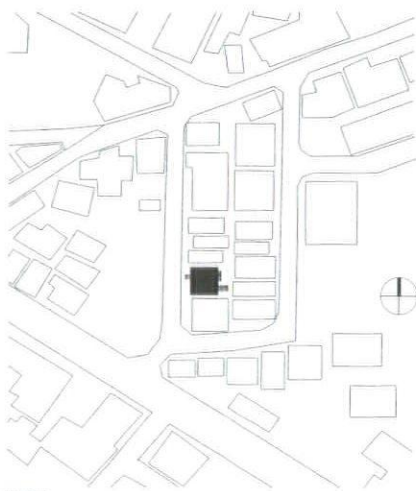
1970年/京都府生まれ

1994年/東京大学工学部建築学科卒業

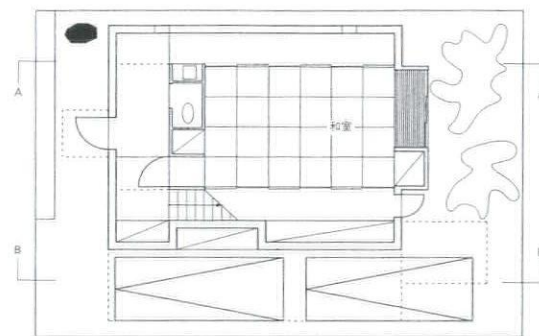
1994-2000年/伊東豊雄建築設計事務所

1996年/SDレビュー1996入選

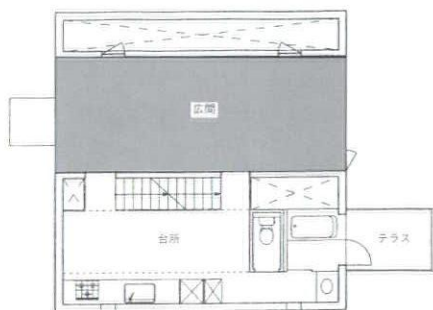
2000年/安田光男建築設計事務所設立



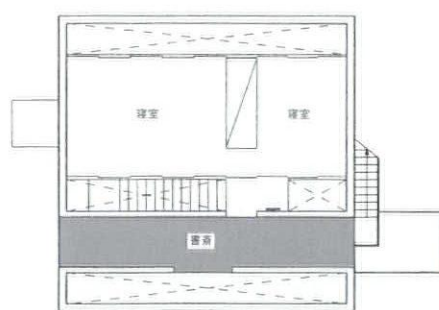
配置図



1階平面図 S=1:200



2階平面図

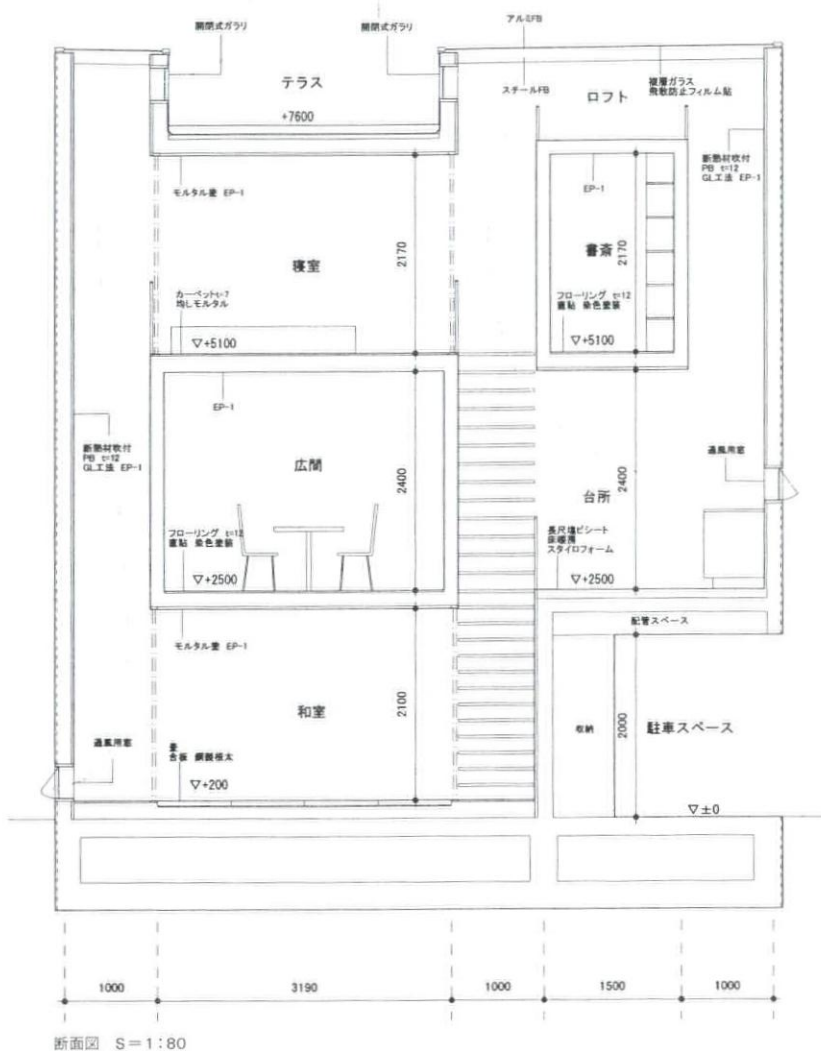
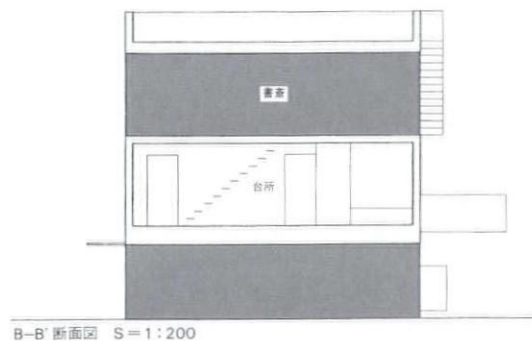
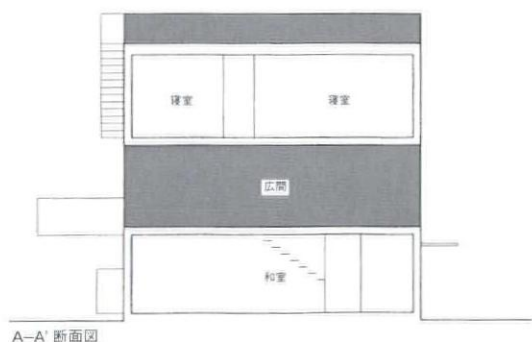
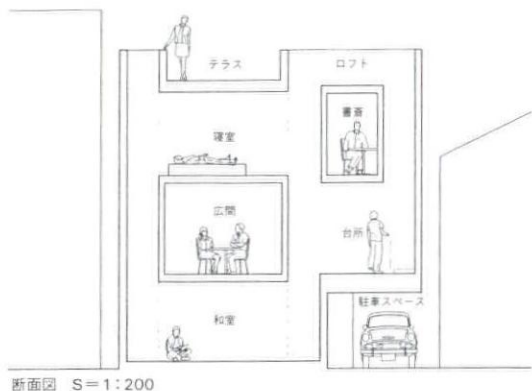
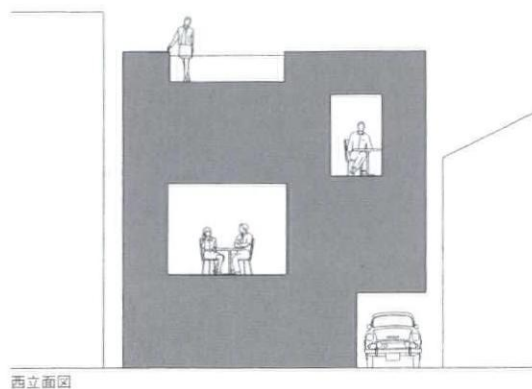


3階平面図

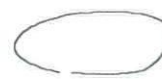
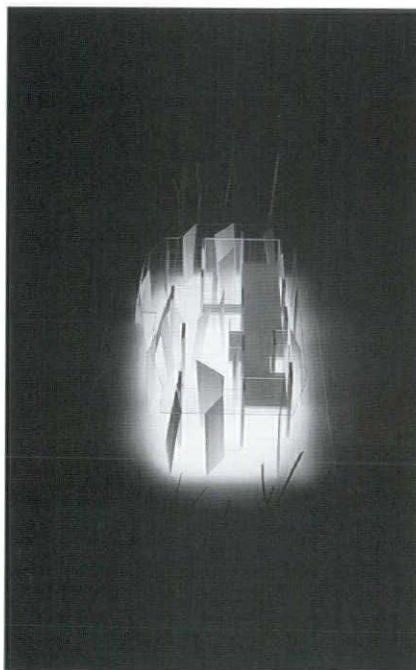
敷地は地方の郊外の住宅地である。敷地周辺は住宅が密集しており、残った空地にも将来的には住宅が建つことが想定される。夫婦ふたりのための住宅で、ゲストルーム、大きな和室、開放的な広間、広い台所、2台以上の駐車場、敷地北西角にある由緒ある石を動かさないことなどが要求された。密集地であるためにプライバシーを確保しながら、いかに開放的な場所をつくり、この狭い敷地を広く感じさせることができるかを考えた。

そのために道路を含めた敷地の長手方向に視線が抜けるように開放的な部屋を配置し、プライバシーの確保がさらに必要な部屋については、トップラ

イトによる光と通風窓による風通しを考えた。広間、書斎、テラス、駐車場は黒い外壁がそのまま室内に入ってくるようにつくっており、より外部との連続感を感じさせ、開放的で活動的な生活空間を生み出す。一方、寝室、和室、水周りはトップライトの光が拡散する白い内装の室内となっており、静寂でゆったりとした生活空間となっている。それらふたつの空間は表裏一体となっており、住人は生活をしながらこのふたつの空間を行き交うことで生活の中にリズムを感じるようになる。そのとき、住人は初めて空間を認識しながら、生活することになるのである。



用途：精神病院付属デイケア施設
所在地：北海道伊達市
主体構造：S造
主要仕上材料
外装：膜材、ペアガラス、表面処理金属板
内装：膜材、コンクリート全ゴテ+ワックス仕上床、
PB+EP
敷地面積：34,217m²
建築面積：204.8m²
延床面積：274.5m²
工期予定：2001年3月～9月
共同設計：佐藤淳構造設計事務所



skin

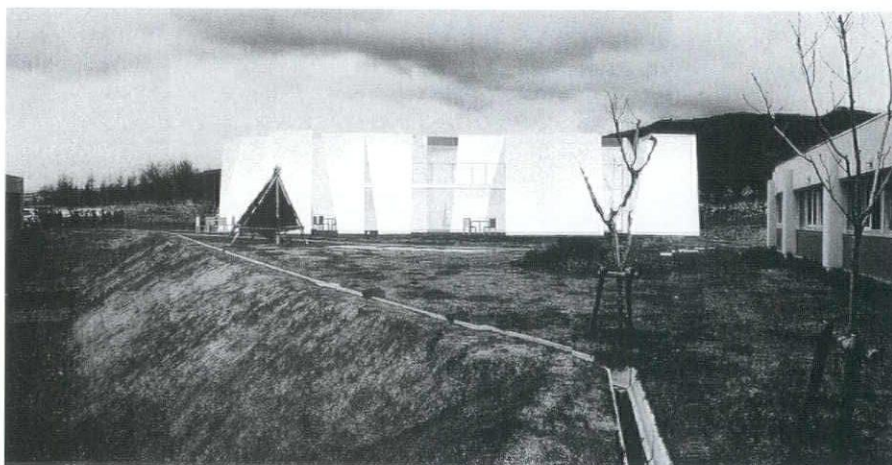
内と外を
区切ることで
場所をつくる



no skin

区切らずに
密度を高めることで
場所をつくる
森のように

藤本壮介 Sosuke Fujimoto
1971年／北海道生まれ
1994年／東京大学建築学科卒業
1995年／SDレビュー1995入選
1997年／SDレビュー1997 SD賞
2000年／青森県立美術館設計競技優秀賞



イメージコラージュ



膜のシルエット

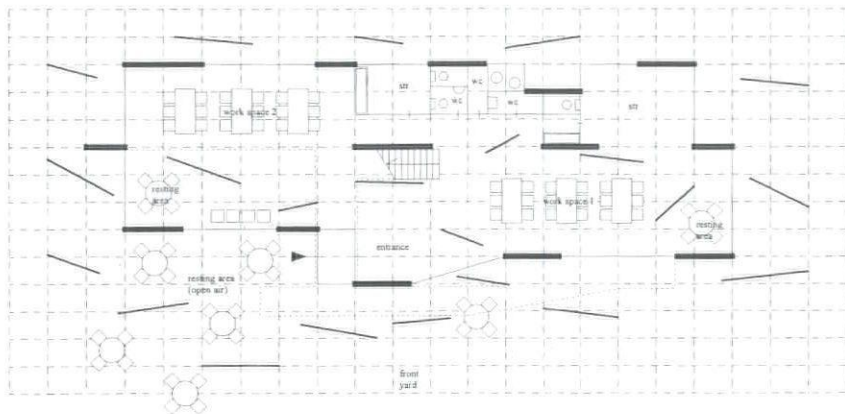
「曖昧な領域としての建築」の試み

精神病院に付属のデイケア棟。外来の患者が通い、作業療法などを行うためのアトリエ的な施設である。敷地は北海道南西の自然豊かな丘陵地。雪は少なく、冬も比較的温暖である。

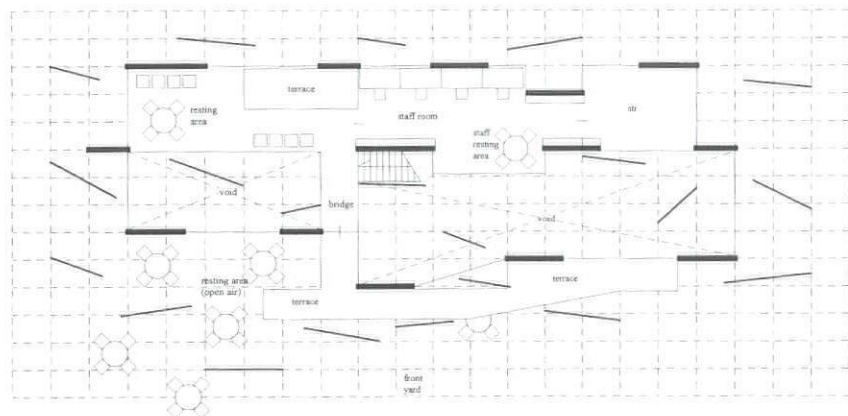
ここに提案するのは、建築と周辺環境との新しい関係の仕方である。明確な境界をもたず、周辺環境と浸透しあうような、曖昧で弱い建築を構想した。それは、恵まれた敷地条件だけでなく、病院と地域が浸透しあう場所という、この建物のプログラムにも呼応する。

林立する軽い膜材の壁の密度が、建物の領域を曖昧に規定する。これは、明確な境界をもたず、それでいながら場所としての強い性格をもっている森のような建物である。薄い膜材による柔らかい光の森である。建築全体がフィルターであり、人が、光が、内外を浸透しあう。

膜材の壁は密度を変えながら空間をゆるやかに分節し、要求された機能に場所を与えていく。それは同時に、日除けとして直射日光を遮り、柔らかい透過光を生む。



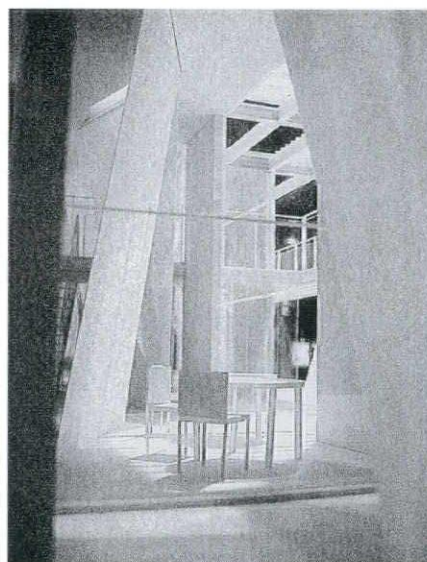
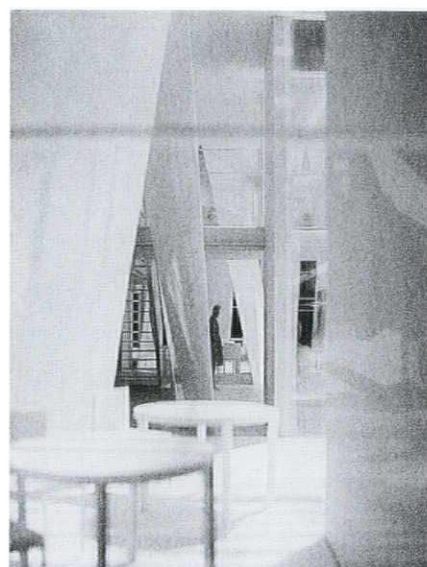
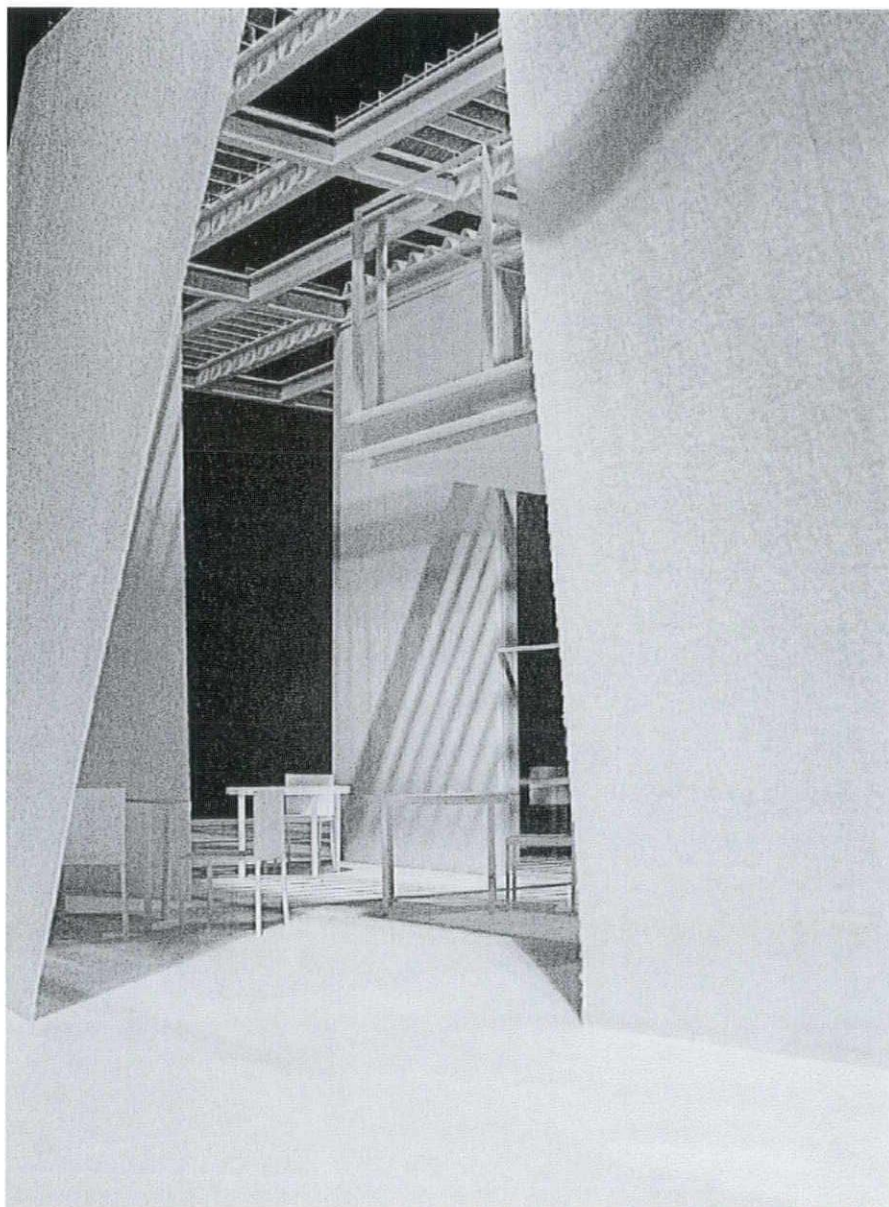
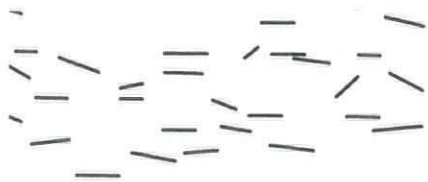
1階平面図 S=1:150



2階平面図



南西立面図 S=1:150



用途：集合住宅

所在地：東京都目黒区

主体構造：RC造（ヴォイドラメン）

主要仕上材

外壁：コンクリート打放し+撥水材塗布、

一部コールテン鋼

開口部：フロストガラス、透明フロートガラス、ジャロジー、

バルンサーサッシュ、飛散防止フィルム

内部壁：ポリカーボネード可動間仕切り、

コンクリート打放し+撥水材塗布

内部床：温水式フロアヒーティング+モルタル全鍍仕上げ、

一部モザイクタイル張り

敷地面積：303.23m²

建築面積：186.96m²

延床面積：588.41m²

工期予定：2000年11月～2001年6月

共同設計：古屋千夏、渡辺 猛（意匠）

O.R.S事務所／依田定和、小川勝利（構造）

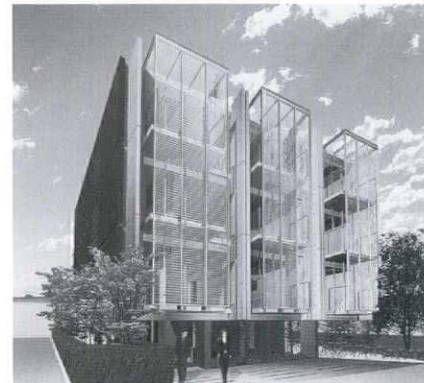
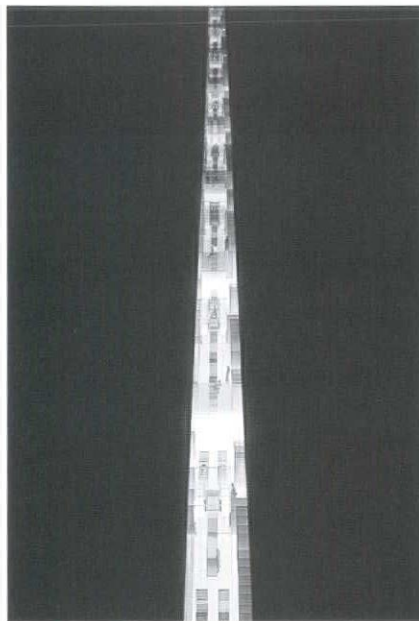
知久設備計画研究所／知久昭夫、神崎好久、

木村義博（設備）

GAヤマザキ／山崎誠子（植栽）

協力：池田泰朗、桜井由子、國武陽一郎

木網裕貴（CG）



山岡嘉彌 Yoshiya Yamaoka

1946年／東京都生まれ

1971年／武蔵工業大学建築学科卒業

1974年／早稲田大学大学院修士課程修了

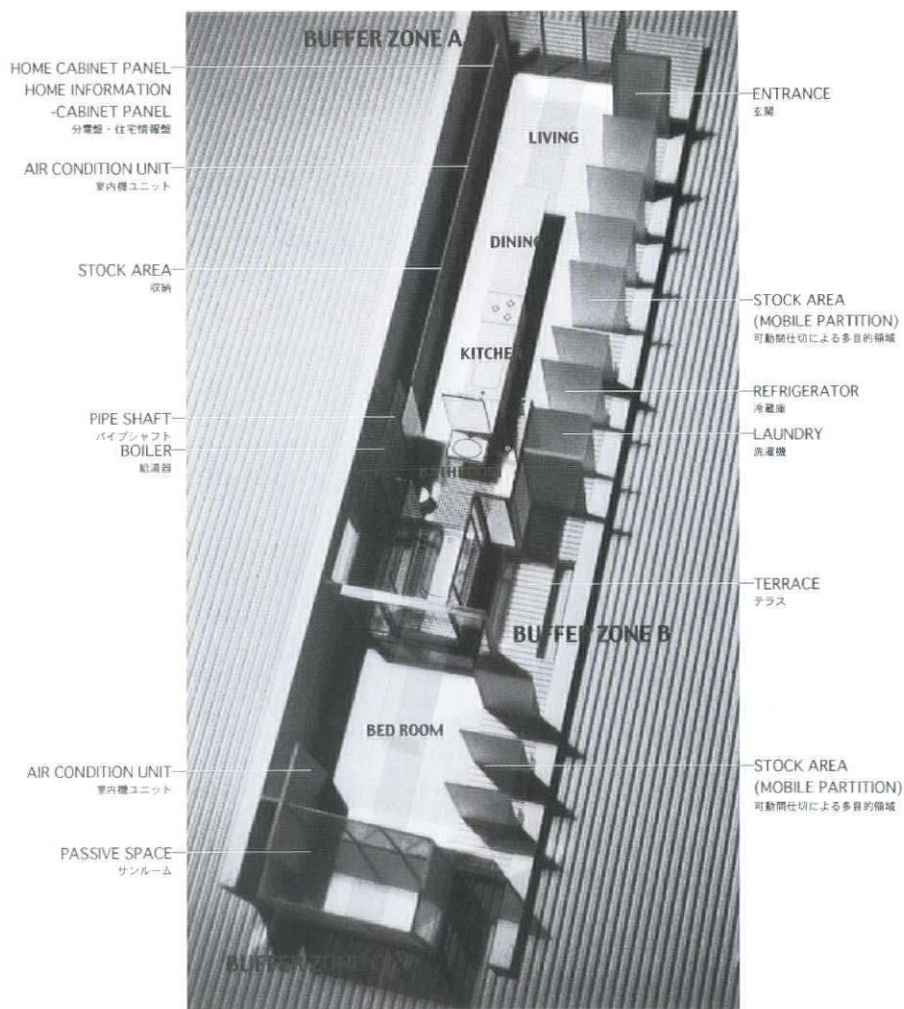
1974年～91年／飯倉建築研究所

1993年／山岡嘉彌 デザイン事務所設立

1993年／日本政府文化庁派遣芸術家在外研修員（イタリア）

RENZO PIANO+UNESCO & BUILDING WORKSHOP

2000年～／武蔵工業大学非常勤講師



アクソノメトリック

IDENTITY：社会情勢の変遷、生活スタイル、家族構成、住まい方の価値観の変化等に対して、適宜移住が容易な賃貸住宅。その存在価値として、豊かなヴァリエーションと個性的な住まい方の可能性を提供するスペースとしてのひとつの提案。

TEMPORARY：一過性の「時」を大切に、「生活」を自ら創造し、楽しむ人のためのテンポラリーな居住空間の提案

SOHO：家に居ながらにして仕事もできるSOHO（Small Office Home Office）にも対応。

PROGRAM：個々人の個性で独創的に使いこなせるためのプログラムを内包する生活単位空間。可動間仕切。床材の選択（D.I.Y.）方式等。

BUFFER：入れ籠構造によるバッファゾーンは光、音、熱を制御するのみ

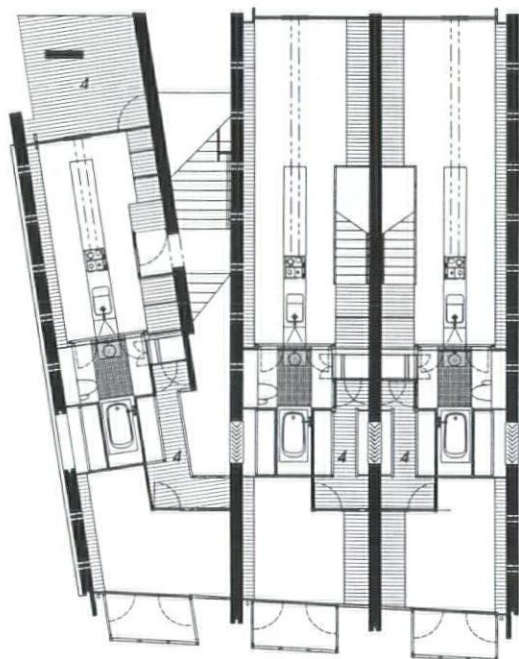
ならず、設備スペースおよび収納となる。また将来的なスペック増にも対応。
LINEA：軸線状の居室に付帯する帯状のサイド・アイル（側廊）は生活領域の利用形態に合わせた用途。

VOID：緑に囲まれた浮遊感のある「空中風呂」の部分は、細長い住まいの中央に開けた風穴であり、光井戸（Light Well）でもある。

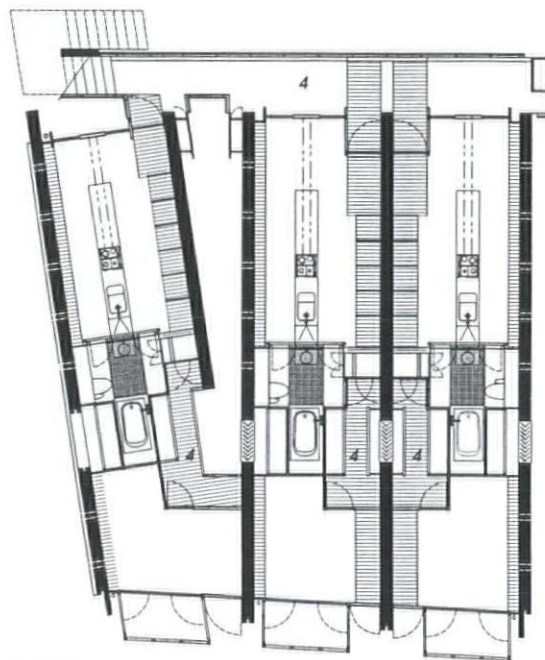
GREEN：敷地周辺に配慮しつつ、各居室からも自然を享受できる緑化計画。

INFRA：柱、梁をなくした単純な構造によるフリーな内部空間、優れた遮音性をもつボックス型のヴォイドラーメン構造。

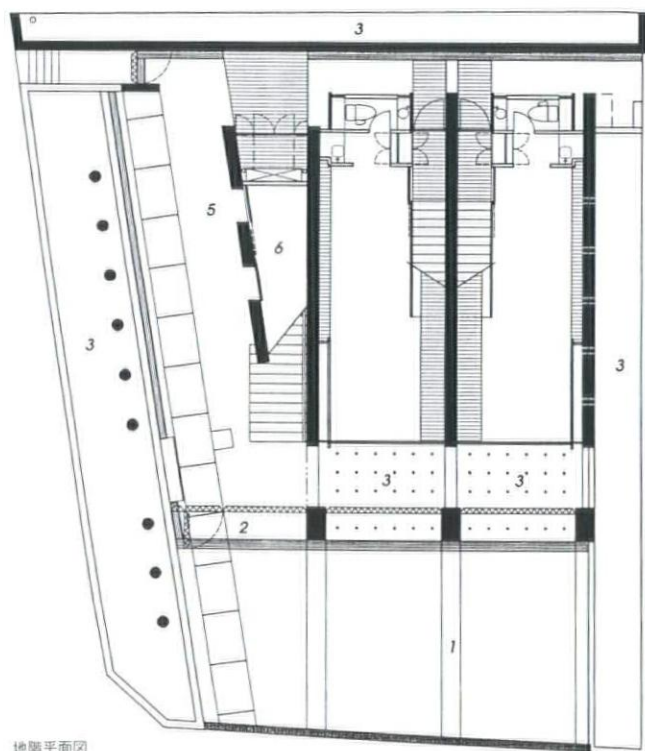
LIGHTING：「タスク・アンビエント・ライティング」（Task Ambient Lighting）の考えにより、局所的な直接照明と全般的な間接照明とを併用し、省エネルギーを図ると共に情感、感受性豊かな空間をつくる。



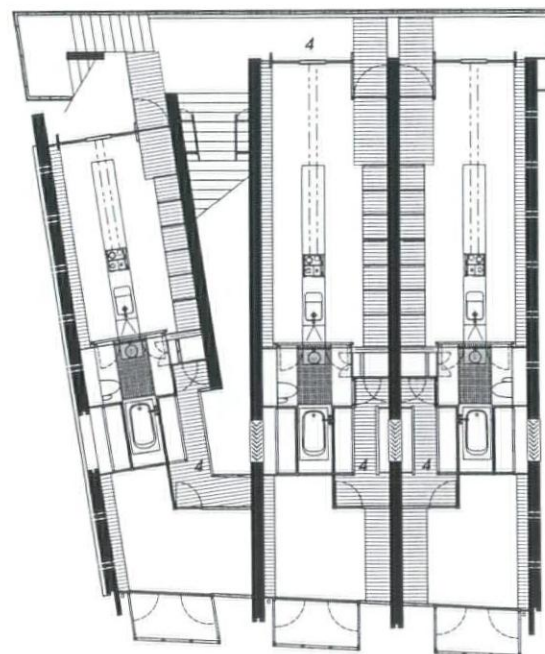
1階平面図 S=1:200



3階平面図

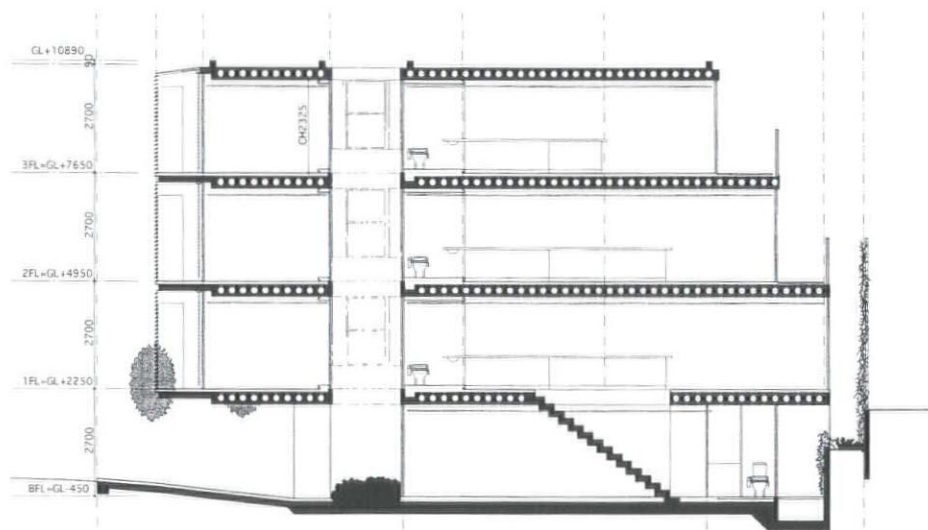


地階平面図

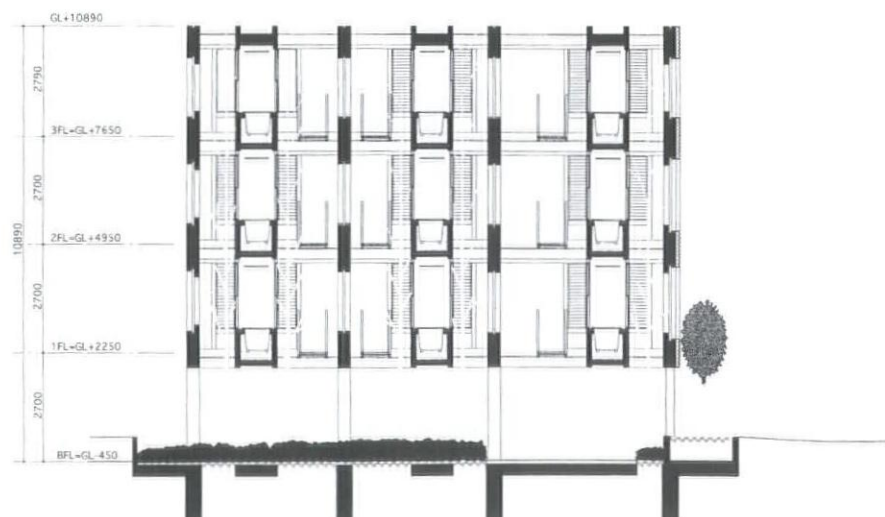


2階平面図

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. パーキング | 4. デッキテラス |
| 2. エントランス | 5. 駐輪場 |
| 3. 植栽 | 6. 倉庫 |



断面図 S=1:200



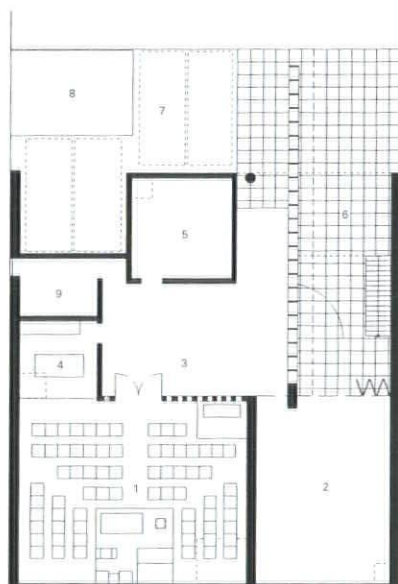
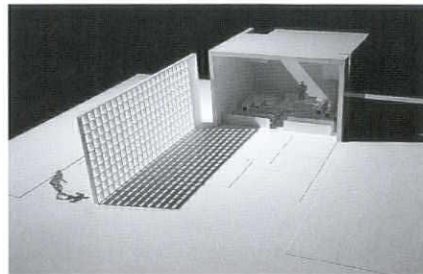
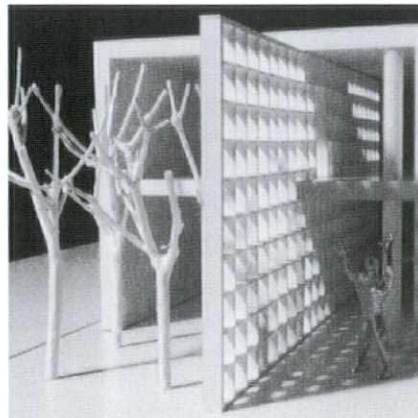
断面図 S=1:200

吉田 晋

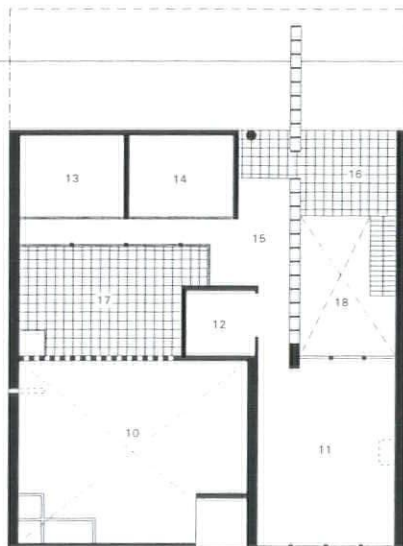
街の教会

用途：教会（牧師用住宅を併設）
所在地：高知市
主体構造：RC造（一部木造）
主要仕上材：コンクリート打放し+APCL、
テラコッタタイル、フローリング、
木レンガ、麻カーペット、
一部土佐漆喰はんだ仕上げ、土佐和紙貼り
敷地面積：373m²
建築面積：220m²
延床面積：301m²
工期予定：2001年1月～7月

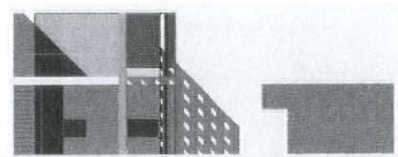
共同設計：大谷英人（ワークショップ共同主宰）、
山本幸延（構造）、
南与力町教会会員のみなさん（ワークショップ参加）
協力：高知工科大学社会システム工学科／澤田浩志、
田中雄一郎、石田計志、大久保圭、中山雄介、三木結花、
松本康夫、三本和美、横山 藍



1階平面図 S=1:300

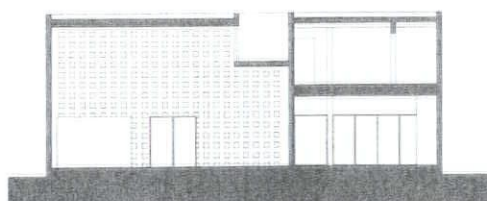


2階平面図



立面図 S=1:300

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 礼拝室 | 10. 吹抜け |
| 2. 機能室 | 11. LDK |
| 3. ホール | 12. 浴室・トイレ |
| 4. 母子室 | 13. 主寝室 |
| 5. 交流／食事室 | 14. 子供室 |
| 6. 教会中庭 | 15. 玄関（牧師住居） |
| 7. 駐車場 | 16. テラス |
| 8. 芝生 | 17. 中庭（牧師住居） |
| 9. トイレ | 18. 吹抜け |

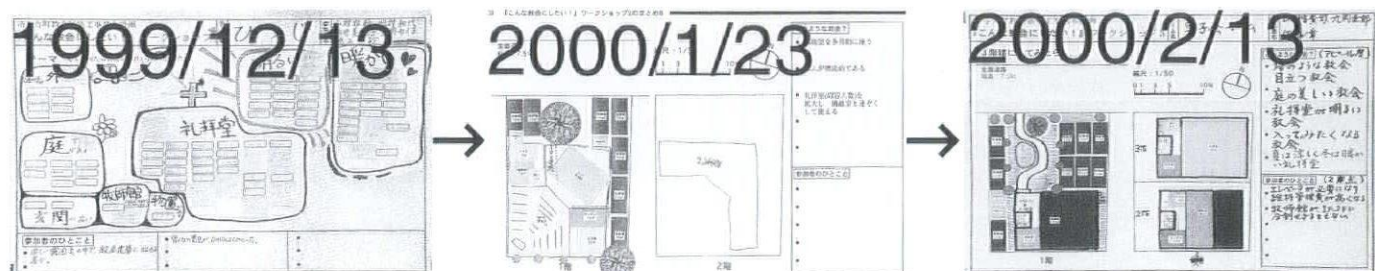


断面図 S=1:300

「街の教会」は地方都市の中心市街地から少し離れた敷地に建つ。周囲は店舗、住宅、マンションその他の施設が雑多に建ち並ぶ典型的な「街」であり、ささやかであるが会員による宗教的生活の中心機能をもったプロテスタント教会としての役割が期待されている。

プロテスタント教会は、その成立の理念と経緯からカトリック教会のように明確なヒエラルキーをもった階層的空間ではなく、「万人祭司論」に基づいて「神の言葉によって集められた民が復活の喜びのうちに聖餐卓を取り囲む」形式をとるべきとされている。これは教会が一人ひとりの信徒がひとつの家族のように集まる「家」であることを示している。

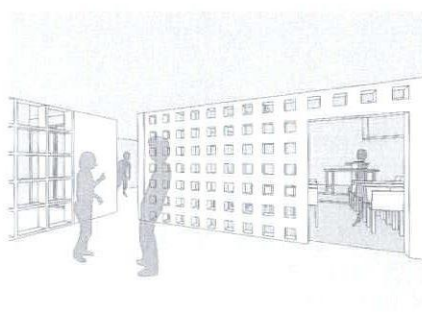
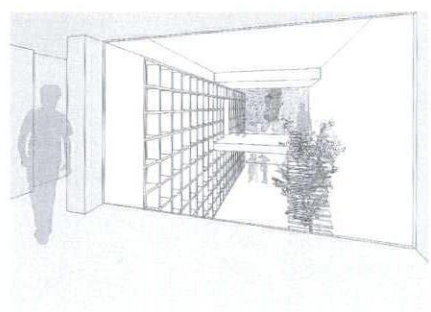
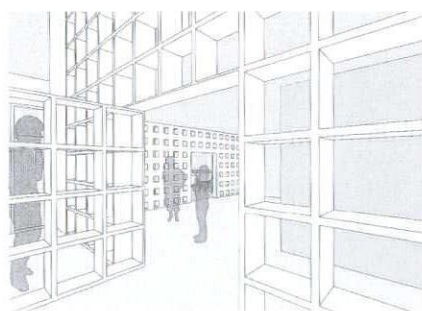
計画の中心的課題は「集まった人々（70人）が観客としてではなく、礼拝に参加する」ことである。本計画では「pervasive workshpping（浸透的礼拝）」の概念により、「すべての空間において礼拝を身近に感じ、参加することになる」。「Pervasive workshpping（浸透的礼拝）」は情報化社会における課題「pervasive computing」とオーバーレイする空間構想であり、浸透的空間・浸透的活動・浸透の関係というoperationから成立している。3つのoperationは、いずれも具体的なdevice（hollow/filter/workshop）によって、空間的にまたは時間的に表現される。



第1回ワークショップ（32名参加）
「こんな教会にしたいワークショップA」（1999年12月13日実施）
現在の教会のよいところって何ですか？
現在の教会のよくないところって何ですか？
教会の見た目はどうする？
教会の中はどうする？

第2回ワークショップ（21名参加）
「こんな教会にしたいワークショップB」（2000年1月23日実施）
どんな教会にしたい？開きで考える

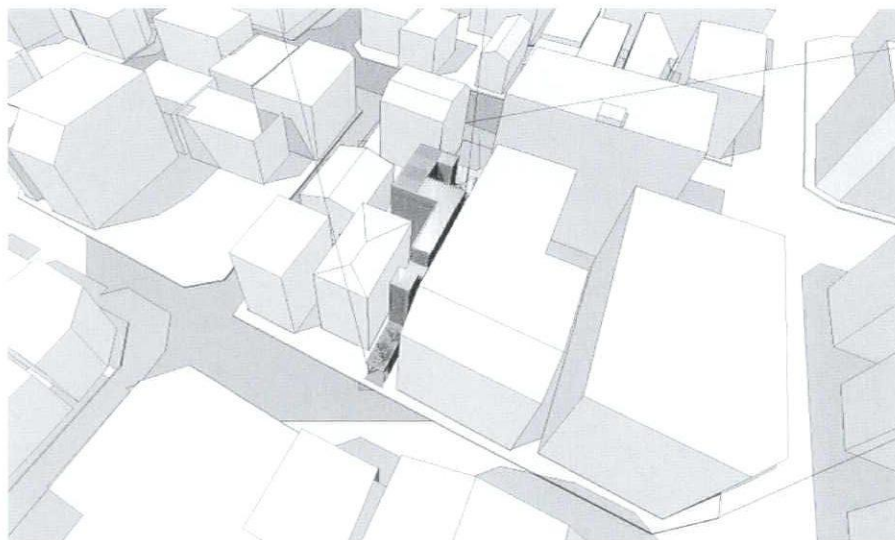
第3回ワークショップ（28名参加）
「こんな教会にしたいワークショップC」（2000年2月13日実施）
礼拝室を1階にしてみたら？
礼拝室を2階にしてみたら？
牧師用住居を別棟にしてみたら？
3階建てにしてみたら？



ライフ アンド シェルター社 / 松野 勉+相澤久美
都市生活者たちの家 a Home of/by/for City Dwellers

用途：住宅／事務所／店舗
所在地：東京都港区東麻布
主体構造：S造
主要仕上材
外壁：ラムダサイディング
内壁：グリッドコアパネル
敷地面積：89.30m²
建築面積：53.56m²
延床面積：156.46m²
工期予定：2000年9月～2001年1月

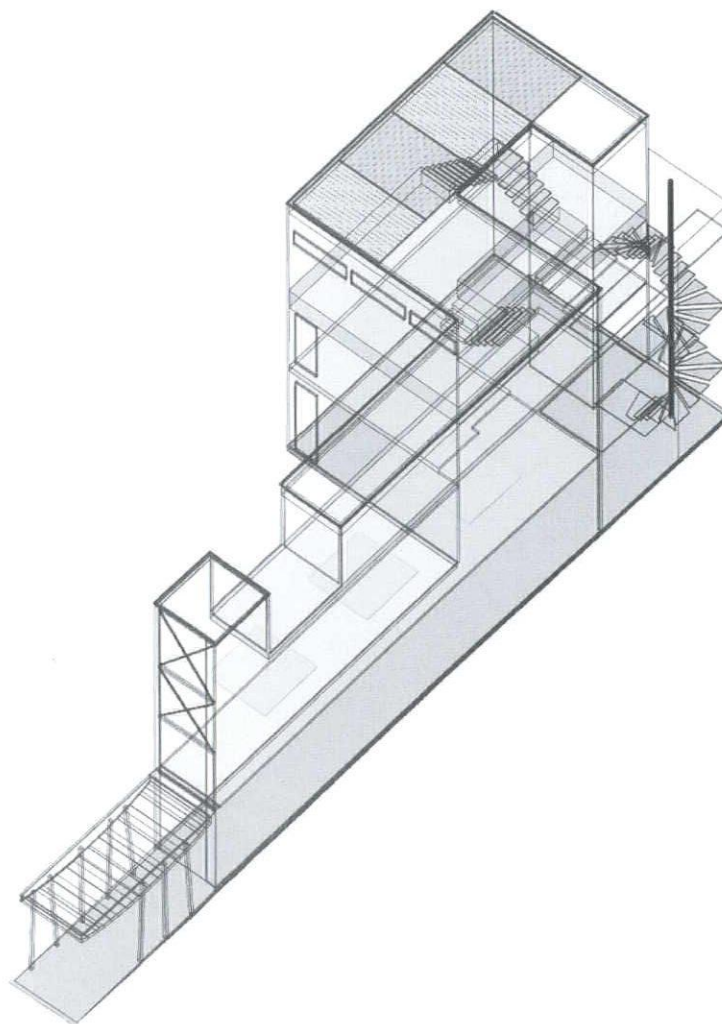
共同設計：石原英明、梅沢建築構造研究所
協力：元永二郎



鳥瞰図

松野 勉 Ben Matsuno
1969年／東京都生まれ
1994年／早稲田大学建築学科大学院修士課程修了
1994-96年／石山修武研究室
1996年／ライフ アンド シェルター社設立

相澤久美 Kumi Aizawa
1969年／東京都生まれ
1991年／ボストン大学経済学部
1991-94年／タスク研究所
1997年／ライフ アンド シェルター社共同主宰



アクトノメトリック

プライベートから開放された都市住宅は、都市を使う人々のコミュニケーションの場となる。その実験場として、この建物は設計され、運営される。

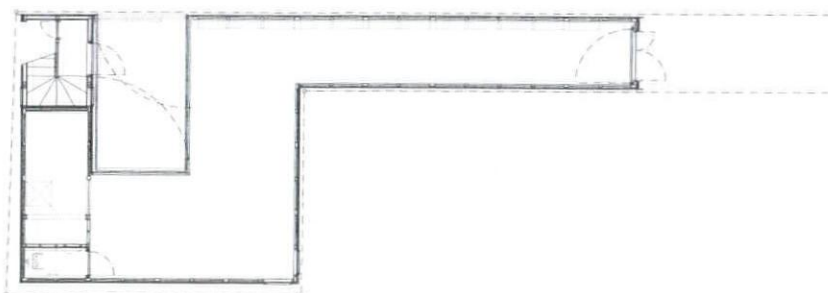
敷地は都心のやや南、東京タワーの足元に位置する狭小旗竿地。相続税の物納によって生じた、まさに都市部特有の敷地だ。このように細分化された土地を統合して大規模な集合住宅を建設すべきだという意見もあるだろう。が、私たちは、このような小さな土地のかげらに建てる小さな建築によって、都市居住の可能性を探っていきたいと考えた。

そのための方策はふたつある。第一に、戸建て住宅をプライベートに囲い込まず、都市に開いていくこと。ここでなされる活動は、カフェ、ギャラリー、ブックショップ、託児所、屋上菜園、設計事務所など、すべて小規模ではあるが、近隣の住民をはじめ、都市に住もうあらゆる人々を対象としている。小規模であるがゆえに、すべてがこの場所内で完結しない。町内会から

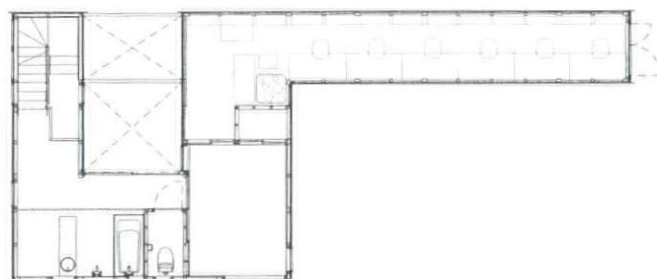
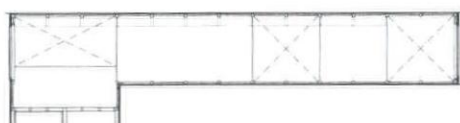
世界に散らばるアーティストまで、広く関係を構築していきたい。現段階でもアート関係者、他分野専門家の協力を得て「small talk」と呼ばれるイベント企画が進行中である。

ふたつめの方策は、空間を時間的に最大限利用することである。都市部と郊外に分離されたワークスペースと住宅はそのどちらも24時間有効利用されているとは言い難い。ここではひとつの空間とひとつの機能が密接に結ばれることを避け、複数の機能が空間を時間的にシェアするよう計画した。中庭のあり方や開口部の取り方、床レベルの設定によって空間自体が伸縮・変化できる工夫を各所に設けた。その効果は実面積に対する体感面積が飛躍的に大きいこととなって現れるだろう。

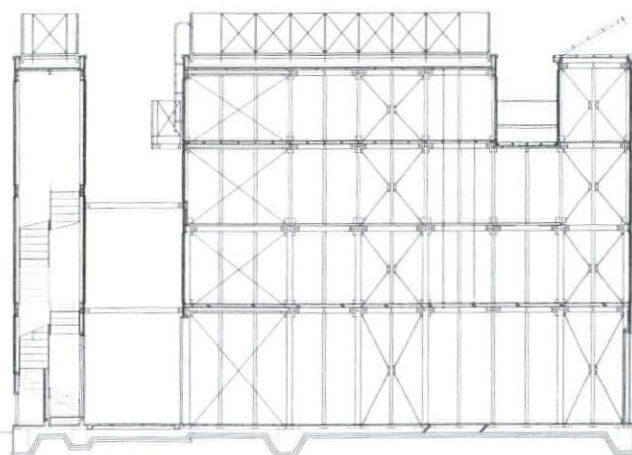
狭く密集した都心に挿入する住居を都市／他者に広く開いていくことで、さまざまな人々にとっての「HOME」となることを願う。



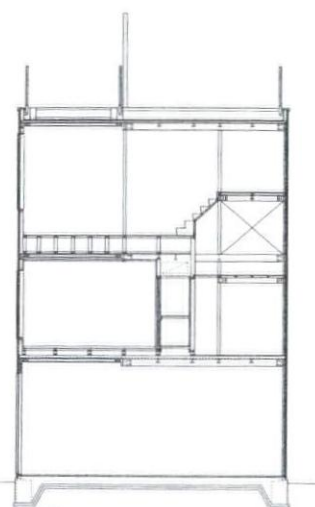
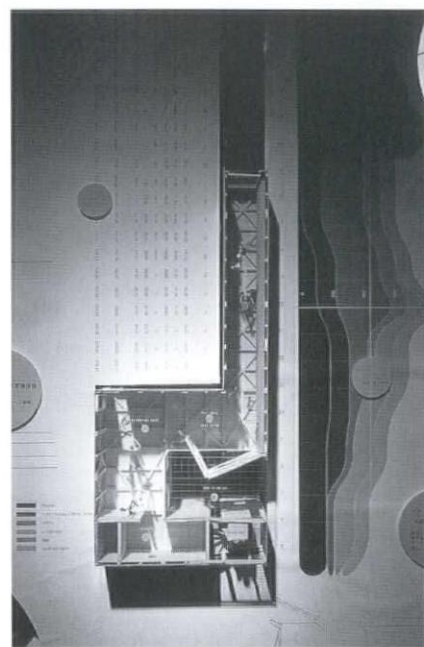
1 階平面図 S=1:200



2 階・中2 階平面図



断面図 S=1:200



断面図

芦原：これは壁面緑化というものに主眼を置いていますね。これまで、室内の間仕切り壁にまで植物がスリット状に用いられている例は見たことがなかった。それで「何か新しいものを見せてくれるのかな」という期待があった。一般的にイメージする「素敵な緑」と「実際の緑」との間にはギャップがあると感じた。自分の家が全部「アイビー」に覆われるのを素敵だとイメージする人がいる一方で、現実的にいい状態を保つためのメンテナンスには工夫が必要になる。やはり現実問題が大きいと思う。

岡部：たとえばヤコブセンは、銀行の中にガラスの壁を挿入し、そこに植物を吊すというかわいらしい提案をしている。それに対して、これはアグレッシブな形で植物が建築に入り込んでいる新たな提案だといえる。ただし、まだ今の時点では、現実的にアイビーがどう育ち、形づくられていくのか解けていないような気がする。

小川：模型などはよかったと感じたが、実際に中に入って心地よいかというと、全体が覆われすぎていて少しいつうしいのではないかと疑問がある。

芦原：非常に手慣れていて、きれいにまとまっていると思う。具体的な敷地を元に、住宅が「場」や「環境」「光」などと呼応しながら成立するというオーソドックスな解答を出している。しかし、そこに新たな解決策、方向性を感じさせてくれるところが足りなかったような気がする。ちょっと小さくまとまりすぎた感がある。

岡部：模型やドローイングを見ると、非常に抽象的できれいに仕上がっていると思う。しかし、現実の材料と照らし合わせて、実際のスケール感がでてきたとき、「光のトーチカ」というイメージが本当に湧いてくるのか難しいところではないだろうか。

横：設計主旨からは、非常に広くオープンな場所に独立して置かれ、さまざまな光を呼び込む装置としての家だと思ったが、模型を見ると、フェンスや壁と接近していて周囲の状況が把握しにくいところがある。現実にはどういう状態の光を呼び込もうとしているのか、また呼び込めるのか判断しかねるところでしょう。

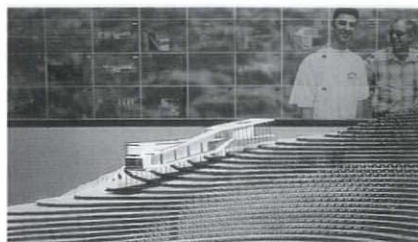
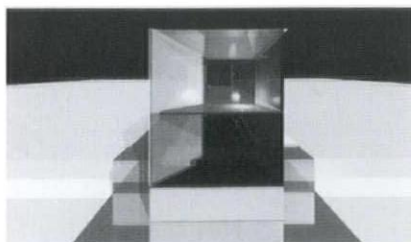
小川：確かに模型や図面は本当に美しい。しかし、周辺環境との関係や光の入り方など、実際にどうなるのか伝わりにくいところがあると思う。

芦原：斜めの床面や空間が流行のスタイルとしてもはやされているが、このロケーションの斜面に対して床が斜めに錯綜しながら、いくつかのシーンが開放的に見渡せるところが気持ちがいい。こののびのびとした感覚が魅力だと思う。建築と地形の整合性を非常によく表した模型は素晴らしかった。

小川：床を浮かしたのは地形的な制約があったからでしょう。そして屋根も有効に使われている。ダイレクトな解答が巧みなプレゼンテーションでよく表現されていると思う。

岡部：環境を配慮して地盤を痛めないように浮かしている。ランドスケープがおもしろいだけではなく、それに呼応し、素直に表現している。やはり建築のひとつの形態を主張していないところがよかったのでしょう。不思議な動きが感じられすがすがしい。

横：高床にしたというのは、外敵から守るということもあるのでしょうか。設計する場合、敷地に対してふたつのやり方があると思う。ひとつは自然に対して対極的な形態をとるもの、もうひとつはこの建築のように、ランドスケープとともに自然な展開を辿っていくもの。どこかで、メビウスの輪をつぶしたようなことを狙ったのではと思います。



横：この作品は一次審査のときよりもインフォメーションが増えて、いろいろな観点から印象的だった。現在ではコンピュータの操作によって実際のものといくらでも接近できるが、この作品には現実の迫力があつた。

造形自身が軽やかで、思い切って240mのスパンを利用しながらもそれぞれの場所が機能している。思考と現実との距離感がとても近いのだと印象に残った。

芦原：この軽やかなフレームとダイナミックなスケール感、そして地域と関係づけられた新しいプログラムは評価できる。しかし一方では、具体的なソフトについて言及されていないことに疑問を感じる。そして「防砂林」として、ガラスのドームにツタをはわせた建物がふさわしいものなのか、あるいは地域の景観にフィットするのか考えてしまった。

岡部：最初、どこにでも見られるものかと思ったが、今回のプレゼンテーションではディテールがとてもシンプルで、簡易なシステムになっていることがよくわかってよかった。しかし海岸は風が強く吹くので土台をしっかりつくっておかないといけな。また、ガラスを使うと費用がかかるということをどう解決したのだろうか。

小川：強化ガラスを使用するということなので確かにコストにひびく。しかし基礎もきちんと考えられて、随分リアリティが出てきたと思う。ガラスのメンテナンスのことと、緑を内側から見ても美しく保てる仕掛けを考えて欲しいと思う。

岡部：住宅スケールで大型ストラクチュアを実現させているが、大型でスパンが分かれていることの意味は何なのでしょう。たとえば〈イームズ自邸〉のように、単純で明快な回答があるのに、わざわざ複雑にすることの魅力は特に感じられなかった。概念的な構造システムのテーマに惹かれたが、それをどう活かしていくのか。

小川：空間構成の考え方のレベルではおもしろかったが、少し無理をしている感じがした。小さなスペースに分割されたフレームは概念としての形態操作の意味が強すぎるように感じられて、空間の心地よさが少なくなってしまうように思われた。

横：一般的に短辺方向にフレームをかける場合が多いが、こういう狭い敷地に対してこの大型の構造を使うことで、逆に空間の伸びやかさを失っているように思う。

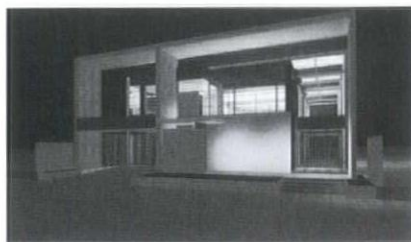
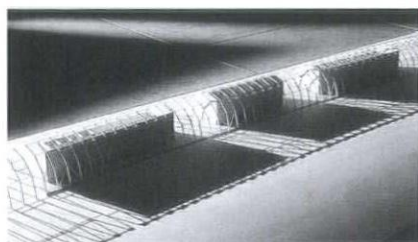
芦原：コンクリートを主体とした大きなストラクチュアと、木を主体にしたインフィル的な部分、また、残されたヴォイドの空間や緑というのをうまく混成させたいという気持ちはわかるが、実際それが現れてきていない。ここでは少し拡散しているように感じる。

芦原：最近、大資本が企画したおしゃれなビーチハウスが話題になっているが、この提案は、地域に根差して海の家を運営している人々とともに、「仮設だけでも、デザインを追求し夏を楽しくすごそう」という試みとして評価できる。僕はおおいにこういった施設ができてくるべきだと思う。ただモックアップや写真で見せてもらった実際のディテールは、イメージの実現のために、まだまだ検討の余地があると思う。

小川：ドローイングや全体の模型では、これが実際にできたら竹の素材感や柱の林立する空間などアジア的でおもしろいと思ったが、実物大のディテール模型で部材の組み方を見ると、もう少し詰めが欲しいと感じた。

岡部：僕は昔、竹を切ってジョイントにアルミのピースをはめ込みアルミフレームのように組み立てたことがある。それとこのプロジェクトを比較すると、重点であるはずのジョイントへの考察に疑問が湧いた。そして、フィールドとしての魅力、また空間としても魅力が本当にあるのかという疑問をもった。竹のおもしろさというのは、構造体として、その中心で割り、節があって、それを組み上げていくところにあると思う。光と影のうつろいは魅力かもしれないが、ただ林立する切断された竹に美しさというのは表象されるのかフツと考えた。

横：本来海の家に求められている、くつろげる環境をつくっているかということ、竹のもっている多柱空間に引かれすぎてしまい、現実にはそれほど魅力的ではないように感じる。また、ある程度の強度と長さをもった竹を手に入れることは案外難しいと思う。



芦原：この提案の言わんとすることは分かりやすい。2世帯を、つかず離れずの関係でうまく組み合わせて、空間と共に立体的に錯綜する関係を実現したということでしょう。しかし、ふたつの世帯の関係はわかるものの、残念ながらそれぞれの空間がどれだけ生活の場として魅力があるのか感じさせてくれない気がする。

岡部：この提案には複雑性が感じられる。今、芦原さんがいわれた「魅力を感じない」というのは、その空間に閉鎖性があるからでしょう。流動性があるように見えるが、具体的にプランや模型を見ていくと、人間が入っていくスペースは、かなり閉鎖的な空間に陥ってしまっているような気がする。そこが気になるのでしょう。しかし組み立て方の難しさがあるものの、実際のスケールとの闘いにもつながっていてリアリティがあり、とてもうまく解決していると思う。

小川：空間構成や形態のつくり方は、本当にうまいと思う。

小川：この作品では、開閉式のFRPハニカム建具（以下FRP建具）の扉が主題になりかけている。ビデオでも、図面でも印象的に示されている。ただ、他の部分のコンセプトが足りないような印象を受けた。特に中央部のチューブの空間自体がもっている機能や、その他を含めてみた場合の魅力があまり見えてこない。模型を見ても分かりにくい。

芦原：かなり小さなスケールまで、色々考えられており、建築家の意図がよく伝わってくる。中心の空間は閉鎖的に、外部の空間は開放的にする明快な構成である。しかし、これが地域に根づいた温泉施設になれるかどうか、少し疑問を感じる。空間形式と、地域のプログラムとして求められているものとが遊離しているような気がする。

岡部：やはり、FRP建具にエネルギーが集中している感じがする。発想としてはコアを中心にどう発展させていくかということ考えたのだろう。しかし、施設として、人が感じる楽しさというものが見えてこない。しかし、こういった施設をひとつつくって、色々実際に試してみれば何かができいく可能性が感じられる。

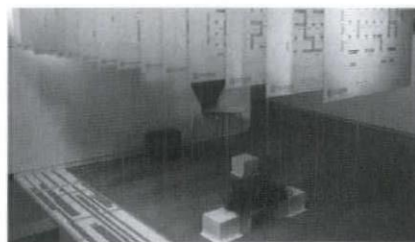
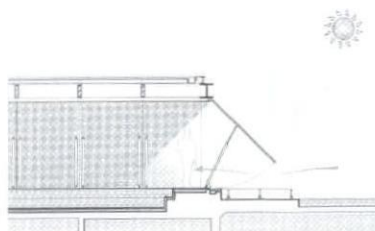
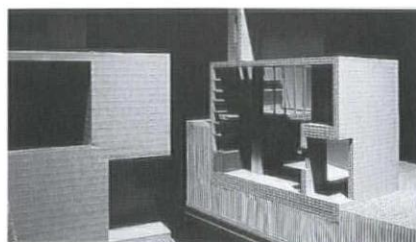
芦原：オフィスの中に、こういう自由にコントロールできる「家具」とはいえない不思議なものを挿入するということに興味をもった。しかし、このアイデアレベルだと、どれだけ素晴らしいものになりうるのか、はつきりみえてこない。

岡部：これを実現させるためには、床の配線等もリンクしていかなければならない。プレゼンテーションだけを考えるのではなく、具体例としてどうやって構築するのかといった家具のレベルでの話しを考えて欲しかった。具体的にいえば、彼らが提案したものに対して、ある種のシステムを開発すれば、どんなオフィスビルにも適応できるといえるかどうかということです。床面に配管をどう組み込むか。それが天井高2～2.40mのオフィスでどう実現できるかという現実問題に答えて欲しかった。

小川：そうですね。現実的なものが見えてこない。一次審査の可能性を二次審査で広げて欲しかった。

槇：もうちょっと大きなモックアップか何かで、ちゃんと見せて欲しかった。

岡部：そうですね。床と天井との関わりについて詰めが欲しかったですね。しかしテーマとしては、非常におもしろい。家具の建築化というのを考えて、ひとつのオフィス空間がIT化されてくるところに何を提言できるかというのを示していると思う。

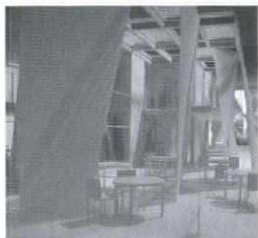


小川：図面と小さい方の模型を見たら、その構造がよくわかる。しかし、大きな模型では、梁がリアルに表現されているものの、膜の構造に関しては少し説明不足という感じがした。また、施設の性格と、こうした形態や空間との関係が適切かどうか考えてしまった。

槇：こういう精神病棟のデイケアセンターと周囲の関係ですね。しかし、このシステムそのものは、まだ他にも使えるかなり汎用性の高いものだと思う。

岡部：プレゼンテーションにあった、コンピュータグラフィックスの構造解析をしたものをそのまま模型で表現すればよかったのではないかと。ただ発想そのものは非常におもしろいと思っている。全体にループをつくっておき、周りにいくほどどんどん軽くなり、最後にプレスで立ち上がっていく。ある新しい試みがなされている。設計主旨には、「外部空間と内部空間の折り合いの中で、違う提案をしたかった」とある。それがやはり、テキスタイルを使うことや構造的なものと強く結びついている。ある種、舞台装置的な建築にみえてくるということに、ケアの部分と結びつけられる何かがあるのではないかとも思われた。

芦原：今までの「壁、天井、床」といった建築の構成要素に変わる、新しい空間をつくる膜という要素に惹かれた。そして今回のプレゼンテーションではこのデイケアセンターの実際のプランやスケール感がよくわかる。吹抜けの様子や膜の入り込みが見て取れる。ただ、狭い中に色々介入しすぎたという感も否めない。しかし、建物の構造でもなく、機能でもない新たなものが人々の心に向けてつくられていると感じられる。

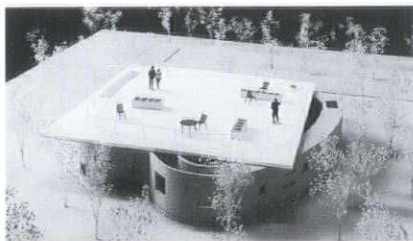


槇：現実には「生活」という視点から見ると、この形態が生まれてきた理由がよくわからない。たとえば真ん中の空間が、そこを取り囲む施設に対して等位の関係を築く手立てとして設けられたと考えられる。しかし、なぜその上に屋根をかけ、その屋根自体にかなりのアイデアを示そうとしているのだろうか。

芦原：これは現実の生活からではなく、まったく別のアプローチの結果生まれた住宅と考えられる。まず、家とは何か、住まいとは何かということを自分なりに捉え直し、生活を抽象化した。生活の機能として固定化されるものを、リニアに築いている。これは概念モデルですね。それを現実の敷地に合わせて曲げた結果があの形態になっている。そのとき、彼にとってはシステムとして空間が成立しているのだから、それを曲げてでも成立するんだという前提がある。ここまで非常に論理的に攻めたわりには、最後、ここに適応するにあたっては、論理では説明できない、恣意的な世界に入ってしまった。

小川：生活に必要な様々な道具や設備の配列を建築の平面上で意図的に変化させることで、それらの物と人間や空間との関係を再構築しようとする計画だと思っていた。しかし、配列が変わっても、それらの物の根本的な意味や役割が問い直され、解体されるところまで検討されていないように感じられた。

岡部：システムと現実の間に飛躍があるのでしょうか。こうした発想であつたら、屋根に何かアイデアやデザインセンスを入れてくれればおもしろかった。



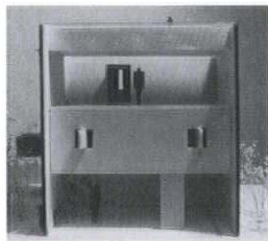
芦原：都内の狭い敷地の中で、非常に工夫に工夫を重ねている。彼の提案は、構成も思い切って削りとして、かなり個性的なものだが、よくよく見てみると使えそうな場が次々と展開している。それも表裏一体となっていて、狭い中に巧みに詰め込んでおり、なかなかおもしろい新しい空間を感じさせてくれている。

槇：模型は外側を黒にして、その黒の空間が段違いで内部に入りこんでいる。それによって、AからBへの移行や、経験をはっきりと象徴させようとしているのも巧みに表現されている。住宅において、日光が満ちている状況での白い空間というのは想像できるし、黒い空間もガラスを通して明るいと思う。そこで考えなくてはいけないのが「夜」だと思う。特に黒い空間に対する光の演出については興味がある。その演出の仕方によっては、美術館のようになってしまう可能性もある。

岡部：空間のスケールが実際のどのくらいかが気になった。非常に小さな空間ですよ。その中で別の空間を入れ子状に放りこんでいる。このスケール感覚を間違えたと時間が経つにつれてきつくなってしまう。

芦原：この敷地は、建て売り住宅がたつよりも小さなところですよ。その中で、これだけの雰囲気を出しているのはいいと思いますね。

槇：うまいですね。



芦原：今、たくさんマンションがありますが、どこも似たようなプランばかりでおもしろくない。財産としての分譲マンションではなく、ここでテーマになっている賃貸マンションの場合は「使っていくもの」。自分が必要なときに必要な場所に、必要なお金を払って住もうという考えは、都市に暮らす人々にとって、大事なこと。そこにはステレオタイプの家族が住まうわけではなく、多様な人々が暮らす。ここでは画一的なワンルームマンションではない、新しい提案がなされている。

横：現行のワンルームマンションと同じくらいの平米数ですね。

芦原：少し余裕がある程度でしょう。普通の「LDK」タイプを考えるより、こういう形態をとるのがおもしろいと思った。特に、お風呂の水まわりの真ん中に吹抜けをとって明かりを入れるという工夫もあり、収納もたくさんとってある。そういう意味では画期的だと思った。

岡部：コルビュジエのユニテの形式と、ある意味似ていると感じた。

横：ユニテの場合は2層だが、このプロポーシオンは2層ではない。しかし、1階のところでは地下に駐車場を設けたりして狭い中できれいなプランを示してある。ヴォイドスラブなどをうまく活用している。明快だと思う。

小川：スケッチなどからもリアルな感じがした。

芦原：きちんとした教会だと思うが、何かもの足りない。一次審査では町づくりという視点で選び、ワークショップに重点を置いているものだったことを覚えている。実際にワークショップはプレゼンテーションにもあるようになされているようだが、この移行なり結果が、建築の具体的なところに活かされているかが読みとりにくい。他に何も介入させない建築を目指しているように感じた。

横：プログラムの色々な要求があったから礼拝のプロパーというのがとても小さいものになっているのかと思った。もちろん、その位でいいならかまわないが、これだけ広大な敷地に対してこの小ささというのは、やはり何か制約があったのだと考えられる。

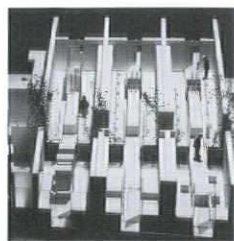
岡部：形態に硬さが感じられる。やはり、プログラムのフレキシビリティというものが生まれるような空間をつくらないと、ワークショップをうまく活用できないと思う。語られていることと、できてきたプランとの境がどうしてもあるようにみえる。

横：設計者はかなり曖昧な結界をつくりたいと考えていたと思われる。

岡部：フィンランドの教会などは、隣に幼稚園などがついていたたり、町の集会場として利用されているものもある。そういう要素が入ると具体的に建築のプランに反映しているわけだが、そういうものがこのプランでは見えてこなかった。

芦原：住宅をその街の中に開いていくということで、既存の住宅のプランニングというよりも「不思議と開かれた場所」がイメージされていることに興味をもった。5年、10年後、街や家、そこに住む人たちの関係が時間の中で熟成されながらアクティビティが生まれてくるというのはイメージとしてはいい。しかし、実際の建物を見ていくと、細い空間が積層されていて、それがどういう風に街に開かれ、使われていくのかということが、今回のプレゼンテーションからは見えてこなかった。その街で生活している人たちが、この計画によって豊かな生活をさせてもらえるのか疑問に思った。

岡部：展開がもう少しあったらよかった。この提案にはシステムがふたつ必要だったはず。ひとつは隙間のシステム。彼らはこの場所に限定してプログラムを提案しているが、もっと広げて考えてもよかったのではないかと思った。この敷地に対して提案し、それを追求したからこうなったのだろうが、実際のテーマはもう少し幅の広いテーマを追っていたら思っていた。



熊倉洋介

建築の展覧会って、不思議ですね。東京には建築専門のギャラリーがいくつもあって、結構おしゃれな場所でやっているのに、建築家と建築学科の学生しか観に行かない。そんな展覧会って、他の分野にありますか？絵や彫刻やインスタレーションにしても、恐竜やオオクワガタや寄生虫にしたって、展覧会となれば芸術家や昆虫博士しか行かないというわけではない。それが建築の展覧会となると、いかにもわたし建築の勉強してますの学生か、忙しいけど見てやるか風の設計事務所のひとがほとんどだ。

似たような光景を最近見た。10月にお台場の展示場でやってた「トラックショー」。会場にいるのが運送業界の人ばかりという感じだった。その前の、みなとみらいでやってた「舞台照明フェア」もやはりそうで、ライティングのプロの集会だった。ということは、建築の展覧会も業界向けの新作発表会と同じというわけだろうか。たしかに建築の展覧会はきれいだけど、普通の人にはちょっと難しいところがあるんですね。そもそも出す方がそういう人のことを相手にしていない。

ところが、最近の様子が変わってきたかも知れない。新宿のガス屋さんのギャラリーでやる展覧会には、建築がテーマでもシロウトのひとが結構いるし、このあいだ家具屋さんが仕掛けた「家具のような建築」というイベントは、西麻布の交差点という場所の良さもあってか、どこかのクラブかライブハウスみたいな人の集まり方だった。VJもいて隣の外壁にビデオ映したりしていた。そういうのを見ると、建築もアートやファッションみたいに開いてきたんだと思う。

一方で業界向けの発表会、もう一方ではクラブ的盛り上がり。いろいろあっていいとは思う。ではSDレビューはどっちなんだ？と問えば、それはやはり業界向けだろう。業界向けの登竜門、というのが私の周りのおおかたのSDレビューに対する印象のようだ。SDレビューの特徴である登竜門的性格は若手建築家や学生に大変にはげみになるもので、他にはない貴重

な機会を彼らに与えるものになっていると思う。ただ、初期のSDレビューが大物建築家と新人の混淆だったが故に新人にとってはそこに入る意味が大きかったと思うのだが、今年の出展者などは20代、30代の若手がほとんどで、レモンの卒制展のその後、のような感じがする。卒制展に出て、SDレビューに通り、『新建築』に載り、いつか学会賞を取るというのがこれまでの建築家の花道なんだろう。でも、そうじゃない方向を向き始めた人たちがいる。自分たちで雑誌をつくってしまったり、パーティみたいな見学会をやって人を集めたり、Tシャツ売って宣伝したりして自分たちの表現をしようとしはじめてる。彼らはオヤジ世代の評価軸をはなれ、自分たちの価値観に自信をもって建築を見つめている。クラブ的盛り上りをみせるのはそんなクリエイターたちのいる展覧会だ。

SDレビューに通ることが建築家としての華々しいデビューではなくってしまう時代がくるのかも知れない。そのとき、この展覧会の役割は終わるのだろうか？たしかに、学生だった私が会場設営のアルバイトをした15年前のSDレビューにあった、あのお祭りみたいな華やいだ雰囲気は近年の会場にはもうない。別の見方をすれば、当時の荒唐無稽にすら見える下派手な展示（ホログラフィーとか純金の模型とかあった）にくらべ、設計の内容を素直に説明しようとしているプレゼンテーションがほとんどの今の状況の方がまともといえばまともだろう。しかし、それを見る人が相変わらず建築家と建築学科の学生だけだとしたら、地味になった分、つまらなくなつたともいえる。雑誌の『SD』が休刊してしまっても、SDレビューは続けてもらいたい。続けて、いつまでもそれに通ることが新人にとって貴重な機会であってほしい。

そのためには、建築家と建築学科の学生以外にも通用する新しい評価軸が必要なのかもしれない。あと、VJも。
(くまくら・ようすけ／建築家)

SDレビュー2000経過報告

2000.05 開催告知

SD0006号から応募要項を発表。

応募要項は以下の通り

〔募集対象〕

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア。国外に建つものも含める。但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、実施の見込みがまったく無いもの、コンペの応募作品は、対象外とする。応募作品数は原則として1人1点に限る。

〔応募資格〕

特になし。

〔提出物〕

プレゼンテーション：

- 1) 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査にあたっての主要な評価対象とはされない。
- 2) プロジェクト名、建築用途、施主名（事業主体名）、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。
- 3) 400字以内の設計主旨文（省略してもよい）。

以上をA3判用紙（420×297mm）4枚以内にまとめたもの。パネル化は不可（クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します）。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2）、3）は添付書類に含めず、1）と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類：

プロジェクト名、応募者（＝設計者）名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所（以上、組織の場合はその担当者について明記）、応募者への連絡先（自宅が勤務先が明記のうえ、郵便番号、住所、電話、FAX番号）、共同設計者名、設計者略歴（入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします）。

以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

2000.06.30 作品受付締切

応募総数315点（昨年306点）

2000.07.10 一次審査

鹿島出版会会講室にて、5人の審査員によって入選15点が選ばれる。

2000.07.11 展覧会出展依頼

各入選者に入選通知と出展依頼をする。出展依頼は以下の通り。

・模型

1つでも、分割されていてもよいが、全体で以下の制限以内とする。

大きさ：幅×奥行×高さ＝5m以内

重さ：10kg以内

素材：自由

・ドローイング

枚数：自由。但し、合計の面積が2m²以内。

素材：自由（こわれにくく、なるべく軽量なもの）

・図面

作品の内容を具体的に説明するために必要な、平面図、立面図、断面図、詳細図等。

大きさ：A3判

枚数：6枚以内

2000.09.18.19 東京展搬入

代官山のヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム（ギャラリー2、3、4、フォーラム）にて会場を設営。東京都立大学の学生と出展者による作品の搬入と展示の準備が進む。

2000.09.20 東京展開催（～10.01）

会場：ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム
東京都渋谷区猿楽町18-8

2000.09.20 審査員座談会

会場での作品展覧後、審査員の座談会を行う。座談会では各出展作品の講評と共に例年の鹿島賞、朝食賞、SD賞、新人賞の他に、今年は特別に横賞が加わり各賞が選出された。5賞の入選者は以下の通り。

鹿島賞：齋藤誠十石田建太郎アレックス・エレンバガー／LOCUS+ architects [house PTT]

朝食賞：山岡嘉彌 [linea]

SD賞：安田光男 [Reversible House]

新人賞：三分一博志十坂野博行 [running green project]

横賞：藤本杜介 [M Hospital Day-care House]

2000.09.20 展覧会オープニングパーティ

午後6時30分より審査員、出展者を交えてパーティが行われた。席上で、SDレビューが来年も継続して開催されることを発表した。

2000.10.01 東京展終了

来場者数1,655人を記録（一日平均138人）

2000.10.03、04 大阪展搬入

大阪芸術大学の学生と出展者により搬入と展示が行われる。

2000.10.05 大阪展開催（～10.15）

大阪芸術大学主催により、大阪展が開催される。
会場：大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール
大阪府南河内郡河内町東山

2000.10.07 大阪展レセプションパーティ

入選者をはじめ大阪展関係者、在阪建築家が出席し、盛況の内に終了。

2000.10.15 大阪展終了

来場者数1,399人を記録（一日平均127人）

2000.11.25 SD12月号刊行

〔主催〕

鹿島出版会SD編集部

〔大阪展共催〕

大阪芸術大学

〔後援〕

朝食不動産株式会社

〔協賛〕

ノール インターナショナルジャパン

〔審査員〕

横 文彦（建築家）

岡部憲明（建築家、神戸芸術工科大学教授）

芦原太郎（建築家）

小川晋一（建築家、近畿大学工学部助教授）

鹿島昭一（鹿島建設 取締役相談役）

〔ポスター作成〕

山口信博／山口デザイン事務所

〔東京展会場構成〕

元倉真琴＋スタジオ建築計画（担当：関谷小百合）

〔東京展照明計画〕

角越政英 光環境計画

〔大阪展会場構成〕

大阪芸術大学建築学科

〔作品写真撮影〕

堀内広治

金子昌弘

（新写真工房）

本特集で出展者、編集部提供以外の写真はすべて堀内広治氏撮影

〔東京展〕

会期：2000年9月20日（水）～10月1日（日）
12:00～19:00

会場：東京都渋谷区猿楽町18-8
ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム

〔大阪展〕

会期：2000年10月5日（木）～10月15日（日）
10:00～17:30

会場：大阪府南河内郡河内町東山
大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール



一次審査会



大阪展会場風景

コミュニケーション・ ワークスペース

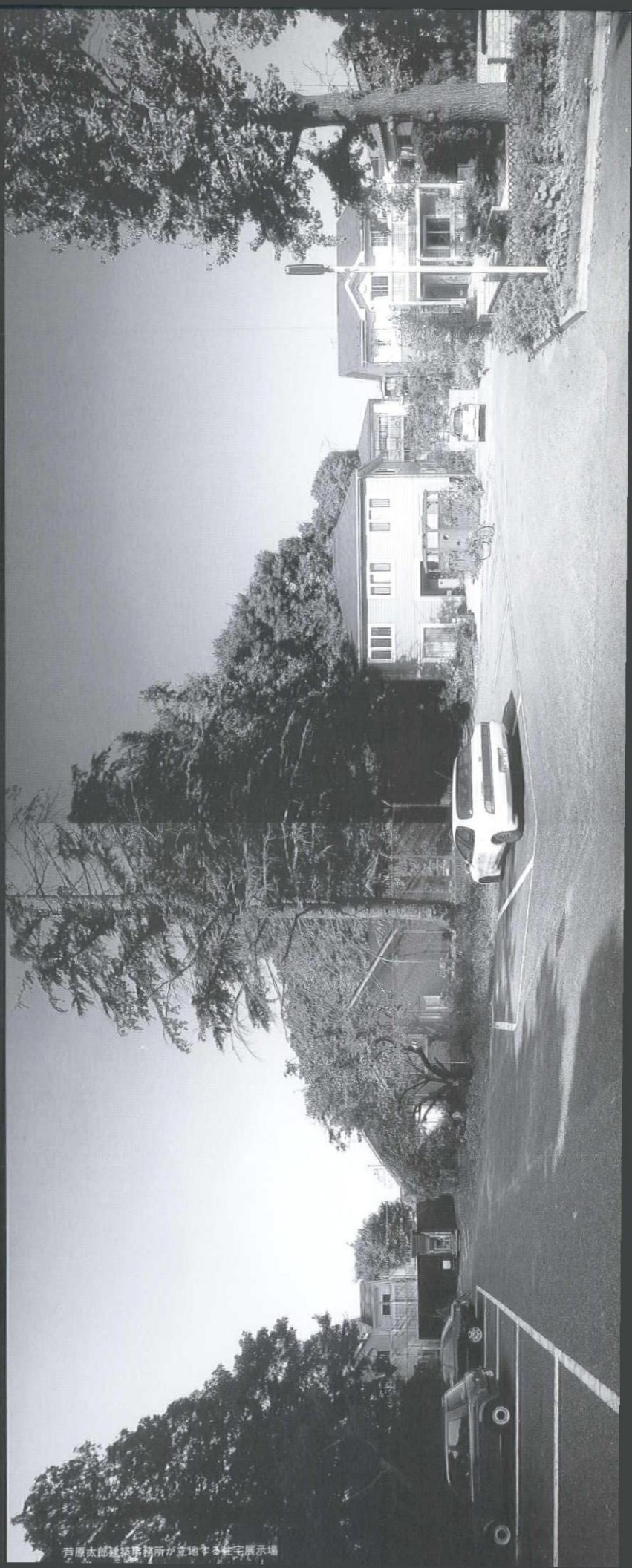
芦原太郎建築事務所リノベーション

Communication Workspace:
Taro Ashihara Architects Renovation

ハードな建築設計にとどまらず、社会との「関係」そのものを
をクリエイトしながら環境をつくってゆこうとするオフィス
がある。彼らが自らのアクティビティの場として選択した環
境は、リノベーション空間であった。

写真＝新 良太

Photographs: Ryota Atarashi



芦原太郎建築事務所が立地する住宅展示場

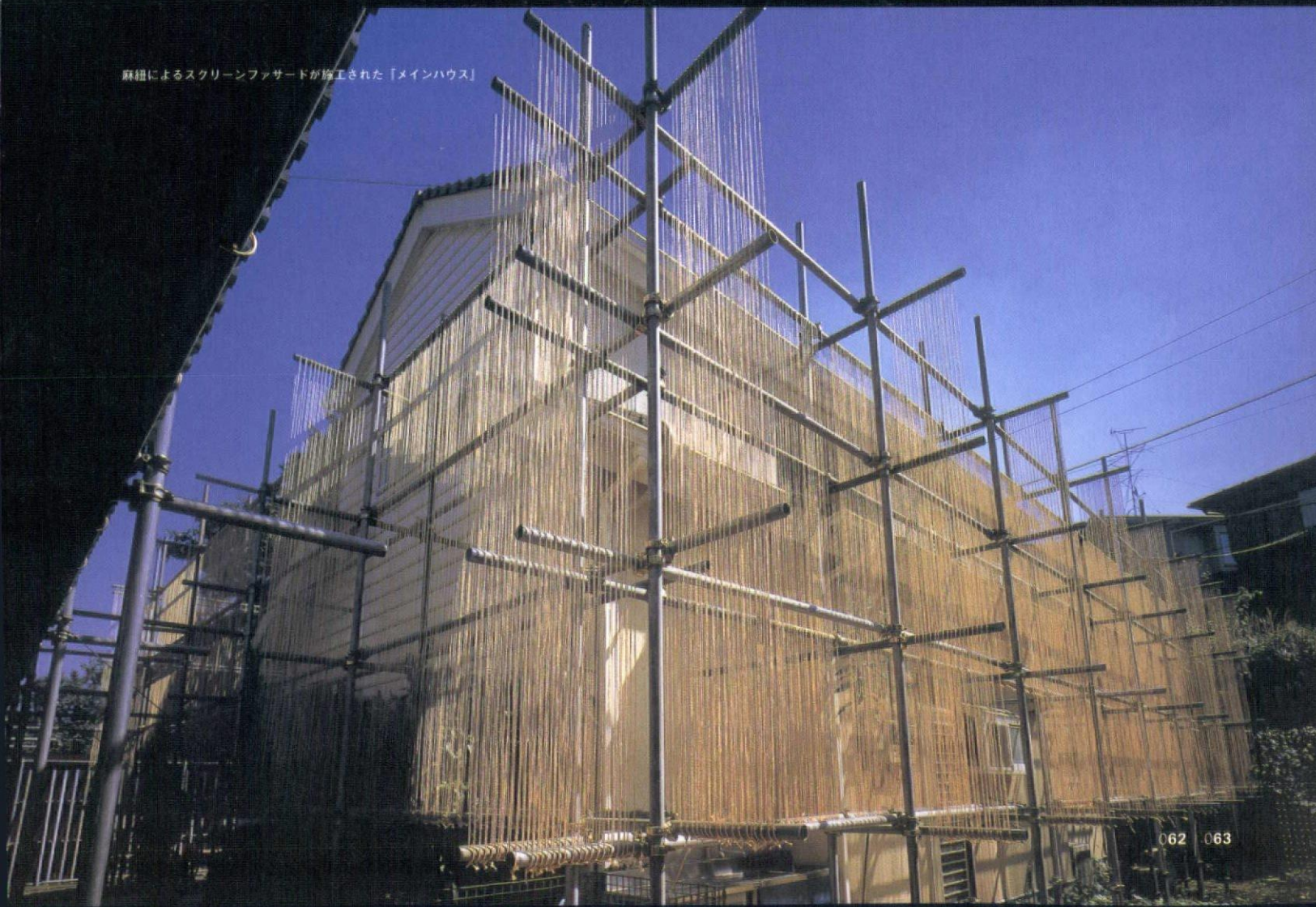


TA

夜間、敷地内を照らす行灯となる「ワークショップスペース」



麻紐によるスクリーンファサードが施工された「メインハウス」



ワークスペースの進化 Workspace Evolution

外部とのコミュニケーションの取り方——社会との関係・環境が変化するとき、自らのワークスペースを適応させる建築設計事務所。その活動拠点の変遷。

1.

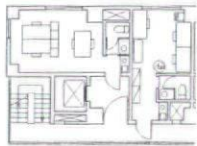
南平台ビル期——1985～87年 ワンルーム・テナントオフィス

設計事務所組織の誕生。

所員数：2～5／面積：40m²

ツール・スペック：

電話機：1、FAX機：1、黒焼機：1



S=1:400

2.

ブリックス期——1988～91年 ペンシルビルのテナントオフィス

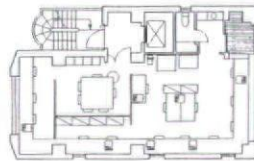
スタッフが増加。一通りのツールがそろい、インテリア環境も整備され、事務所としての体裁が整えられる。

所員数：5～13／コラボレーター：1

面積：75m²

ツール・スペック：

電話機：7、FAX機：1、青焼機：1、コピー機：1



S=1:400

3.

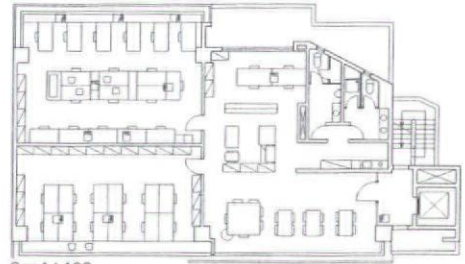
杉ビル期——1992～97年 人気スポットのファッションビル・テナントオフィス

コラボレーター（建築設計事務所）とのシェアで成立するコラボレーション・オフィス。外部の事務所とのネットワークを構築した。

所員数：13～18／コラボレーター：4／面積：255m²

ツール・スペック：

電話機：11、FAX機：1、パソコン：6、青焼機：1、コピー機：1、モノクロレーザープリンター：1、カラーインクジェットプリンター：1、モノクロプロッター：1



S=1:400

設計業務のボリューム

個人オーナー

会社オーナー

ディベロッパー

公共

ワークスペースの変遷

■海外協力事務所が日本法人を設立

Denton Corker Marshall Japan

■コラボレーションオフィス・スタイルが始まる

加藤隆久都市・建築事務所

(株)アシハラインターナショナルアーキテツツ

ネットワーク構築の変遷とコラボレーター

■海外事務所との協力

Denton Corker Marshall Pty. Ltd. (在日オーストラリア大使館)

■設計業務におけるコラボレーション

(株)ワークショップ (白石市立白石第二小学校)

丹羽建築設計事務所 (水島サロン)

NOBUTAKA ASHIHARA ASSOCIATES

アーキテツツ・コラボレーティブ設計室 (公立刈田総合病院)

(堀池秀人・都市建築研究所 / architecture WORKSHOP)

■さらなるインターナショナルネットワークの構築

(株)アシハラインターナショナルの設立

芦原太郎建築事務所秘書業務・事務経理業務代行

設計業務外での試み

■街づくりや公共建築づくり

宮城県白石市において「白石まちづくりデザイン会議」としてまちの調査をし報告書をまとめる。住民参加型ワークショップ手法の導入。新潟県村上市のまちづくりアドバイザーとなる

4.

インフォスタワー期——1997～99年

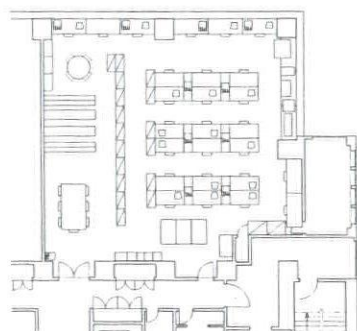
超高層インテリジェントビル・テナントオフィス

ビジネス・オリエンテッドな効率化をはかったワークスタイルを堅持できる環境。

所員数：14～19／コラボレーター：4／面積：180m²

ツール・スペック：

電話機：14、FAX機：1、パソコン：16、青焼機：1、コピー機：1、モノクロレーザープリンター：1、カラーインクジェットプリンター：1、モノクロプロッター：1



S=1:400

5.

上原期——2000～2001年

庭付きモデルルームのセルフリノベーション

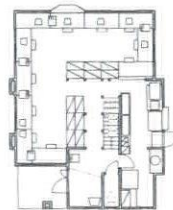
異業種との繋がり、近隣との繋がりをつくめた事務所の社会的コネクションが拡張し、一方でメンバー個人の事務所内での主体化がはかれる。そのため、継続的な環境の変更が可能になるセルフリノベーションが実施される。

所員数：19～20／コラボレーター：2／面積：230m²

ツール・スペック：

電話機：14、FAX機：1、パソコン：20、青焼機：1、コピー機：1、モノクロレーザープリンター：1、カラーレーザープリンター：1、モノクロプロッター：2、カラープロッター：1

前期



1F S=1:400



2F S=1:400

芦原建築設計研究所分室

アーキテクト・コレボレーティブ設計室〈公立刈田総合病院〉

K・Sアーキテクト（K-house）

→ ■事務所組織改革

・アトリエWAT'S／落合設計アソシエイツ／スタジオ・ノア

■INTERIOR SECTIONの構築

→ ■所内独立者との協力体制も出てくる

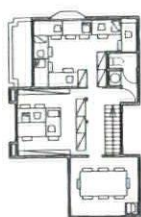
ビジネスマネージメントソフト構築

データベース構築

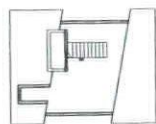
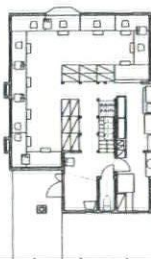
■次世代ライフスタイルづくりワークショップ（他業種合同協力型ワークショップの実施）

■所内研修ワークショップ（リノベーションワークショップ／レゴワークショップ）

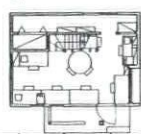
後期



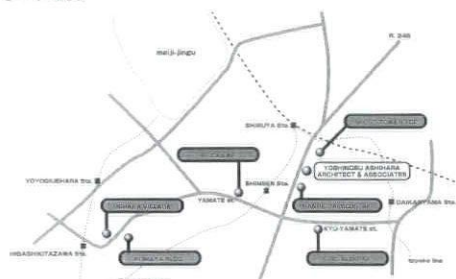
2F



2F



1F S=1:400



ワークスペースのロケーション

6.

駒場期——2001年～

テナント・オフィスビル1棟丸借り

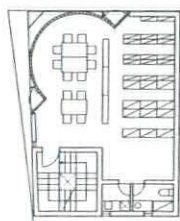
社会に開くフロア、他社とコラボレーションするフロア、自社の活動を実施するフロアと、フロアごとに分割することで、事務所のアクティビティの統合をはかる。

所員数：16～

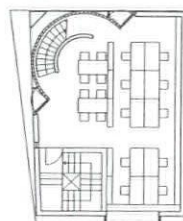
面積：400m²

ツール・スペック：

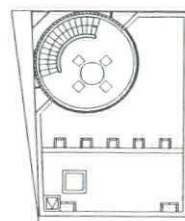
電話機：14、FAX機：1、パソコン：20、青焼機：1、コピー機：1、モノクロレーザープリンター：1、カラーレーザープリンター：1、モノクロプロッター：2、カラープロッター：1



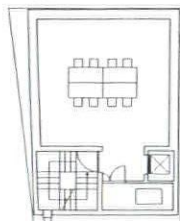
3F



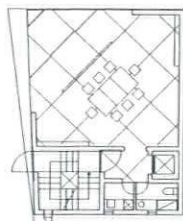
4F



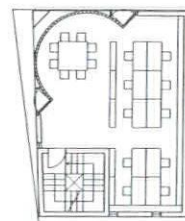
5F



B1F S=1:400



1F



2F



【遊歩道】の一部（制作：千葉大学生）。近隣にある竹屋の廃材、敷地内の銀杏の枝、煉瓦などを利用し、既存の場所を遊歩道化した。



コミュニケーション・ワークスペース ソーシャルリレーションを拡張する建築リノベーション

上原モデルルームリノベーション

Communication Workspace: Social-relation Expanding Architectural Renovation

Uehara Sample Room Renovation

外部とのコミュニケーションが個人単位で拡張し、職能が多重化するとき、仕様を随時変更できるセルフ・リノベーションが適応される。
ここでは住宅モデルルーム会場がリノベーション対象として選択された。

代々木上原と東北沢の中間にある1500坪の敷地は、都心とは思えぬ緑豊かな森となっている。私たちがこの森を初めて訪れたとき、身の丈程に立ち枯れた雑草の向こうに、うち捨てられた古いモデルハウス群がひっそりと建ち並んでいた。

このモデルハウス群をワークプレイスとして再生するにあたり、私たちはまず、『メインハウス』の改修を試みた。住宅における衣食住の機能を取り除くために、調理台やユニットバス、部屋のドアや収納、間仕切壁を撤去し、執務スペースとした。天井も全面的に撤去し、野縁は模型や大きな図面を収納するスペースとして残した。設備廻りはトイレと洗面を除くすべてを撤去、オフィス機能として必要最小限の空調機と照明を新たに設置した。こうして住宅の抜け殻がオフィスのシェルに生まれ変わったところで、スタッフ自らが壁を白く塗装したり黒い和紙を貼るなどして工夫をこらした。改修された『メインハウス』は、作業デスクやサーバー、出力機器などが置かれ、事務所の中核機能を担っている。

外部については、一本の『回廊』を通すことにした。長さ46mのこの動線は、孤立した3つの

ハウスをつなぐ軸として機能する。『回廊』の両端にはゲートを設け、設計事務所の範囲を示しながらも、一方を正面駐車場に、もう一方を近隣の住宅街や予備校・幼稚園といった地域的な場所に開かれることを望んだ。

これらの工作物は、将来の解体・再利用を考慮して使い古しの単管を地盤に差し込むだけの「基礎無し柱」構造とし、キーストンプレーットの屋根と乳白色ポリカ波板の壁をフック留めした。壁は透光不透視で、明るさを損なわず双方のプライバシーを確保する。床は枕木廃材を敷き並べた。両端のゲート部はスチール板を掛け、赤錆で風合いが出るに任せた。『回廊』は休憩や小打合せにも利用されている。

中央の『ワークショップスペース』は、もともとモデルルームの基礎だけが残されたところに木造の架構を施してつくられた。床は中古枕木の半割、屋根は母屋桁に折板、壁は乳白ポリカ波板を使用。建具はツインポリカをフラップ状に吊った。夜間は敷地内を照らす行灯となる。

『母屋』と『ワークショップスペース』の間には『テラス』が設けられた。当初より敷地内に放

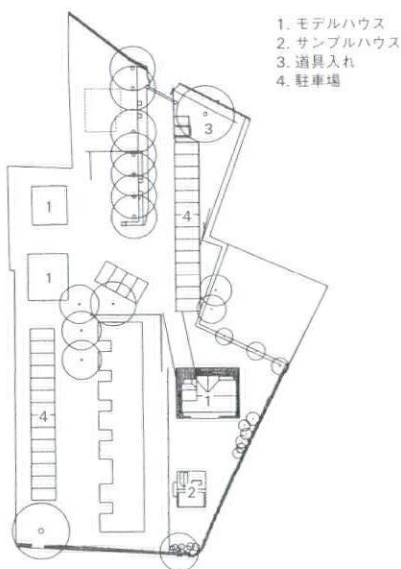
置されていたレンガにて舗装、片隅には中古の流し台を設置。リノベーション作業やバーベキューパーティに活用されている。

敷地内にはS社の現役モデルハウス群と社宅が同居しており、その周囲にもいくらかの手を施した。

敷地全体の門は車の出入が容易なように門を拡張し、地域のゴミ置場を併設。門の脇にあった事業系ゴミ置小屋は敷地の奥に移設、小屋のあった場所には大島桜の木陰にベンチが設置された。駐車場沿いに高木を追植し、隣地擁壁の威圧感を軽減した。さらに社宅とモデルハウス群との間にフェンスを設置、生活空間と勤務空間の摩擦を抑えた。

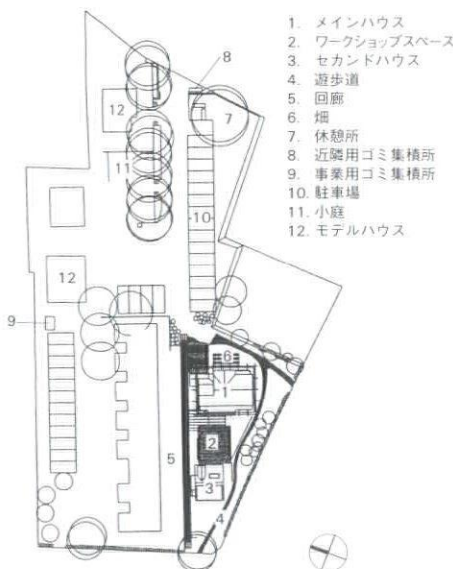
未完の目標をもって進められたこれらのリノベーション計画は、その後『メインハウス』のスクリーンファサードを単管組にて施工するなど、少しずつ変化しながら、今も進行している。(渡辺誠/STUDIO NOA、大竹正裕/芦原太郎建築事務所)

Before Renovation



配置図 S=1:800

After Renovation



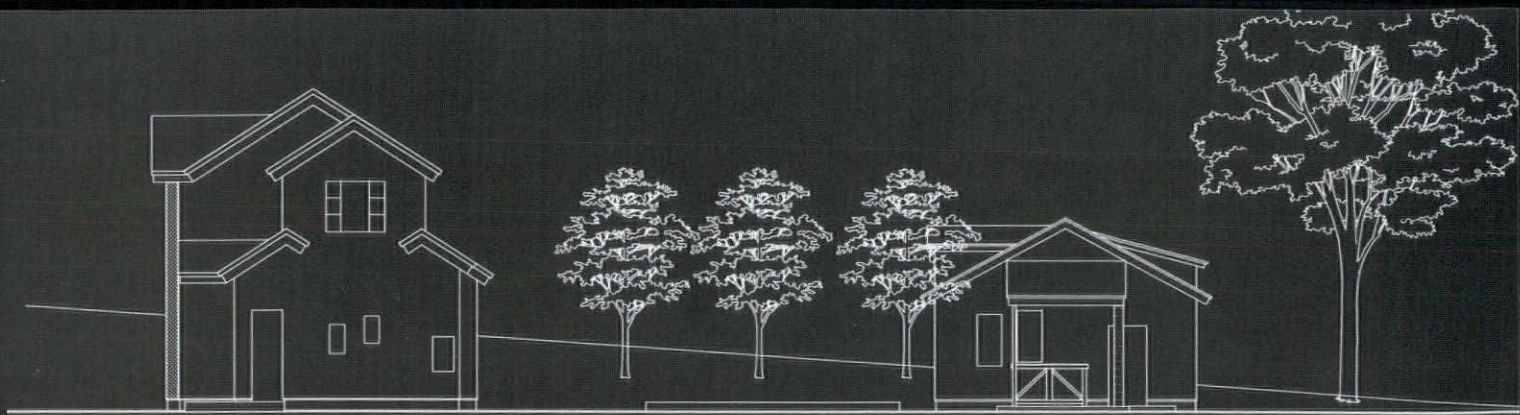
配置図 S=1:800

トンネルのワークショップ

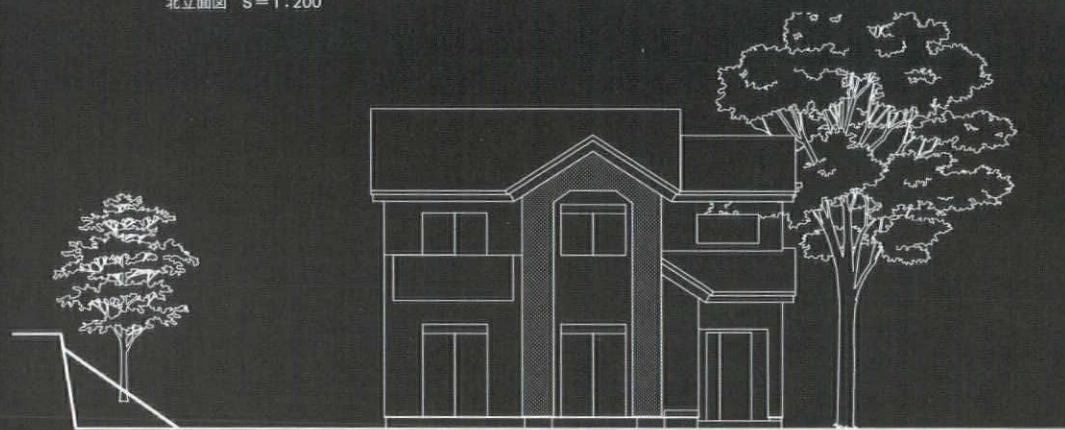
敷地の東側入口と西側入口を直線で繋ぐ『回廊』の他に、南側の敷地を通過して東西を繋ぐ経路をつくることを目的として、学生主催のワークショップが開かれた。社会や地域、環境に開かれたオフィスのあり方を模索し、近隣住民、特に隣の幼稚園の子供たちが、自由に事務所敷地内に立ち入り近道できる道をトンネルで実現しようとした。

何回かにわたるワークショップと実験の結果、『トンネル』から『遊歩道』に変更。同じ参加者の手で施工された。素材は敷地内の間伐材を利用。現在では実際に近隣住民が近道として使用している。





北立面図 S=1:200



東立面図 S=1:200

電気容量 50A

撤去したもの

MAIN HOUSE

床・壁・天井・ユニットバス・収納・

クローゼット・換・建具・手摺り・照明・柱・

キッチン・下駄箱

SECONDE HOUSE

床・壁・トイレ・ユニットバス・玄関・窓枠

Before



2000.1.4

3.13

3.15

3.17

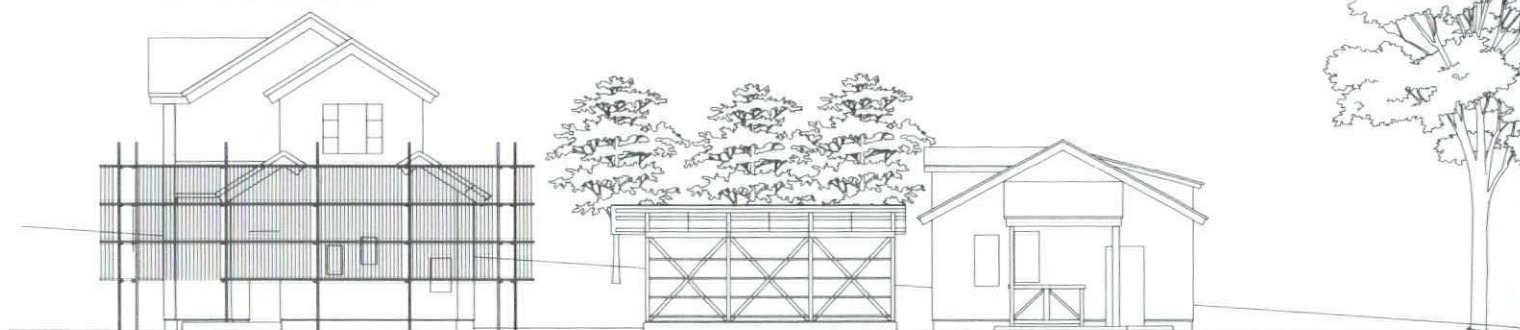
3.21

4.11

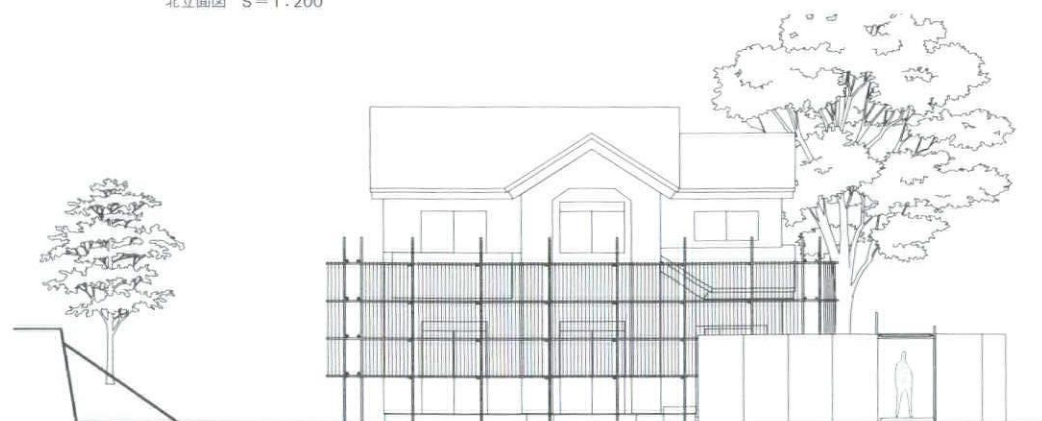
5.16

10.31

After



北立面図 S=1:200



東立面図 S=1:200

電気容量 125A

新設／増設したもの

MAIN HOUSE

エアコン・LAN・電話回線・蛍光灯・

玄関扉化粧・玄関ポーチ拡張・水道

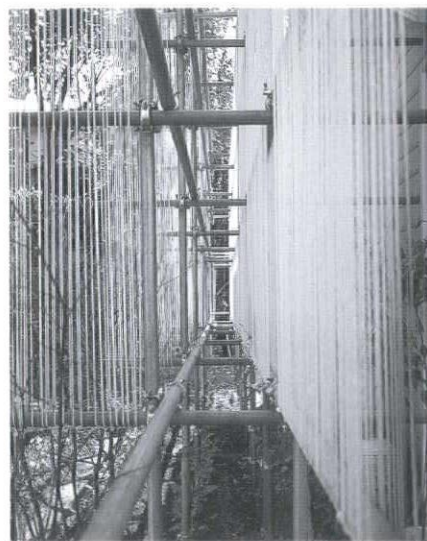
SECONDE HOUSE

エアコン・LAN・電話回線・蛍光灯・

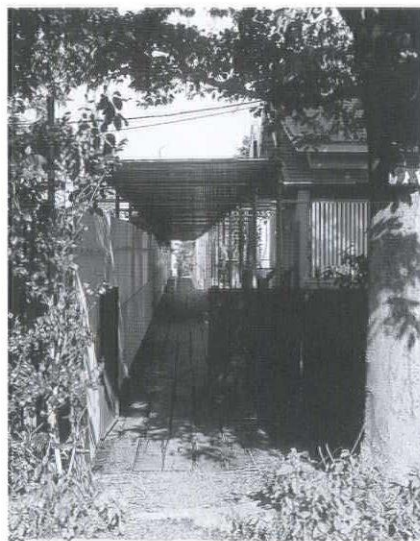
セラミックルーバー



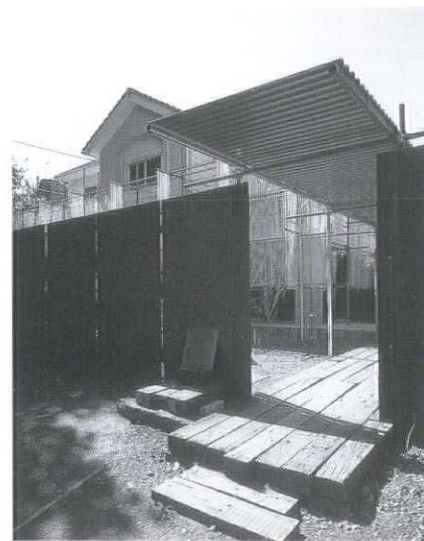
ワークショップスペース：就業時はミーティングに、休日や終業時はワークショップやイベントに利用されている。ワークショップスペースは上原期から設けられたが、今後駒場に移転してもワークショップやイベント、展示空間などといったことがオフィス内で展開される。いわば、芦原太郎建築事務所のコンテンポラリーな「オフィスタイル」の代表となる場である



正面ファサードのスクリーン：メインハウスの外観を覆う二重フレームの足場（二期工事）に張られた麻紐のスクリーン。秋の文化週間にあわせて、事務所スタッフとプロジェクト・ボランティアによるセルフビルドで施工された



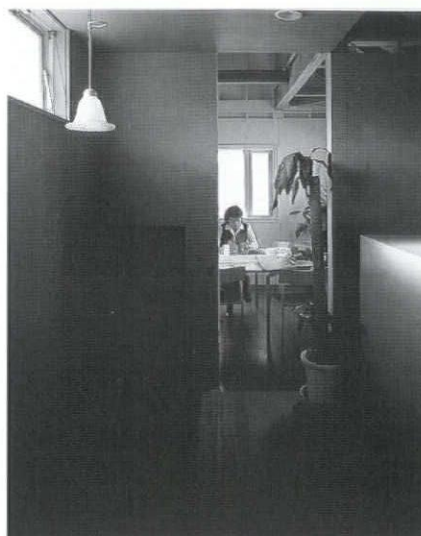
西側入口。住宅街や予備校、幼稚園といった近隣に開かれる



東側入口。駐車場側に面しながら、設計事務所としての顔をもつ



ミーティングスペース：かつてディレクターズルームだったこの場所は、建物内でも特別な位置づけをするため印象の強い白で塗装された。社外の人々による最初の作業で、この室をかわきりに着々と他のスペースの改造も始まった。仕上がりがいざだったため、塗装後ミーティングスペース化され、行き当たりばったりリノベーションプロジェクトが始まった（担当：香雪）



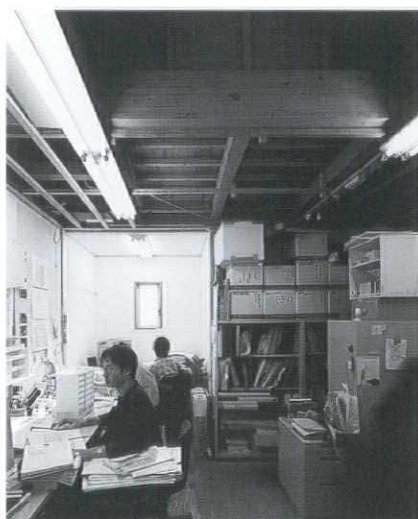
ミーティングスペースでの打合せ風景



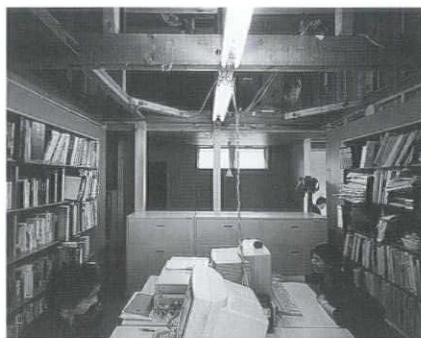
セカンドハウス：ネットワーク事務所等のワークスペース。無数の建具やユニットバスなどのサンプルが設置されていたサンプルルームであったこの場所は、壁・天井・床すべてを撤去し、ワンフロア化した。壊した壁に設置されていた電源スイッチなどを移設。LANケーブルや電話のケーブルをメインハウスから延長（担当：セカンドハウスリノベーションチーム）



ワークスペース1：計9名のスタッフが作業している。既存の床・壁・天井・畳・収納・襖などを取り外し、ほぼワンフロア化した。通路との間仕切りは、建築資料やカタログ・サンプルの棚でおこなった。このスペースは、壁がコンパネや断熱材が一部露出しているところに黒の和紙を貼った（担当：1階リノベーションチーム）

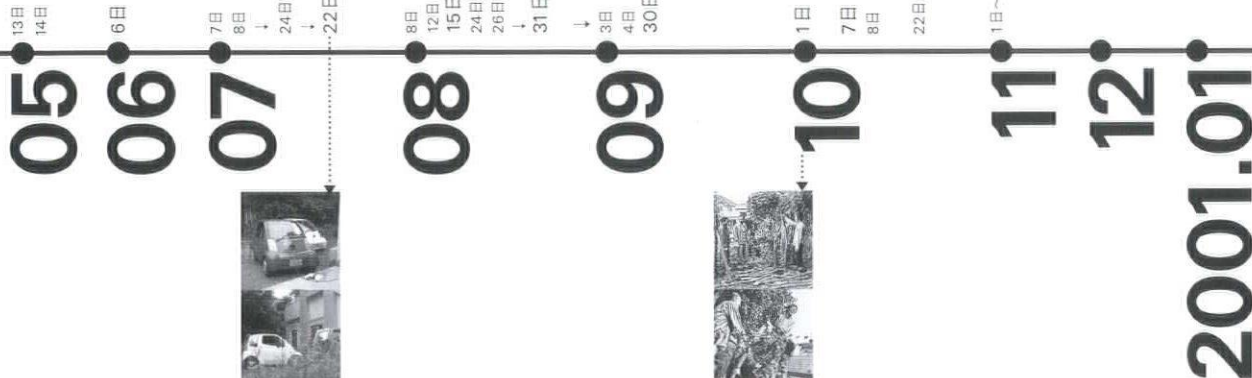


ワークスペース2：2階にあるワークスペースである。現在は、主に住宅系のプロジェクトの担当者が作業している。壁面や照明などを大きくは変更せず、シンプルにカーテンを取り付け、清潔感のある空間となっている（担当：2階リノベーションチーム）



ディレクターズルーム：戸原太郎・弘子および（株）アシハラ・インターナショナル・アーキテクツの執務室。かつて、ミーティングスペースだったこの場所は、階段から上がってすぐの場所に位置するため、人の視線および配置されている家具の色を考慮し、落ち着いた色で壁面が塗装された。住宅をオフィス化したときに露出することになったLANケーブルや電話の線は1本のラインにまとめ天井から下ろされる。未だ施工中。今後は屋根裏部屋と間通しているため、あかりなども設置されてゆく（担当：香雪）

所長室がミーティングルームになり、屋内ミーティングスペースを改修し、所長室になる



「空間」記録プロジェクト

刻々と移り変わる上原の日常を、スタッフ各々がボラロイドカメラによって切り取る。

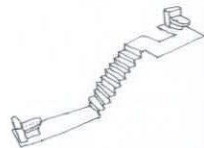
普段認識されることのない自分の「空間」は、他者の日常の中へと取り込まれる。(谷口麻里子)



トイレリンク・プロジェクト

1階の男子トイレと2階の女子トイレの動線を繋ぐことで建物内のトイレの存在を際立たせるプロジェクト。

同一素材(サンドペーパー)を床に使用した。モデルルームがワークスペース化しても変わらぬ存在、それはトイレである。(岡田雅人)



ドローイング・ドア・プロジェクト

ある扉を黒板塗料で塗装し、その扉を開ける／前を通り過ぎる人が自由に書き込みのできるプロジェクト。訪れた人々の記憶を残す。そんな家具があってもいい。(香雪)



畑プロジェクト

地域や社会に開かれることを前提とした今回のリノベーションの中で、この「畑」プロジェクトは、自然や環境に開かれたリノベーションという位置づけとなる。自然や環境、つまり季節を堪能することを目指し、「食」と「遊」をテーマとした。

具体的なこととしては、自らの手で野菜をこの場所で育て、食する。計画時から東京農業大学の学生たちと園田造園設計事務所代表の園田氏が参加し、青空の下、農作業をしたいという有志のメンバーの手により率先的に行われた。

かつての農法や、この土地の土の質などによって育った野菜を11月の収穫祭で堪能するため、現在企画中。



次なる時代へ向けての実験 The Experiment for Next Generation

芦原太郎

Taro Ashihara

今、まさに時代が変わろうとしている。

20世紀のおわりに、総括してみれば次なる時代の糸口をつかめるかもしれない。

20世紀は近代化の名のもとに豊かさを求めた進歩の時代だったと言える。都市化が急速に進み、機能、効率を重視した建物が数多く生みだれてきた。忙しく働き続ける現代の人々は本当に豊かさを手に入れたのだろうか。生活者が主体的に生きられる真に豊かなライフスタイルを創造することが今日的な課題である。また、この近代化は、環境破壊につながり、地球は悲鳴を上げている。次世代に引き継いでいけるサステナブルな環境づくりに建築も貢献する必要がある。建築家の職能も、こうした要請に答えて、変化し拡張されてくるはずだ。

建築は、権力や経済といった社会制度の中でつくられ、できあがった建築は宿命的に制度として空間を規定するものである。社会の近代化の中で生み出されてきた機能空間の中で、個人と空間との「主体的」な関わりが希薄になってきている。空間の制度に縛られた生活者の主体性を回復することに貢献できるような建築の姿を探索したいと思っている。また、建築家として、より開かれた建築と地域の関係や、地球環境との関係を調停していくことを目指したい。

私達のオフィスも、その時々々の要請に答えるべく、かなりフレキシブルに変化を続け、引っ越しも繰り返してきた。

以前の事務所は、渋谷駅近くに新しくできた超高層テナントオフィスの10階にあり、まさに近代がつくりだしたビルディングタイプの典型的なものであった。しかし、引っ越した新事務所は、それとは対照的に代々木上原の住宅地に位置し、木造1戸建てである。ハウスメーカーのモデルハウスであったが、1500坪の環境が大変気に入った。さいわい、現状回復の必要が無いので、全面的にリノベーションを行い、次なる時代へ向けた新しいワークスペースづくりの実験をしてみようと考えた。

既存のふたつの建物のリノベーションは、壁や天井、キッチンやバスといった住宅のための設備や仕上げを撤去して、プラスではなく、マイナスのデザインによって、素形の空間をワークスペースとすることから始めた。次に2棟の間に打ち合わせスペースを建設して、3棟を外廊下でつなぐこととなった。現在は、個々のワークスペースや、テラスや遊歩道、畑などの外部空間の整備が続けられている。リノベーションは、次のようなルールで実行に移した。

1. 最終ゴールを設定せず、フィードバックを繰り返しながら、絶えずリノベーションを継続させる。

2. ボランティアを原則とし、やりたい人がやりたいことを自分たちで考え、できるだけ自分たちで施工する。

3. 敷地内あるいは、地元にある物を工夫して利用し、できるだけ外部から持ち込む物を少なくする。やむを得ない場合は中古品やリサイクル可能なものにすることも心がける。

大きな樹木に囲まれたこの環境は、快適である。

夏は暑さや蚊と戦い、冬は足元が冷えてくるとはいうものの、完全空調で、温湿度が調整されている以前のオフィスよりも豊かな気持ちになれる。

広い屋外スペースは、オフィスビルのリフレッシュコーナーとは比べものにならず、自然と共にあるやすらぎを感じられる。たとえ不都合があっても、ビルの管理事務所に文句を言うのではなく、自分でなんとか工夫をしたり、より快適な場を求めて自分が移動することができる。管理されていることから開放されて、ワークスペースに自己の主体性が戻ってきたように感じられる。

リノベーション作業は、所員のみならず学生や外部からのボランティアの方々も参加している。ワークショップを行い、自分たちで考えたことを自ら実行に移し、その結果をフィードバックして次につなげる。自らつくることによって、日常設計活動でかく忘れがちなものづくりの原点をみんなでも体験している。その他にも、設計業務とは直接関係のないワークショップも度々行われ、他分野の方々とも交流が広がっている。

最近、渡り廊下や遊歩道には、地域の方々がおそろそろ通り抜ける姿を見かけるようになってきた。従来のオフィスという制度の枠を開放することで、働く個人の主体性の回復と、社会との新しい関係づくりを指向したワークスペースができつつあるように思える。自然や社会、そして様々な人々と共にあることを感じ、お互いにゆったりと対話をはかれるようなコミュニケーション・ワークスペースを目指した実験のはじまりである。

ここでの実験を、来年また移転する将来のオフィスや今後の私たちの設計や活動の中で継続し、次なる時代の扉を開けることに挑戦してみたい。
(あしはら・たろう／建築家)



■芦原太郎建築事務所メンバー

芦原太郎・芦原弘子
八幡 謙・小林 仁・往蔵満秋・黒木博臣・稲富宏郎・大竹正裕・山口志之・遠藤千裕・塩見 庸・矢野賢一・谷口麻里子・岡田雅人・大塚希久子・前田麻衣子
落合政勝・渡辺 茂・渡辺 誠・辻 香

■旧芦原太郎建築事務所メンバー

Chen Guoming・Anna Fairbank・Cho Chorucha・松岡哲也
満岡誠治・Ang Ging Wah・鈴木美都葉・黒兼聖子・佐々木 育・上田邦宏・高階澄人・小野 淳・安武佐和子・坂本 格・橋本朝子・水澤孝彦

■上原リノベーション参加者

〈「畑」プロジェクト〉

企画：園田 穰／園田造園設計事務所

佐々木亮子／東京農業大学農学研究科造園専攻

参加者：熊谷聡子／東京農業大学・佐々木良太／東京農業大学・安藤百理枝／東京農業大学・松居隆／東京農業大学・高野哲之／東海農園

〈「トンネルワークショップ」〉

企画：佐藤友則／工学院大学沢岡研究室

参加者：

近藤尚弘／東京工芸大学・平賀 敦／東京理科大学・上野佳世子／東京理科大学・石塚菜々子／工学院大学・吉田佳世／工学院大学・佐藤友則／工学院大学・宮崎祐子／千葉大学・高木伊久乃／千葉大学・河合菜穂子／千葉大学・西澤昭子／千葉大学・片山 完／千葉大学・島田智美／千葉大学・西尾桃代／千葉大学・持館政敬／千葉大学・山野佳秀／千葉大学・押川幸一郎

〈ディレクターズルーム改装プロジェクト〉

香雪（小垣外美雪、辻 香）・前田麻衣子／（株）アシハラインターナショナルアーキテクト・清水直子

〈マーキング・プロジェクト〉

岡田雅人

〈トイレルンク・プロジェクト〉

岡田雅人

〈「空間」記録プロジェクト〉

谷口麻里子

〈寸法表示プロジェクト〉

塩見 庸

■写真提供

芦原太郎建築事務所：p.64～66、p.69右、p.70、p.73～75

越後妻有アートトリエンナーレ2000

「大地の芸術祭」を終えて

この夏、新潟県妻有地域で、「大地の芸術祭：越後妻有アートトリエンナーレ2000」が開催された。32ヵ国、総勢140人以上のアーティストが、6市町村（十日町、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町）、762km²の広範囲に、様々なアプローチでアートを展開した。地方都市の、なおかつ過疎地域といわれる中山間地帯でのフェスティバルでは、異例の16万人以上の観光客が53日間に訪れた。現地は世界でも有数の豪雪地帯だが、夏は亜熱帯地域といえるほど温度と湿度が上昇する。だから暑いコシヒカリが採れるのだが、夏場の観光は重労働である。作品は屋内外を問わず山間にも設置され、予定外の登山を味わった人々もいたであろう。しかし有形無形を問わず、プログラムのなもの、体験型のもの、故意に人目に触れない場所に設置するものまであり、多種多様でアートに関する知識がなくとも楽しめる芸術祭であった。

開催の背景には、新潟県の推進する「ニューにいがた里創プラン」がある。独自の価値発信に基づく地域づくりを目指すもので、最初の地域活性化プロジェクトが、「越後妻有アートネットワーク整備事業」だ。その一環として「大地の芸術祭」が、「人間は自然に内包される」という基本理念のもとに開催されたのである。各国のアーティストが、場所に根ざした作品制作やワークショップなどのプログラムを展開し、住民やこへび隊というボランティア組織との共同作業を行った。空き家や廃校、休耕田に設置されたアートは、過疎や高齢化に伴う産業の衰退という負の条件を克服し、地域独自の魅力を高めたものでもあった。

今回クリップでは、おもに松代町と松之山町のアート作品および十日町トリエンナーレセンターの設計を担当し、各作家と打ち合わせ、図面作成の作業と監理を行った。アーティストとの打ち合わせは、まず現地の視察から始まる。建築の世界では最初に敷地ありきで計画をスタートするが、ここではすべてが未定であった。作家の過去の作品から、事前に設置場所の目星をつけ、それでも朝から晩まで野山を駆けめぐり、ときには田圃で

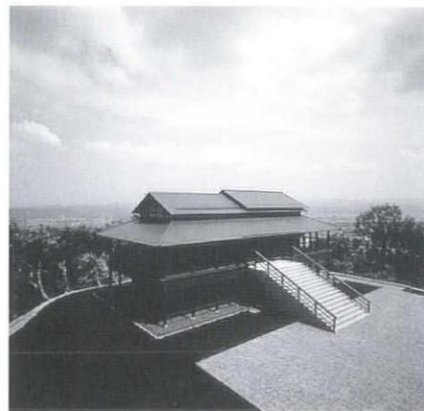
泥まみれになりながら作家と共に候補地を探すのである。地元の人々から情報を仕入れたり、忘れ去られた場所を見つけたりと妻有探しの楽しい日々であった。その後作家からスケッチが届き、ようやく設計が始まるが、技術や予算的な面で再考していただくことも度々である。特に常設される作品は、雪対策に頭を悩ませ、小屋組規模の「雪囲い」を用意した作品もある。作品が決まり地主の方々の了解をえると今度は施工だ。作品は林内や棚田内にも計画され、樹木の伐採や周りの地形を損なうことなく設置することが求められた。あぜ道や棚田を破壊せずに重機が入り込むことは困難を究める。作品によっては豪雪地帯ということ逆手を取り、雪で地形が覆い尽くされて起伏のない時期に、雪上車で運搬、設置するという手法が取られたりもした。地域の住民と話し合いながら、雪の中100kg以上の作品を左右に移動させて配置が決定される場面もあった。

この「大地の芸術祭」は、通常の設置型アートフェスティバルと違い、アートを媒介として人と人、自然や様々な場所との関係を結びつけるものであった。一見何の必要性もないものに多くの人々が参加しつくり上げる。そこに打算はなく、純粋なエネルギーのぶつかりあいだけであり、達成感を生む。そんな熱い思いがたくさん小さな物語を生み、人々の心に残っていくのである。作品がなくなったとしても、人々に語り継がれ大きな流れへとつながっていくのだろう。環境破壊が叫ばれている今、大自然と向き合いながら生きている農村部でのフェスティバルは、今後の都市、ひいては人類のあり方に新しい視野を広げたものであったと確信している。

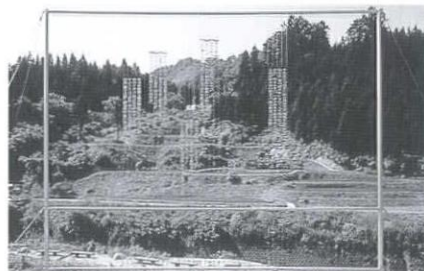
「越後妻有アートネットワーク整備事業」は、今後もつづく。アートを軸にした地域振興プロジェクトが数多く進行中だ。道路や公園などのインフラ整備や建築で、計画段階から地域住民とアーティストや建築家が深く関与する。アートの潜在能力はこれからもっと引き出されるであろう。

(CLIP)

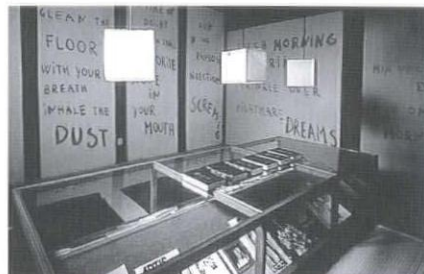
この頁の写真をすべてS.SANZAI



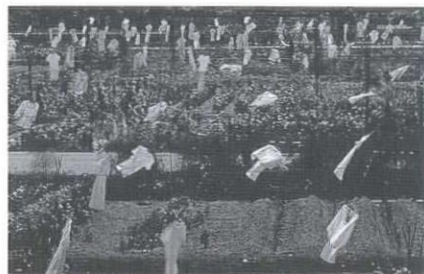
ジェームズ・タレル〈光の館〉



イリヤ・エミリア・カバコフ〈米が実る山の5つの彫刻〉



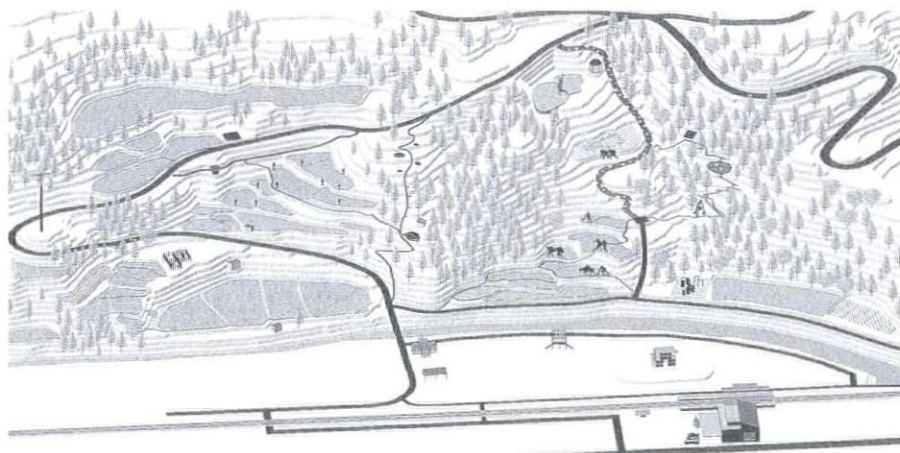
マリナ・アブラモビッチ〈夢の家〉



クリスチャン・ボルタンスキー〈リネン〉



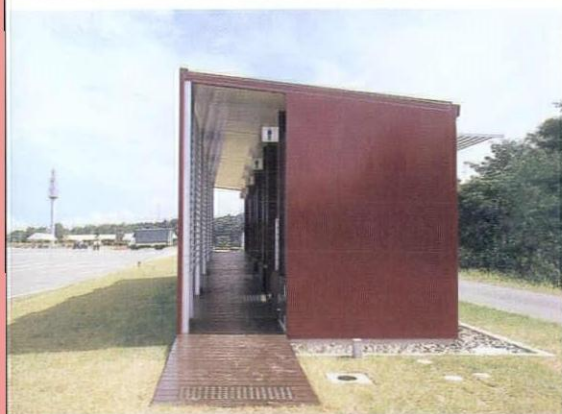
川俣正〈松之山プロジェクト〉



松代ステージ アクソノメトリック

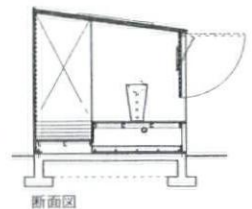
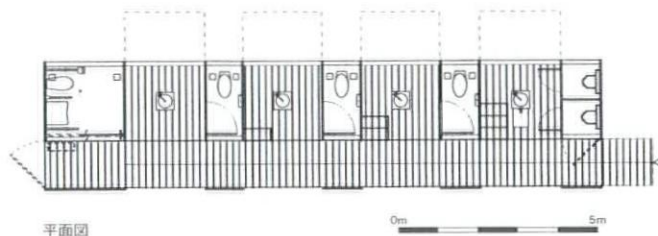
河岸の燈籠

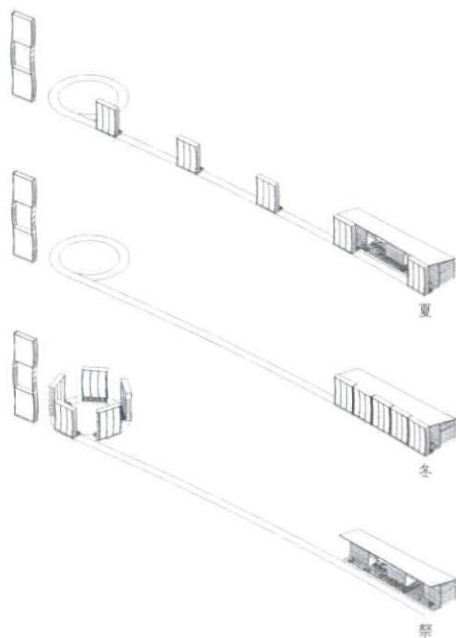
越後妻有アートトリエンナーレ2000



主用途 : 公衆便所
 所在地 : 新潟県中魚沼郡中里村
 延床面積 : 43.56m²
 構造 : S造/複合パネル壁構造
 発注者 : 建設省北陸地方建設局
 信濃川工事事務所
 施工者 : 株式会社 村山土建
 基本設計 : (有)一級建築士事務所 CLIP
 松永英伸、棚橋国彦、設楽壮一
 施工期間 : 2000年4月~9月
 仕上 : 壁パネル/St.PL-2.3両面張 焼付塗装
 床/御影石張
 屋根/St.PL-3.2 焼付塗装
 ガラス/強化ガラス 乳白フィルム貼
 ルーバー/St.パイプ34φ AP
 デッキ/松板120×32 キシラデコ
 ル塗装

ここでは“どこにも陰のない開放的なトイレ”を試みた。そのため可能な限り壁を取り除いた構成としている。男女間を区分けする間仕切り壁をなくし、全体を構成する外壁もない。できるだけプレーンな空間を創出するために柱と梁を排除し、強度を均等に受ける鋼製複合パネルによる鉄板構造を採用している。そして、各ブースに専用の手洗器を持つオープンテラスを備え、縁側状の導入路、手摺や雪囲いの機能を併せ持つルーバーが、空間を曖昧につなげている。これらは利用者の快適性を保つと同時に信濃川への眺望を確保する。各ブース壁も2面にはガラスが入り、自然光が内部を満たす。夜になると昼間とは逆転し、5つのガラスブースが光ってミオンの森を背景に「燈籠」として現れる。このような開放性は、厳格に分節される西洋的な空間とは異なり、ルーバーや半透明ガラスの作用によって、日本的で曖昧な“間”を創出すると考える。





アイソメトリック

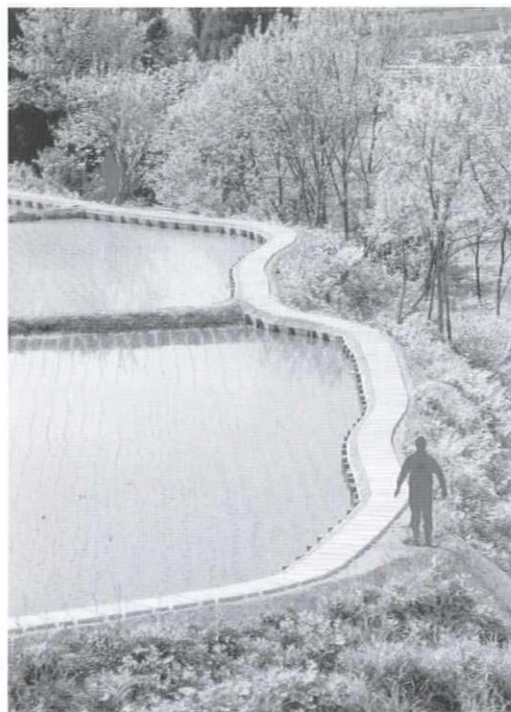
主用途 : 駐車場・公衆トイレ・広告塔・ベンチ
 所在地 : 新潟県東頸城郡松之山町
 敷地面積 : 2300m²
 延床面積 : トイレ / 13.6m²
 広告塔・ブース / 各1.5m²
 構造 : トイレ / 木造、広告塔・ブース / S造
 発注者 : 新潟県松之山町
 建築設計 : (有)一級建築士事務所 CLIP
 松永英伸、棚橋国彦、設楽社一
 構造設計 : (有)大賀建築構造事務所
 設備設計 : 株式会社 明野設備研究所
 施工者 : 株式会社 高橋組
 施工期間 : 2000年6月～8月
 仕上 : [公衆トイレ]
 壁 / 米松 120×90 キシラデコール塗装
 床 / モザイクタイル貼り デッキ米松
 屋根 / St.PL-3.2 ウレタン塗膜防水仕上
 [広告塔・燈籠ブース]
 壁 / St.PL-4.5 アクリルシリコン樹脂塗装
 ガラス / FL-12 乳白フィルム貼
 アクリルファニチャー組み込み

この修景計画は、古来より旅人の心を和ます旅籠の燈籠を松之山温泉郷の顔として新たに配置し、人々の記憶に永くにとめようとするものである。山間のわずかな土地を最大限に有効活用するため、配置計画は直行グリッドとせず、山裾に沿ったものとした。前後からの山裾の曲線と道路による波形は中央に緩衝地帯を生み出し、安全な歩行区域「プラットフォーム」をつくり出す。そのなかに光る直方体(燈籠)を配置し、広告塔や案内図・ベンチの機能を持たせることが、基本的な方針であった。5つの燈籠は季節の変化や催事に移動し、その配置によって温泉街の景観を新たにかたちづくり、季節の移り変わりを認識させる。夏期は、認知度を高めるため分散配置となる。祭りなどの催事には、その会場構成にあった様々な配置が可能で祝祭空間を演出する。冬期は豪雪に備えるため、燈籠が便所の前に集まり、「雁木造り」の通路を創出する。これによって便所の雪囲いとプラットフォームの除雪が簡易になる。光る燈籠が連なる様は、訪れる観光客に新鮮で強烈な印象を与えると同時に、昔懐かしい記憶を甦らせることになるであろう。

松代ステージ—園路

主用途 : 公園
 所在地 : 新潟県東頸城郡松代町
 敷地面積 : 約4500m²
 発注者 : 新潟県十日町地域広域事務組合
 設計者 : (有)一級建築士事務所 CLIP
 松永英伸、棚橋国彦、設楽社一
 施工者 : 株式会社 司工務店
 施工期間 : 1999年10月～2000年7月

起業者有アートネックレス整備構想では、はくほく線松代駅から南に至る松代城までのエリアを松代ステージとして計画している。今後、中心施設として「文化村センター」が建設される予定だが、今期の「大地の芸術祭」では、里山の中腹に、地域の魅力を体で感じとることのできる「自然体感型公園」が披露された。里村の智慧を見せる様々なアートを組み込んだこの公園は、造成工事を最小限にとどめるため、既設の山道やあぜ道・農道を利用して、アートを結ぶ園路としている。そのため農耕車の通行にも配慮し、なおかつ親自然的なデザインとした。草花が舗装路内にも生育可能にするため、所々円形にくり抜かれた舗装路や、あぜ道のカーブにあわせ曲線形状の台形平板ブロック、山林の中で自然の植物を傷めないよう地盤から浮き上がった木製デッキなど、様々な配慮がなされた。



峡谷の燈籠

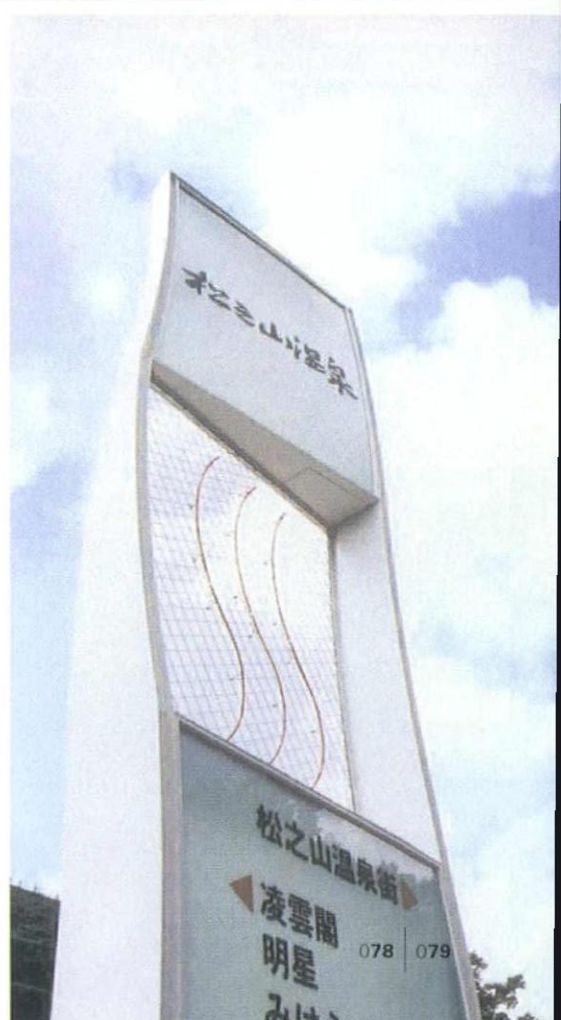
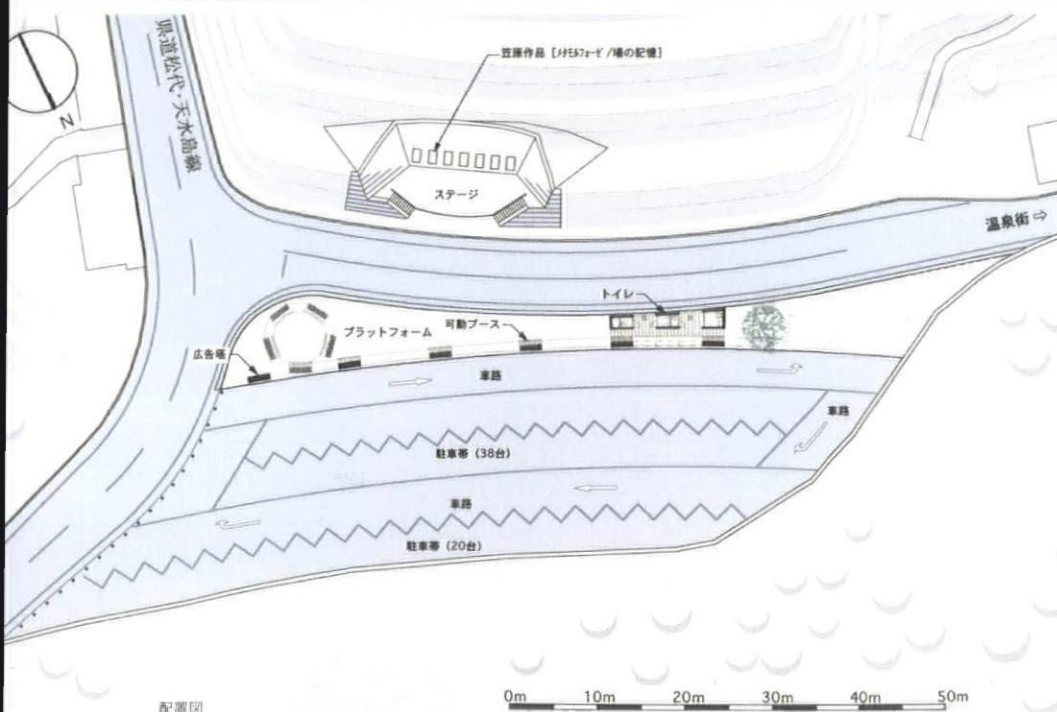
越後妻有アートトリエンナーレ2000

公募作品コンクールグランプリ作品

©S.SANZAI

松之山温泉は700年の歴史を持ち、日本3大薬湯のひとつとされ現在も年間12万人の観光客が訪れる。同時に、豪雪や地滑りといった過酷な自然環境、それに伴う過疎・高齢化や産業の衰退などの社会的条件に悩む松之山は、近代化の過程で取り残された地域ともいえる。敷地は、温泉街の入口であり、昔から雪崩に悩まされてきた場所で、ここを整備し新たな温泉街の顔をつくるのが温泉街に従事する人々の30年来の望みであった。

雪崩を起こす山の斜面は、昨年度から新潟県による造成工事が行われ、当初は“大地の芸術祭”とは無関係に完了する予定の事業であったが、地元の人々の熱意により、昨年末に公募ポイントとして計画が変更・補填された。公募は今年の始め、招待作家とは別に6組の作家が171組の応募作品のなかから選ばれ、各市町村に作品を設置した。クリップは松之山町に作品を設置し、公募作品のなかで松代町のLUXと共にグランプリを受賞した。



MITSUBISHI
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。

薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

新登場

エレパック

ELEPAQ

三菱エレベーター

機械室レスタイプ／乗用・住宅用・寝台用

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)
信頼性に優れ (Reliable)
快適な移動空間の創造 (Comfortable)
エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

 三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……………三菱電機株式会社 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 (三菱電機ビル)

本社ビル事業部 TEL (03) 3218-4544

閉鎖ガソリンスタンドが仮設転用により生まれかわる

不思議の国のCHARA

植木明日子



給油機の上で歌うCHARAがフューチャーされたCDジャケットの表紙(図版提供: Epic Records)

*「CHARA Caramel Milk ~THE BEST OF CHARA~」
(11月1日リリース/ESCB2178/¥3,059税込/Epic Records)

水色のギター。大きなみつあみに白いワンピース。いつものようにヒールの高いくつで芝生の上をゆっくりと歩いている。大きな大きな屋根の下の小さな小さな世界。ここはどこなのだろう。

そこに住む人は、CHARA。水平にひろがる天井の先にのびる水色の空や、オレンジ色の池をのぞきこんだりしているけど一体何があるのだろう。大きな屋根は雨を凌ぐためではなく、この世界に生きるすべてのものをのんびりとくるんでいる。そんな場所にCHARAはいた。しばらくすると、モコモコの枝葉をまとった大木の足元に、ふと目をやる。どこかで見たような黒い箱。あれは……。やがて箱からのびるピストルの先には金色のじょうろがつけられ、CHARAがひきがねを引くと透明の液体が吹き出した。ガソリン! そう、あの箱は給油機。この世界には毒なもの……。しかしそんな心配は一切無用。

いつも車で通り過ぎているガソリンスタンド。特別気にしていなくても、「あたりまえ」にそこにある。そういうもの。ここはどこなのだろう。そう、ここはガソリンスタンド。見慣れた給油機のあたりに、なにやらモコモコした木が生えている。その足元には芝生がひろがり、溢れ出す液体はこの世界を潤すエネルギー。芝生に、大木に、生き物たちに届けばこの場所はいっそう息づく。コンクリートの床に緑が広がると、水色のギターを手にしたCHARAは給油機の上に座っていた。一瞬、すべてが静まる。そして、歌いはじめる。大きな屋根の下に歌声が広がると、また、世界が動きはじめた。この世界の住民、ピンクフラミンゴたちが集まり、屋根の色は変わりはじめた。CHARAが歌うと花が咲く。CHARAが歌うと鳥も歌う。CHARAが歌うと……。みんながCHARAワールドで生きている。ここはそんな場所。

そんな夢でも見ているような、CHARAの2枚目のベストアルバムのジャケット撮

影が、9月に千葉県で閉鎖され放置状態の某ガソリンスタンド(以下GS)で行われた。この素敵な世界をプロデュースしたのは、CHARA1枚目のベストアルバムも手がけたアーティスト、打越俊明である。イメージは「不思議の国の住人CHARA」。このイメージを実現するためにデザイン事務所「錦瓊(King Cay Lab.)」を率いる打越がロケ地として選んだのがGSだった。以前からGSの潜在的魅力に関心を抱いていた打越と、一方でGSの可能性を建築的視点から探ろうと活動を展開していた建築家やエディターで構成される「SS再生計画実行委員会(以下、SSコミッティ)」との出会いから、今回のプロジェクトはスタートした。

全国にコンビニの1.5倍、約55,000カ所もあるGSは近年、岐路に立たされている。その結果、廃止GSが増加し、放置されているものも多い。SSコミッティはこの現状に対して、「リノベーション」という視点からさまざまな提案を行っている(SD9910、SD0002参照)。この閉鎖状態のGSの有効転用の提案依頼をうけていたSSコミッティが、打越の「CHARAのアルバムジャケットのロケ地としてGSを使いたい」との要請をうけて、「超暫定的仮設転用」のひとつとしてオーナーに働きかけて実現したのが今回の経緯だったのである。準備から撮影、撤去までの10日間程のあっという間の出来事。見慣れたGSの殺伐とした風景が、CHARAを取り巻く新たな世界へと変化を遂げたのである。

一見どこにでもあるGSが密かに放っているサインに気が付けば、今までとは異なる魅力が見えてくるはずである。今回の試みは、「あたりまえ」に潜むものをそのままに活かしながら鮮やかな変身をとげさせたという点において、私たちの住むこの世界にも新しいエネルギーを生み出すことへの第一歩につながったのかもしれない。

(うえき・あすこ/明治大学)



ジャケット撮影の舞台となった、閉鎖され放置状態のガソリンスタンド
SD0012



「不思議の国」に生まれ変わったガソリンスタンド
(写真提供: Epic Records)

2000年チェルサイエ国際展示会より

10月3日から8日まで、イタリア・ボローニャ市においてチェルサイエ国際展示会(セラミックタイルとバスルーム備品の国際見本市)が開催された。会場は、丹下健三氏設計のボローニャ・フィエラ地区センターに隣接した、展示場面積136,000m²という広大なものであった。出展数は、1065社でそのうち201社はイタリア以外の30ヶ国を数え、多くの人々が訪れこの期間ボローニャ市の道路とホテル、レストランは大混雑となった。

そもそもエミリア・ロマーニア地方は良質なタイル用粘土の産出地として知られ、中世マジョリカ・タイルの流れをくみ、第2次世界大戦後のさらなる繁栄をもとに、イタリア・タイルの世界への発信地といえる。過去にも同市においてチェルサイエ展は開催され、隣りのファエンツァ市にはファエンツァ国際陶芸博物館もあり、イタリア・タイルの通史やデザインの流れなども知ることができる。

会場では、イタリア・タイル協会会長のアンジェロ・ボレリ氏が「ここは、革新的なセラミックタイルと流行の先端を走るバスルーム・デザインに、世界中から競合する出展者が集まり、居住空間をデザインする人々が間近に実物を見る

ことのできる巨大なショーケースとなる」と語るように、セラミックタイル、テラコッタ、クリンカータイル、モザイクタイルなどの展示ブースが所狭しと並び、伝統的なものから現代デザインまで、タイル業界の現在を感じ取ることができる。

一方、バスルーム備品ブースを見て、まず感じたのはどのブースも非常に美しいディスプレイがなされているということだ。ミニマルなモダンデザインから実際のジャグジー空間を模したもので、実にイタリアらしいといえる。

また各備品も、さまざまな素材(ガラス、プラスチック、石、木、ポリカーボネイト、ステンレスなど)や色が使われており、日常生活を楽しもうというイタリアン・マインドを感じさせられる。ちょっと気付いただけでも、H.マリスカル、M.I.ギーニ、M.グレイブス、P.スタルクといった人たちのデザインが眼に止まる。

さらに、このチェルサイエ展の公式ポスターのデザインはセラミックタイルのデザインを手掛けた経験ももつ、E.ソットサスが担当している。こうしたことから、セラミックタイル業界の意気込みと、デザイン王国イタリアの健在さを感じさせられた展示会であった。(K.A.)



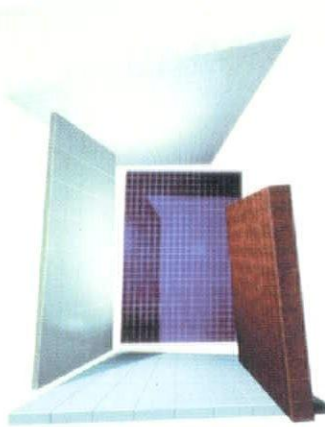
チェルサイエ国際展示場



ファエンツァ国際陶芸博物館



バスルーム備品(デザイン: B.ラビサルダ)



INTERNATIONAL EXHIBITION OF CERAMICS
FOR THE BUILDING INDUSTRY AND BATHROOM FURNISHINGS
CERSAIE
BOLOGNA • ITALY
3-8 OCTOBER 2000

エトトレ・ソットサスのデザインによるポスター



フェラーリ社ミーティングルームの床タイル



バスルーム備品展示ブース



で注意!!

窃盗団による、カギあけ侵入被害が激増中!!

ピッキング攻撃に強い ロータリーシリンダー「U9シリンダー」を お勧めしています。

防犯性能が低いシリンダー



ウェーバー
シリンダー式



ディスク
シリンダー式



ピンシリンダー式
(カギ山の深さ・溝の
浅い部分のシリンダー)

ヨコ式でW形
の鍵穴が
安心の目印!

*当社のディスクシリンダーは、
鍵穴がタテ式です。

CP錠認定のシリンダーです。

ロータリータンブラーとロッキングバーを組み合わせた全く新しい構造の上、さらにタンブラーの外周にアンチピッキング切り込みを持たせたピッキング攻撃に強いシリンダーです。鍵違い数は1億5千万以上を達成し、キーの抜き差しも大変スムーズです。現在ご使用の錠前のシリンダーだけを交換するだけで防犯性能が向上します。お取り換えは、全国ネットワークの美和ロックサービス代行店SDがお引き受けしています。



ピッキング攻撃に強い全く新しい構造
鍵違い数1億5千万以上

ロータリーシリンダー
「U9シリンダー」

世界最高峰、172億の鍵違い数「JNシリンダー」

操作性と防犯性をより高めた画期的なバリアフリー
対応のリバーシブルシリンダーのため、挿入
時にキーを持ち替える必要がありません。



リバーシブルタイプのデンプルキー

さらに防犯強化をするために...

CP錠をお勧めしています。



CP錠とは、警察庁が制定した優良防犯機器型式
認定制度にもとづき、現在は(財)全国防犯協会
連合会が厳しく審査し、認定した錠前のことです。



全防連認定優良防犯機器
型式認定番号LA-00-06

U9LA-CP型 レバーハンドル錠

◆新規施工には、彫込みタイプで
CP錠認定の主錠、補助錠を。



全防連認定優良防犯機器
型式認定番号LA-00-07

U9DA-CP型 本錠錠

◆既存の扉には、CP錠認定の面付補助錠を
取り付けて1ドア2ロックに。



全防連認定優良防犯機器
型式認定番号LA-00-09
U9CPNDR型
面付本錠錠

シリンダー交換は、SDにお任せください。

SDは全国に約800店。アフターメンテからリフォームまで確かな技術で迅速に対応しています。



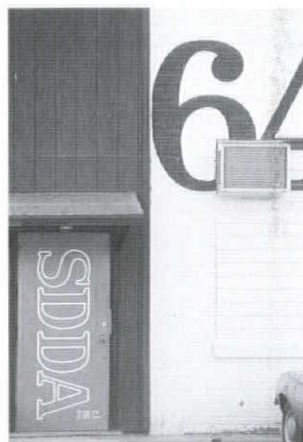
SDとは、美和ロックが専門技術や社会的
モラルなどの研修後、厳重な審査を経て
認定したロックミス(錠前取扱技術者)の
こと。この(技術者証)が信頼の証です。



*ここに紹介した製品は一例ですが、他にも各種高級ロック、各種セキュリティシステムとその機器類、ドアクローザ、建築金具類など豊富に揃えていますのでご相談ください。

都田 徹

ヒデオ・ササキ氏の死を偲ぶ



1970年代のササキ&アソシエイトのオフィス・エントランス(ウォータータウン)



現在のササキ&アソシエイトのオフィスの外観
(写真提供：都田 徹)

「9月8日の朝日新聞の死亡欄にササキ死去の記事が掲載されている。」とプロセス社の室谷氏が知らせてくれた夕刻、ルイジアナ大学のマックス教授からもボストン・グローブ紙の記事の概要がE-メールされてきました。

私が、『SD』に「環境計画＝SDDAの場合」という特集を発表したのが1973年の9月、この訃報を知るまでに、実に27年間の月日がすでに過ぎていることに愕然としました。ボストン・グローブ紙の記事の概要は以下のとおりです。

「世界的なランドスケープ・アーキテクトであるササキは、ササキ&アソシエイトの基礎をつくった創立者であり、ハーバード大学のランドスケープ・デザインとアーバン・デザインの分野で最初のデザイン教育の改革を行ったパイオニアでもある。イリノイ大学卒業後、ハーバード大学で修士号をとり、1953年に自分の事務所をウォータータウン（東部）とサンフランシスコ（西部）に設立。ウォータータウンの会社での仕事の一方で、ハーバード大学のランドスケープ・アーキテクチャ学科の学科長として10年間にわたって活躍。ハートフォードのコンスティテューション・プラザやファーストクリフト教会等の公共広場の仕事や、またニューヨークのワシントン・ヴァレージ・ガーデン等のインターナショナルな広場等のデザインが主要な作品。1950年から1970年にわたるモダニズムへの相互多角的なアプローチに対して、ハーバード大学の100年記念事業の名誉メダル賞を受賞している。ササキの最大の功績は、ランドスケープ・アーキテクトとアーキテクト、アーバンデザイナー、土木家の異業種間のギャップを文化を共有しながら、学際的交流でもって異種間共同作業の手法（マルチディスプリナリ・アプローチ）をもって、異分野の人々のコラボレーション関係をうまく運用したことと言える。」

以上がボストン・グローブ紙の抜粋ですが、私がササキを最初に知ったのは1964年、大学3年生の時、私の恩師である久保貞教授の机の上にあったSDDAのオフィス・ブローチャーを見た時でした。こんなにすばらしい作品をつくっているランドスケープのデザイン事務所があるとの感想がササキ事務所への憧れとなり、この時の驚きと発見が私のアメリカへの憧れのはじまりとなっています。その後、鹿島建設からの企業留学生として1972年にU.C.バークレーからハーバード大学へ

転学しました。授業外の時間にウォータータウンの彼の事務所で働くことになった喜びは今でも新鮮で忘れることのない思い出です。1964年から36年間、私の記憶の先端にあったササキのイメージともお別れです。

今年はアメリカでの私の恩師、ガレット・エクボ、ロバート・ザイオン、そしてササキが帰らぬ人となり、私の前から離れてしまっています。

ササキ事務所のフィロソフィを、彼は生前このように語っています。

「SDDAは自然を保護するために、国土の開発計画すべてに、まったく反対を唱えるのではなく、バランスのとれた開発をはかるためにあるのです。それは、自然環境の中に最適な方法で人間の要求を定着させようと試みている。」

その方法によって『そこにあるもの』を生かし、『そこにあるべきもの』、あるいは『そこに必要なもの』を生み出していくことが可能である。この考えは、しばしば『そこには何もあるべきではない』、あるいは『自然の状態はそのままにしておくべきである』というような結論に達することであるかも知れない。しかし、これがわれわれの積極的な土地の使い方に対する態度である。これをわれわれは『マルチ・ディスプリナリなアプローチ（手法）』と呼んでいるのです。」

また、ササキはE.サリネンやP.ルドルフ、I.M.ペイ、ミノル・ヤマサキ等との協同作業を通じて、新しい開発の大幅な枠組みをデザインするキャンパス・プランニングの分野でその力を発揮しました。彼らは個々の建物に左右されることなく、プロジェクトのより広いコンテキストに則ってスペースを定義し、キャンパスにおける所有境界線の中での接続やそれを越えた関係性の確立をめざし、大きな環境の中での調和の程度や全体性を追求し、これらはササキが協同することによる成果であったと言えます。その価値観とは、より大きなコンテキスト、簡潔性、慎み、プロポーション、そして永遠性の尊重にありました。実際、ササキは土地そのものについて意識していたのであり、彼が受けた教育は様々だったが、その中心にあったのは彼が「ランドスケープ・アーキテクト」であったということなのです。（みやこだ・とおる／ランドスケープ・アーキテクト）

Book Review

書評

評者 岸田省吾

イソザキによる「歴史」へのオマージュ

20年前、この書物の原著、『建築行脚』シリーズ(全12巻)が刊行されるに際し、撮影担当の篠山紀信はイソザキとの対談のなかでこう述べている。「これは建築写真集でもないし、建築論でもない。磯崎さんの時代論であり、文明論だと思う。僕にとっては、そこを訪れた時の、一つの空気、温度、肌触り、そして自分がそこから感じ取ったことすべてのドキュメンタリーだと思うわけです」。確かにイソザキにとっても、建築と出会う「ドキュメンタリー」であることに違いなかった。ただドキュメンタリーといっても、その「出会い」は幾度も反芻され、省察され、異常な深さを与えられ、建築論や時代論、文明論や創作論のいずれとしても読みうる膨大な厚みをもったテキストとともに現れた。

本書は、その12編のテキストを再録する二冊本の前編にあたる。「前編」とはいえ単純に原著の1巻から6巻の論文を集めたわけではない。改めて6つの建物が選ばれ、ひとつのタイトルのもとにまとめ直されている。

書名の「人体の影——アントロポモルフィズム」とは、ギリシャあるいはローマ以来、西欧世界における思考を規定してきた神人同形説——アントロポロジーに、すべての建築デザインの生成規範を置く考え方をいう。アクロポリスからはじめ、〈ヴィッラ・アドリアーナ〉、〈サン・ロレンツォ〉を経て、〈パラッツォ・デル・テ〉、〈シヨアの製塩工場〉、そして〈サー・ジョン・ソーン美術館〉とイソザキは巡ってゆくが、とりわけ〈サン・ロレンツォ〉に関わる諸計画以降300年にわたって、アントロポロジーが西欧建築に通底する強固な基盤となるとともに、18世紀後半以降、次第に瓦解していった様を描ききる。

近代とは、つねに人間という中心を持ち自足した調和的世界としてのアントロポモルフィズムを蝕む力として現れ、それに代わるさまざまな建築の問題構制が求められ、展開されてきた時代である。そしてその状況は今日も変わっていないということであろう。

現時点では、建築的なもの＝「建築」は自明でないということこそ、おそらく確実にいえる数少ないことのひとつである。建築とはどのようなものか、どのように立ち現れるのか、どのような基準でその良し悪しを判断し、何を手がかりにデザインを行えるのか。自足した「業務

の世界」に生きる、いわゆる通俗的(商業的)建築家ならいざしらず、イソザキという意識的(前衛的)建築家(「建築」というものを問いつづける者としての建築家)たらんとするならば、そうした極めて限定的な出発点からいかなる足場を築くことができるか、つねに批判的に問い直さなければならないことになる。

そのためにも歴史は「喚問」される。近代という時代の変動が記された跡を見出し、今日にも共通する思考の枠組みが生成した状況を理解することが不可欠になる。イソザキが手法にこだわってきたことも、そして「建築」とはそうした手法を作動させたときに見えてくるものではないかという予感も、こうしてようやく一定の広がりの中で理解できるようになる。

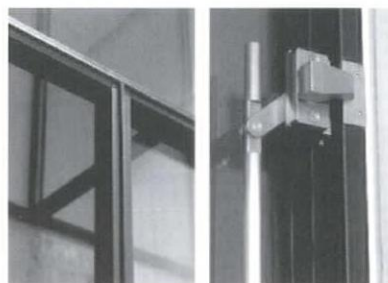
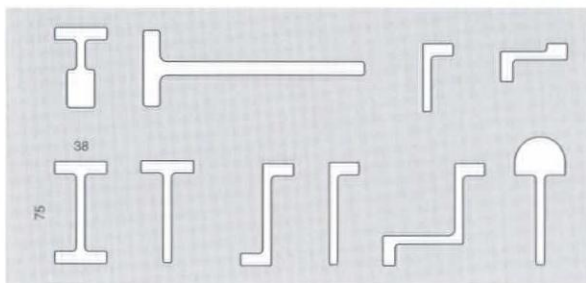
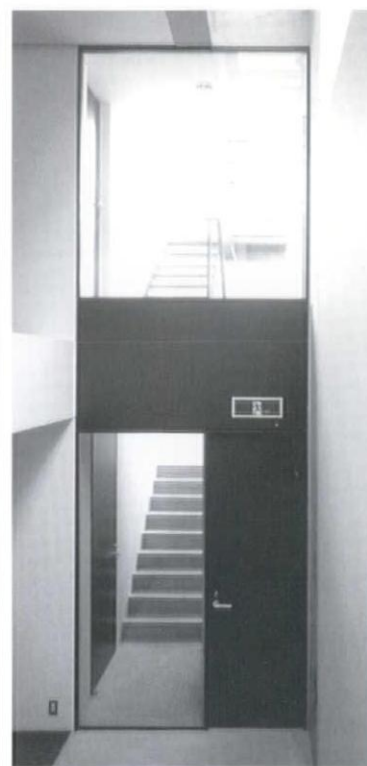
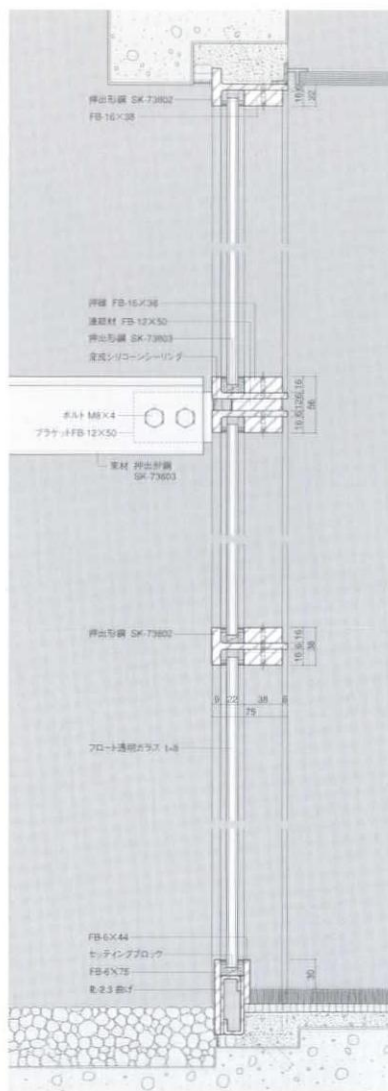
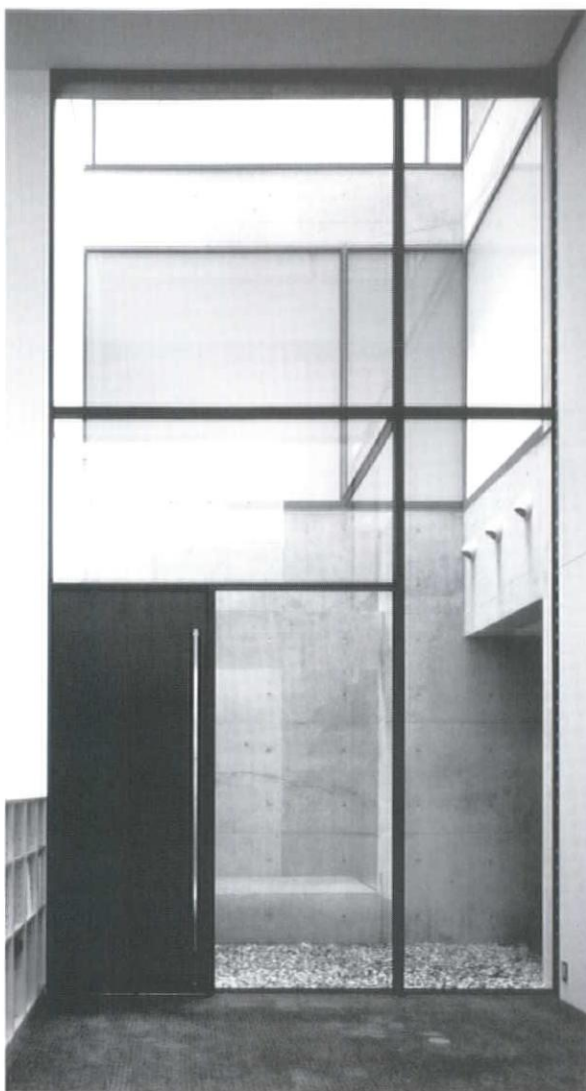
それにしても、イソザキが「歴史」を切り裁く様はたえようがない。そこでは、「歴史」が生き生きとした輪郭と質量をもって生成する。空間の生きられた経験、創造の現場での模索と深い思索が響きあうからである。全歴史、全書物、全作品、すなわち「世界」が折り重なり、波打ち、なだれ込む。すばらしいスピード感とリズムだ。つねに目配りし、思考を巡らす範囲は広く深い。しかも瞬時の動物的ともいべき嗅覚がある。ここにはラジカル＝根源を問いつづける者として走りつづけてきたイソザキの姿が勇躍している。

鹿島出版会のイソザキシリーズは近刊予定の本書後編で終結する。このシリーズは『空間へ』からはじまるイソザキのほとんどの著作をカバーするもので、イソザキのこれまでの思考の軌跡を辿るうえで定本となろう。ことにこの『アントロポモルフィズム』は、その前著である(実際の執筆年代は逆に新しい)『造物主義論——デミウルゴモルフィズム』とあわせ読むことを勧めたい。本書で示されたイソザキの「歴史」理解をさらに大きな流れのなかで位置づけられるとともに、イソザキの創作における応答をつぶさに目撃できるであろう。

(きしだ・しょうご/建築家、東京大学助教授)



「人体の影」
磯崎 新＝著
A5判 316頁
鹿島出版会 3600円



時代が求めるファサードを スチールという素材で表現

NECESS St 3875

建築の外装デザインにおいて、ガラスによる透明感のある表現は、近年、構造設計や施工方法、新素材の開発などの技術革新により、さまざまな形で具現化されています。YKK APでは、このようなデザインを可能とする新技術や新素材を常に研究し、新しい商品を生み出しています。その中で「スチール」という古くからある素材を改めて見直してみました。そして、鉄の持つ強度、耐火性などの魅力ある特長を活かし、開発したサッシシステムが「NECESS St 3875」です。熱間押出成形による専用形鋼は、既存形鋼との組み合わせが自由にできるシンプルな断面形状です。シャープでありながらも存在感を持ち、スリムでありながらも重量感が感じられるものを目指し、優れた材料特性とも相まってデザイン自由度の高いシステムとなっています。

■仕様

- ・表面処理 最下層：電気亜鉛メッキ処理
下地塗装：エポキシ系錆止め塗料
仕上り塗装：ウレタン樹脂塗料
- ・バリエーション FIXスクリーン
はめ殺し窓
外開き窓
外倒し窓
框ドア
フラッシュパネルドア

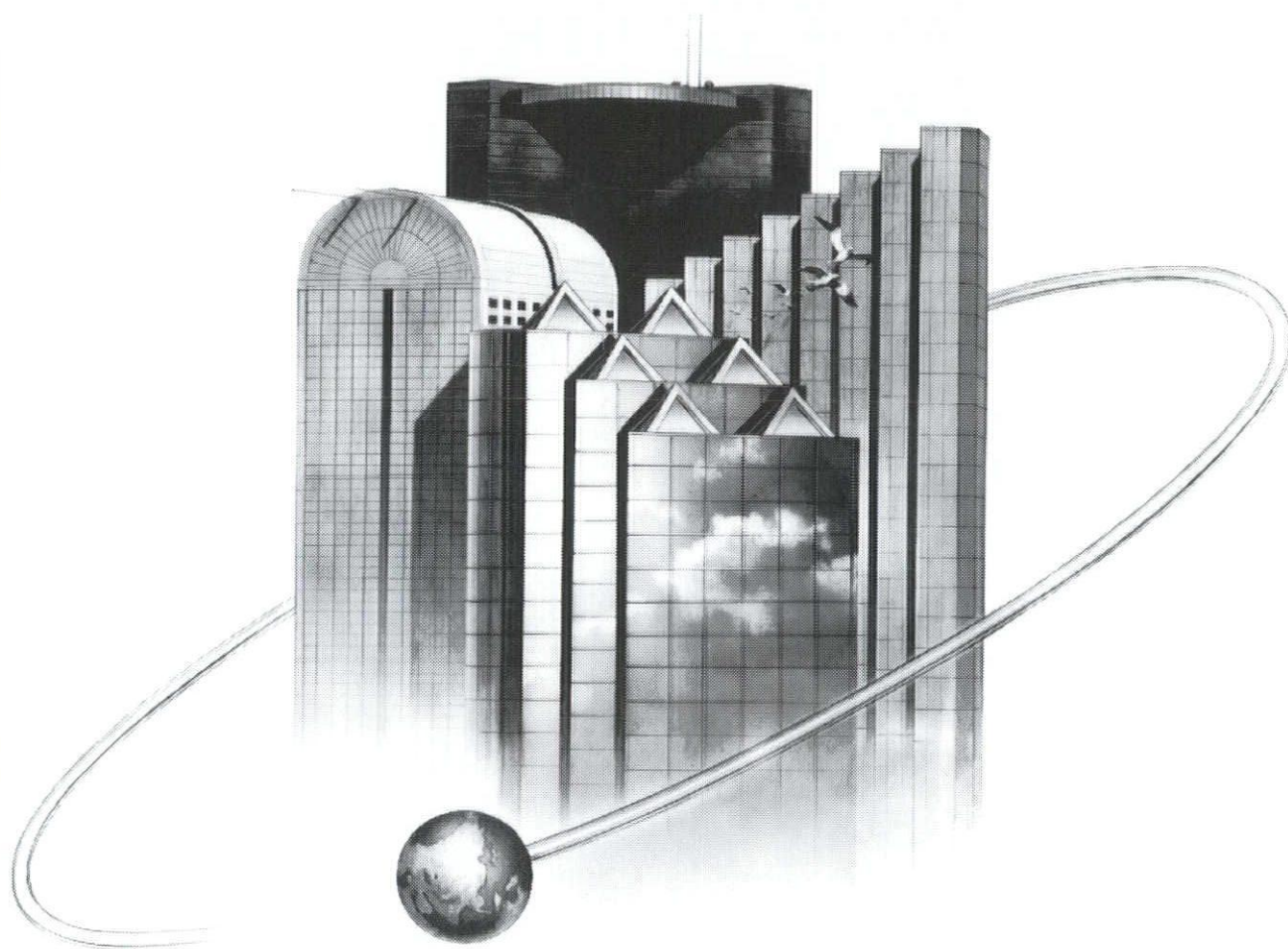
**YKK
ap**

YKKア・キテクチュラルプロダクツ株式会社

東京都千代田区神田和泉町1

<http://www.ykkap.co.jp/>

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

『巨匠への憧憬——

ル・コルビュジェに魅せられた日本の建築家たち』

佐々木 宏＝著

A5判 464頁

相模書房 4800円

This is the 「日本のル・コルビュジェ」。それがこの本であり、新たな定本の誕生でもある。コルとの関係性こそが、日本の近現代建築史そのものを体現しているからだ。無数のコル論考のなかで、特別な位置をしめることになろう大著である。

前川國男と丹下健三をプロデュースした岸田日出刀がコル導入のキーパーソンでもあったこと、知られざる弟子・土橋長俊や謎の論客・香野雄吉の発掘、《国立西洋美術館》建設におけるA.ベレの弟子の存在……。下記の目次概要の顔ぶれだけでも新事実の重要性が認識できよう。また、6章での輸入路の検証が、日本の「コル熱」は世界的にも特異であったことを物語る。

著者自身の見解よりも「生の言葉」を重視し、事実を精確に編むことで、次代のコル研究に無数の布石を敷いた、ゆるぎない「基礎研究」である。

●目次概要／1章：ル・コルビュジェを訪問した建築家たち＝薬師寺主計、今井兼次、中西六郎、中尾保、山田守、中條精一郎、山口文象／2章：コルの作品を見に行った建築家たち＝上野伊三郎、森口多里、筒井新作、藤島玄治郎、村野藤吾、藏田周忠、山脇巖、吉田鉄郎／3章：コルの著作を入手して紹介した建築家たち＝中村順平、岸田日出刀、池田英夫、宮崎謙三／4章：コルのアトリエで図面を引いた建築家たち＝前川國男、牧野正巳、土橋長俊、坂倉準三、吉坂隆正、金重業、村田豊、進来康／5章：日本におけるコルの影響＝アントニン・レーモンド、土浦亀城、田上義也、岡見健彦、本野精吾、石本喜久治、堀口捨己、谷口吉郎、丹下健三、他／6章：コルについての論評＝海外のコル論紹介、日本のコル論／7章：日本に現存するコルの建築作品＝国立西洋美術館



『「建築外」の思考——今和次郎論』

黒石いずみ＝著

A5判 348頁

ドメス出版 3800円

「建築学」「建築設計／計画学」にたどる閉塞感——そんな現代に風穴をあけるための今和次郎論として、本書はつづられている。それは、日本の建築の「近代化」が抱えつづけた根本的な問題を逆照射することでもある。

『日常生活の器』として、建築のあるべき姿を独自の方法論で探求し、民家研究、装飾論・工芸論、考現学、生活学といった学問体系を構築した今和次郎（1888～1973）。フィールドワークに主眼をおく研究姿勢は多くの追随者をうみ、現在も色あせない人間像の魅力に惹かれる研究者も少なくない。本書の原典が米ペンシルバニア大学の学位論文という事実からも、今の思考の世界的な先進性が確認できよう。

クロスカルチャルな活動に貫流する、その思考を解明するための手がかりとなったのは、今の未発表の原稿や個人的な研究ノートと蔵書である。膨大な資料に散在する理論的基盤を緻密に調査し、思考の展開過程をあざやかに甦らせた。そして、欧米の諸理論に深く学んでいた今に対して、著者の豊かな学識が切れこむことで、近代日本建築という枠組みをこえて世界的な文明理論の座標軸へ位置づけることに成功している。

早稲田大学建築学科の教授を長く務めながらもアカデミズムからは傍流とみなされ、建築家としても認識されない奇妙な存在の今が、ドローイングによって人間と建築を観察・理解し、理念を展開していったことが本書で解明される。さらに、意外なほど多い建築作品が丹念に掘り起こされ、建築観が具体的にしめされるのである。

定量的な建築（学）を超えて、「質」を評価し表現する新たな方法論の構築の可能性——それが今和次郎のドローイングであり、この本といえよう。



『平面 空間 身体』

矢萩喜從郎＝著

A5判 320頁

誠文堂新光社 2400円

身体（感覚）をつうじて平面（グラフィック）と空間（建築）の領域をつなぎ合わせ、創作に関わる概念のリセットを図った画期的な論考集。著者のマルチな活動と思考が、自作の図版と写真で解説され、体験的なデザイン論として集約している。



『呑流建築雑誌』

野々村俊夫＝著

A5判 470頁

日刊建設通信新聞社 2800円

ハコモノと揶揄され非難的となる、公共事業・建築を斬った辛口の文明批評。過剰に豪華な音楽ホール、歴史的建造物や町並みの保存・再生事業、職能論、メディア論……多岐にわたる100話は、元・省庁建築部長による現代ドキュメンタリー。



『道具論』

榮久庵憲司＝著

A5判 292頁

鹿島出版会 3100円

I.D.の第一人者が、「道具寺」の「物教」経典を律することをうたった文明論。「道具」に生命を見出し、健全で美しい創出、病床者の蘇生、生涯現役、博物館と裁判所の創設を誓う。デザイン道の行脚をささえる精神的論拠で満たされた一冊。



Pacific Rim Architects 環太平洋建築家展

環太平洋地域の建築家によって構成された、展覧会・シンポジウム／セッション・出版・インターネットからなる総合建築展。20世紀の大西洋地域を中心とした近代主義が流布する果ての地（エッジ）としての「環太平洋」地域において、それがいかに変容し、成熟していったのか。21世紀を目前にした今、果ての地のひとつである「日本」において、これを検証し、発信する。

会期：12月16日（土）～12月28日（木）

時間：10：00～19：00 会期中無休

会場：東京デザインセンター

東京都品川区東五反田5-25-19

入場料：無料

参加建築家：岸和郎（日本・モデレーター）、マティアス・クロツツ（チリ）、アルベルト・カラチ（メキシコ）、チャン・ユウ・ホー（中国）、アン・ジン・ワー（シンガポール）、野田俊太郎（日本）、古市徹雄（日本）、カニカ・ルクル（タイ）、ラビヴァーン・チョクソンパチャイ+ラルフ・ネルソン（USA）、イアン・ムーア（オーストラリア）、ピーター・ボスレイ（ニュージーランド）、キム・ヨンスー（韓国）

講演会・シンポジウム

環太平洋建築家によるセッション

日時：12月16日（土）10：30～16：30

12月17日（日）11：00～17：30

会場：東京デザインセンター

定員：180名（当日先着順）

入場料：無料

ホームページ：

<http://res.ipc.kit.ac.jp/~warox/pacificrim/>

問い合わせ：Pacific Rim Architects 事務局（古市徹雄・都市建築研究所）

Tel: 03-3403-5710（担当：高橋）

安斎重男の眼 1970-1999 写真展 写真がとらえた現代美術の30年

期間：11月2日（木）～12月17日（日）

時間：10：00～17：00 水曜日休館

夜間開館：11月10日（金）、11日（土）は20：00まで開館（入館は19：30まで）

会場：国立国際美術館

大阪府吹田市千里万博公園10-4

入場料：一般 830円、高校・大学生 450円、小・中学生 250円

問い合わせ：国立国際美術館

Tel: 06-6454-8600

空間術講座10

我々は状況を構築する、 21世紀の曙光に向けて

第4回：12月9日（土）14：00～

「混交——アイデンティティはいかに生成するのか？」（クライン ダイサム アーキテクト、マツオカ・ワン・アーキテクト）

第5回：12月23日（土）14：00～

「地形——都市をいかに読み込むのか？」（みかんぐみ、宮本佳明）

第6回：12月23日（土）17：30～

「20世紀最後の建築会議——若手はどこに立っているのか？」（阿部仁史、五十嵐太郎、曾我部昌史、千葉学）

会場：健保会館はあといん乃木坂

定員：各回100名（事前申込制・抽選）

受講料：各回500円（当日受付にて）

申し込み：問い合わせ：ギャラリー・間「空間術講座10」事務局

Tel: 03-3402-1010 Fax: 03-3423-4085

建築祭 2000-2001

武蔵野美術大学造形学部建築学科の第2回学生作品展及び卒業・修士制作展の開催。

会期：

作品展：2001年1月12日（金）～1月14日（日）

制作展：2001年1月26日（金）～1月28日（日）

時間：10：30～16：00

会場：武蔵野美術大学8号館3階

東京都小平市小川町1-736

問い合わせ：武蔵野美術大学建築祭実行委員会事務局 Tel: 042-342-6067

モードの新世紀 展覧会

今年1月に開催され、大好評を博した「国際ファッション・フェスティバル」の拡大版ともいえる次代を創る最先端のモードが集結する展覧会。最新ファッション写真と映像、衣装の展示に加え、モデル・オーディション、メーク&ヘア・ショーなどのライブイベントも開催する。

会期：11月16日（木）～2001年1月8日（祝）

時間：11：00～18：00 水曜日休館（金曜日は20：00まで。また、12月27日～2001年1月4日は休館）

会場：神戸ファッション美術館

神戸市東灘区向洋町中2-9-1

入場料：一般 800円、高校生以下 600円

イベントの日程等の詳細は下記にて確認のこと。

問い合わせ：神戸ファッション美術館

Tel: 078-858-0050 Fax: 078-858-0058

学生デザインレビュー 2001／福岡 参加者募集

学生デザインレビューは、テーマに対する学生の作品を通じて、現代建築や都市環境をとりまく諸問題をとりあげ、参加者とゲストクリティークが共に議論し、意見を交換する開かれた場を提供する企画。通常のコンペ形式とは異なり、講評作品選出の審査過程に参加全員が出席し、学生とゲストクリティークの対話の場を設け、投票による作品選出のプロセスを公開、デザイン作品の可能性やリアリティについて幅広い意見交換を行う講評会を開催する。

テーマ：リビングコンディショニング

居住の文化を支持する諸条件を広く「リビングコンディショニング」と捉え、世紀末の建築、都市環境の現実を前提に、次世紀に向けたリビングコンディショニングの提示とそれに相応しいトータルな環境デザインの提案を求める。

ゲストクリティーク：阿部仁史、貝島桃代、千葉学、塚本由晴、宮本佳明、土居義岳

応募資格：大学、大学院、短大、高専等に所属し、建築・都市を学ぶ学生

応募内容：応募作品は1人1作品（共同作品可）とし、展示場所（600mm×900mm、横使い一面）に展示可能なサイズとすること。テーマに対するオリジナル提案であれば卒業制作、設計課題等いずれも可能であるが、学生個人に著作権があるものに限る。

応募登録：インターネットによる登録が原則（<http://dr2001.kyushu-id.ac.jp>）。ただし、ホームページから登録書をダウンロードしてファックスによる登録も可能。

応募登録料：前年度の記録誌の購入（1000円）をもって応募登録料にかえる。当日の作品受付時に記録誌を提示のこと。また、当日に受付での記録誌購入も可。

登録期間：2001年3月1日（木）～3月16日（金）

作品受付：2001年3月30日（金）10：00～12：00（18：00までに各自で搬入・展示）

公開審査・講評：2001年3月31日（土）

開催場所：九州芸術工科大学 多次元ホール

福岡市南区塩原4-9-1 Tel: 092-553-4400

問い合わせ：学生デザインレビュー 2001／福岡実行委員会（<http://dr2001.kyushu-id.ac.jp>）

記載内容については変更される場合があります。学生デザインレビュー 2001／福岡への参加希望者、内容の詳細等の確認については必ずホームページを参照のこと。

design

ゲストクリティーク

阿部仁史 (東北工業大学／阿部仁史アトリエ)

貝島桃代 (筑波大学／アトリエ・ワン)

千葉 学 (東京大学／ファクターエヌアソシエイツ)

塚本由晴 (東京工業大学／アトリエ・ワン)

宮本佳明 (大阪芸術大学／アトリエ第5 建築界)

土居義岳 (九州芸術工科大学／建築批評)

review

[学生デザインレビュー2001 / 福岡]

学生デザインレビューは、テーマに対する学生の作品を通じて、現代建築や都市環境をとりまく諸問題をとりあげ、これを議論し、デザインの可能性とリアリティについてゲストクリティークと参加者が共に考え、意見を交換する開かれた場を提供する活動です。学生デザインレビューでは、設計教育や建築批評の第1線で活躍するゲストクリティークを招き、学生の意欲的な作品を講評します。日頃の教育現場では得難い横断的な議論や、活発な意見交換を行い、学生デザインのレベル向上を目指すと共に、イベントを公開することによって、建築批評や、さらには実際の建築・都市デザイン領域の刺激となる視点を提供することを目的としています。

[主催] 学生デザインレビュー2001 / 福岡実行委員会 [共催] (社) 日本建築家協会九州支部、博多デザイン倶楽部

当日は(社) 日本建築家協会九州支部、学生設計選奨作品の選出も行われます。学生デザインレビュー2001 / 福岡に参加を希望される方、詳細を確認されたい方は、下記ホームページをご参照ください。

<http://dr2001.kyushu-id.ac.jp>

リビングコンディション
21世紀はサイバーミレニアムの幕開けだといわれます。バイオテクノロジーとエコサステイナブルの世紀だといわれます。昨今のハンディなコンピューターツールの普及が、ひとびとのコミュニケーションを場所や時間の拘束から自由な形式にしています。持続的エネルギーの開発が、生産／消費の図式を循環的なパラダイムに変えています。

世紀末のいま、携帯文化、新たな生命体、民族単位の国家的枠組の再編といった一見不連続な世界的トレンドに、従来の定住概念の境界を曖昧にし居住の文化の多様化、個別化を加速するベクトルが顕在化しているように思われます。20世紀の居住の文化を支えたさまざまな条件や地勢、つまりリビングコンディションとそれを取り囲む環境が大きく変わりつつあります。

今世紀の建築、都市文化を支えた諸制度や空間パラダイムは、このような変化を前にして次世紀にも有効なフレームとなるのでしょうか。あるいは有効性を喪失するならば、次世紀的な居住の文化を支持するあらたなリビングコンディションとはどのようなものなのでしょうか。またそれに相応しいシステムや物的な環境、さらに空間のイメージはいかに描かれるのでしょうか。

学生デザインレビュー2001 / 福岡では、世紀末の建築や都市環境の現実と身体感覚を手がかりに、21世紀に向けた多様なリビングコンディションの提示と、具体的な建築 | 都市 | ランドスケープのデザインを求め、ゲストクリティークと共に、提案の可能性やリアリティについて幅広いディスカッションを持ちたいと考えます。

□ 開催日程

平成13年3月30日 (金)

作品受付・展示

平成13年3月31日 (土)

公開審査・講評

□ 開催場所

九州芸術工科大学 / 多次元ホール
福岡県福岡市南区塩原 4-9-1

□ 応募資格

大学・大学院・短大・高専に所属し
建築・都市を勉強する学生

□ 応募作品

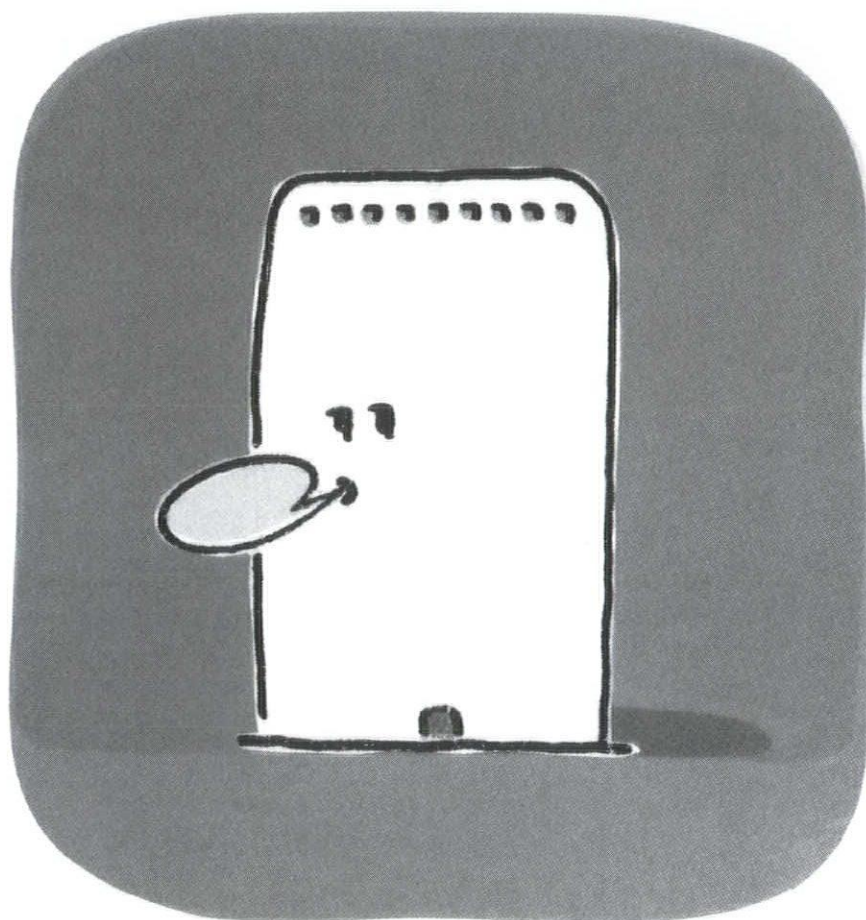
学生個人に著作権のある作品

テーマ

リビング
コン
ディ
ション

2001

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は

自然の呼吸に

支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド
東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

SDグラフィティ 36年の思い出

SD Graffiti: Recollection of 36 Years



これまでにどれだけの建築・都市・アート・デザイン……を紹介したのだろう。

これまでにどれだけの著者に寄稿いただいたのだろう。

これまでにどれだけの写真家と取材をともにしたのだろう。

36年間のSDには、気の遠くなるような、多くの人たちのエネルギーが凝縮され、

そしてそれは記録を超えて記憶に残る雑誌を生み出してきたのだ。

ここに時間と誌面の都合で、ごく少数ではあるが、「私とSD」という視点から、

さまざまな想いをつづっていただき、SDグラフィティとした。

これらのグラフィティが、各人の思い出を超えて、

新世紀のSD再出発へむけての道標ともなりうることを祈りたい……。

特別な雑誌

私がはじめて建築の長編連載を書いたのはSDにおいてでした。第1回が掲載されたのは1989年5月号ですから、もういまから12年も前のことで、当時、私はまだ20代の終わりにいました。依頼があったのは、その前年の88年の10月ごろだったと思います。場所はSDレビューの東京会場で、当時編集長だった伊藤公文さんが、「1年間の長編連載をやらないか」と言ってくださったのです。しかも内容は自由に決めていいということでした。

私はその1年前の87年夏に、勤めていた建設会社設計部を辞めて、建築評論を生涯の仕事にしようと決心し、活動を開始していたところでした。いくつかのコラム連載の仕事はありましたが、長編連載はこれがはじめてで、伊藤さんから話をうかがったときはとても嬉しく、かつ緊張したことを昨日のこのようによく覚えています。私にとっては1年間の航海に旅立つような、ある意味でいえば大きな冒険でしたが、これといった実績がまだなかった私を起用した伊藤さんにとっても、やはりこれはひとつの冒険だったのではないかと想像します。

最初原稿を伊藤さんにお渡ししたのは、89年の1月の末でした。それから1年間、私はこの連載「光のドラマトゥルギー」に全力を傾けました。連載が終了してから半年して、この年間連載は同名タイトルのまま単行本化されましたが、結果的にこの本は私の記念すべき第一作になりました。

あれから12年の歳月が流れたことになりましたが、私はいまでもあの連載が自分の原点だと考えています。私はそこで現在の私を形成する核になるものを掴むことができました。そしてその後の、相川編集長との数多くの仕事を通じて、私はつねに、何かについてただ書くことということだけではなく、「何かについて考える」という機会に恵まれました。そういうことを考えさせてくれる雑誌は、そうあるものではありません。ですから私にとってSDは、特別な雑誌だと言い切ることができます。評論家としての私をつくりあげたその基底に、この雑誌はいまでも存在していますし、そのことはこれからも決して変わることはないでしょう。

(いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授)

建築が消えたのだから
SDの休刊はいさぎよい

SDの創刊号に「イタリアの広場」を寄稿させてもらった。当時の編集長・平良敬一さんのはからいだった。その前年、私はグランド・ツアーのつもりで、世界の各地を旅したが、そのころ私は都市デザイナーと自称していたこともあって、建築を都市と同時にとらえる視点を捜していた。広場という都市の空洞としての部屋がその絶好の主題だと思った。とはいっても、これをアカデミックに研究するつもりはないので、表現手段としてはエッセイしかない。平良さんがそんな意向を見抜いて、私としてははじめての長いエッセイを大きくとりあげてくれた(『空間へ』鹿島出版会刊に収録されている)。

以来SDと姉妹雑誌『都市住宅』が私の仕事の主たる発表の場となった。建築物を設計するだけでなく、そのときに考えた、建物からはみ出たものを文章にする。こんな妙な領域がいつしか私の日常的な思考をかたちづくる舞台となっていく。SDが単なる建築業界の記録とか、営業的な広告や自己宣伝の場になることを避けつづけて、建築を広い文化の中核に据える、という強い意志に支えられてきたことに私はつねに鼓舞されてきたように思う。私の建築業界から逸脱したような活動の型は、そんななかから組み立てられたようだといふようになって改めて感じている。いいかえると、私はSDに育てられて、建築を文化の広いパースペクティブで考えるようになったといえるだろう。

おかげでSDと付き合いはじめて10年ぐらいうると、外部の文化領域の活動に引きだされることになった。『へるめす』(岩波書店)の同人になったり、『批評空間』(太田出版)のアドバイザリー・ボードにいたりした。こんなとき、私は建築家のタイトルをはずさずにそれぞれが目指した広い文化領域にかかわることに努めた。つまり建築を自ら背負うことを強いてきた。その理由は、いつでも建築プロパーにもどればいい、SDのように建築側から文化に接近する意志を持ちつづける発表の舞台がある、と思っていた。

SDが休刊になる前に、『へるめす』も『批評空間』も終刊した(『批評空間』は今改めて再刊を準備している)。2000年の区切りが心理的に作用しているに違いない。そして今多くの雑誌が、眼が悪くなるので私の嫌いなウェブのなかに逃げ込もうとしている。辺境が文化をあらたに生み出すという昔の理論が正しければ、そこに違った文化が生まれるだろうが、ここに入りこむには、建築家というタイトルをはずさねばならない。つまり、文学や建築をつくりあげていたメディアが消滅したのだ。

とすればSDの休刊はいさぎよい。建築のなくなった世界とこれ以上つき合うこともないじゃないか、といっているようだ。36年の記録が残った。20世紀の末に、文化としての建築の最後が記録されたといっている。この次はどこで捜したらいいか? ウェブの内にも外にもまだ建築がみつかったとは聞いていない。

(いそぎき・あらた／建築家)

SDは長生きする

雑誌の誌面に表れているものすべてを編集長の名に帰すことに私は多少の異論がある。編集長の仕事内容はその個性と能力によって一人ひとりまったく違う。特集企画に長けた人、(建築誌でいえば)新しい建築家や執筆者を見つけるのが得意な人、その辺りは全部スタッフにまかせて経営だけをしっかりとやる人。ワンマン体制になったり、その逆だったり。

しかし、何年も継続して出しつづけるべき定期刊行物である以上、編集長は、ある一点でどの雑誌にも共通して、確乎として存在する。つまり全体の方針と構想は、編集長として最終責任を引き受ける者だけがもたざるをえないのだ。

SDが創刊されたときの事情は具体的にはしらないのだが、建築という枠組みを外すために、美術もデザインもまた文学も都市計画も、さらには歴史も現在も未来も、農村も都市も、それらについて少しばかり触れるだけではなく、誌面そのものが全部を受け入れて、建築がそのなかで相対化されているといった新しい雑誌を考えたのは、やはり、創刊時の平良敬一編集長だと思う。彼がそれまでに手掛けてきた雑誌、またSD以降に創刊した雑誌をあわせて見てもSDはもっとも平良らしい。つまり方針と構想が大きく、新しい雑誌の創刊というものが何にもまして時代の転換を反映するという気分(これこそ最近次々と創刊される雑誌にまるで感じられないものだ)が横溢していた。いやむしろある寂寥を帯びた明るさが、創刊時に独特の、また不可欠な誌面感覚だったのかもしれない。

今でこそさまざまな領域を横断するメディアに事欠かないが(いや、そればかり)、当時は途方もない発想だった。ただひとつ、そのころつくられていた『エナジー』というPR誌に触発されるものがあつたかとも思うが、だとしたらPR誌も取り込んで、店頭に並べる商業誌を考えたことも意表をついた。

各分野の専門家がSD誌上で、空間といわれるもの全般について発言しはじめたときの驚きは、言論的には狭い建築村で宇宙船をつくりだしたようなものだった。「スペースデザイン」とは宇宙計画の雑誌かと思った人もいたらしいが、それほどの構想を印刷メディアという現実に着地させるには、それなりのブックデザインが必要だった。そして創刊2年目の1966年1月号から、杉浦康平のおそろべき精密なデザインワークがはじまった。この表紙を六本木の本屋で見た私は、その場でへたりこんでしまう思いがしたと、どこかで書いたことがあるが、そのときの私は、新しい時代の出現に打ちのめされたのである。

こうした編集の骨格は、2000年の最新号まで、編集長やスタッフやデザイナーが変わっても引き継がれてきた。誌面の美しさも時期によって多様だったが、いたずらにセンセーショナルリズムに陥ることなく、一貫してある透明性を保っていた。その透明度の高さ静謐さは、現代にあつてスペースデザインと呼ばれるものの生命力の強さを読者に送りつづけたのである。

(うえだ・まこと／編集者)

新しいSDをつくろう

学生時代、僕は建築学科の図書室で多くの時間を過ごした。内田祥哉設計の、屋上を改造しラウンジ風にしつらえた快適な図書室だった。そこで雑誌をめくりながら建築について多くを学んだ。SDとののはじめての出会いも本郷の図書室だった。SDのバックナンバーで原広司にひかれ、磯崎新を知った。

しばらくすると、大学院の仲間と「グルッポ・スベッキオ」の名でSDのコラムを担当するようになった。竹山聖、隈研吾、小林克弘ほかと、アーでもないコーでもないといいながら、毎月、建築をめぐるエッセーを書かせてもらった。伊東豊雄、長谷川逸子、安藤忠雄、象設計集団、葉祥栄、鈴木了二、山本理顕、高松伸などといった気になる30代の若い建築家のオフィスをおとずれ、はなしを聞き、その仕事をみてまわった。

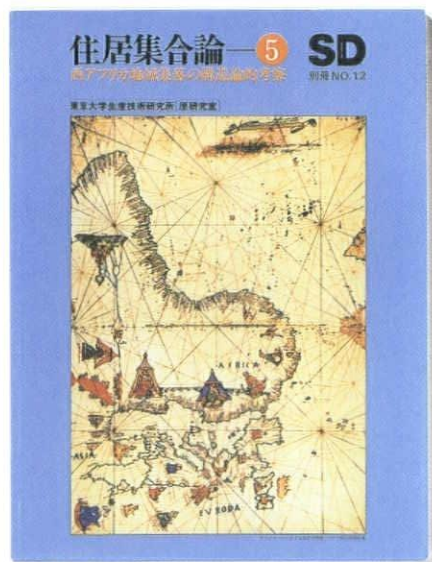
SDの建築家特集は魅力的だった。磯崎新のはじめての特集は繰り返し眺め読んだものだ。〈岩崎美術館〉が表紙をかざった横文彦の特集や、篠原一男の特集をもち歩いていたこともある。在籍していた東大生産研究所原研究室による海外の集落調査も5冊のSD別冊でまとめられた。僕は、アフリカのサバンナの集落について原広司が語ったことばを英訳し、調査した集落の図版を描いたりもした。

80年代になるとSDレビューが創設され、第1回、第2回とつづけて、竹山聖と設計した友だちの家で、入選した。初期のSDレビューは手づくりの展覧会で、ヒルサイドテラスでSD編集部のスタッフといっしょに会場の設営まで行った。その後も、建築やアートの評論やレポートを書かせてもらったり、展覧会をしたり、SDはいろいろな機会を与えてくれた。原広司の特集では自分が図面を引いた建築をめぐってテキストを書いた。大学で教えるようになった94年には初代の卒論生が編集部に通ってスタッフを手伝い、翌春「テクノスケープ」という特集号が出た。研究室でつくったウォーターフロントのプロジェクトを紹介してもらったこともあった。

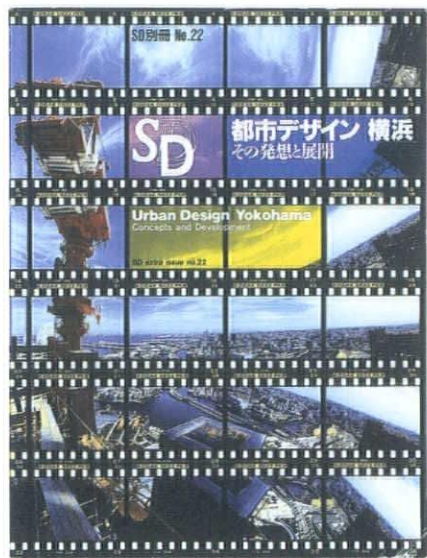
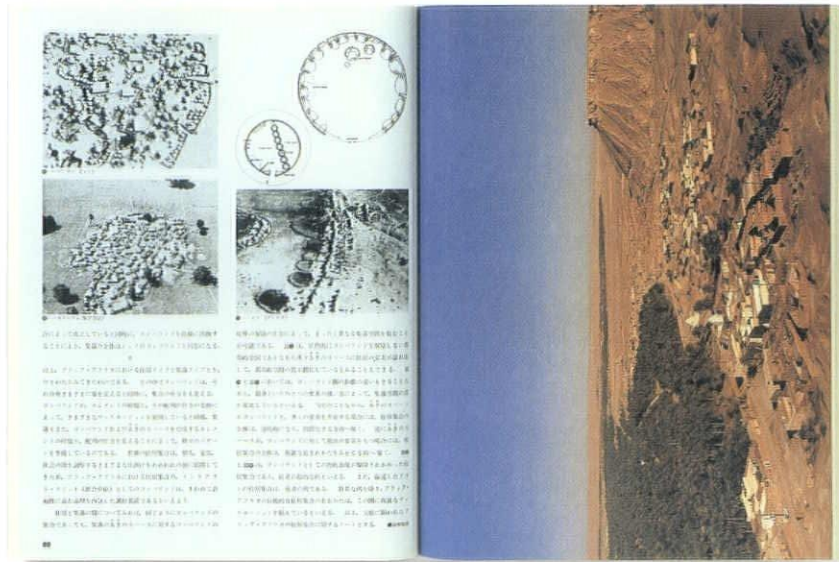
SDは、都市・建築、芸術の波頭にたつて、若い建築家や学生の関心をチェックできるセンサーでありつづけた。そして、多くの建築家やデザイナーがSDを媒介として育った。建築家兼教師としての僕の観察によると、近年でも、ランドスケープデザインやプロダクトデザイン、若い建築家、デザイナーの動きをあつかった号など、学生たちはきわめて敏感にSDに反応していた。長年孵化培養器として機能してきたメディアが休刊となれば、若い人たちにとっての新鮮な議論と発表の場が失われることになる。彼ら彼女らには僕たちがたどってきたような路は閉ざされる。ひとつの時代が終わる。

おそらく、世紀が変わり時代の気分が様変わりすれば次のフェイズにむけてSDのリスタートが各方面から強く要望されるだろう。21世紀バージョンの、次世代のための、新しいSDをつくろう。

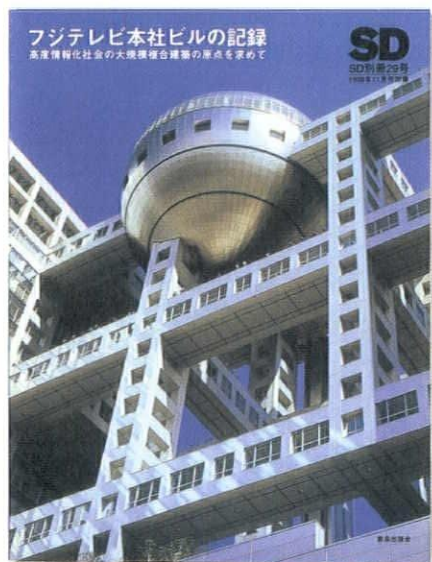
(うの・もとむ／建築家、千葉大学助教授)



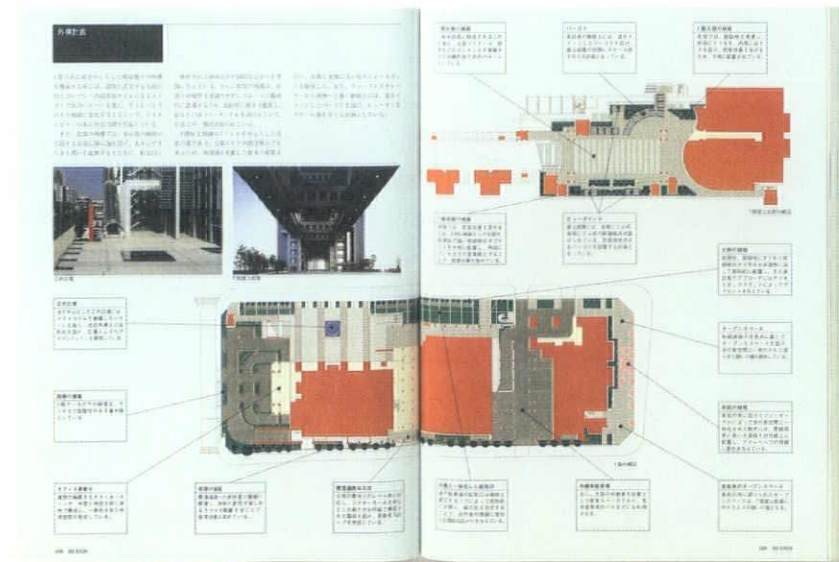
No.12 住居集合論⑤：西アフリカ地域集落の構造論的考察（調査・編集協力＝東京大学生産技術研究所 原研究室、表紙デザイン＝松井晴子、1979年11月）



No.22 都市デザイン—横浜：その発想と展開（編集協力＝横浜市都市デザイン室、表紙デザイン＝町口 忠、1992年3月）



No.29 フジテレビ本社ビルの記録：高度情報化社会の大規模複合建築の原点を求めて（表紙デザイン＝魚本敏正、1996年10月）



開かれた「批評」の場

戦後日本社会は、右肩上がりの経済成長という目標しか持ちえなかった。今や政府が問題の表面化を糊塗し、問題の解決を先送りにして、目標の堅持をしめそうとも、誰もがその目標を信ずることができず、その不信感が現在の閉塞感を生みだしている。問題のひとつが建設業であることは、周知の事実であるが、政・官・財の利権のもたれあい構造を変革しようとする勇気もエネルギーもないまま、唯々、債権放棄という無責任を容認しているだけである。責任を取らないことと、価値を極限まで相対化することとが結びつくと、「自分が好きでやっているのだから、何をやってもいいじゃないか、他人にとにかく言われる筋合いではない」という姿勢が大勢を占めることになり、その姿勢が、「批評」を生みだし、逆に「批評」を受け止めるという真っ当なコミュニケーションを阻害することになる。

疑問符で終わる新聞社説、コメンテーターと呼ばれる文化人を配したテレビニュース、各種雑誌における月評や座談会、これらは一見すると「批評」の体をなしているようではあるが、「批評」ではない。そこで要求されているのは、瞬間的な感性の閃きだけであって、持続的な思考の積み重ねなど無用の長物でしかない。ジャーナリズムが「公器」としての中立性を保持しようとすればするほど、あるいはまた「商品」としての販売部数を上げようとすればするほど、そこからは「批評」が欠落し、最新の出来事や流行を、読者が関心を抱き、理解できるような形で切り取っては紹介するだけのものになる。現代日本のジャーナリズム全体が、在野からの「批評」という牙を自ら抜き去っているのであって、その傾向は建築ジャーナリズムにおいて甚だしいように思われる。

建築雑誌というメディアにおいて、軽くてエフェメラルな出来事と流行に抵抗する、重くて持続的な「批評」の場を設けるとするならば、それは「特集」と「連載」という形式に限られよう。SDという雑誌は、スペースというキーワードを軸にして建築以外の分野に開かれており、しかも「特集」と「連載」という形式に対しても開かれていた。私自身、「フォルマリズム」特集（1977年10月、78年3月）の手伝いにはじまって、「マイケル・グレイヴス」特集（83年4月）、「アーツ・アンド・クラフツとイギリス世紀末建築」特集（84年2月）に関わらせてもらい、「インフラストラクチュアにみるモダニズム」（93年7月～94年6月）という連載もつづけさせてもらった。そこで私がいかに「批評」ができたかは、大いに自己「批評」すべきであるが、そこが私にとっての修練の場であったことは確かであって、この場を借りて、SDという学校に深謝しておきたい。またSDが、その開かれたポテンシャルを十二分に展開できないまま休刊することに対しては、残念であると言わなければならない。現在の閉塞感を打ち破る、開かれた「批評」の場を、他所に求めざるをえないからである。

（かたぎ・あつし／建築家、名古屋大学教授）

都市空間の質を問う——総体を議論する場としてのSD

雑誌SDは、建築そして家具・インテリアから造園・都市にいたるまで幅広く空間を論じてきたが、おそらく、分化されたデザインの諸領域に対する危機や断片化された実際の空間への危機感があったと考える。生活を取りまく空間の総体を論じようとした唯一の専門誌である。

私自身は都市デザインを中心に活動をしてきたが、SDでは「横浜＝都市計画の実践的手法」（別冊11、1978年）、「都市デザイン・横浜」その発想と展開」（別冊22、1992年）と2回の特集号に参画した。自治体の現場におけるデザイン活動を取りあげる雑誌はほかにはなく、われわれ自治体の都市プランナーや都市デザイナーにとって自らの思考やその実際を問う貴重な機会であった。また、個々の計画ではなく都市全体の戦略やデザインを記述することの意味は大きかったと考えている。横浜に限らず先駆的な自治体や市民活動に「まちづくり」が広く定着してきたのはこの20年ほどの大きな変化であり成果である。近年では一般誌での取り扱いも多くなるなど関心も高まっており歓迎すべきことではあるが、一方で専門家の間での議論やそれぞれの分野を超えた議論がそれほど進展しているわけでもなく、新しいデザイン論や計画論、あるいはそれを社会に問うような運動が生まれていないことが気がかりでもある。

近代の工業化・都市化社会の行き詰まっているが、次なる生活像や空間像となるとなかなか難しく相当な議論や試行錯誤・発想の転換が求められる。先日の日本都市計画学会金沢大会では「21世紀の都市計画ビジョン」をめぐるワークショップが開催された。私もメンバーとして参加したが、「都市計画」を新しい枠組みでとらえなおそうという趣旨で、キーワードとして提起されたのは「環境、個性、自治、参加、情報」、計画論として「再生、漸進、動的」、「パートナーシップ、都市運営、制度改変」などであったが、目標とすべき「公共性とは何か」「生活や空間の質とは何か」「文化とは何か」を明確にすべきという論点が重要であると考えている。

生活の多様化に対応する豊かな空間は、抽象的で画一的な政策やデザイン、類型化した規制誘導や数量化と効率性による施設計画からは生まれず、都市や町や地域それぞれの生活にあった固有のデザインが必要とされている。また、どう空間を確保し、空間をまとめ、空間の質を高めていくかという実現策も議論されることになる。自然や農地緑地あるいは市街地内空地などの「空（から）間」、風景や眺めなどの「空（そら）間」、次世代が活用できる余地である「空（あき）間」等々、空間をめぐる論点は多々あり、住空間から都市空間、国土空間にいたるまで広く総体を論じるためにはさまざまな立場から意見を戦わす場とジャーナリズムが必要である。こう考えると雑誌「SD＝空間デザイン」は、今後21世紀初頭にかけてこそ必要とされるものであり、できるだけ早い時期に復刊されることを期待したい。（きたざわ・たける／都市デザイナー・東京大学大学院助教授）

若僧の透明

SDとの出会いは1977年、大学院へと進んだ年に、連載コラムの執筆を依頼されたときにまで遡る。「国内建築ノート／ゲルッポ・スベッキオ編」というのがそのコラムのタイトルであり、当初は匿名でスタートし、数名の友人と1頁ずつを担当しながら約10年間、月一回のペースで書きつづけた。

よくぞまあ実績もなにもない23才の若僧に、そんなコラムを依頼したものだ、今になってみれば依頼した側の編集部（とくに当時編集長の長谷川愛子さん）の勇気に対して感心するばかりだが、そのおかげで、建築に対して考える訓練、建築について書く訓練をたっぷりとさせていただくことができた。

この連載のなかでもっとも印象に残っている一文は、じつは自分が書いた文章ではなく、この連載が完結する際、鈴木博之さんによって寄せられた文章である。鈴木さんは「なにものでもない人（いわゆる教師とか建築家とかいう職業についていない人という意味）の書くものは、常に正しいのです」という言い方をされて、僕らの書いてきたものを総括した。そして、彼は「しかし、いつかは人はなにものかにならなければならないのです」とつづけた。

これは僕のSD誌上のコラムに対する総括ということだけではなく、僕という人間自体に対する総括、あるいは批判であるようにも感じて、どきりとした。そして、今でも依然として僕は、そのような「なにものでもない人間」から抜け出していないのではないかと、よく思うのである。そこには反省もあるけど、開き直りも少し混じっている。

鈴木さんのひとつの論点は、批判とはどんなに客観性を装ったとしても、政治的にならざるをえないという指摘である。批判とは所詮は自分の所属する団体、グループ、立場なりを擁護するためのものではないかという指摘がまずあり、そのようないかなるしがらみとも無関係なフリをして文章を書くという一種のモラトリアルに対する批判がその裏には込められている。

しかし、固定された立場を擁護するためではなく、もっと自由（あるいは無責任）な言語活動としての批判というものもありえるのではないかと僕は思うのである。なぜなら固定された立場というもの自体が、ひとつのフィクションでしかないと感じるからである。21世紀になればそのフィクションから人々は、今よりもっと自由になると思うのである。

そして、その無責任な批判活動を許容していたSDというメディアそのものが、あらゆる意味での政治からも、固定された立場からも遠い、とてつもなく自由で透明なメディアであったともいえるのである。それは、もっと大きなものにSDが守られていたということと同義かもしれない。自由と透明はいつの時代においても保護と安全のもとにある。その自由と透明は今、SDという特定のメディアを超えて、世界全体に拡がり、行き渡ったように、僕は信じたいのである。

（くま・けんご／建築家）

SDの36年と私

鹿島出版会が、SDを休刊にすることをきいて、これは大変に誤った判断だと思っている。

SDだけではなく、鹿島出版会の出版事業の独自性は際立っていたので、誠に残念なことである。

明治以後の日本は、西欧の近代化を手本として、専門分化の道をついて走ってきた。工業化社会を目指すには、このことは必須だったし、日本は世界から優等生と認められる見事な専門分化、タテ割社会をつくってみせた。

単一目標へ近づくのに、分業による効率のよいシステムは有効で、日本は、技術・経済大国となった。日本の教育制度、官僚制度にある分業化、タテ割り構造は、あらゆる産業にも浸透し出版業界も、また、その例外ではない。

『新建築』、『建築文化』といった、いわゆる建築専門誌のなかであって、SDはつねに幅の広い境界領域を包含する独自の境地を開拓してきた。

21世紀は、工業化社会のうえに、新しく情報化社会を重ねて多様性と学際性を兼ね備えた新しいタイプの建築雑誌を必要としている。

これから、まさにSDを必要とする時代がくる。だから残念なのだ。

私は、1965年11月号にグラフィックデザイナーの杉浦康平氏とSDで特集を組んだ。そのタイトルは「異根都市」である。この特集で、私は、ニュートン力学的な空間認識の終わりを主張し、天体と天体との間の宇宙空間を虚としてとらえるのではなく、濃密な物質の存在する実体ととらえることにより、リーマン空間的認識へ近づくことができると考えていた。

この発想は、そのまま中間領域論、そして共生の思想へつながっている。

このような詩とも落書きともつかない奇妙な特集を組むことを許したSDの先見性(?)に深く敬意をあらわし、休刊を決めた経営者の非先見性を残念に思う。

（くろかわ・きしょう／建築家、日本芸術院会員）

始めの時、終わりの時

『伝道の書』でコヘレトが語るように、やはりすべてこの世のことには、与えられた時があるのか。播く時があり、刈る時のあるように、SDにも始まりがあり、そして終わりがあるということなのであろうか。しかしそれにしても、それはあまりにも突然来たとしか言いようがないが、これまで、SDによって与えられたたくさんのことに感謝しつつ、この終わりを受け入れたいと思う。

1960年代に大学院にいて、建築論、意匠論を志していた若者にとっては、建築ジャーナリズムは最良の学校であり、修行の道場でもあった。宮内嘉久の『国際建築』、そして『建築年鑑』、そして平良敬一の『建築』。頭でっかちで、小生意気な建築青年は、毎日それらの場所に入出入りし、議論に加わって興奮し、たまに短い文章を書かせてもらって、有頂天になった。世の大勢に逆らい、流行を否定し、遠くに定かならぬ理想を夢見ていた。そのなかのひとりに、長谷川愛子女史もいた。

SDが発刊された年は、ちょうど私がアメリカのペンシルバニア大学に留学した年である。毎月私の住む安下宿に船便で送られてくる月遅れの号を、日本語に飢えていた私は、隅から隅まで、何度も読み返したものだ。それは、なつかしい日本の香りで、私を安心させてくれると同時に、私の知らないところで急速に変わりつつある日本のざわめきで不安にさせるものでもあった。しかしそんな不安に長く関わってなどいられない、嵐のような熱中の日々であった。

そんな時、長谷川愛子女史から連絡があって、鹿島昭一氏がフィラデルフィアに来られるという。ルイス・カーンの特集号を組みたいので、そのことをカーンと話したいということであった。私は氏をカーンの事務所にお連れし、翌日、当時工事中だったプリンモア大学の建物など、いくつかの所をご案内した。その時は、それほどにも思わなかったのだが、後になって、鹿島氏が、雑誌の企画のために、自ら、しかも単独で来られるということがいかにただならぬことであるかを知った。草創期には、こういうこともあったのである。

SDから教えられ、学んだことはとうていここに書きつくせることではない。自分のことだけに限っても、日本に帰ってすぐ関わった〈九州芸術工科大学〉計画についての、大学論に始まる大きな文章、あるいはアメリカ建築史・文化論についての包括的なエッセイ、等々、すべてその後の私の仕事の基本となったものだ。思い返せば、よくもあんな不器用で、ただ真面目なだけの文章を、書かせていただけたものだ、と驚き、かつ感謝するほかない。流行を鮮やかにすくい上げたり、トピックスを切れ味鋭く料理したりする手際を競いあうことだけが、ジャーナリズムの仕事ではないという姿勢がSDにはしっかりとあったのだと思う。感謝し、拍手を送りつつ、その終わりを讃えたい。

(こうやま・ひさお／建築家、東京大学名誉教授、明治大学教授)

貴重なSD

SDは1965年創刊だが、私が一愛読者を越えて、一緒に仕事をさせていただくようになったのは、1977年のことである。当時、グルッポ・スペッキオという批評コラムがあり、大学院の修士1年のときに先輩方から引き継いで、修士での同級生だった竹山聖、隈研吾、片木篤、榎本弘之の諸氏とともに、今から言えば本当に若僧の分際で、このコラムを数年間お手伝いすることになった。私自身にとっては、原稿が活字になる最初の経験だった。このコラムの担当者が、鹿島出版会に入社したての、現編集長・相川幸二氏であり、私たちはすぐさま意気投合した。当時の長谷川愛子編集長には、「まったく、あなたたちは書きたい放題ね」とお小言をいわれもしたが、長谷川さん自身も若い私たちをそれなりに楽しみつつ、温かく見守っていてくれたように思う。

それ以降の24年間は、じつに頻繁に文章や作品を発表する機会を与えていただいた。おもなものを辿ってみると、自分自身の成長の軌跡が見えてくるほどである。ちなみに、八束はじめ氏が中心になってまとめた「現代建築の新思潮：フォルマリズム・リアリズム・コンテクスチュアリズム」(7803)や「新古典主義」(8103)では、ある程度まとまった量の原稿や翻訳をお手伝いしたが、これは本当に良い勉強になった。博士課程でコロンビア大学に留学している間、自分でもまとまったテーマで文章が書けるようになったころ、当時の伊藤公文編集長から「ニューヨークのアルデコ」(8301)の大特集への全面協力を依頼され、さらには私の発案で「アメリカン・ボザール1870-1940」(8311)という特集を組んでいただき、ちょうど学習していたことを絶妙のタイミングで発表できる機会をえることができた。のちには、都立大学の私の研究室で行った調査旅行の成果を、「大地と光の変様：オーストラリア建築1788-」(9604)でまとめていただいた。

作品発表でも「ノンシャランなフォルマリズム：小林克弘＋竹山聖によるコンペ応募案」(8709)では、アモルフ時代の作業をまとめることができ、「シリーズ：現代建築の新世代8小林克弘」(9502)では、飯島洋一氏の優れた批評と浅川敏氏の素晴らしい写真を伴って、当時の近作を発表できた。また、1991、92年に、若手建築家の最良の登竜門SDレビューの審査員をお手伝いできたことも、忘れ難い貴重な経験である。

このように、おもだったおつきあいを挙げるだけでも、大変な量になる。SDがなかったら、私自身の活動はずいぶん違ったものになっていたのではないかなと思えるほどである。私だけではなく、多くの方が、SDに育てられたと思うが、とりわけ私はSDから本当に多くの恩恵をえた。思うに、これほど、若い人材を起用する度量と懐の深さを持ち、かつ、きわめて広い範囲のテーマを扱えた建築雑誌はほかにないし、この先も現われないのではない。休刊を心から残念に思うと同時に、心からSDの果たした役割に感謝と賞賛の意を表したい。ぜひ近い将来、何らかのかたちで再興されることを、心から願っている。

(こばやし・かつひろ／建築家、東京都立大学教授)

SD, オーボワール

この夏、10年ぶりにロンドンを訪れました。話題の〈テート・モダン美術館〉を見るためです。Sir Gilbert Scott設計の火力発電所（1950）は野心的な美術館に変身していました。強靱な骨格の肉体が新しい洋服を着て旧い外套をまとったといった様子です。巨大なタービンルームはロビーに改修されて、世界各国からの来訪者でまるで見本市のようににぎわい、展示室も人であふれ、さまざまなお国ぶりの英語が耳につきましました。強烈な作品に対する反応が思わずお国訛りになったのでしょうか。刺激的な数々の現代美術作品に囲まれて、基軸言語としての英語という存在の現実を知り、もし建築美術の基軸言語があるとするれば、それは何なのか考えてみました。

SD創刊のころ1960年代は、まだまだいわゆるインターナショナルデザインの影響の強いなかで、ようやくモダニズムの流れが現実のものとして建築美術の世界で顕著になってきた時代だったと思います。モダニズムの建築美術は世界各国で基軸デザインとして求められ通用しはじめ、初期のSDはその確かな編集方針によって幅ひろく造詣の深い展望を見せてくれました。基軸言語としての英語が同時に非基軸言語をさまざまに位置づけるように、基軸デザインもやがて非基軸デザインを構造的にかかえこむ世界になりました。SDもその後の流れのなかには、基軸的な存在のほかには非基軸的なものも広い視野のなかでとらえてきたと評価できるでしょう。建築や美術の豊かな資産は基軸的なものと非基軸的なものとの非対称性のなかにかくされていることをSD36年の歴史のなかに見出すことができますが、創刊のころ編集顧問として参加した会議での多彩で活発な談論とともに私にとっても忘れがたい思い出です。

SDの評価と位置づけについて、素人のこじつけとは思いましたが基軸言語をとりあげてみました。さしずめあまり将来に希望がもてないエスペラント語をバウハウスのインターナショナルリズムと位置づけてみると、ローマの滅亡後でさえ、千年ものながきにわたって基軸を保ったラテン語のように、モダニズムの流れは21世紀のデザイン基軸としてその位置を保っているのでしょうか。SDにそのあたりの方向を見つづけてもらいたいと思っていましたが、休刊にあたりここでは、“アデュー”ではなく“オーボワール”と言ってお別れしたいと思います。（しいな・まさお／建築家）

“不在”表現のメカニズム

「幅広いデザイン領域の事象を時代に即した切り口で取り上げ、ヴィジュアル主体の美しい誌面で紹介」してきたと、休刊の挨拶のなかでSD編集の意図と歩みが率直に表明されている。これをそのまま私のSD理解の言葉としよう。今、休刊という区切りをつけることになったのは、この国の今日の経済環境によるのであろう。しかし、それはSDだけの問題ではないから、それに特別の感想はないが、すべての領域の表現活動が向かいあっている時代の特徴に私は注目する。現代建築あるいはデザインの、この半世紀におよぶ広範な活動が豊饒あるいは饒舌な水準に達し、その表現技術が定常状態になって久しい。“時代に即した”情報伝達メディアは“自動的に”この定常状態を共有することになる。どこかの領域で、この事態に破れ目が現れ、その新しい切り口を手掴みにして発信できる日まで休刊するのは、積極的な“表現活動”といってよい。この場合の“休刊”は、休むという日常用語と同義語ではない。

西欧の芸術家たちが、ときに、それまでの活動を休止し、新たな表現の手がかりを見つけて新生のダイナミズムを描き出す。この“休止のメカニズム”はまだこの国ではほとんど理解されていないようだ。

「SDの36年と私」という要請された課題は、作品あるいは論文をSDに発表する機会が多くなかった私には、「創刊15周年記念号」（1979年1月）の〈久我山の家〉（1954）から〈上原曲がり道の住宅〉（1978）までの私の作品特集というひとつのことになる。長谷川愛子、伊藤公文、アートディレクター羽原肅郎のみなさんによる“美しい編集”に支えられたこの特集をもったことを今も私は幸いに思う。これにはひとつの小さいドラマが付随した。個人作品の特集はあとでハードカバー・シリーズになるシステムというのは知っていたが、私はそれを辞退した。月刊誌としてのある時点での鮮明な提起が実現した、ここで完結と私は感じたからだ。私の気が変わるのを期待し、長い間、みなさんは待った。しかし“月刊誌”のままで終了した。この編集が好きだった私の評価の、ひとつの“空間化”だった。

月刊誌SDが再刊されるとき、それはこの国の建築表現の新しい視野浮上のアナウンス。次世紀初頭の早い数字で発行されるその号を私は楽しみに待つ。

（しのはら・かずお／建築家、東京工業大学名誉教授）

時代を切り拓きつづけたSD

自分の学生時代、若いころは、SDをはじめ、建築雑誌の全盛時代で、そこからどん欲に知識や刺激を吸収することができた。SDの創刊は私が建築を学びはじめる4年前の1965年だから、その最初の時期にリアルタイムに接することはなかったが、バックナンバーを通して、その輝きにつねに触れていたのを懐かしく思い出す。

創刊号が、「イタリアの都市と広場」を特集し、そこに磯崎新氏の刺激的論考、そして私が後にイタリア留学に際して大変お世話になる田島学先生の魅力溢れるヴェネツィア論が掲載されていたことは、自分の進む道に大きな影響を与えてくれたように思う。

この機会に、創刊から自分がもっとも影響を受けた若いころのSDにもう一度、目を通して見て、その時代の先端を突っ走った軌跡のすごさに、改めて驚かされた。編集長・平良敬一氏の下、辣腕の若手編集者が顔をそろえ、さまざまなジャンルで活躍する錚々たる顧問の方々の名前が連なる。特集テーマをみると、今なお輝くテーマが目白押しだ。「スペインの建築と美術」では、美術史家の神吉敬三氏らが登場し、イスラーム文化との交流に光が当てられている。まさに、私自身が今、取り組んでいるテーマのひとつだ。「特集・東京——未来への指標」では、高山英華氏と経済学者・都留重人氏の対談、そして建築史家・内藤昌氏の「江戸と江戸城」が光る。SDの編集方針は、ジャンルをクロスさせ、社会に大きく開き、現実を見据えていること、歴史から発想を学び、ヴァナキュラーな文化にも関心を向けること、などが強烈に貫かれていたように思う。まさに近年話題を集めるテーマとしての「京都——保存と開発」や、サウンドスケープを先取りする「音と生活空間」が早くも特集されているのに驚かされる。

72年に長谷川愛子氏が編集長になってからも、その魅力的な編集方針は受け継がれ、広い視野から建築を問いつづけた。作家論が徐々に多くなったとは思いますが、歴史や文明批判、ヴァナキュラーな都市への眼差しも重視され、井口勝文氏の連載「史的都市形態論——トスカナのチェントロ」、畑聡一氏の特集「キクラデスの集落」など、私自身が大きな影響を受けた企画も多かった。

そんなSDに、幸い自分自身も何度もお世話になった。研究室で着手したイスラーム都市調査の最初の成果として、「マラケシュ物語——迷宮の中のパラダイス」(91年4月)を発表できたし、今年の4月には、特集「歴史的都市を読む」としてスペイン、トルコ、中国に関する調査の成果を大々的に紹介してもらえた。つねに時代を読み、建築界を大きな視野からリードしてきたSDが休刊になるのは、いかにも寂しい。だが、その輝かしい足跡はいつまでも建築を発想する原点として生きつづけるに違いない。

(じんない・ひでのぶ／イタリア建築・都市史、法政大学教授)

建築メディアの革新にむけて……

建築を中心にすえて芸術全般に眼をとどかせ、文化的な状況に鋭く切りこんでゆく。創刊当初3～4年のSDは、編集長・平良敬一さんの気迫と高度成長期の高まりが重なりつつ、従来にない雑誌を生みだそうと意気盛んなものがあつた。鹿島昭一さんを中心とする編集顧問会も、また少数精鋭のスタッフが集まる編集部も、みずみずしく前向きに機能していた。『建築』誌から移ってきた平良さんは、泰然自若として大局をまとめる理想的なディレクターだった。一方、建築界の人脈に通じ、きめ細かい気配りをするのが長谷川愛子さん。新しい動向を敏感にとらえようとする平昌司さんと、平くんが広げた風呂敷を几帳面に結び直し、整ったレイアウトをする山口尊敏くん。編集部の主役は、これらの人たちだった。

私は創刊以前から、編集顧問として相談に乗っていた。創刊後1年は、表紙デザイン・レイアウトともに平くんと凸版印刷A.D.の田辺輝男くんが中心になり、熱いデザインワークを行っていた。私の役割は、それに対していろいろ意見をいうこと。だが時に深く首を突っこみすぎることもあった。たとえば音の特集号(1965年7月号)では、当時交流があった作曲家・武満徹さんの「水の曲」をソノシートとしてつけることを提案し、実現した。武満さんは、水滴の音を細かく加工して、ミュージックコンクリートによる能の鼓の音色を生み出した。今のCD-ROMをつけるようなもの。このころの建築・芸術系の雑誌では珍しい出来事で、予想以上に大変なプロセスだった。だがこの号のあたりから、新しい方向性が定着しはじめたと思われる。

64年の秋に、私はウルム造形大学に招聘された。ドイツと日本を行き来しながら、表紙だけでなく、本文ページもふくめてデザインシステムを導入することを提案した。そこで翌年の66年から、スタイルを一新することになる。誌面の水平方向は10ptを標準にし、垂直方向は3行、4行というように、行を単位にして割付をする。当時としては画期的な割付のシステムだった。このグリッドは余白の割りだしや、表紙にまで及んでいる。さらに栗田勇さんの連載「幻の都市」では、活版が中心の時代に写植をつかう。大判の雑誌であるにもかかわらず、本を90°横に廻して読むという、珍しい形だった。同年3月号のローマの特集記事になると、20ページの全部を90°廻す……というレイアウトを試みたりした。

デザインをするときには、どの場合でも企画段階から著者である建築家や美術家たちと深く話しあい、彼らの考えのまるごとを形にして表現しきることを考えた。実現するためには、むしろ編集部が怠惰であってはならない。入稿の直前には、事務所での仕事を終えてから編集部に出かけてゆき、私も2～3日は編集部で徹夜したりした。とにかく建築雑誌の領域を大きくはみ出して、ユニークな問題意識をかきたてようとする困難な道のりだった。だが、当時の読者の意識を大きくゆさぶることになったと思う。

ところで、ほかの雑誌ではできない新しい試みを盛りこみ、その実践も試みつづけたので、やがて編集顧問会がふたつに割れてきた。林昌二さんは、きちんと置いて読める本じゃないといけないという。椎名政夫さんや松本哲夫さんは、前向きに行こう……と支援してくださる。とくに68年1月号の「浮遊の思想・原広司」で上下から読む表紙をつくり、本文も裏表紙の方から侵入する……というエディションをつくると、反対派が6割ぐらいになり、私が手を引くことになったと思う。まあ、激しくやりすぎたのだ……と思っている。5月に創刊された『都市住宅』の表紙を磯崎新さんとともに私が手がけるようになったことも重なって、SDの方は、表紙へのアドバイスを中心としたかわり方になっていった。鹿島出版会側の要望もあって、SDはその後、建築雑誌へと回帰してゆく。つまり第一期の役割を終えることになったのだと思う。これらのことを、いま、懐かしく想い出す……。 (談)

(すぎうら・こうへい／デザイナー、神戸芸術工科大学教授)

総合芸術誌の夢

SD創刊のころ、毎月のように開かれていた編集会議は、不思議な熱気に包まれていた。今から36年前のことだから、当然われわれはみな若かった。小学校以来の私の先輩である鹿島昭一氏をはじめ、参加していたのはみな30代であったろう。だがその熱気は、若さのためだけではなかった。従来になく新しい雑誌をつくろうという意欲が、会議全体の雰囲気をつわめてヴォルテージの高いものにしていてよかった。

私にとっては、「SD」という雑誌名がはなはだ魅力的であった。それは「空間のデザイン」であり、「空間とデザイン」という意味にも受け取れたが、いずれにしても、どちらも新鮮な響きをもった言葉として私を惹きつけた。美術史を専攻していた私は、日本の大学で美術史は文学部に属し、建築史は工学部で教えるという制度の不都合さを、フランスに留学してただちに思い知らされた。美術の講義は、まず建築の歴史から始まるのがつねだったからである。そして、絵画や彫刻と建築をひとつにつなぐものこそ「空間」であり「デザイン」という概念であった。この場合、「デザイン」の意味するところは、通常日本でグラフィック・デザインとか工業デザインと言うときよりも、もっと広く深い。

もともと「デザイン」という言葉は、イタリア語の「ディゼーニョ (disegno)」に由来する。したがって「ディゼーニョ」は今でも「デザイン」と同義だが、それだけではない。英語に取り入れられて「デザイン」となったこの言葉は、フランス語にも入りこんで「デッサン」となった。「素描」の意味である。つまり、かたちを生み出す構想力と、かたちを描きだす表現力とともに兼ね備えたものが「ディゼーニョ」にはかならない。『芸術家列伝』の著者で理論家でもあったイタリアのヴァザーリは、絵画、彫刻、建築をひとまとめにして、「ディゼーニョの芸術」と呼んでいる。

一方「スペース」も、日本語の「間」がそうであるように、「拡がり」として捉えれば、当然「時間」もそれに含まれるから、音楽や演劇も視野にはいつてくる。SDは当然建築を中心としながら、都市論や景観論の方にも広がっていけば、他方ジャンルを越えて他の芸術にも目配りを忘れない幅の広い雑誌にしたいと、私は思っていた。事実創刊当初には、展覧会評や演劇論なども掲載されていた。

もちろん、あまりに多くを望むといずれも中途半端になる恐れがある。SDがつねに新鮮な視点を保ちながら、次第に建築に特化していったのは自然の成り行きであったろう。しかし36年前のあの多面的な総合芸術雑誌への思いは、今なお見果てぬ夢として私のなかに残っている。

(たかしな・しゅうじ／東京大学名誉教授、前国立西洋美術館館長)

SDの休刊に向けて

毎月読ませていただくことを楽しみにしておりましたSDが休刊されるとお聞きし、驚いております。貴誌が果たしてこられた役割は、建築を建築の範囲にとどめず、創造の営みとしてとらえることで、ともすれば現実社会から遊離しかねない建築家の活動に根を与えてきたといえるでしょう。私もまた、SDという場をお借りして、作品やコンセプトを発表することにより、私自身の役割や考えを再確認する機会が与えられました。

私は建築家の職能が、社会の信頼を得るに足るものとして認知されることを常に意識してまいりましたが、貴誌がその働きを深く広く知らしめる媒体としての重責を担い、建築文化の質の向上に貢献されてきたことを思い、実に残念な気持ちであります。

また、工業化社会から情報化社会へ、時代の移り変わりとともに成長する都市を見つめ、それにふさわしい表現を探りつづける貴誌により、どれだけ多くの建築家が新しい手法や視覚言語の刺激を受け、そのデザイン・ランゲイジを構築してきたことでしょうか。建築や空間から発信されるメッセージを、真摯に伝えてこられたその働きはなにものにも代えがたいものです。新しい建築についてはもちろんのこと、建築に関連するさまざまな分野の特集から何気ない記事にいたるまで、世界各地で仕事をしてまいりました私もおおいに関心をそそられるものが少なくありませんでした。新しい世紀に向けて新しい価値観が模索されるなかで、貴重な灯火を失うような気がいたします。

私の作品を5回にわたって特集していただいたことも、懐かしい思い出であり、深く感謝しております。写真の選択やトリミングの指定、あるいは校正刷りの修正などを編集のみなさまと直接させていただき、ご苦労をおかけしましたが、熱心な対応とその出来映えには常に満足しておりました。

6回目の特集号の出版は当面むずかしいようですが、ご関係のみなさまのこれまでの経験を日本の建築、都市のさらなる発展のために活かされることを期待しております。

(たんげ・けんぞう／建築家、東京大学名誉教授)

開かれた建築ジャーナリズムを

アトリエの図書室にSD創刊号から揃っていますが、よく読んでラインを引き汚れた号と、まるで読まなかったかのようにきれいな号とが混ざって並んでいます。原研究室の世界の集落の本はよく手にしましたし、実際にアフリカの集落を訪れる旅をした号はボロボロになっています。SDが届くと、東京大学の大学院生たちのグルッポ・スベッキオが軽妙でうまい語り口で書いていた「国内建築ノート」をまっ先に読んだものでした。竹山聖さんや隈研吾さんのインタビューを受けましたが、20代のこれらの建築家たちを知る面白いチャンスでした。やがて「海外建築情報リミックス」に変わりましたが、そこでも若い人たちの執筆がつづき、この欄を通してやはりこれからの建築家の名を知ることに、引きつづきよく読みました。

SDではたくさんの建築家の作品集も丁寧につくられました。私も85年4月と95年11月の2冊を出版させていただき、スタート時からの作品をすべて網羅して自分の仕事の履歴を残せたことは、SDのみなさまの大きなご支援のおかげと感謝しています。2冊ともテーマを掲げての編集というより、75～85年、85年～95年と各10年の仕事のすべてをまとめるという内容でした。その後の5年間、〈新潟市民芸術文化会館〉をふくむ1995～2000年の仕事をまとめた本がNAiから『Island Hopping』というタイトルで10月末に出版されることになっています。〈新潟市民芸術文化会館〉は、何よりも私の一番大切なものになったと確信しているため、ぜひSDにも発表したいと願っていましたが、結局かないませんでした。建築雑誌は、編集人の方針によりまとめられるものです。私はこの10年くらい、発表のチャンスがスムーズに開かれていないもどかしさを感じてきましたが、それは日本の編集人の評価とずれていることを意味します。とくに〈新潟市民芸術文化会館〉は、外国の建築雑誌には多く掲載されましたが、日本では限られた雑誌の発表となりました。公共建築に対するアレルギーでしょうか。昨今、建築メディアが作品発表の場としてうまく機能していないと感じているのは、私だけではないようです。

この夏ハノーバーとカッセルでの私のレクチャーの会場で、ある都市計画家は篠原一男の住宅とドイツ雑誌にでていたアトリエ・ワンの〈ミニハウス〉を比較して、「若い建築家は東京のカオスに荷担し、日本でしか通用しない建築をつくっている。国際性を失いつつある」と批評されました。日本では、雑誌だけではなくさまざまなイベントでもこの〈ミニハウス〉のシュミレーションが支配的であることは外国にも伝わっています。こうしたことだけではなく、eメールなどのネットワーク化で私たちの生活が変化しだしているなかで、生活におけるパブリックとプライバシーのあり方が改めて問われだしています。建築についてのコミュニケーションが必要なときであり、今こそ開かれたジャーナリズムが求められると私は考えます。

(はせがわ・いつこ／建築家)

「デザインエディター」の10年間（1974～84）

今思うと幸いにも私は、このSDの創刊号、1965年の1月号に寄稿した。それは当時編集部員のひとりであった中村敏男氏の知人であったからだと思う。SDの創刊には方々から編集者が集められた。中村氏はそのとき確か『近代建築』という雑誌の編集長だったかと思うが、SDの、その理想的なエディター・シップに共鳴して移ってきたのである。発刊準備の数ヶ月の間、何回かお会いして氏の新しい雑誌への情熱を聞いているうちに、この私も結果的にいうならば終頁に近いコラム欄にニュースのようなエッセイのようなものを書いた。それは「ビジュアルデザインという文化について」という表題である。新しいテクノロジーの時代に向かって、日本人の感覚、日本語（漢字・ひらがな・カタカナ、タテ組・ヨコ組、等々）の課題と、ビジュアルデザインの美的価値観の文化としての重要性認識へ向けての提案であった。現在、ビジュアルデザインの美的価値観の認識は十分に達成され、日本のグラフィックデザインは世界屈指の成果をあげている。しかし、日本語そのものは、コンピュータの出現によって、そのデザインの構成の秩序は混乱に向かっていると思うが、どうだろうか。

1974年の秋から、幸いにも実際にSDの編集員のひとりとして協力するようになる。1975年5月号より「デザインエディター」と称して、1984年9月号まで務めた。デザインエディターという呼び名は当時、いや今でもほとんど使っている人はいないのではないだろうか。それは、アートディレクターだけではない実際の編集作業も行う者として、私が思考した名称である。アメリカの『ヘラルド・トリビューン』紙の「ニューヨーク」という日曜版にピーター・パラゾー（Peter Palazzo）というデザインエディターがおられるということは、後で分かった。こういった新しい試みができたのも、SDという正統なる前進前衛を思案しようとしたことが根本にあったからではないだろうか。

1977年の新年号では、1月号と2月号の合併号というのを発刊した。それは、アルヴァ・アアルトの特集であったが、単に2ヵ月分を一緒にすれば良いというものではなかった。毎月予定されている広告のこと、月刊誌を配本する取次店の手配、用紙や印刷所の日程などに、長谷川編集長、生田目武久氏をヘッドとする当時の編集部の緊張した空気は、今想起しても鳥肌が立つといって過言ではない。

デザインエディターといっても主としてレイアウトにもっとも力を入れたと思う。それは、誌面にポイントを規準にしたグリッドを敷いて、それに則して記事を構成する、いわゆるひとつのシステムである。また、活版印刷からオフセット印刷への変動期であり、その両者のもっとも基本的な実務と、最高の技術と最新のシステムを体験体得できたことは、じつに充実した期間であった。

(はばら・しゅくろう／デザイナー、明星大学造形芸術学科教授)

SDの36年と私

ほんの昨日のことのようには思いますが、じつはもう36年も昔のことでした。SDが創刊された1965年とはどういう時代だったのか、改めて思い出さなければなりません。前年の64年秋には、オリンピックがあり、東海道新幹線が走り始めるなど、日本は華やかな気分には包まれていましたが、小生にとっては、64年夏から〈パレスサイドビル〉の工事がはじまっていたため、超短期の工程に合わせて設計図をつくりあげる、熱い日々がつづいていました。

鹿島昭一さんが雑誌を出すという噂は、前年から伝わっていました。雑誌『建築』から移られた平良敬一さんと長谷川愛子さんが中心となり、内田祥哉、高階秀爾、杉浦康平、山本学治、穂積信夫、松本哲夫といった面々が顧問に並ぶと聞けば、雑誌の充実ぶりが想像されます。呼ばれて参加した顧問会議は、予想通り痛快な議論の場でした。

誌名の「SD」を聞いたとき、私はなぜか、『工芸ニュース』を思い浮かべました。それは74年に廃刊された、薄手ではあっても、お役所仕事と思えない洒落たデザインの雑誌でした。しかし創刊されたSDの印象は、私の勝手な想像とは違って、サーリネンの作品論、ヴェネツィアや東京の都市論などが並ぶ、建築寄りの堂々たる雑誌でした。今から思えば60年代は日本近代建築の絶頂期でしたから、鹿島さんが、納得のいく建築の雑誌を出そうとされたのも当然のことでした。とはいえSDは「建築と芸術の総合誌」をうたっていましたから、建築の全領域をカバーするには無理があったのか、68年には『都市住宅』が発刊されています。植田実さんの手になるだけあって、時代に先駆けた見事な雑誌でした。86年12月に、惜しくも消え去りましたが。

改めて雑誌の寿命というものを考えさせられます。世の中は変わり、読者は世代交替し、編集者も年齢を加えますから、いつまでも同じ調子の雑誌ができるわけではないのですが、しかし読者にとって長年親しんだ雑誌と別れるのは、友人を失うに似た淋しいことです。廃刊後しばらくすると検索が難しくなり、さらには存在自体が忘れ去られてゆきます。

幸いにもSDは廃刊ではなく「休刊」だと聞きました。若い建築家たちに人気のあるイベントSDレビューはこれまで通り続行されるそうで、その記録のためにも一年に一度は形を変えたSDが刊行されるものと想像します。

建築のメディアは日刊の新聞から週間、隔週刊、そして月刊とさまざまでありますが、不思議に年刊のものがありません。毎月沢山の建築物がページを埋めつくす時代はもう終わりますし、誰の書棚も満員で悲鳴をあげている現状ですから、充実した年刊ものが出ればきっと歓迎されます。

休刊にあたり、長年にわたり貴重な記事をつくりつづけてくださったみなさまに、一読者として、改めて感謝を捧げます。

(はやし・しょうじ／建築家)

個人史の部分としてのSD

SDには長年にわたって、たいへんにお世話になりました。心から感謝しております。

SDが発刊されたあたりの興奮は、若いころの私にとってはたいへん重要な建築的契機でした。平良敬一、長谷川愛子、植田実といった、私の大切な先輩と友人が、雑誌『建築』から、SDのために移ってゆき、やがて植田さんが編集する『都市住宅』誌も登場してきます。長谷川さんとは、東京大学でともに内田祥哉先生の教えを受けましたので、初期のメンバーの新しい活躍は憶えております。

個人的な記憶では、いくつかの出来事があります。まず、杉浦康平デザインによる特集「浮遊の思想」(1968年1月)。これは表からと裏からでは、逆さまになった編集で、もちろん朝日新聞をはじめ、たいへん話題になりました。杉浦さんと私が悪のりして、平良編集長はじめみなさまにたいへんご迷惑をかけました。でも、あのような本は二度とつくれないでしょう。大事に至らなかったのは、通常よりたいへん確実な編集をみなさまがつづけていらしたからだと推測します。

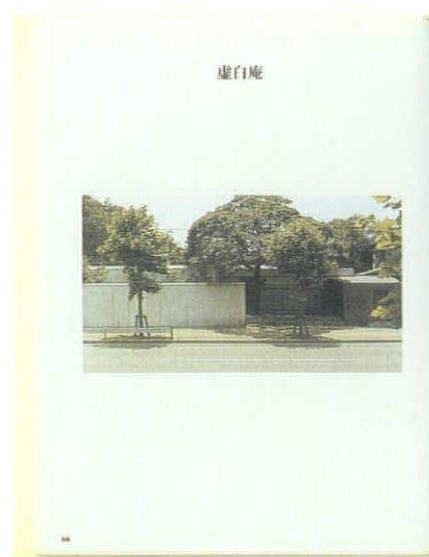
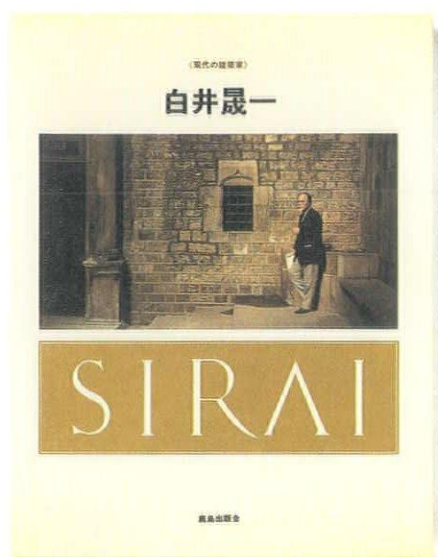
そういえば、寺山修司、宇佐美圭司、高松次郎とSD誌上で話しをしたときの写真をいただいて、子どもたちの私に対する評価が上がったものですが、それも、SD初期のころでした。『都市住宅』とあわせて、とくに勢いがありましたね。

つぎに、別冊『住居集合論①～⑤』。この本はもう手に入れることはできないでしょう。70年代の5回の世界の集落調査とその報告は、SDのおかげでした。1年間は調査と準備、もう1年間は本づくりと、このサイクルを5回行ったのが私の70年代です。おそらく、この5冊は、100年くらい経ちますと、歴史的価値が出てくると確信しております。世界各地で近代化がすすみ、集落も消えるでしょうから。当時は、日本での世界の集落調査などはありませんでしたので、研究費など出してくれるところはありません。はじめのころは、私も大学の休暇をとり、いつでも辞表を出すつもりで調査に出かけたような状態でした。別冊の原稿料の前払いをいただいて出かけたのですが、経済的な支えになりました。SDがなかったら、集落調査はつづかなかったでしょう。

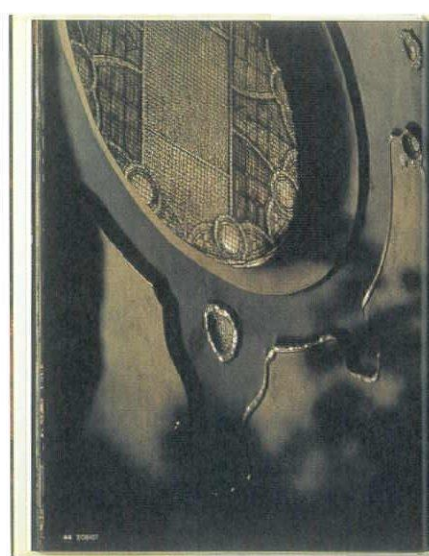
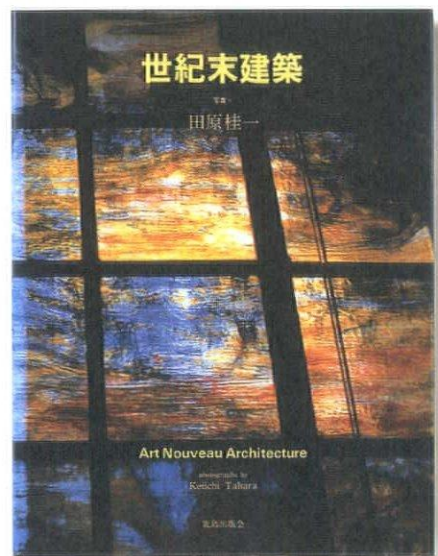
長谷川編集長の時代にはじまったSDレビューのお手伝いもしました。安藤忠雄さんも加わっていたのですが、すぐに帰ってしまるのが印象的。けれど、個人的にはたいへん重要な話を聞いてもらいました。SDレビューでは、妹島さんの登場が印象的で、はじめのころは少女趣味のような感じを受けましたが、だんだんと凄味をもちはじめました。相川編集長の時代も、SDレビューはだぶっていますが、その後私の作品集もつくっていただきました。

つまり一言であらわせば、SDは私の個人史にとって不可欠であったのです。本来なら、大局的に結語を書かねばならないところですが、強い愛着の情があるために、このような文章になりました。

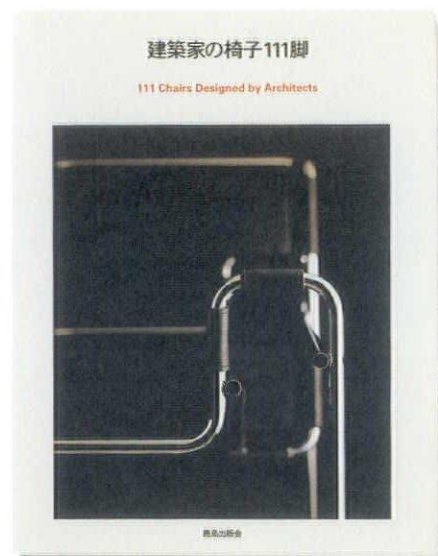
(はら・ひろし／建築家、東京大学名誉教授)



《現代の建築家》白井晟一（カバーデザイン＝羽原肅郎、1977年4月、本誌7601号）



世紀末建築（写真＝田原桂一、カバーデザイン＝羽原肅郎、1985年7月、本誌8407号）



建築家の椅子111脚（監修＝光藤俊夫、編集協力＝羽原肅郎・河合俊和・織田恵嗣、カバーデザイン＝SD編集部、1997年4月、本誌9606号）

これから建築は
人のこころを熱くすることができるのか

1964年、オリンピック東京大会開催のため、羽田空港は拡張、首都高速道路など完成、新幹線の開通と人の移動が早くなったが、そうだからといって気楽に建物を見て歩くことのできるような時代ではなかった。そのころ、鹿島出版会ではSDの企画について議論がかわされていた。建築の月刊誌だからすぐ思いつくのは読者にかわって最新の作品を追うニュース情報誌である。だが、そうはならなかった。

人は建築のどこに惹かれるのか。魅力の源はよくわからないまま、その周辺を手探りで進むことになった。取材の範囲が広がりすぎて、平良敬一編集長や長谷川愛子さんを中心とする創刊当時の編集陣は、自らまいた種とはいえ、それからずっと苦勞することになる。

だんだんわかってきたことは、魅力のかなたに見え隠れする、美と気品に手品の種があるらしいということであった。この手品の種あかしとしてときどき外国の情報ものゝるが、必ずしも新しいものばかりでなく、途方もなく古いものや、なにげない街のたたずまいであったりする。

本の体裁が話題になったこともある。杉浦康平さんがポケットにはいる大きさがいいといいだしたのである。通勤や旅行のお供に良い。おまけに、本をはさんでふたりで読むようにしようという。さしずめ炬燵に差し向かいの情景である。これが実現していたら36年もったかどうか。だがこの提案のショックでいろいろな発想が柔軟になったようである。

建築の魅力を伝える手だてはいろいろあり、当時は力まずとも人々は建築に引き寄せられてきた。今はどうであろうか。18歳の人々が2/3に減っただけでなく、若者がITやナノテクノロジーなどに惹きつけられ、建築への志望者はどんどん減っている。専門誌が仲間のなかだけで話題になっているようではだめで、若者の間で建築が熱く語られるようになりたいものだが、さてどうしたものだろう。

19年前からSDの副産物としてSDレビューがつくられ、作品の展示と賞が若い建築家の注目の的となった。秘術をつくした愛すべき模型は、作品が展示された代官山のおしゃれな通りを行き交う人々をも惹きつけたのである。

SDはその時代の使命をおえて休眠に入るといふ。しかし、SDレビューは鹿島昭一さんの英断によりつづけられることになった。いま必要なのは専門誌よりも多くの若者へのよびかけだという気持ちからいえば、この英断がなにより救いの手だ。これからの出展者は、今年の審査員のひとり芦原太郎さんがいうように、仲間うちの語り口に粋を凝らすよりも一般の人の目を吸い寄せるような表現を工夫してもらいたい。そのなかにいる若者の何人かはきっと建築の魅力のとりこになり、熱っぽく建築を語るようになるにちがいない。

(ほづみ・のぶお／建築家、早稲田大学名誉教授)

SDと私

SDは今年でちょうど36年目になったという。長かったなあと思う。なぜなら私自身が海外生活に一応の区切りをつけて東京で設計事務所を始めたのが、SDが創刊された1965年だからである。長かったというのは個人的な実感なのだ。

考えてみるとアトリエ的な設計事務所と、SDのようなこじんまりした雑誌には多くの共通点があったと思われる。どちらも限られた人々のアイデアとロマンから自分の小宇宙を描き出す作業である。2次元と3次元の差はあっても、明確な志が存在しなければならぬし、描き出す世界の表現にスタイルがなければならない。何よりも時代の精神みたいなものがそこに敏感に反応していく必要がある。絶えずデッドラインがあり、追い込みがある。

このような親しみ、懐かしさをもって比較できるのも、SDが始まる以前からあった鹿島昭一氏や長谷川愛子さんとの長い交遊を通じるところが大きかったと思う。平良敬一さんや長谷川さん以降の編集長も含めて、編集者の顔によってイメージできる雑誌があるということは本当に幸せだった。

個人的な思い出といえば、SD Reviewと《現代の建築家》シリーズが一番大きな接点であった。SD Reviewについてはほかの機会に何度も述べるがあったので、ここでは触れないが、《現代の建築家》シリーズは今年の1月号で4回目の登場をさせていただいた。今、この文をしたためているちょうど目の前の本棚に、第1回目からの白いハード・カバーも含めてその4冊が並んでいる。これはまさに私自身の建築家としての里程碑でもある。多くの編集の方に随分わがままをいいながらできた4冊のシリーズは、いわばSDとの協同作品といってもよい。あらためて編集のみなさんに感謝の意を表したいと思う。

月刊誌SDは36年目で一時休刊になるという。しかしその存在のイメージがまだ読者の脳裏に鮮明に残されつつ終わるということは、別の言葉でいうならば、ひとつの歴史がここでがっかりとつくられたということにほかならない。みんなでその歴史の記憶を大事に守っていききたいと思う。

(まき・ふみひこ／建築家)

IDとSD

創刊1年前の1964年春、関口台の鹿島邸に、のちにSD編集顧問になる人々が集った。

創刊時の編集スタッフとなる平良敬一さんと長谷川愛子さんに声をかけられたのは『建築』誌でIDのコラムを持って以来のおつき合いがあったからか、私もそのひとりであった。この年、剣持デザイン研究所は11月1日オープンの京王百貨店で大忙しの年、東京オリンピックの年でもあった。

会合では、新雑誌の性格づけが議論されたように思う。たとえば、総合誌の『世界』『展望』『中公』のように依って立場を明確にするとといったようなことを話しあったおぼえがある。スペースデザイン(SD)という名称は、芸術と空間の総合という思潮が底にあると考え、都市、建築、デザインおよびその他の諸芸術の領域での空間概念やイメージの共通、類似、連続、等々の性格を確認しつつ、われわれにとっての空間像を探ることを目的としたように思う。それは集合した編集顧問の顔触れを見れば一目瞭然である。

創刊からSDコラムが存在するのも、ID、クラフト、インテリア、美術、演劇、音楽、建築、都市計画、等々の専門家に開いた窓口により多くの執筆者の意見を集めて、新しい空間像を探る手段であった。私がおもしろかったのは、執筆前にその号のコラム担当メンバーが集って、何を問題に書くかを開陳して、話しあいながら自分の考えをまとめることができたことで、貴重な経験であった。65年6月号で、新幹線の椅子について、人間工学の成果の適用を記述した結果、小原二郎教授(当時千葉大学)との長いつき合いがはじまったこと、そして国鉄、JRと車両デザインに関係するきっかけにもなった事実も忘れられないことである。

71年6月、剣持勇が自ら命を絶ち、その年の12月号に、剣持の特集をしていただいたとき、宮内嘉久さんが文章中に「時務に殉じた剣持勇」と書いてくださって、彼の死に納得がいったのもSDのおかげと言ってよい。コラムからSDクローズアップとなったがこれを執筆することで、物の見方を変化させたり、周知のものと思っていた事柄に新しい発見があったり、私自身のデザイナーとしての眼が養われていったと考える。

60年代なかばからスタートして、日本経済の盛衰と、モダニズムの陰りからポストモダニズムの一瞬の光芒、そして永くつづく混沌の時代を駆け抜け、20世紀末に36年の幕を降ろすのは残念ではあるが、幕間の短からんことを願うのみである。

(まつもと・てつお/デザイナー)

SD Reviewのはじまり

SD発刊当時の新鮮な衝撃については、きっと多くの人が語ってくれるだろうから、私はそれから17年後、1982年のSD Reviewスタートあたりのことを話そう。

当時ヒルサイドテラスでは、ギャラリーなどパブリックスペースの使い方について、オーナーである朝倉さんとその関係者たちが方向を模索していた。そんななかで、横文彦さんが「建築の展覧会を定期的にやったらどうか」と提案された。

「PA (Progressive Architecture) のDesign Awardのような、実際に建つ建築のコンクールがいい、すぐにSDに話してみよう」とアイディアをどんどん具体的に進める。横さんが当時編集長の長谷川愛子さんと交渉し、あつという間に決まってしまった。名前も横さんから「本当はPreviewが正しいのだけど、語呂よくSD Reviewがいい」と、これもすぐ決まる。そして「後はよろしく」とバトンを渡されてしまった。何かを確信したときの横さんの加速のよさは、よく知っているつもりだったが、このときばかりは少々驚いた。

審査委員は委員長の横文彦と鈴木恂、布野修司の各氏、それに立ち上げの軌道に乗せるべく私に加わった。応募規定の枠組みもプレゼンの条件も、今とほとんど同じ。それは最初の案がよくできていたからというより、ほとんど規定らしきものがなかったためである。この構えないフランクな態度と自由さがその後のSD Reviewを性格づけた。

心配した応募作品も60数点集まり、ほっとする。審査はどんな建築になるのかの期待を込めて行われた。

私の重要な役割は展示である。会場がヒルサイドのなかの2ヵ所に分かれる。横事務所時代にデパートの展覧会の会場構成を2回やった経験だけを頼りに、パネルや展示台を制作してもらい、照明器具も借りて、何とか会場らしくしつらえた。展示もSDの編集スタッフを中心に私の事務所のメンバーが助っ人に出て深夜までかかってセッティングをした。今振り返ってみると、全体にどこか学園祭風なのが少し恥ずかしい。展示の素人臭さをカバーしてくれたのは、作品の出来のよさだった。とくに、鈴木了二さんや小宮山昭さんのアートの迫る模型の力が緊張感のある会場をつくってくれた。12月にはじめてのSDレビューの特集号が出たときには、とても誇らしく感じた。

今気がついたが、これは貴重な出会いだった。SDの建築、アートそして文化全体につながる視野の広い自由さと、ヒルサイドテラスの関係者の良い意味でのルーズな自由さが出会い、横さんというイメージの豊かな錬金術師によってかたちを与えられたのがSD Reviewであった。そして今年で19回を重ねたが、日本ではめずらしく権威的にならずに、コンクールという名を借りた建築家を中心としたアーティストの集いとしてつづいていることは貴重である。そして、この創造的な自由な空気が保たれる限り、SD Reviewはつづけていく意味があると思う。(もとくら・まこと/建築家、東北芸術工科大学教授)

SD 0012	SD Year 2000	建築の発展と都市の発展 SD Year 2000 30th Anniversary	SD Year 2000 International Association of Architects and Engineers
SD 0011	エー・エー・センター・デザインの可能性 建築の発展と都市の発展	エー・エー・センター・デザイン 建築の発展と都市の発展	エー・エー・センター・デザイン 建築の発展と都市の発展
SD 0010	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0009	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0008	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0007	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0006	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0005	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0004	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0003	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0002	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展
SD 0001	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展	建築の発展と都市の発展 建築の発展と都市の発展

SD2000年バックナンバー（表紙デザイン＝山口信博）

0001 特集 横文彦 1993-1999

- 006 建築とコミュニケーション 横文彦
- 008 スケッチ
- 014 鳥取県立美術館／ヴォサーリ・ニュータウン高層住居／デュッセルドルフ港のオフィスビル／海のミュージアム／ザルツブルグ・コンGRESSセンター／MIT新メディア研究所
- 026 対談：街並みとしてのヒルサイドテラス／ウェストの解説
門内輝行×横文彦
- 036 ヒルサイドウェスト／風の丘葬斎場／浮かぶ劇場／東京キリストの教会／YBG芸術センター／イザール・ビュロー・パーク／幕張メッセ新展示場・北ホール／富山国際会議場
- 104 アーバン・デザインにおける建築の探究 デイヴィッド・B.スチュワート
- 116 建築——空中に遊ぶ身体を表明するひとつの詩法 富永譲
- 124 名取市文化会館／霧島国際音楽ホール／慶應義塾湘南藤沢キャンパス 大学院研究所／慶應義塾湘南藤沢キャンパス セミナーゲストハウス／福岡大学60周年記念館／神奈川大学16号館／YKK R&Dセンター／ノバルティス ファーマ筑波研究所／横浜市緑原地区センター・地域ケアプラザ／中津市立小幡記念図書館／福井県立図書館・公文書館／福島県女性総合センター／新潟国際コンベンションセンター／横浜ベイサイドタワー／テレビ朝日新本社
- 168 ディテール：透過性のある表層の表現
YKK R&Dセンター／慶應義塾湘南藤沢キャンパス 大学院研究所／東京キリストの教会／ヒルサイドウェスト／富山国際会議場
- 192 作品データ
- 196 プロフィール 1993-1999

0002 特集 コミュニケーション・キッチン

- 006 鼎談：キッチンが喚起する住宅のなかのコミュニケーション
黒田秀雄×葛西潔×東利恵
- 009 事例12作品紹介
[中井の家] 室伏次郎／スタジオアルテック、[A LITTLE HOUSE] 白川直行アトリエ、[保土ヶ谷の住宅] 佐藤光彦建築設計事務所、[西荻北の家] スタジオナスカ、[葉山の海荘] 杉原建築デザイン事務所、[西六郷の小住宅] オムニバス／石上申八郎、[柏の家] 木型屋のむすめの仕事部屋、[木箱210] 葛西潔建築設計事務所、[中央区勝どきM氏邸] 佐々木正明建築都市研究所、[あざみ野の家] 増田政一／アルクデザイン、[成城の家] 伊東寛アトリエ、[私の家] 阿部勤／アルテック
- 043 キッチンのスグレモノ
- 045 収納設計の極意 下島資子
- 049 国産キッチンメーカーが提案するシステムキッチンの最新動向
松永信子
- 057 世界のキッチン 写真＝木戸明
- 061 海外メーカー動向：自立するキッチン
- 065 業務用キッチンSDセレクション
- 067 新しい時代のキッチン空間を考える 黒田秀雄

0003 特集 リカルド・ボフィール 1995-2000

- 006 都市の意味を問い直す リカルド・ボフィール 訳＝古谷和仁

- 010 [バリバ・マルシェ・サントノーレ]
- 018 [カタロニア国立劇場]
- 026 ふたつのアイデンティティ 飯島洋一
- 028 [サルダナ・アトリウム]
- 036 [カサブランカ・ツイン・センター]
- 044 [モンペリエのオリンピック・プール]
- 050 [明治生命青山パラシオ]
- 054 透明なモニュメンタリティ 櫻井義夫
- 056 [マンザナレス川のリニア・パーク]
- 059 [カステラーナ通り延長計画]
- 062 [バルセロナ新港“ノヴァ・ボカナ（新しい口）”]
- 066 [ボローニャ中央駅]
- 070 [プロジェクト2000]
- 072 [資生堂新銀座ビル]
- 076 「THE CLASH OF CIVILIZATIONS／文明の衝突」のすすめ
志村直早
- 078 [リカルド・ボフィール自邸]
- 083 主要作品リスト

0004 特集 歴史的都市を読む フィールドワークによる都市解析

- 監修＝陣内秀信
- 006 対談：フィールドワークから見えてくるもの
長尾重武×陣内秀信
- 011 写真構成：歴史的都市の風景
- 017 天空に開くパティオの街 [アルコス]
法政大学陣内研究室＋禪野美帆
何故、アルコスか／重層する斜面都市／アルコスの中庭型住宅と街区の構成／地区の構成／住宅の空間構成
- 037 もうひとつのイタリア [フェラーラ]
柳 智子＋武蔵野美術大学長尾研究室
もうひとつのイタリア／都市のイメージ／都市を読む／都市南部の形成／都市北部の形成／都市の変容／都市の原点／現代の計画
- 053 トルコのキャラバン都市 [ギョイヌック]
法政大学陣内研究室＋鶴田佳子
トルコのキャラバン都市／風景のキーワード／エリア別紹介／住宅と敷地の構成手法
- 077 重層する中国近代都市 [厦門] 恩田重直
厦門の魅力／中国都市の近代化と厦門／イレギュラーな中国都市——旧市街の空間構成／近代の都市改造／多層的な都市空間／変わりゆく風景

0005 特集 ヒューマノイド・インターフェイス

- 編集協力＝小田切博＋深山美都里＋竹村真一
- 009 プロローグ：メディアから生まれてきたロボット
文＝小田切博＋深山美都里
ガンダム20周年という現象／「つくる喜び」とそれが媒介するコミュニケーションの可能性／人の相手をする人工知能：パッチャル・エンターテインメントの仕掛け／人の相手をする人工知能・個人所有されるロボット
- 027

- 030 ヒューマノイド・インターフェイス
ヒューマノイド・プロダクト 小田切博
[SIG]北野共生システムプロジェクト／ヒューマノイド・ロボットの開発研究／次世代情報工学のプロダクトデザイン 松井龍哉
- 038 今月の演劇「バラリンピア」
文＝高羽泰雄 イラスト＝ワキサカコウジ
- 040 国際ロボットデザイン委員会 松井龍哉
- 041 「進化するロボットとの共生」 中嶋 泉
- 042 サイボーグ・インターフェイス 竹村真一
[人工心臓] 川崎和男／[没入型VR環境「CABIN」] 廣瀬通孝／[人工細胞デバイス] 生田幸士／[リアルタイム・リモート・ロボティクス] 館 暲
- 047 日常に浸透し始めた新技術：身体拡張を支援する機械 清水直子
- 049 対談：拡張する身体、変化するテクノロジー
川崎和男×竹村真一
- 052 知性化するインテリア 小田切博＋深山美都里
[ロボティック・ルーム] 佐藤知正／[タマ] 松下電器産業／[パーソナルロボット R100] NEC／[ガードロボ C2] 総合警備保障／[SECOM AX] SECOM
- 057 デザイナーズ・インタビュー：インターフェイス・デザインの必然性 構成＋文＝岡 正明 インタビュー＋文＝元永二郎
- 062 タンジブル・ビット：人とデジタル情報と建築空間のシームレスなインターフェイス 石井 裕
- 066 思考するシェルター：建築設備の遍在化
高草大次郎／デザイン・スーヴ
- 068 身代わりのメカトロニクス
身代わりとしてのロボット 中田 薫／[粘菌型ロボット] 嘉数 侑昇 文＝竹村真一
- 073 Robot-ism 1950-2000 鉄腕アトムからAIBOまで 深山美都里

0006 特集 クライン・ダイサム・アーキテクツ

- 006 際立つウィット 伊東豊雄
- 025 トーキョーというシーンをつくるクリエイター 渡部千春
- 026 いま、ここ、ということ クライン・ダイサム・アーキテクツ
- 028 [Vroom!]／[ピカピカPRETZEL 仮開い]／[ブリティッシュ・カウンスル・インフォメーションセンター]／[かんぱんshelter]／[ギャラリー住宅]／[ファッション・コマンドー]／[UK98 バビリオン]／[東京国際都市博覧会]／[大岡早苗美容室銀座店]／[ヨーガン・レール・ショップ]／[U-Project]／Other Projects
- 056 KDa Web
- 060 KDaのすべて
- 062 KDa too...
- 064 What's DELUXE
- 066 クライン・ダイサム・アーキテクツのデザインの魅力 萩原 修
- 070 アストリッドとマークのデザイン 西沢立衛

0007 特集 ツール・ド・ロマネスク

- 企画協力＝櫻井義夫 写真＝堀内広治
- 006 巡礼者のロマネスク教会 櫻井義夫
- 008 route de Vezelay ヴェズレー⇄ボー
ヴェズレー [サント・マリー・マドレーヌ聖堂]／ディジョン [サン・ベニエニュ修道院]／トゥルニユ [サン・フィリペール教会]／ベルゼ・ラ・ヴィル [修道院礼拝堂]／バレー・ル・モニアル [サクレ・クール聖堂]／クリュニー [サン・ピエール・エ・ポール修道院]／オートン [サン・ラザール大聖堂]／ペリグー [サン・フロンド大聖堂]／ペリグー [サン・テチエンス・ド・ラ・シテ教会]
- 022 ミレニアム（千年紀）と巡礼路教会堂 羽生修二
- 024 route de Tours バリ⇄トゥール⇄ボー

- モントワール・シュール・ル・ロワール [サン・ジル礼拝堂]／ラヴァルダン [サン・ジュネ教会]／サン・テニャン・シュール・シュール [サン・テニャン僧会教会]／タヴァン [サン・ニコラ教会]／ボワティエ [ノートルダム・ラ・グラント僧会教会]／シヴレー [サン・ニコラ教会]／サン・サヴァン・シュール・ガルトン [サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院]／オネー [サン・ピエール教会]、他
- フランス・ロマネスク壁画展望 長塚安司
- 034 ノルマンディー・ロマネスクの村 田窪恭治
- 045 route du Puy ル・ビュイ⇄ボー
- 046 ル・ビュイ・アン・ヴレ [ノートルダム大聖堂]／コンク [サント・フォア修道院]／カオール [サン・テチエンス大聖堂]／モワサック [サン・ピエール教会]、他
- 053 巡礼者のための美食案内 山田 健
- 058 route de Saint Gilles アルル⇄サン・ジル⇄ハカ
アルル [サン・トロフィーム大司教教会]／サン・ジル [サン・ジル修道院]／サン・ギレーム・ル・デセル [サン・ソヴェール・エ・ギヨーム修道院]、他
- 072 後記＋「ロマネスク」「フランス・ワイン」ブックガイド

0008 特集 本：20世紀ブックデザインの精鋭

- 監修＝金澤一志
- 005 北園克衛：奇跡のデザインワーク
詩集『空気の箱』 写真＝藤井 保／自装詩集：『白の断片』、『煙の直線』、『黒い火』／『VOU』／プラスチック・ポエム／装幀：ハヤカワミステリー文庫／白水社海外文学シリーズ／『机』、他
- 028 北園克衛：デザイナー／Study of k by k 金澤一志
- 034 インタビュー：杉浦康平 デザインプロセスに潜む構造
- 042 活字組版のアーキテクチュア 山口信博
- 043 進化するフォルム：2000年のDTP
- 044 オブジェクト・サーカス：『VISIONAIRE』
- 050 TOMATO：セミコロンの発想 蜂賀 享
- 054 スタイルをデザインしないデザイナー fuel 渡部千春
- 058 血気盛んな中華文化と『漢聲』 方 振寧
- 064 今月の演劇 文＝たかばやすお イラスト＝ワキサカコウジ
- 066 アートブックの考現学 北橋明也
- 068 DTP2K：ロッテルダム発の建築デザイン
- 077 造本実験の世紀：「本」を超えるために
- 078 連鎖するウサギ穴：20世紀ブックデザイン・概論
- 084 「リアル」への道標：90年代型写真集の原点
- 086 ポップアップ・スキャンダル
- 088 黒いページ
- 090 ウルムの遺産：マックス・ビル再び
- 092 箱のなかの解放区：製本されない本
- 094 フルクサス・アネックス
- 100 アーティスツ・ブックからの跳躍：ソル・ルウィットとジョゼフ・コースス
- 106 本が置かれている場所 サイドストーリー：読者、書店、図書館
- 112 SD特選必携書

0009 特集 木造モダニズム 1930s-50s 写真＝清水 襄

- 企画協力＝大川三雄＋矢代真己＋田所辰之助＋濱崎良実
- 012 今、なぜ木造モダニズムか 大川三雄
- 014 年譜：木造モダニズムの振幅
- 016 対談：木造のとき 黒沢 隆×内藤 廣 聞き手＝大川三雄
- 020 木造表現のバラダイム
- 022 構造の表象とオルタナティヴ
[跣足男子カルメル会修院聖堂] 今井兼次、[井上邸] [東京聖十字教会] [新発田カトリック教会] [聖ポール教会] アントニン・

	レーモンド
028	『木』の構造とデザイン 濱寄良実
030	トラディショナル・シックエンス
	『日向別邸』ブルーノ・タウト、『聴竹居』藤井厚二、『八勝館御幸の間』堀口捨己、『旅館「稲住温泉」の4つの離れ』白井晟一
035	伝統との共振 大川三雄
038	『切妻屋根』というロゴス
	『前川自邸』前川國男、『秋の宮村役場』白井晟一
042	納得／説得という形態言語 濱寄良実
044	トビックス：モダンデザインにおける匿名性原理の消長
	黒沢隆
054	モダニティの構築
056	『パウエン』IN NIPPON [土浦自邸] 土浦亀城
056	『機能拡張』された「技術＝トロッケン・パウ」のかたち
	矢代真己
064	木造「コア」イズム
	『コアのあるH氏の住まい』増沢 洵、『試作小住宅』白井晟一
064	積極的「コア」／消極的「コア」 渡辺研司
070	コラム：コア＝中心という思想
072	戦時下テクノロジー
072	テクノロジー・ユートピアの両義性 田所辰之助
078	インターナショナル리티の超越
	『八幡浜市立病院伝染病棟』、『日土小学校』、『江戸岡小学校』、『川ノ内小学校』、『八幡浜市立図書館』松村正恒（八幡浜市役所）
078	生活世界の構築 田所辰之助
087	コラム：松村正恒の学校建築

0010 特集 改造建築：公共建築の増改築の手法

監修＝宮脇 勝

006	改造建築・都市改造 文＝宮脇 勝
013	Part.1 都市の記憶
	『ライヒスタック』フォスター・アンド・パートナーズ、『ビベラッハ市立図書館』ボリス・ボドレック、『オペラ・ハウス』ジャン・ヌーヴェル、『ガスタンクA,B,C,D棟』ジャン・ヌーヴェル+コープ・ビンメルブラウ+マンフレッド・ヴェードン+ヴィルヘルム・ホルツパワー、『アンダルシア文化遺産研究所』パスケス・コンスエグラ、『フランクフルト21』フォン・ゲルカン&マルク、『フェルミニ市のユニテ・ダビタシオン再生プロジェクト』アンリ・シリアーニ
047	Part.2 既存の価値を高める方法
	『大英博物館』フォスター・アンド・パートナーズ、『テート・モダン』ヘルツォーク&ド・ムーロン、『ベネトン・アート・スクール“ファブリカ”』安藤忠雄、『クッパースミューレ・ミュージウム“グロテココレクション”』ヘルツォーク&ド・ムーロン、『進化博物館』ボール・シュメトフ&ボルハ・ユイドロ、『東京大学工学部1号館』香山壽夫、『バルセロナ現代文化センター』アルベルト・ビアブラーナ&エリオ・ビニョン、『リール市立美術館』イーボス&ヴィタール
085	Part.3 新しい領域へ
	『メゾン・コニャック・ジュイ』ジャン・ヌーヴェル、『バンダーベーン・デパート増築』ヘルマン・ヘルツベルハー、『国立現代アートスタジオ“ル・プレノア”』バーナード・チュミ、『国際決済銀行指名設計競技案』伊東豊雄、『サン・シーロ・サッカースタジアム』ジャン・カルロ・ラガツィ、『ミュンヘン市立図書館』クラウド・ブロック、『国立国際子ども図書館』マンハッタン・ペントハウス 安藤忠雄
	インタビュー：
	B.ボドレック、ヴォルフ・デン・ブリックス、M.ヴェードン、パスケス・コンスエグラ、M.フォン・ゲルカン、H.シリアーニ、フランチェスコ・ダル・コッ、スベンサー・デ・グレイ、安藤忠

雄、ボール・シュメトフ、香山壽夫、A.ビアブラーナ、イーボス&ヴィタール、ヘルマン・ヘルツベルハー、伊東豊雄

0011 特集 ヒューマン・センター・デザインの可能性

監修＝彦坂 裕 企画・編集協力＝中原蒼二十信時正人

006	ヒューマン・センター・デザイン序説 彦坂 裕
007	ヒューマン・センター・デザイン（HCD）領域の構図
009	ギャラリーHCD
013	座談会：ヒューマンセンターデザインの可能性
	柏木 博×川崎和男×中原蒼二×彦坂 裕
021	Design Great：次世紀への構想と実践 川崎和男
026	タンジブルを超えて 吉本光宏
030	「経験経済」へ向けてのユースウェア、ソーシャルウェア
	渡辺保史
038	協働の知のスタイルをデザインする 渡辺保史
040	インタビュー：プロセスを通じた新たなコミュニティ・デザイン
	中村 考
042	21世紀のデザイン・パラダイム 魚住早智子
046	インタビュー：サイバー・スフィアと六つのスフィア
	ジョン・アレン インタビュアー：魚住早智子
048	関係的存在としての建築へ向けて：荒川+ギンズの建築を通して
	今村有策
056	コラムHCD インタビュアー：信時正人+中原蒼二+彦坂 裕
	インタビュー：青木史朗、阿知波悟美、荒木由美子、井出秋人、伊藤裕夫、上山良子、内田敬之、他
064	あらゆる身体のための衣をめざして 岩川千歩
066	ヒューマン・センター・デザイン・プロセス 魚住早智子
071	情緒の歌を奏でるミニマリスト 魚住早智子
072	マテリアル・コネクション：心と物の出会いの場 魚住早智子
074	知は、臨在すべき場所で、聴取に黙する自身を、見出すことができるか 森岡祥倫

0012 SDレビュー2000

第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

017	『SDレビュー2000』開催にあたって 鹿島昭一
018	総評：横 文彦、岡部憲明、芦原太郎、小川晋一
020	『IVY』岡田周也+太庭 晋+住谷 覚、『光のトーチカ』川人洋志、『house PTT』齋藤 誠+石田建太郎+アレックス・エレンパーガー+LOCUS+m architects、『running green project』三分一博志+坂野博行、『b-in-d』末包伸吾、『HAYAMA beach house project』中島貴光+安宅研太郎+西澤徹夫+儀賀咲恵、『FLAT A+B』二宮 博+菱谷和子、『M村温泉施設計画』野澤良太+栄元正博+中村秀樹、『@/scape』原田真宏+原田麻魚、『Soft house』矢口博幸+I.C.A.、『Reversible House』安田光男、『M Hospital Day-care House』藤本壮介、『linea』山岡嘉彌、『街の教会』吉田 晋、『都市生活者たちの家 a Home of / by / for City Dwellers』松野 勉+相澤久美
054	講評：横 文彦、岡部憲明、芦原太郎、小川晋一
059	SDレビューレビュー 熊倉洋介
060	経過報告

作品、その他

02069	GS Revolution：ガソリンスタンド再生計画 volume 2
	SS再生計画実行委員会
02070	鼎談：サービスステーション施設の現状と再生の可能性
	門松 貴×林 康郎×SS再生計画実行委員会
02074	SS業界の基礎知識
02076	ガソリンスタンド解剖図鑑
02078	ガソリンスタンド・サンプリング：中心市街地の場合——東京都世田谷区編

- 02086 第一次再生計画案 SS再生計画実行委員会
- 03090 代官山インスタレーション'99
講評：横文彦、中原佑介、川俣 正
- 06073 豊かなアメニティ環境をめざして：
新しい病院のインテリアデザイン
文+構成=日建スペースデザイン/ヘルスケアデザインチーム
- 06083 都市型エンタテインメント施設・メディアージュ
- 07073 エコロジー・エクスプレス：水戸岡鋭治の最新列車デザイン
取材+構成=磯達雄 文=森山明子
- 07082 玉座考：古代スツールにみる玉座の性格 服部等作
- 09089 知られざる名作——もうひとつの閑室をめぐる 西澤英和
- 11079 宮崎浩の“透明なスペース” 住宅から公共建築まで最新作3題
取材+構成=磯達雄 写真=北嶋俊治
tag/再生木ルーバーハウス/道の駅「仁保の郷」
- 11090 透明への誘惑とその処方他 椎名英三
- 12061 コミュニケーション・ワークスペース
芦原太郎事務所リノベーション
- 12064 ワークスペースの進化
- 12069 コミュニケーション・ワークスペース：上原モデルルームリノベーション
- 12074 上原リノベーション・クロニクル
- 12076 次なる時代へ向けての実験 芦原太郎
- 12093 SDグラフィティ 36年の想い出
飯島洋一/磯崎 新/植田 実/宇野 求/片木 篤/北沢 猛/隈 研
吾/黒川紀章/香山壽夫/小林克弘/椎名政夫/篠原一男/陣内
秀信/杉浦康平/高階秀爾/丹下健三/長谷川逸子/羽原肅郎/
林昌二/原 広司/穂積信夫/横文彦/松本哲夫/元倉真琴

連載 カルチャーカフェ

- 01202 今月の舞踊 伊藤キム『On the Map』尼ヶ崎 彬
- 01204 今月の映画 「シュリ」 瀧沢 隆
- 02090 今月の演劇 「拳骨ロック」『1999 シェイクスピア リチャード
IIより』清水裕之
- 02092 今月の音楽 「カルロス・ヌニェス」服部のり子
- 03096 今月の舞踏 「アブソルート・ゼロ」多木浩二
- 03098 今月の映画 「雨が来る」 浜野保樹
- 03094 今月の音楽 「エムリース・ミッシェル」ピーター・バラカン
- 01148 今月の演劇 「Happy Days〜幸せな日々」 原 研哉

展覧会レポート

- 01211 清水譲街角写真展「みつけた。」
- 01212 「Digital Exhibition + VJ」展 笠原一人
- 01215 第14回「ヴェローナ・アビターレ・イル・テンポ」展 荒知幾
- 01219 「ジャンニ・コロンボ」展 菊田樹子
- 01220 第6回「ジャパン・アート・スカラシップ」展
- 02094 写真展 村井修の空間——光と影 細江英公
- 02095 「エンジニア・アーキテクトのデザイン」展 佐々暁生
- 02097 住まいを見続ける眼・展/住まい学体系の100冊が語る1987-
1999 中谷正人
- 03102 現代デザインの新風景「デザインとマテリアル」展 太田浩史
- 04098 「近代デザインに見る生活革命 大正デモクラシーから大阪万博ま
で」展 梅宮弘光
- 04101 前野まさる退官記念展 北川 卓
- 05089 パウハウス展——ガラスのユートピア 田所辰之助
- 05090 あかり展 角館政英
- 06093 比翼連理とも偕老同穴ともいふべき二人展 羽原肅郎+益田祐作
- 06094 素材としての「木」題材としての「椅子」 河合俊和
- 06095 グラフィックを豊饒させる紙素材 工藤強勝
- 07089 ミラノ・サローネ・インターナショナル2000 荒知幾
- 07093 ハイナール・シリング展——エントロピーの森 秋山 伸

SD0012

- 07094 デペロの未来派芸術展 菊田樹子
- 07095 ISSEY MIYAKE Making Things 川上典子
- 08118 「地球をもっと知ろう」という試み 梅宮弘光
- 08120 もうひとつの扉 20世紀・アーティストの本 金澤一志
- 10109 黒川記章回顧展 飯島洋一
- 10110 現在の都市改造を裏付けるふたつの展覧会@ベルリン
レンゾ・ピアノ展、都市の建築の都市展 内山佳代子

ニュース

- 01206 ポワブシェにおけるプロセスマッピングの試み——ヴィトラデザ
インミュージアムとボンビドーセンターによるサマーワークショ
ップより 赤坂知也
- 01208 第2東名高速道路豊田ジャンクション桁架設工事
- 03100 「大地の芸術祭」作品公募・最終公開審査 磯達雄
- 04102 第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展：第1回 松野 勉
- 05082 第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展：第2回 松野 勉
- 05086 第6回KAJIMA彫刻コンクール
- 06089 第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展：第3回 松野 勉
- 07096 第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展：第4回 松野 勉
- 08122 ヨーロッパからの椅子便り
- 08123 体験できる地底空間
- 09097 第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展：第5回
- 09101 水陸両用居住のためのデザイン
石田壽一+九州芸術工科大学石田研究室
- 10106 チューリッヒ・アフォルターン国際コンペ1等案 ARX New York
- 11093 水陸両用居住のためのデザイン2
石田壽一+九州芸術工科大学石田研究室
- 12077 越後妻有アートトリエンナーレ2000「大地の芸術祭」を終えて
CLIP
- 12082 不思議の国のCHARA 植木明日子
- 12083 2000年チエルサイエ国際展示会より
- 12085 ビデオ・ササキ氏の死を偲ぶ 都田 徹

書評

- 01222 『井上武吉 Bukichi Inoue | my sky hole 1997』
井上武吉=著、鹿島出版会、朝日 晃=評
- 02098 住まい学体系100『栖十二』
磯崎 新=著、住まいの図書館出版局、中谷正人=評
- 03103 『ブリュッケン』フリッツ・レオンハルト=著、田村幸久=監訳、
メセイ出版、佐々暁生=評
- 04104 SD選書236『都市デザイン [野望と誤算]』ジョナサン・バーネ
ット=著、兼田敏之=訳、鹿島出版会、北沢 猛=評
- 05092 『動く家——ポータブル・ビルディングの歴史』ロバート・クロ
ネンバーク=著、牧 紀男=訳、鹿島出版会、佐藤孝一=評
- 06096 『「住宅」という考え方——20世紀的住宅の系譜』
松村秀一=著、東京大学出版会、南 泰裕=評
- 07097 『裸の建築家——タウンアーキテクト論序説』
布野修司=著、建築資料研究社、本江正茂=評
- 08125 『フランク・ロイド・ライト全作品』ウィリアム・アリン・スト
ーラー=著、岸田省吾=監訳、丸善、青木 淳=評
- 09106 『近代日本の郊外住宅地』片木 篤+藤谷陽悦+角野幸博=編、
鹿島出版会、植田 実=評
- 10112 『反オブジェクト——建築を溶かし、砕く』隈 研吾=著、筑摩書
房、五十嵐太郎=評
- 11099 『ジェームズ・スターリング——プリティッシュ・モダンを駆け
抜けた建築家』ジェームズ・スターリング=著、ロバート・マク
スウェル=編、小川守之=訳、鹿島出版会、榎本弘之=評
- 12086 『人体の影 アントロポモルフィズム』磯崎 新=著、鹿島出版会、
岸田省吾=評

鹿島出版会 の本

Kajima Institute Publishing Co., Ltd

書物のフォルマリズム

デザイン周辺を泳ぐ人々の中継地点——。古典であれ新説であれ、言説とビジュアルで構成される書物とは、誌面からそこはかとなく伺い知れるセンスを、あるいは知的葛藤のもとに獲得されるインテリジェンスを我が物とする喜び手として自己実現するものでありたい。弊社は、読者からの期待、出版社としての企図、それらを十分に達成し、皆様に対し適宜提供すべく、独自の専門分野を主体に出版活動を行っている。

——時代の流れに風化することなく、21世紀にもひき続き有効な「参照点」になるだろう骨太の本。振り返って、「あそこまでは泳ぎ着いたのだ」と再認識させる知性。「スペースデザイン」のためのリファレンス・ブックの必携書をここに提示。ジャンルを超えた知の横断と、実践の時代にふさわしい多彩なエッセンスのラインナップを是非ともお役立て頂きたい。

建築 Architecture

環境 Environment

感性 Sensitivity

タイポロジー Typology

インテリア・デザイン Interior Design

建築 | Architecture

ネイキッド・アーキテクチャ

—— 建築とは何か。この問いに答えることは容易ではないが、その答を模索する試みは古来より続けられてきた。現象のありのままの記述から、「建築とはこのようなもの」という回答例まで、歴史に残された答案を探り出す。建築の持つ可能性を有限なかぎり培うことの必要性を問い、そして意味合いを知る。

	本体価格
建築とは何か (SD選書95) B.タウト 著 藤田英雄 訳 長谷川純 解説 1974	1,800
続建築とは何か (SD選書141) B.タウト 著 藤田英雄 訳 1978	980
図集世界の建築 (上) H.ステアリン 著 鈴木博之 訳 1979	2,800
図集世界の建築 (下) H.ステアリン 著 鈴木博之 訳 1979	2,800
建物はどのように建っているか M.サルバドリー 著 望月重 訳 1980	1,800
世界建築事典 N.ペプスナー 他共著 鈴木博之 監訳 1984	5,800
建築家なしの建築 (SD選書184) B.ルドフスキー 著 渡辺武信 訳 1984	1,800
自然な構造体 (SD選書201) F.オットー 著 岩村和夫 訳 1986	1,800
仮設建築のデザイン GK設計、朝倉則幸 著 1993	2,800
時を超えた建築の道 C.アレグザンダー 他 著 平田翰那 訳 1993	6,100
動く家 ポータブル・ビルディングの歴史 R.クロネンバーク 著 牧紀男 訳 2000	4,300

言説の多様性と対立性

—— 人間が聖なる神々の世界を表象すべく現前化させようとしてきた建築という行為は、古代から中世、近世を経て建築家という職能の確立に及び、ついに思想的営為として成立する。そこには神の名を借りた数々の建築と、人間存在を記するそれ以上の数の建築が併立している。建築のあるべき姿を探ること、あるいはあるべき姿などあるのかと問い続けること。建築を取り巻く思考と試行は止むことはない。

	本体価格
建築をめざして (SD選書21) ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 1967	1,800
思想としての建築 (SD選書134) 栗田勇 著 1978	980
ヴァレリーの建築論 加藤邦男 著 1979	2,500
建築について (上) (SD選書158) F.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳 1980	1,800
建築について (下) (SD選書159) F.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳 1980	1,200
驚異の工匠たち B.ルドフスキー 著 渡辺武信 訳 1981	3,800
建築の多様性と対立性 (SD選書174) R.ヴェンチュリー 著 伊藤公文 訳 1982	1,800
建築とポップカルチャー R.バンハム 著 岸和郎 訳 1983	2,300
建築の七つの力 鈴木博之 著 1984	1,900
建築の現代思想 杉本俊多 著 1986	2,500
イメージゲーム 異文化との遭遇 磯崎新 著 1990	3,400
アダムの家 (SDライブラリー18) J.リクワート 著 黒石いずみ 訳 1995	4,000
建築と断絶 ベルナルド・チュミ 著 山形浩生 訳 1996	2,900
造物主論 デミウルゴモルフィズム 磯崎新 著 1996	3,800
芸術としての建築 (SD選書224) S.アバークロンビー 著 白井秀和 訳 1996	1,800
建築の七燈 ジョン・ラスキン 著 杉山真紀子 訳 1997	2,800
空間へ 根源へと進行する思考 磯崎新 著 1997	4,600
建築の解体 一九六八年の建築情況 磯崎新 著 1997	4,200
手法が カウンター・アーキテクチャ 磯崎新 著 1997	3,800
20世紀の建築思想 杉本俊多 著 1998	2,800
建築とリアル 松畑強 著 1998	2,700
不気味な建築 A.ヴィドラー 著 大島哲蔵、道家洋共 訳 1998	3,400
時間のなかの建築 M.ムスタファヴィ 他共著 黒石いずみ 訳 1999	2,800

20世紀モダニズム

—— モダニズムは自己を、過去 (様式) との断絶として定義した。つねに現在進行形であった。しかし、ポストモダニズムの出現により「モダニズムも所詮一様式にすぎない」と断罪される。「現代」ではなく「近代」だと。そのポストモダニズムも結局はオルタナティブを示す力を持ちえなかったと認められつつある現在、「未完のプロジェクト」(ハーバースマス)であるモダニズムは復権を果たしつつある。ギーディオンの熱弁、ジェンクスの皮肉、フランク・ロイド・ライトの献身——モダニズムは今ようやく証されつつある。

	本体価格
ユルバニスム (SD選書15) ル・コルビュジエ 著 樋口清 訳 1967	1,800
輝く都市 (SD選書33) ル・コルビュジエ 著 坂倉準三 訳 1968	1,800
近代建築 (SD選書63) V.スカーリー 著 長尾重武 訳 1971	1,500
第一機械時代の理論とデザイン R.バンハム 著 石原達二 他共訳 1976	4,800
インターナショナル・スタイル (SD選書139) H.R.ヒッチコック 他共著 武沢秀一 訳 1978	1,800
近代建築の失敗 (SD選書150) P.ブレイク 著 星野郁美 訳 1979	1,800
パウハウス (SD選書156) 杉本俊多 著 1979	1,800
エスプリ・ヌーヴォー (SD選書157) ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳 1980	1,200
口紅から機関車まで R.ローウイ 著 藤山愛一郎 訳 1981	2,800
ポスト・モダンの時代と建築 磯崎新 対談 1985	2,600
現代建築の潮流 V.M.ラムプニャーニ 著 川向正人 訳 1985	4,800
ポスト・モダンの座標 松葉一清 著 1987	1,800
グッドバイ・ポストモダン 隅研吾 著 1989	2,400
近代建築の系譜 (上) (SDライブラリー3) W.J.R.カーティス 著 五島朋子 他共訳 1990	4,600
近代建築の系譜 (下) (SDライブラリー4) W.J.R.カーティス 著 五島朋子 他共訳 1990	4,600
モダニズム以降のデザイン J.サッカラ 著 奥出直人 他訳 1991	2,900
現代建築ポストモダン以後 松葉一清 著 1991	2,300
ルイス・カーン建築論集 (SDライブラリー14) L.カーン 著 前田忠直 編訳 1992	3,600
国外からの建築 (SDライブラリー19) D.アグレスト 著 大島哲蔵 訳 1995	3,600
マスメディアとしての近代建築 ビアトリス・コロミーナ 著 松畑強 訳 1996	3,000
ロンドン・アヴァンギャルド 浜田邦裕 著 1997	2,800
ポストヒューマニズムの建築 マイケル・ヘイズ 著 松畑強 訳 1997	2,900

アーキテクト／巨匠の時代の終焉

—— 「巨匠」の時代は終わった。分権社会に生きるこれからの建築家は、超越的な「」を目指すこと自体が不可能である。巨匠は回顧されるしかない。しかし、彼らは今でも挑発的で、われわれを刺激しないでおかない。建築家としてのありようではない何か、引き継いでいく何かをどこに見いだすのか。20世紀を生きた「近代建築の巨匠たち」を振り返る。

	本体価格
フランク・ロイド・ライト (SD選書7) 谷川正己 著 1966	1,800
ライトと日本 (SD選書123) 谷川正己 著 1977	1,800
タリエンへの道 (SD選書132) 谷川正己 著 1978	980
知られざるフランク・ロイド・ライト E.ターフェル 著 谷川正己 他共訳 1992	5,700
フランク・ロイド・ライトと日本文化 ケヴィン・ニュート 著 大木順子 訳 1997	3,800
巨匠 フランク・ロイド・ライト D.ラーキン 他編 大木順子 訳 1999	3,200
ル・コルビュジエのベサック集合住宅 P.ブードン 著 山口知之 他共訳 1976	2,800
ル・コルビュジエ (SD選書144) C.ジェンクス 著 佐々木宏 訳 1978	1,800
ル・コルビュジエの建築—その形態分析 J.ペイカー 著 中田節子 訳 1991	6,500
ル・コルビュジエ 理念と形態 W.J.R.カーティス 著 中村研一 訳 1992	8,200

ル・コルビュジェと日本	高階秀爾、鈴木博之、三宅理一、太田泰人編	1999	2,800
評伝ミース・ファン・デル・ローエ	F.シムツ 著 澤村明 訳	1987	8,900
ミース・ファン・デル・ローエ (SD選書204)	D.スペース 著 平野哲行 訳	1988	1,800
私のルイスカーン	工藤国雄 著	1975	2,800
ルイスカーン研究	前田忠直 著	1994	3,400
ルイス・カーン 光と空間	ウルス・ビュッティカー 著 富岡義人 他共訳	1996	4,200
アルヴァ・アアルト (SD選書34)	武蔵章 著	1969	1,800
アルヴァ・アアルト (現代の建築家)	SD編集部 編	1978	4,000
白い机1:若い時	G.シルツ 著 田中雅美、田中智子 共訳	1989	9,500
白い机2:モダン・ダイムス	G.シルツ 著 田中雅美、田中智子 共訳	1992	14,300
白い机3:円熟期	ヨーラン・シルツ 著 田中雅美、田中智子 共訳	1998	19,000
パツラーディオー世界の建築家	福田晴彦 著	1979	4,500
アントニオ・ガウディ (SD選書197)	鳥居徳敏 著	1985	1,800
ガウディの建築	鳥居徳敏 著	1987	2,900
バックミンスター・フラーのダイマキシオンの世界	B.フラー 他共著 木島安史 他共訳	1988	6,000
アーキテクト 建築家とは何か (SDライブラリー5)	R.ルイス 著 六鹿正治 訳	1990	3,800
ガウディの七つの主張 (SDライブラリー4)	鳥居徳敏 著	1990	2,900
マッキントッシュ	R.マックラウド 著 横川善正 訳	1993	5,600
ガウディ 芸術的・宗教的ヴィジョン	R.デシャルヌ 他共著 池原義郎 他共訳	1993	14,800
バックミンスター・フラー	M.ボーリー 著 渡辺武信、相田武文 共訳	1994	3,200
エーロ・サーリネン (SD選書227)	穂積信夫 著	1996	1,800
ピーター・ライズ自伝	P.ライズ 著 岡部憲明 監訳 太田佳代子 他共訳	1997	3,800
アントニン・レーモンドの建築	三沢浩 著	1998	3,500

マリオ・ボッター構想と構築	マリオ・ボッタ 著 古谷誠章 訳	1999	2,700
ルドルフ・シンドラー	デヴィッド・ゲバード 著 末包伸吾 訳	1999	3,700
アーキグラム	アーキグラム 編 浜田邦裕 訳	1999	3,400
横事務所のディテール TEPIA	SD編集部 編	1991	6,602
コネクションズ ハイテク・コンストラクション 2	A.ブルックス 他共著 難波和彦 他監訳	1994	4,500
コネクションズ ハイテク・コンストラクション 1	A.ブルックス 他共著 難波和彦 他監訳	1995	4,500
スーパーシェッズ ハイテク・コンストラクション 3	K.ウィルキンソン 著 難波和彦 他監訳	1995	4,500
エコテック—21世紀の建築	キャサリン・スレッサー 著 難波和彦 監訳	1999	7,300

建築ガイド

——鹿島出版会の建築ガイドブックは持ち歩きに便利な四六判サイズで、近代建築から最新の現代建築まで、代表的建築物を各コース別に紹介します。

本体価格			
近代建築ガイドブック [関東編]	東京建築探偵団 著 村松貞次郎 他顧問	1982	2,300
近代建築ガイドブック [関西編]	石田潤一郎、沢田 清、柴田正己 他共著	1984	2,800
西洋館漫歩 建築スケッチの旅	田中薫 著	1984	1,900
ヨコハマ建築事情	吉田綱市 著	1991	2,800
東京現代建築ガイド	松葉一清 著	1992	2,800
ヨコハマ建築案内 1950-1994	吉田綱市 著	1994	2,700
東京現代建築ガイドII 2000'S	松葉一清 著	1999	2,800

環境 Environment

都市デザイン

——これからの都市と人間のあり方とは？ 近代都市計画の意志と失敗を集成した、J.バーネットの「都市デザイン—野望と誤算」、一大センセーションを巻き起こした、ジェイコブスの「アメリカ大都市の死と生」。変貌を遂げる都市環境を、成熟し躍動する空間として認識する。

本体価格			
メガロポリス (SD選書22)	J.ゴットマン 著 木内信蔵、石水照雄 共訳	1967	1,500
明日の田園都市 (SD選書28)	E.ハワード 著 長瀬連 訳	1968	1,800
爆発するメトロポリス (SD選書81)	W.H.ホワイト Jr. 他共著 小島将志 訳	1973	980
アーバン・ゲーム (SD選書85)	M.ケンツレン 著 北原理雄 訳	1973	980
人間のための街路	B.ルドフスキー 著 平良敬一、岡野一宇 共訳	1973	3,800
都市の景観 (SD選書98)	G.カレン 著 北原理雄 訳	1974	1,800
近隣住区論	C.A.ベリー 著 倉田和四生 訳	1975	2,500
アメリカ大都市の死と生 (SD選書118)	J.ジェコブス 著 黒川紀章 訳	1977	1,800
人間のための都市 (SD選書135)	H.ペーターズ 著 河合正一 訳	1978	980
都市憲章 (SD選書136)	磯村英一 著	1978	980
装置としての都市 (SD選書171)	月尾嘉男 著	1981	1,500
進化する都市 (シルバースシリーズ)	P.ゲデス 著 西村一郎 他訳	1982	2,800
都市の道具 (SD選書203)	GK研究所、榮久庵祥二 著	1986	1,500
都市の街割 (SD選書208)	材野博司 著	1989	1,500
都市景観のデザイン	花輪恒 著	1989	2,800
都市の文化	L.マンフォード 著 生田勉 訳	1990	6,300

よみがえるダウントウン	B.J.フリーデン 著 北原理雄 監訳	1992	7,200
コラージュ・シティ (SDライブラリー12)	C.ロウ 他共著 渡辺真理 訳	1992	3,800
メガロポリスを超えて (SDライブラリー15)	J.ゴットマン 他共編 宮川泰夫 訳	1993	5,700
街のデザイン 活気ある街づくりのシナリオ	C.ボーマイア 著 北原理雄 訳	1993	4,300
新世紀大都市 The 100Mile City	D.スジック 著 植野糾 訳	1994	5,700
都市と建築の解剖学	J.ベーカー 著 富岡義人 訳	1995	5,800
都市と建築のパブリックスペース	H.ヘルツベルハー 著 森島清太 訳	1995	6,700
都市デザインの系譜 (SD選書228)	相田武文、土屋和男 共著	1996	1,800
都市空間の芸術パブリックアートの現在	カトリニス・グラー 著 藤原えりみ 訳	1997	3,000
世界都市の論理	ポール・L.ノックス 他共編 藤田直晴 訳編	1997	3,600
都市デザイン 野望と誤算 (SD選書236)	J.バーネット 著 兼田敏之 訳	2000	2,100

環境の世紀へ——ランドスケープのトータルデザイン

——環境の世紀:21世紀のデザイナーに何ができるのか？ 環境と技術のコーディネーターが待望される今、K.リンチの傑作「敷地計画の技法」は原点に帰して思考する1冊。サステイナブル社会にとっての視座を切磋琢磨させる教養書。

本体価格			
ヨーロッパの造園 (SD選書43)	岡崎文彬 著	1969	1,800
アーバン・ランドスケープ・デザイン	G.エクボ 著 久保貞也 訳	1970	7,800
環境とデザイン (SD選書56)	G.エクボ 著 久保貞也 訳	1971	2,000

日本の公園 (SD選書87)	田中正大 著 1974	1,800
庭と空間構成の伝統 (縮刷版)	堀口捨己 著 1977	20,000
環境計画論 (SD選書164)	田村明 著 1980	1,800
環境としての建築	R.バンハム 著 堀江恒郎 訳 1981	2,900
水空間の演出 (SD選書167)	鈴木信宏 著 1981	1,800
広場の造形 (SD選書175)	C.ジッテ 著 大石敏雄 訳 1983	1,800
水のデザイン (SD選書182)	D.ペーミングハウス 著 鈴木信宏 訳 1983	1,800
ストリート・ファニチュア	西沢 健 著 1983	2,900
プレシジョン (上) (SD選書185)	ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳 1984	1,500
プレシジョン (下) (SD選書186)	ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳 1984	1,500
環境照明のデザイン (SD選書188)	石井幹子 著 1984	1,800
バタン・ランゲージ 環境設計の手引	C.アレグザンダー 他 著 平田輪郎 訳 1984	9,800
「作庭記」からみた造園 (SD選書193)	飛田範夫 著 1985	1,800
水辺の計画と設計	吉村元男、芝原幸夫 共著 1985	2,900
新版 敷地計画の技法	K.リンチ 著 山田 学 訳 1987	6,200
水辺空間の魅力と創造	松浦茂樹、島谷幸宏 共著 1987	3,200
楽園のデザイン イスラムの庭園文化	J.ブルックス 著 神谷武夫 訳 1989	5,500
建築環境論 (SD選書211)	岩村和夫 著 1990	1,800
アクアテクトア 建築と水	A.ウイリソン 著 黒田秀彦 訳 1990	5,700
アメリカン・ランドスケープの思想	都田徹、中瀬勲 共著 1991	2,300
環境デザインの思想 (SD選書216)	三輪正弘 著 訳 1991	1,800
景観論 (都市選書)	G.エクボ 著 久保真、中村一 他共訳 1991	3,500
アース・ワークの地平	J.バーズレイ 著 三谷徹 訳 1993	7,600
人間のための屋外環境デザイン	C.マーカス 他共編 湯川利和 他共訳 1993	6,600
広場の空間構成	三浦金作 著 1993	3,200
都市と彫刻	樋口正一郎 著 1994	2,900
ランドスケープデザイン	吉村元男 著 1995	2,800
庭園の詩学	C.W.ムーア、W.J.ミッチェル 他共著 有岡孝 訳 1995	4,700
記憶に残る場所	D.リンデン、C.W.ムーア 共著 有岡孝 訳 1996	4,400
庭の意味論	M.フランス、R.T.ヘスター Jr. 共編 佐々木葉二 他共訳 1996	4,600
人にやさしい公園づくり	浅野房代、亀山始、三宅祥介 共著 1996	2,700
日本の水景	文=藤原修 写真=三沢博昭+河合隆盛 1997	4,600
建築家のためのランドスケープ設計資料集	豊田幸夫 著 1997	4,500
美術から都市へ	南條史生 著 1997	2,700
環境デザイン学入門	G.T.ムーア 他著 小林正美 監訳 三浦研 訳 1997	3,600
イタリアのヴィラと庭園	パウル・ファン・デル・レー 他著 野口昌夫 訳 1997	4,100
サウンドスケープ (SD選書229)	鳥越けい子 著 1997	1,800
風景のコスモロジー (SD選書230)	吉村元男 著 1997	1,800
都市景観と造形の未来	樋口正一郎 著 1997	2,900
見えない庭	P.ウォーカー、M.サイモ 共著 佐々木葉二 他共訳 1997	5,200
環境保全と景観創造	西村幸夫 著 1997	4,200
自然共生建築を求めて	宿谷昌則 著 1999	2,300
エコミュージアムへの旅	大原一興 著 1999	2,500
安らぎと緑の公園づくり	三宅祥介、浅野房世 共著 1999	3,200
公園のユニバーサルデザインマニュアル	都市緑化技術開発機構 監修 2000	2,400

街づくりのためのエッセンス

——キーワードは「住み続ける」「集まって住む」「次世代街区」等々。これからの町並み・まちづくりのプレゼンテーションは、自らがその提案者である。

ブライド・オブ・プレイス (SD選書103)	C.トラスト 著 井出久登 他共訳 1976	980
街の景観 (SD選書163)	G.パーク 著 長素連、長も子 訳 1980	1,200
集まって住むことは楽しいナ	延藤安弘 著 1987	1,800
郊外住宅地の系譜	山口廣 編 1987	3,800
あそび環境のデザイン	仙田満 著 1987	2,800
居心地のよい集合住宅	バンクーバー市都市計画局編 湯川利和 他共訳 1988	2,800
集合住宅団地の変遷	佐藤滋 著 1989	3,500
まちづくりの新しい理論 (SD選書210)	C.アレグザンダー 他著 難波和彦 監訳 1989	1,800

屋外空間の生活とデザイン (SDライブラリー2)	J.ゲール 著 北原理雄 訳 1990	3,300
子どものための遊び環境	ロビン・ムーア他 編著 吉田謙也 他共訳 1995	4,400
住み続けるための新まちづくり手法	佐藤滋、新まちづくり研究会 編著 1995	3,200
同僚会のアパートメントとその時代	佐藤滋、高見澤邦郎、伊藤裕久 他著 1998	3,300
集合住宅原論の試み	黒沢隆 著 1998	3,800
ふれあい空間のデザイン (SD選書233)	清水忠男 著 1998	1,800
次世代街区への提案	三宅理一、林明夫 編 1998	3,000
新しい交通まちづくりの思想	太田勝敏 編著 1998	2,800
新宿・街づくり物語	勝田三良 監修 河村茂 著 1999	3,300
まちづくりの科学	佐藤滋 編著 1999	3,500
近代日本の郊外住宅地	片木篤、藤谷陽悦、角野幸博 編 2000	8,400
初学者のための都市工学入門	高見沢実 著 2000	2,300
西村幸夫 都市論ノート	西村幸夫 著 2000	2,900

次世代のインフラ・デザインへ

——時空を超えて垣間見る異次元空間への誘い。多層性の領域への弛まない探査・発掘に余念がない日常。余地と与条件を持ち合わせた新開拓こそ都市インフラの究極の姿。技術力の結集は不可能を可能にする。インフラ・デザインを夢想させる1冊。

四つの交通路 (SD選書142)	ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳 1978	980
物語 日本の土木史	長尾義三 著 1985	2,400
東京の橋 水辺の都市景観	伊東孝 著 1986	2,200
大深度地下開発と地下環境	陶野郁雄 著 1990	3,400
橋の文化史 桁からアーチへ	B.ハインリッヒ 編著 宮本裕 他訳 1991	2,800
地下都市は可能か	平井亮 編著 1991	2,300
明治の国土開発史	松浦茂樹 著 1992	3,800
都市交通のバースペクティブ	大西隆 著 1994	2,500
テクノスケープ	片木篤 著 1995	2,900
土木と文明	合田良寛 著 1996	3,800
国土づくりの礎	松浦茂樹 著 1997	2,700
建設業と環境マネジメントシステム	土木学会地球環境委員会 編 1998	2,400
都市の地下空間	松尾稔、林良嗣 編著 1998	3,800
日本百名橋	松村博 著 1998	3,800
大地の鼓動を聞く	高崎哲郎 著 1999	1,700
国土を創った土木技術者たち	国土政策機構 編 2000	2,100
河川環境の保全と復元	島谷幸宏 著 2000	4,300
グランドカバー緑化ガイドブック	(財)都市緑化技術開発機構 編 2000	4,400

感性 Sensitivity

空間の可能性——身体感覚への視座

——人間のための空間とは何か。無から在へ、無機から有機へと作用する空間を見つめ眺望する。かたちのフォルムの成り立ちを通して、造形のもつ可逆性をも再認識する。感性のセンシビリティを喚起させる啓蒙書。

	本体価格
芸術空間の系譜《SD選書19》 高階秀爾 著 1967	1,800
実存・空間・建築《SD選書78》 C.ノルベルグ=シュルツ 著 加藤邦男 訳 1973	1,800
モデュールII《SD選書111》 ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 1976	1,800
モデュールII《SD選書112》 ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 1976	1,800
空間としての建築(上)《SD選書124》 B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳 1977	1,800
空間としての建築(下)《SD選書125》 B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳 1977	1,800
建築空間「尺度について」《SD選書130》 P.ブドン 著 中村貴志 訳 1978	980
デザインの認識《SD選書145》 R.ソマー 著 加藤常雄 訳 1978	980
みっともない人体(からだ) B.ルドフスキー 著 加藤秀俊 他共訳 1979	2,900
東方への旅《SD選書148》 ル・コルビュジエ 著 石井勉 他訳 1979	980
建築鑑賞入門《SD選書149》 W.W.コーディル 他共著 穴鹿正治 訳 1979	1,800
空間と情緒《SD選書166》 箱崎総一 著 1980	1,500
人間の空間 デザインの行動的研究 R.ソマー 著 堀山貞登 訳 1988	2,700
住まいのコンセプト 有形建築への道 C.N.シュルツ 著 川向正人 訳 1988	4,800
建築美論の歩み 井上充夫 著 1991	4,400
建築の世界 意味と場所 C.ノルベルグ=シュルツ 著 前川道郎 他共訳 1991	8,700
移ろいの風景論 五感・ことば・天気 小林亨 著 1993	3,800
さあ横になって食べよう《SD選書234》 B.ルドフスキー 著 奥野卓司 訳 1999	1,800
風景の調律 小林亨 著 1999	2,500

ジャパニーズ・エッセンス——〈和〉への回帰と可能性

——目の前にある「日本」を覗いてみれば、次世代デザインのヒントばかり。それはデザイナーにとっての秘密のアイディア・ソース。「西澤文隆の仕事(1)透ける」、神代雄一郎の「間(ま)」をはじめとした格好のヒントを集大成。日本美・和の空間・見立てからもどき・見えがくれなど、深遠さと謙虚さが醸し出る。

	本体価格
日本デザイン論《SD選書5》 伊藤ていじ 著 1966	1,800
きもの文化史《SD選書8》 河崎実英 著 1966	1,800
日本美の特質《SD選書20》 吉村貞司 著 1967	1,800
日本の庭園《SD選書23》 田中正大 著 1967	1,800
日本建築の空間《SD選書37》 井上充夫 著 1969	1,800
茶匠と建築《SD選書53》 中村昌生 著 1971	1,800
京の町家《SD選書59》 島村昇他 編 1971	1,800
キモノ・マインド《SD選書76》 B.ルドフスキー 著 新庄哲夫 訳 1973	2,000
かいわい[日本の都市空間]《SD選書126》 材野博司 著 1978	1,800
日本の住まい・内と外 E.S.モース 著 上田篤、加藤見規、柳美代子 共訳 1979	2,900
見えがくれする都市《SD選書162》 横文彦、若月幸敏、大野秀敏 他共著 1980	1,800
日本の空間構造《SD選書173》 吉村貞司 著 1982	1,800
木の匠 木工の技術史 成田寿一郎 著 1984	2,300
日本壁のはなし《物語・ものの建築史》 山田幸一 著 1985	1,300
畳のはなし《物語・ものの建築史》 佐藤理 著 1985	1,300
建具のはなし《物語・ものの建築史》 高橋康夫 著 1985	1,300

数寄屋の思考 石井和誌 著 1985	3,500
風呂のはなし《物語・ものの建築史》 大場修 著 1986	1,300
台所のはなし《物語・ものの建築史》 高橋昭子、馬場昌子 共著 1986	1,300
便所のはなし《物語・ものの建築史》 谷直樹、遠州敦子 共著 1986	1,300
窓のはなし《物語・ものの建築史》 日向進 著 1988	1,300
床の間のはなし《物語・ものの建築史》 前久夫 著 1988	1,300
西澤文隆の仕事(1)透ける 西澤文隆 著 1988	4,500
木造の継手と仕口 住吉寅七、松井源吾 著 1989	2,300
江戸東京のみかた調べかた 陣内秀信、法政大学東京のまち研究会 著 1989	2,200
屋根のはなし《物語・ものの建築史》 石田潤一郎 著 1990	1,300
和瓦のはなし《物語・ものの建築史》 藤原勉、渡辺宏 共著 1990	1,300
見立ての手法 日本的空間の読解 磯崎新 著 1990	3,400
仕組まれた意匠 京都空間の研究 川崎清、小林正美、大森正夫 共著 1991	4,200
門のはなし《物語・ものの建築史》 佐藤理 著 1995	1,300
建築語源考 技術はコトバなり 飯塚五郎蔵 著 1995	2,100
桂離宮 ブルーノ・タウトは証言する 宮元健次 著 1995	2,300
城下町の近代都市づくり 佐藤滋 著 1995	4,200
数寄屋の美学—待庵から金魚の茶室へ 出江寛 著 1996	2,800
始源のもどき ジャパネスキゼーション 磯崎新 著 1996	3,800
庭園から都市《SD選書231》 材野博司 著 1997	1,800
座敷のはなし《物語・ものの建築史》 山田幸一 監修 吉田高子 著 1998	1,300
間(ま)—日本建築の意匠《SD選書235》 神代雄一郎 著 1999	2,400
源氏物語空間読解 安原盛彦 著 2000	2,500

素材／マテリアリティ思考

——自然素材から人工構築物へ、そして天然素材へとリサイクル型の循環社会の到来は必至。素材の持つ物質的価値を再発見するための基礎理解について学ぶ書。環境時代には物理的特性を超えて取り扱いに配慮が肝要。

	本体価格
素材と造形の歴史《SD選書9》 山本学治 著 1966	1,800
道具考《SD選書42》 榮久庵憲司 著 1969	1,500
木の文化《SD選書67》 小原二郎 著 1972	1,800
木のこころ 木匠回想記《SD選書178》 G.ナカシマ 著 神代雄一郎 他共訳 1983	1,800
日本の伝統工具《SD選書209》 土田一郎 著 秋山実 写真 1989	1,800
石と建築 材料と工法 武井吉一、中山實 共著 1992	4,200

アジアのデザインパワー

	本体価格
アジアの都市と建築 加藤祐三 編 1986	2,800
水の神ナガ アジアの水辺空間と文化 S.ジウムサイ 著 西村幸夫 訳 1992	3,900
中国の水郷都市 陣内秀信 編 1993	3,300
中国 都市と建築の歴史 張在元 編著 1994	3,864
超級アジア・モダン 村松伸 著 1995	2,500
北京 都市空間を読む 陣内秀信、朱目、高村雅彦 共編 1998	2,900
アジアの水辺空間 畔柳昭雄、中村茂樹、石田卓矢 著 1999	2,800

タイポロジー | Typology

もっと知りたい(住宅)のデザイン

——民家からはじまり、個人の住宅から建築家の自邸まで、その住まい方・住み方への執着を改めて再確認。快適性さと居住性能を探索しながら、誰にでもできるインテリアから居住空間への見識と尺度を錬成する。

	本体価格
住宅論 (SD選書49) 篠原一男 著 1970	1,800
住居空間の人類学 (SD選書54) 石毛直道 著 1971	1,500
住まいの原型1 (SD選書61) 泉靖一 編 1971	1,500
住まいの原型2 (SD選書77) 吉阪隆正 他共著 1973	2,000
続住宅論 (SD選書96) 篠原一男 著 1975	1,800
アメリカ住宅論 (SD選書131) V.スカーリー Jr. 著 長尾重武 訳 1978	980
近代和風建築 村松貞次郎、近江榮 共編 1988	3,700
世界の高齢者住宅 J.D.ホグランド 著 湯川利和、延藤安弘 共訳 1989	3,400
高齢者住宅の企画と設計 M.ヴァリンス 著 湯川利和 訳 1991	5,600
バタランゲージによる住宅の建設 (SDライブラリー10) C.アレグサンダー 他著 中笠博 監訳 1991	3,600
日本の近代住宅 内田青蔵 著 1992	2,900
現代の民家再考 降幡廣信 著 1994	2,900
20世紀の住宅 原口秀昭 著 1994	3,600
建築家の住宅論 富永譲 著 1997	2,500
建築家の住宅論 吉田研介 著 1998	2,500
都市・住宅論 (SD選書232) 東孝光 著 1998	1,800
民家のこころ 道塚元嘉 著 1999	1,600

新しい高齢者住宅と環境 J.ポールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳 2000	3,100
建築家の住宅論 鈴木恂 著 2000	2,500

オフィスビル / 福祉施設 / 商業施設 / 公共施設 / 集合住宅 etc

——現代人の要求を欲求に変えて具現化する空間づくりとは。マネジメントが経営・運営に交互に作用する施設と装置の将来とは。公共的空間の現在を理解し、さらに今後の行方を模索させる実践書。

	本体価格
アトリウム建築 発展とデザイン リチャード・サクソン 著 古瀬敏 他共訳 1988	6,500
新しいガラスアーケード H&HK ニーダーヴェールマイアー 共著 青木英明 訳 1989	9,515
音楽のための建築 M.フォーサイス 著 長友宗重、別宮貞徳 共訳 1990	12,000
博物館建築 半澤重信 著 1991	13,600
商業空間とアトリウム マイケル・J.ベドナー 著 古瀬敏 訳 1993	9,400
美術館とは何か D.ジロディ 他共著 高階秀爾 監修 松岡智子 訳 1993	2,900
演劇のための空間 伊東正示、シアターワークショップ 共編 1995	5,700
ガラス建築 SD編集部編 1999	3,200
痴呆を癒す建築 S.ジャッド、M.マーシャル 他共著 井上裕、浩子 訳 1999	3,500
21世紀の地域劇場 清水裕之 著 1999	3,700
ヘルスケア施設づくりの実践 野口哲英、中田利夫 著 2000	4,200
劇場の計画と運営 山崎泰孝 著 2000	3,300
劇場 舞台芸術のための建築計画と設計 R.ハム 著 劇場技術研究会 訳 2000	6,200

インテリア・デザイン | Interior Design

	本体価格
インテリアデザインとは何か (SD選書198) 三輪正弘 著 1985	1,800
インテリア・デザインの美学 S.アバークロンビー 著 戸川智 他共訳 1995	2,700
建築家の椅子111脚 光藤俊夫 監修 SD編集部 編 1997	3,200
地球のためのデザイン ヴィクター・ババネック 著 大島俊三 他訳 1998	4,100
巨匠エットレ・ソットサス ミルコ・カルポーニ 編 横山正 訳 2000	3,200
インテリア関連法規の知識 改訂版 芝木達 著 1994	2,600
内装仕上げのデザインと材料 内堀繁生 著 1992	2,200
品質管理とコストコントロール 坂本信義 著 1993	2,300
住空間の収納の基礎 橋本周明 著 1994	1,800
住宅設備設計の知識 石崎清士 著 1995	2,200
レイモンド・ローウィ P.ジョーダド 著 高島平吾 訳 1994	3,200
エットレ・ソットサス J.バーニー 著 高島平吾 訳 1994	3,200
ホームオフィス J.マイヤソン 他共著 太田佳代子 訳 1994	2,600
テーブルウェア J.マイヤソン 他共著 太田佳代子 訳 1994	2,600

キッチンウェア J.マイヤソン 他共著 太田佳代子 訳 1994	2,600
光と照明器具 J.マイヤソン 他共著 太田佳代子 訳 1994	2,600
インテリアと家具の基礎知識 内堀繁生 著 1985	2,600
椅子のデザイン小史 (SD選書202) 大廣保行 著 1986	1,800
現代の家具と照明 大廣保行 著 1988	2,900
デザイナーのためのインテリア家具のエッセンス 内堀繁生 著 1988	1,800
続・現代の家具と照明 大廣保行 著 1991	2,500
ディスプレイデザイン (SD選書223) 魚成祥一郎 監修 清家清 序文 1996	1,800

2000年刊行図書一覧

2000年に刊行した建築関連図書の一覧です。

詳しい内容につきましては、当社のホームページ上で紹介しておりますのでご覧ください。

建築環境エンジニアリング ② 建築にかかわる設備計画

建築環境技術研究会 編著/A5判・168頁 本体3,000円+税

建築環境エンジニアリング ③ 電気設備計画

建築環境技術研究会 編著/A5判・224頁 本体3,800円+税

建築環境エンジニアリング ④ 空調・衛生設備計画 [7月刊]

建築環境技術研究会 編著/A5判・224頁 本体3,800円+税

次世代ビルの条件 ロングライフ/フレキシビリティ&キャッシュフロー
オフィスビル総合研究所 ベースビル研究会 編著/四六判・288頁 本体2,500円+税**高層ビル火災の排煙と制御**

ジョージ・T.田村 著 吉田治典 訳/A5判・288頁 本体7,000円+税

高齢化・介護福祉のためのヘルスケア施設づくりの実例

野口哲英、中田利夫 著/A5判・208頁 本体4,200円+税

新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ
ヤン・ポールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳/A5判・152頁 本体3,100円+税**これだけは知っておきたい マンションの劣化・修繕の知識**

印藤文夫 著/B6判・154頁 本体2,100円+税

計画・設計実務のための病院形成の方法

小川健比子 著/B5判・408頁 本体16,000円+税

建築家の住宅論 鈴木恂

鈴木恂 著/菊判・128頁 本体2,500円+税

劇場の計画と運営 やわらかい建築へ

山崎泰孝 著/四六判・272頁 本体3,300円+税

建築プロデューサー

浜野安宏 著/四六判・240頁 本体2,000円+税

源氏物語空間読解

安原盛彦 著/四六判・232頁 本体2,500円+税

近代日本の郊外住宅地

片木篤、藤谷陽悦、角野幸博 共編/A5判・608頁 本体8,400円+税

Space Structure 木村俊彦の設計理念

渡辺邦夫 監修 佐々木睦朗 他著/A5判・244頁 本体3,800円+税

動く家 ポータブル・ビルディングの歴史

ロバート・クロネンバーグ 著 牧紀男 訳/B5変形判・184頁 本体4,300円+税

巨匠 エットレ・ソットサス

ミルコ・カルポーニ 編 横山正 訳/B5変形判・280頁 本体3,200円+税

SD選書236 都市デザイン 野望と誤算

ジョナサン・バーネット 著 兼田敏之 訳/四六判・288頁 本体2,100円+税

初学者のための 都市工学入門

高見沢実 著/四六判・212頁 本体2,300円+税

西村幸夫 都市論ノート 景観・まちづくり・都市デザイン

西村幸夫 著/A5判・208頁 本体2,900円+税

建物情報管理とファシリティマネジメント

柳瀬正敏 著/A5判・96頁 本体2,200円+税

公園のユニバーサルデザインマニュアル

都市緑化技術開発機構 監修/A5判・248頁 本体2,400円+税

ジェームズ・スターリング

ジェームズ・スターリング 著 小川守之 訳/四六判・272頁 本体2,800円+税

人体の影 アントロポモルフィズム

磯崎新 著/A5判 上製箱入・320頁 本体3,600円+税

現代建築学 構造設計論

佐藤邦昭 著/A5判・324頁 本体3,100円+税

イギリス集合住宅の20世紀 ヨーロッパ建築ガイド

I・カフーン 著 服部孝生、鈴木雅之 共訳/A5変・240頁 本体3,500円+税

プライベート・リトリート

グスタフ・ジリ・ガルフェッティ 著 岩下暢男 訳/本体3,200円+税(予価)

フランスのロマネスク教会 ヨーロッパ建築ガイド②

櫻井義夫、堀内広治 著/A5変・236頁 本体2,900円+税(予価)

美術館は生まれ変わる

太田泰人、水沢勉、渡辺真理、松岡智子 編著/四六判・232頁 本体3,600円+税

初学者のための 新・建築構造入門

西谷 章 著/四六判・160頁 本体2,100円+税



12月号 11月25日発売

SD

本体1905円+税

特集1 SDレビュー2000 第19回SDレビュー2000入選展の結果を審査員のコメントを交えて誌上発表する。

特集2 コミュニケーション・ワークスペース

特集3 SDグラフィティ 36年の想い出

文＝飯島洋一、磯崎新、植田実、宇野求、片木篤、隈研吾、黒川紀章、香山壽夫、小林克弘、椎名政夫、篠原一男、陣内秀信、杉浦康平、高階秀爾、丹下健三、長谷川逸子、羽原康郎、林昌二、原広司、穂積信夫、横文彦、松本哲夫、元倉真琴

http://www.kajima-publishing.co.jp 鹿島出版会 ☎03-5561-2551

12月号 11月18日発売

建築技術

本体1762円+税

特集：外壁ジョイントの構法と考え方 監修：吉池佑一（千葉大学）外壁接合部の水密設計及び施工に関する技術指針（案）をベースに、設計フロー、検証法、ケーススタディ、指針では扱えなかった事項や最新情報を通じて外壁ジョイントを総合的に解説する。表現としての目地と要求性能／外壁ジョイントの基本／設計手順／要求性能／ディテール／フィールドジョイント／オープンジョイント／補修・改修／ファサードデザインと外壁ジョイント／ケーススタディ

http://www.k-gijutsu.co.jp 建築技術 ☎03-3222-5951

隔月刊

No.30

11月16日発売

造景

本体2800円+税

特集 中心市街地再生の戦略

地方中心市街地における遊動空間の創出 ●滋賀県長浜市

●長野県松本市 ●福島県二本松市 ●山形県鶴岡市

タウンマネジメントの可能性を探る ●佐賀市 ●諫早市

●会津若松市 ●富山市 ●金沢市 ●七尾市

特別企画 日本の都市環境デザイン

北海道の風土が育む都市のかたち① 函館

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

隔月刊

No.45

11月6日発売

confort

本体1905円+税

特集 家具の素顔

〈保存版〉素材とつくりの基礎を知る・家具実用講座

インタビュー ●南雲勝志 ●五十嵐久枝 ●若杉浩一

家具産地・都城の新たな挑戦

身体を調える道具としての椅子／矢田部英正

家具を越える造形—黒田辰秋展

特別記事 ジェームズ・タレル「光の館」

田んぼに浮かぶ茅葺きの藁「陽の楽屋」／隈研吾

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

12月号 12月1日発売

住宅建築

本体2333円+税

特集 外断熱構法とエコロジカル・デザイン

北海道の断熱構法／圓山彬雄 地球規模で住宅を考

える／野沢正光 ごく当たり前の技術で／海野健三

エコロジカル・デザインと建築の可能性／難波和彦

外断熱の必要性／前田誠一

〈作例〉畑聡一／宮坂公啓／市川雅雄／花田勝敬／

前田光一／野口捷二／大岩剛一

作品 遠藤菜／岡英世／野口捷二

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

2000

11

12

ARCHITECTURAL MAGAZINES INFORMATION

■ご購入は最寄りの書店でお求め下さい。ここに掲載してある雑誌は、建築関係雑誌発行出版社の協力により最新号を告知しています。雑誌の一部は予定価格の表示がされたいものも含まれていますが、詳しくは各出版社にお問い合わせください。(BNF事務局)

12月号 11月28日発売 商店建築 本体1943円+税

●業種別特集1 美容室

美容室555テート(大阪)：美船デザインスタジオ、ヴィクゼ(奈良)：シュウデザイン、ニーナ(福岡)：安井秀夫、オブヘア(表参道)：カフェ、アーチザン(岐阜)：アーキテクトエス他

●業種別特集2 クラブ&バー

バー オレンジ(西麻布)：ワークショップ、バー イーストパブ(大阪)：インフィクス、グランドパブ ゴールド(錦糸町)：atシェリーバー デ・ドッセ(新橋)：兼城祐作 他

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

商店建築増刊

創刊2号 好評発売中

I'm home.

本体1714円+税

〈主な内容〉デザイナーのつくる非日常のあるホームデザイン

上質なデザインと上質な暮らしをテーマにインテリアデザイナーや建築家による都市型ホームデザインを多数紹介します

特集／光と風を感じる家に暮らそう

イキイキとした暮らしを与えてくれる自然と隣り合わせの家を紹介

特集／バルコニーガーデンのデザイン

広告企画／ナチュラルにこだわるインテリアパーツ 他

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

別冊商店建築

好評発売中

SKブックス

本体 71400円+税

他1800円+税

〈好評発売中〉シリーズ「SKブックス」は読む商店建築。

設計のコツや施工現場で直面するトラブルを具体的に解説し、成功するための商品・店づくり他を豊富な実例を基にレポート。

①よくわかる現場学 ②アイラプレストラン ③困ってしまった設計の話 ④急成長するHMRの秘密 ⑤クレーム・トラブル・バスターズ ⑥飲食トレンド最前線 ⑦空の高さ ⑧U.S.A. ショップ・ウェーブ2000 ⑨ホテルクラシック ⑩商空間のライティング・レシビ ⑪アイラプレストラン・2

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

My GARDEN 別冊

No.1 好評発売中

GARDEN&LANDSCAPE

本体1429円+税

特集—ロビン・ウィリアムスの世界

建築・景観設計の専門家のための新シリーズがスタート

第1号はグリーン博みやぎ'99で日本で初めて公開されたロビン・ウィリアムスの英国式庭園を徹底解説。

ガーデンデザイン実践講座—庭を飾る／遊びの場所としての庭

／ガーデンプランのいろいろ 植栽デザイン—造園施工とメンテナンス／ガーデンハウスのウェザリング／日本庭園との違い／オリジナル植栽図面／植物リスト／他

http://www.marumo-p.co.jp/

マルモ出版 ☎03-3496-7046

季刊

No.22

11月16日発売

LANDSCAPE

本体2505円+税

特集 ランドスケープワークス 2000年度の厳選作品を徹底紹介

さいたま新都心シビックコア地区—環境造形整備／環境配慮型

集合住宅—エコビレッジ松戸／都心の森の学園—目白学園／水

と杜が織りなす造形—シェルコム仙台／アクアマリンふくしま

の展示空間／マチエールのある空間—府中市美術館—前庭／新

運河のある街—キャナルタウン兵庫のアーバンランドスケープ

／緑が出迎える街—ウッディタウン中央／ほか

http://www.marumo-p.co.jp/

マルモ出版 ☎03-3496-7046

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい(五十音順)

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

神奈川県三浦郡葉山町堀内533

0468-77-1207

FAX0468-77-1208

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052(221)7641(代)

ア	株朝日工業社	A 8
カ	株関電工	A 1
	鹿島	A 2・A 3
	学生デザインレビュー2001実行委員会	91
キ	株きんでん	表 2
ク	栗原工業株	A 8
コ	株弘電社	A 4
サ	三機工業株	88
ス	住友電設株	A12
タ	高砂熱学工業株	表 3
	大興物産株	A 5
ト	東光電気工事株	A10
	株トーエネック	A 9
	東洋熱工業株	92
ニ	日新工業株	A 7
	株西原衛生工業所	A 6
	日章工業株	A 9
ヒ	株日立製作所	表 4
ミ	三菱電機株	81
	美和ロック株	84
ワ	YKKアーキテクチュラルプロダクツ株	87

あなたが触れると、
私達が動く。



私達はより快適な
人間環境を追求します。

スイッチON。私達の技術がフル回転をはじめます。あなたがより創造性豊かに思考したり、より機能的に活動できるよう働きはじめるのです。あなたの身のまわりの、なんの変哲もないスイッチひとつの裏側に、私達のノウハウがいつばいつめこまれていきます。あなたはただ触れるだけ、私達の出番です。あなたが普段、なにげなく使っている設備、なにげなく過している環境に、より快適であるよう生命を与えつづけること……これが私達の仕事です。あなたの目には見えない所で、私達は快適な環境をプロデュースし、クリエイトしつづけていきます。

いろいろな快適、笑顔でつなぐ。



住友電設